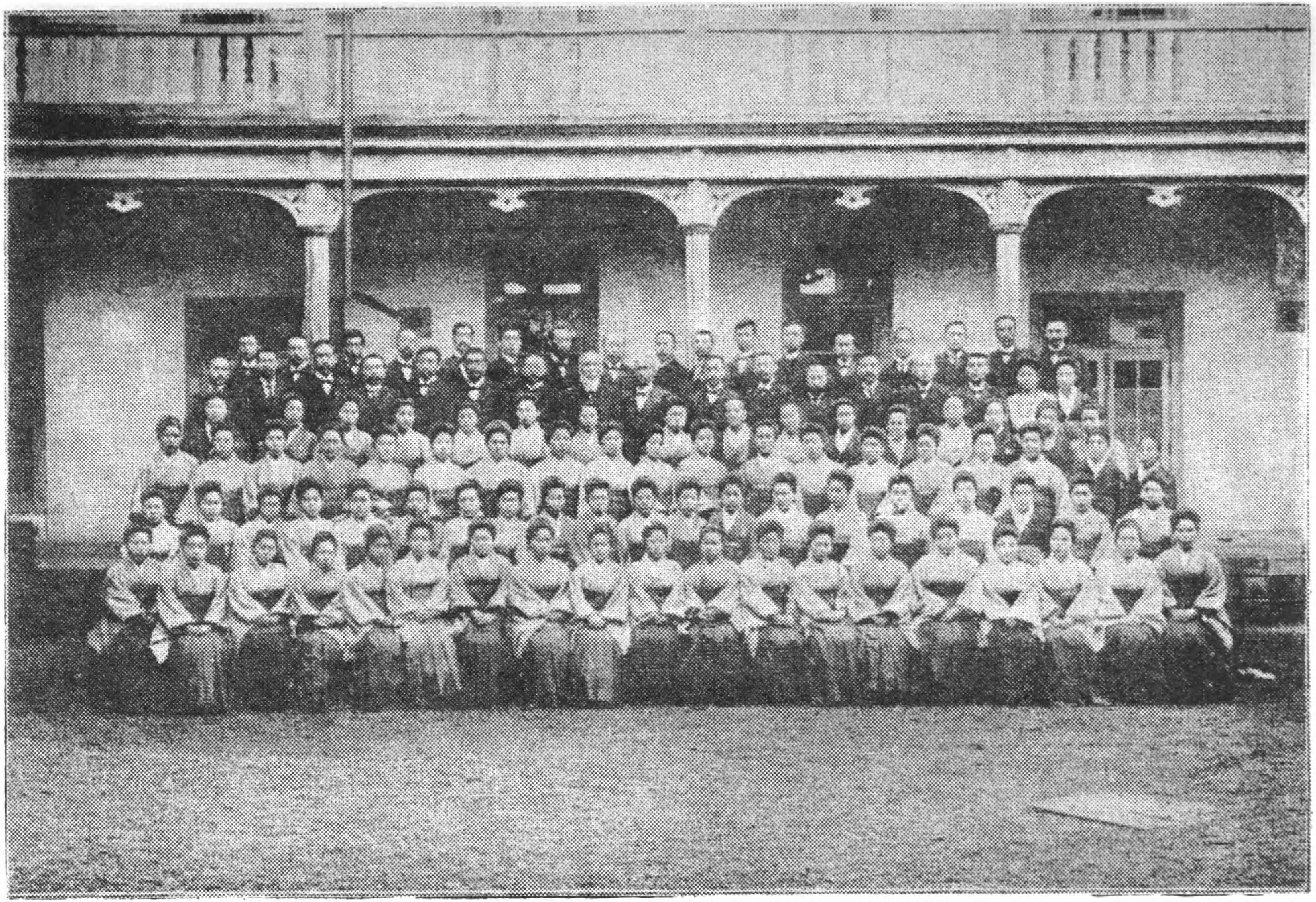



三井呉服店
東京日本橋駿河町
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候にゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候様奉希上候

# 女鑑 第十四年第六號 目次

## 口繪


第五回内國勸業博覽會褒状
小町印
商標
帝都斯業界
唯一の受賞袴
價格は極て低廉なることを以て主眼と致します
東京神田區南神保町二番地
卸小賣部
永井支店
小町印學生袴發賣元
卸問屋
永井本店
電話浪花二八四

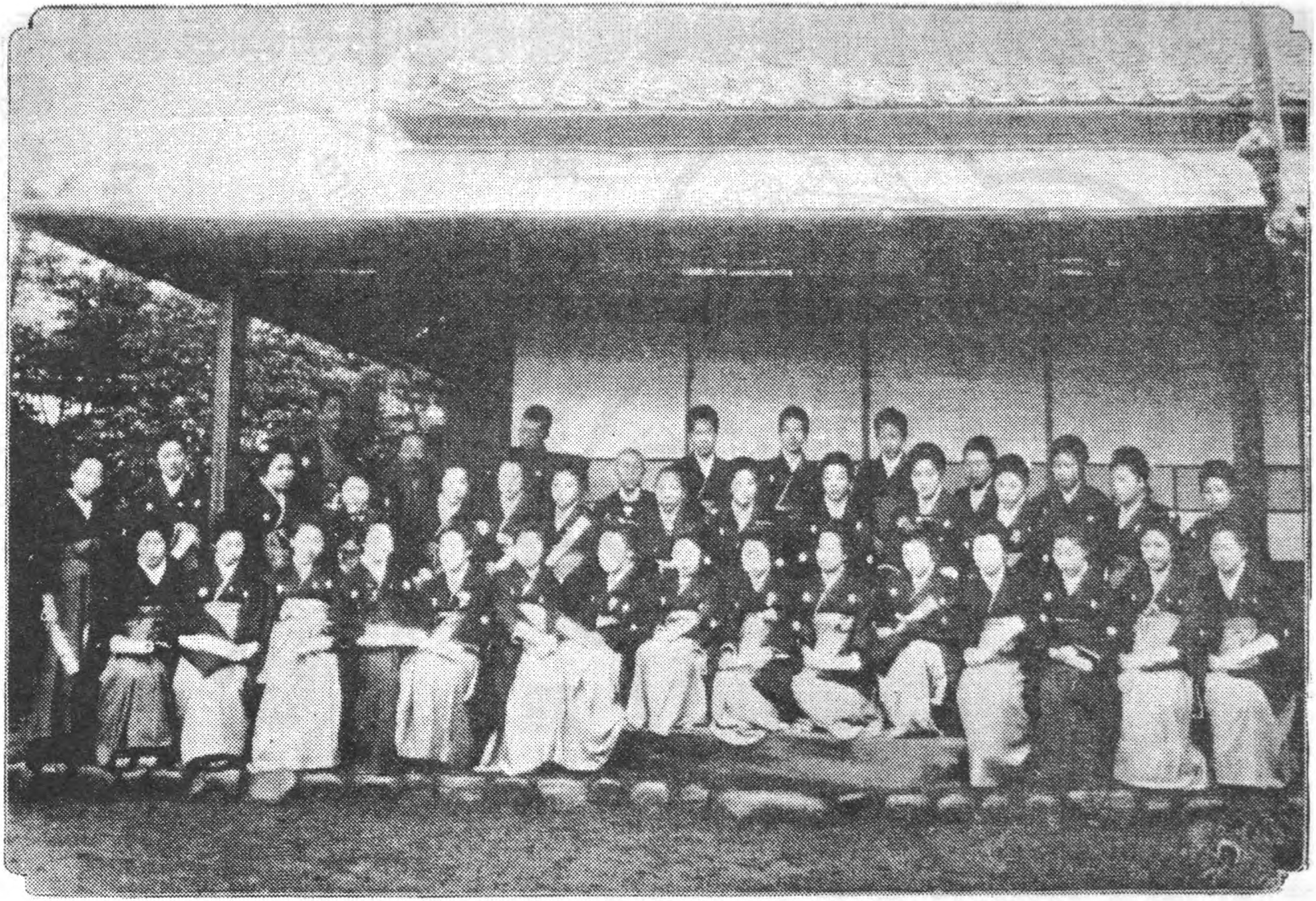

（東京御茶の水橋玉翠館氣賀秋畝撮影）

東京女子高等師範學校職員並卒業生



(東京御茶の水橋玉泉館氣賀耿畝氏撮影)

東京女子高等師範學校附屬高等女學校職員並卒業生



跡見女學校職員並卒業生

山崎忠和先生著

# 日露の英雄

四六判洋装肖像入

定價金二十錢

郵税金二錢

日露戰爭の豫言者として我維新前に於ける彼我英雄の心事を知らんと欲せば須く本書を讀まるべし露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其の識見事業の世界的なる處同一なりと論じ、三雄の音容動作眼前に現はれ出で宛も活動寫眞を見るが如し、大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒する志氣を養成せられんことを望む

發行所　東京京橋區築地二丁目　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京美術學校長正木直彦序文
同校教授島田佳矣
同校卒業生野口俊尾 共著

新按

# 女子技藝 編物模樣圖案

（製本出來）

全五册 石版極彩色 大和綴美本

定價 ●松の巻 金四拾錢 ●櫻の巻●藤の巻 各金五十錢
●菊の巻●梅の巻 各五十五錢 郵税各貳錢

一、本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて書模樣を編み或は刺繍するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなれば女子技藝に於て教育上參考上必携書なり

一、本書の著ある所以は從來此類の歐米各國に於て盛に出版されしものあれども其意匠圖案の樣式風趣は直ちに我邦工藝の風致に適應せざるのみならず價格の點に於ても不廉にして一般に普及する能はざるを以てなり

一、本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を改善せしものにして我邦に於ける編物圖案の嚆矢唯一の書なり

一、本書編物は本邦女子の技藝として貴賤、都鄙の別なく極めて適當の手技なるを以て漸次盛大の域に適しつゝあるのみならず海外に輸出するの望ありと雖も從來行はれたる意匠圖案の拙劣なることは斯道技藝家の遺憾とする所にして之れが欠點を補はんが爲め著作ある所以なり

一、本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字、等の簡易なるものに始まり横模樣、連續模樣角模樣、圓模樣、隅模樣、單獨模樣等の順を經て漸次、高尚優美なる繪畫的、下繪に進み花卉、蟲魚、獸類、器具、風景、人物を蒐集しあるを以て編物修學者の敎科書として適當なるのみならず斯道技藝家の好參考書なり

一、本書は編物模樣圖案に必要なるは勿論なりと雖とも麥藁細工、織物、等各種手工技藝の敎育參考書として必携のものなり

一、本書の普及は女子技藝發達上大に有益なるを以て特に來る五月廿日迄に本社に直接別紙割引券を添へ申込あるときは定價の一割引無郵送料にて御送附致し以て本書購讀者の好意に報ゆべし

國光社發行

女子技藝 編物模樣圖按割引券

(注) 本券有効期限は明治卅七年五月廿日限とす

(一) 本劵は直接本社宛御注文者に限り有効とし特に定價の一割引とし郵税本社に於て支辨すべし

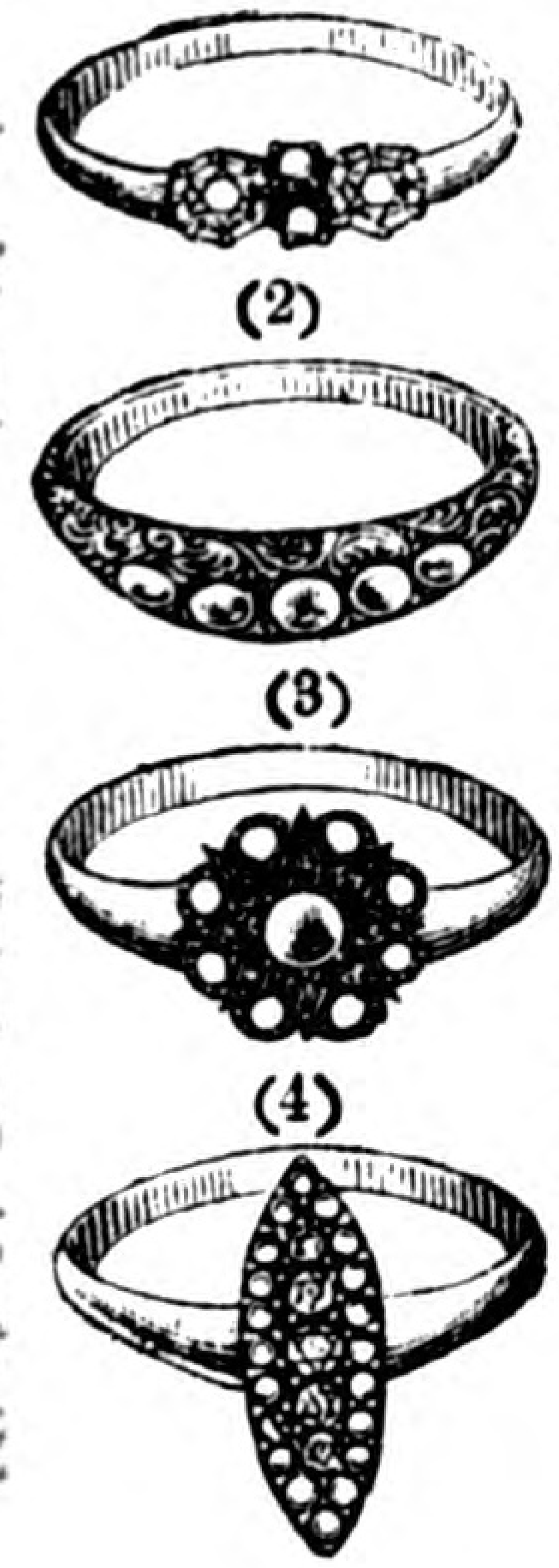
(注) 期限經過後は無効とす

(一) 前金を添へ御注文に非されば無効とす

東京築地二丁目 株式會社 國光社

發兌元 東京市京橋區築地二丁目 株式會社 國光社

## 新製 寶石入指環



(1) 拾金製……價九圓六拾錢
(2) 拾八金製……價廿貳圓卅五錢
(3) 拾八金製……價廿三圓五拾錢
(4) 拾八金製……價廿六圓廿錢
（市外郵送料拾五錢）

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

時計寶玉類貴金屬美術品及銃砲火藥商 **天賞堂**

電話番號新橋（特三三三）（三一五三）

● 無料呈贈 天賞堂營業一覽（送費四錢）

---

## 新製指環及

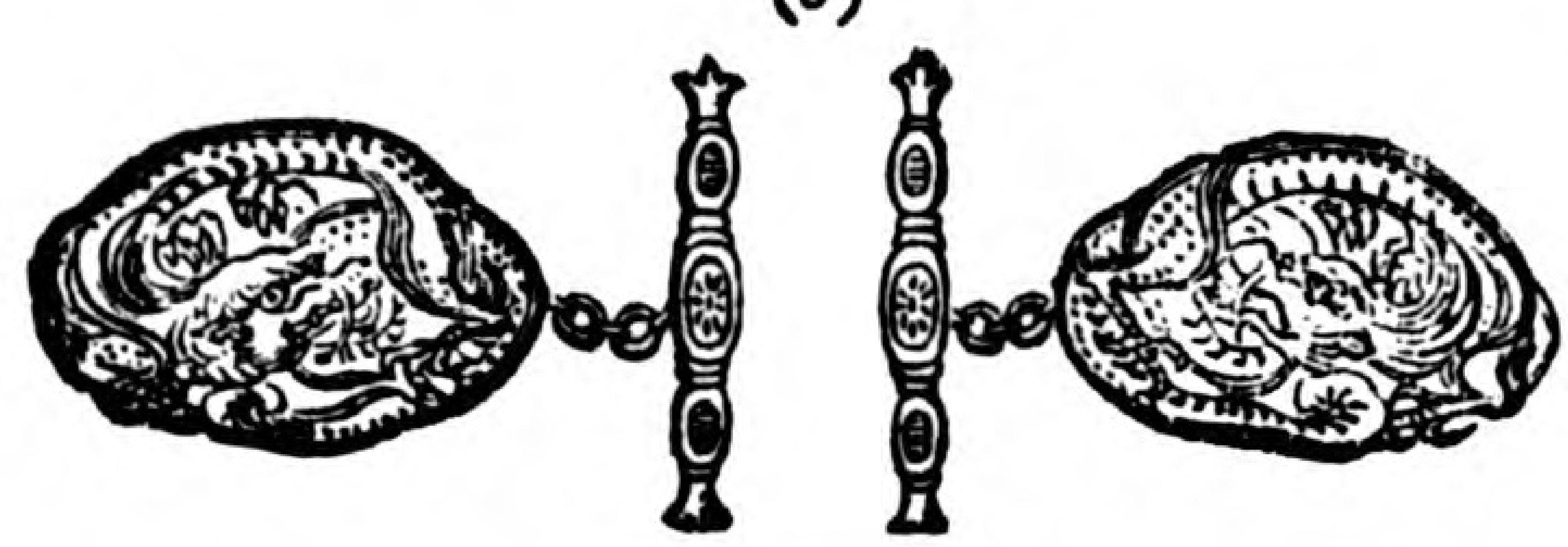
(1)　(2)　(3)



(4)



(5)



(1) 價廿一圓八拾錢……廿二金三匁付片切刻
(2) 價廿七圓八拾錢……同……高　刻
(3) 價二拾圓八拾錢……同……片切刻
(4) 價五拾六圓五拾錢……同四匁付……高　刻
(5) 價卅二圓九拾錢……十八金三匁付高　刻

東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、七、八、九、番地

時計寶玉類貴金屬美術品及銃砲火藥商 **天賞堂**

電話新橋（特三三三）（三一五三）

天賞堂出張所々在地
東京市神田小川町●橫濱市●名古屋市●大阪市●廣嶋市●熊本市●長崎市●小樽（臨時）

# 韓國女子風俗



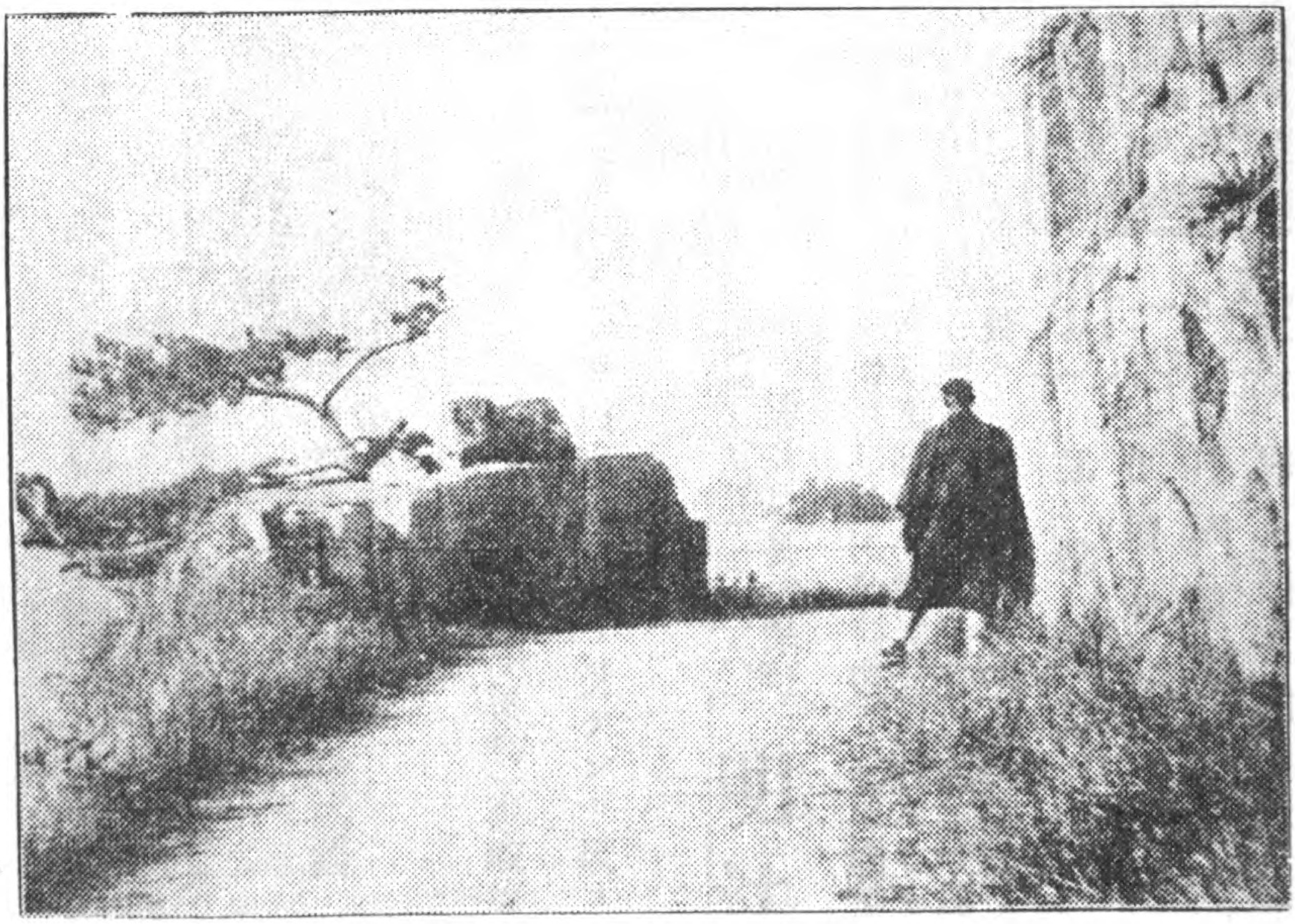
貴紳の子女



外出の女子



信州下伊奈郡市田村紀念公園より天龍川を望む



駿河江之浦沿道より獅子濱の遠景

家元生間正起著

# 日本家事調理法

全一册

洋装美本
用紙菊判上質
正價金卅五錢
郵税金六錢

各女學校の家事科に於て料理を教授せらるゝも唯實地のみにして教科書として學術を教ゆるに適當なる著書未だ之あらず是れ調理學上の一大缺點なり本書は家元生間先生玆に見る所ありて料理法の原則より加工品、野菜、海草、魚、鳥、介貝、乾物、鹽物、漬物、調味品、膳部食物の配合方に至る迄詳細に記述せられたるものなれば本書を熟讀せば庶幾くは調理の學術と實地の應用とを會得することを得べし故に教科書として適當なると同時に家庭の參考として最好無比の良書なり乞ふ陸續御愛讀あらんことを

發行所
東京日本橋通三丁目（電話本局五三二一番）六合館
同 神田區裏神保町（電話本局一四三六）同 明法堂

## 研究科生徒募集

一 本校研究科ハ女子高等師範學校入學試驗女子大學編入試驗及ビ小學校教員檢定試驗ヲ受ケント欲スル者ノ為メニ須要ナル學術ヲ授クルヲ以テ目的トス

二 研究科ノ學科目ハ倫理教育國語漢文外國語歷史地理數學（代數幾何算術）理科（物理化學博物）家政等トス但シ右學科目中專修スルコヲ得

三 修業年限一ヶ年トシ本年五月一日開始シ翌年三月終ル

四 入學者ハ入學願書ニ履歷書及在學證書ヲ添ヘ差出スベシ但入學金壹圓ヲ納ムルコト

五 高等女學校程度ノ學校卒業生若シクハ相應ノ履歷ヲ有スル者ハ無試驗ニテ編入ス授業料ハ金貳圓

## ◉本科技藝科生徒補缺募集

●本科一、二、三、四、五學年各級及ビ技藝科一、二年同專修科高等科何レモ缺員アリ此際入學ヲ許可ス

●本校ハ大ニ事局ニ鑑ムル所アリ軍人ノ子女並ビニ學資ノ不充分ナル者ニ限リ相當ノ職業ヲ與ヘ無月謝無束脩ニテ各級入學ヲ許可シ懇切ニ教授ス此際至急申込ムベシ

東京市麴町區元園町二丁目四番地

愛國女學校

工藤武重謹著

# 孝明天皇御遺徳

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして事蹟尚湮晦に闇し聖徳未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の實歷談に依り以て汎く逸事遺聞を網羅したるものにして庶幾くは聖徳の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

菊判洋裝
定價廿五錢
郵稅四錢

---

清藤正輔謹編

## 皇后陛下御畧記

# 坤徳

美術版本　定價　上製廿五錢　並製廿錢　郵稅四錢

畏くも本書には皇后陛下の御肖像を精巧なるコロタイプ寫眞版にて奉揭したれば坊間に有觸たるものと類を異にし髣髴御眞影を拜するが如く加之土方伯御珍藏の御眞筆（竪一尺二寸橫一尺七寸）を同伯の許を得て拜寫し　皆公の御詠を土方伯に拜寫を乞ひ共に卷頭に奉戴し又華族女學校學監下田歌子女史の序文を附し而して表紙の（坤德）の二字は前皇太后宮太夫杉孫七郎子の揮毫を乞たるもの眞に弊社の光榮出版界空前の盛事なり

---

發兌元　株式會社　國光社

---



## 明如上人

# 遺芳録

國光社編纂

本書は曩に遷化せられたる本派本願寺第二十一世明如上人大谷光尊法主一生の御傳記にして本山の記錄に基き眞宗文學歷史家編纂の任に當り顧問諸氏の校閱を受けたるものなり

幸に信徒諸氏は勿論他宗門の人と雖も一本を購ふて長く上人の高德を欽仰感戴せられむことを切望して已まざるなり

全壹冊菊版最美本●上人最近眞蹟●名號●偈語●和歌●手數葉挿入●別にアートタイプ寫影を添ふ

◎壹冊定價金貳拾錢郵稅四錢

## ◉女子部生徒募集

本科は高等女學校女子師範學校等ノ體操敎員養成ノ目的

本科ハ各女學校敎員受驗者ノ爲メニ設ク但入學試驗ヲ要セズ

各自ノ運動若クハ練習ノ爲メ本科中ノ或科目ヲ希望スルモノノ爲メニ設ク但入學試驗ヲ要セズ

◉高等科五拾名

◉受驗科若干名

◉選　科　若干名

右募集ス志願者ハ本月二十五日迄ニ本校ヘ願書ヲ差出スベシ

入學試驗ハ四月三十日ニシテ入學期ハ五月十日トス

但地方ニテ受驗セントスル者ハ願書ニ附箋シ其旨記入スベシ詳細ノ規則書入用ノモノハ郵券參錢ヲ要ス

### 備考

高等科ヘ無試驗入學ノ資格左ノ如シ

「高等小學校本科敎員及本科准敎員又ハ尋常小學校本科正敎員ノ免許狀ヲ有スル者。高等女學校第三學年以上ノ修業證書ヲ有スル者」

高等科ノ入學試驗程度左ノ如シ

「國語、算術、作文ノ三科目ニシテ高等女學校三學年以上ノ程度ニ因ル」

明治三十七年四月九日

東京麴町區九段牛ヶ淵

**日本體育會體操學校**

伯爵東久世通禧君題字
高等教育會々議員湯本武比古君序
東京感化院長高瀬眞卿講述

學校家庭

# 修身一夕話

菊版洋裝美本上製定價金六十錢郵稅八錢
並製定價三十八錢郵稅六錢

本書は修身倫理の大綱を説き東西古今の偉人碩儒の事蹟を言文一致體に叙述せしものにて、趣味饒多近來稀有の好書なり

伯爵副島種臣題辭
從二位尾崎忠治題辭
鹿川宮內默藏著述

# 王學指掌

菊版總クロース全一册
定價金壹圓郵稅金拾錢

王學の吾人心身の修養に大益あることは既に天下識者の認むる所にして。今更論辯を要せじ。而るに從來この學に志すもの。三輪執齋考定本の傳習錄に由りてこれを講究すと雖。奈何せむ該書は語錄體にして。初學この學の統緒を繹ぬるに便ならず。本書は著者が古傳習錄及文錄等より。この學の講究に最も必要なる條項を擇び。系統的にこれを編纂し。部門を道體學術の二類に分ち。その內又各目を種別し。これが義解と評語とを施したれば。一讀の下直ちにその要領と下手の方法を理會するを得べし。且つ開卷には王子の本傳を擧げて。子の人となりとその事功の詳なるを記す實に近世王學を修むるもの、一大好書なり。世の志士幸に一讀の榮を賜へ

內藤耻叟序文學博士栗田寬著

# 天朝正學

菊判洋裝 定價三十五錢 郵稅四錢

紫洲甲秀輔編

# 德川の孔明

定價郵稅共十五錢



發行所 東京築地二丁目 國光社

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變する法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内……**無代進呈**す酒造家右今回披露の爲拾萬部限り及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

確實

發明**元祖** 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

---

# 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても**純白色に變化**し特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製壹圓特別製分壹圓五拾錢

**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

---

# 月やく下し 通經劑

本劑は胃膓を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



---

# わきが (腋臭症) 根治確證 新發見藥

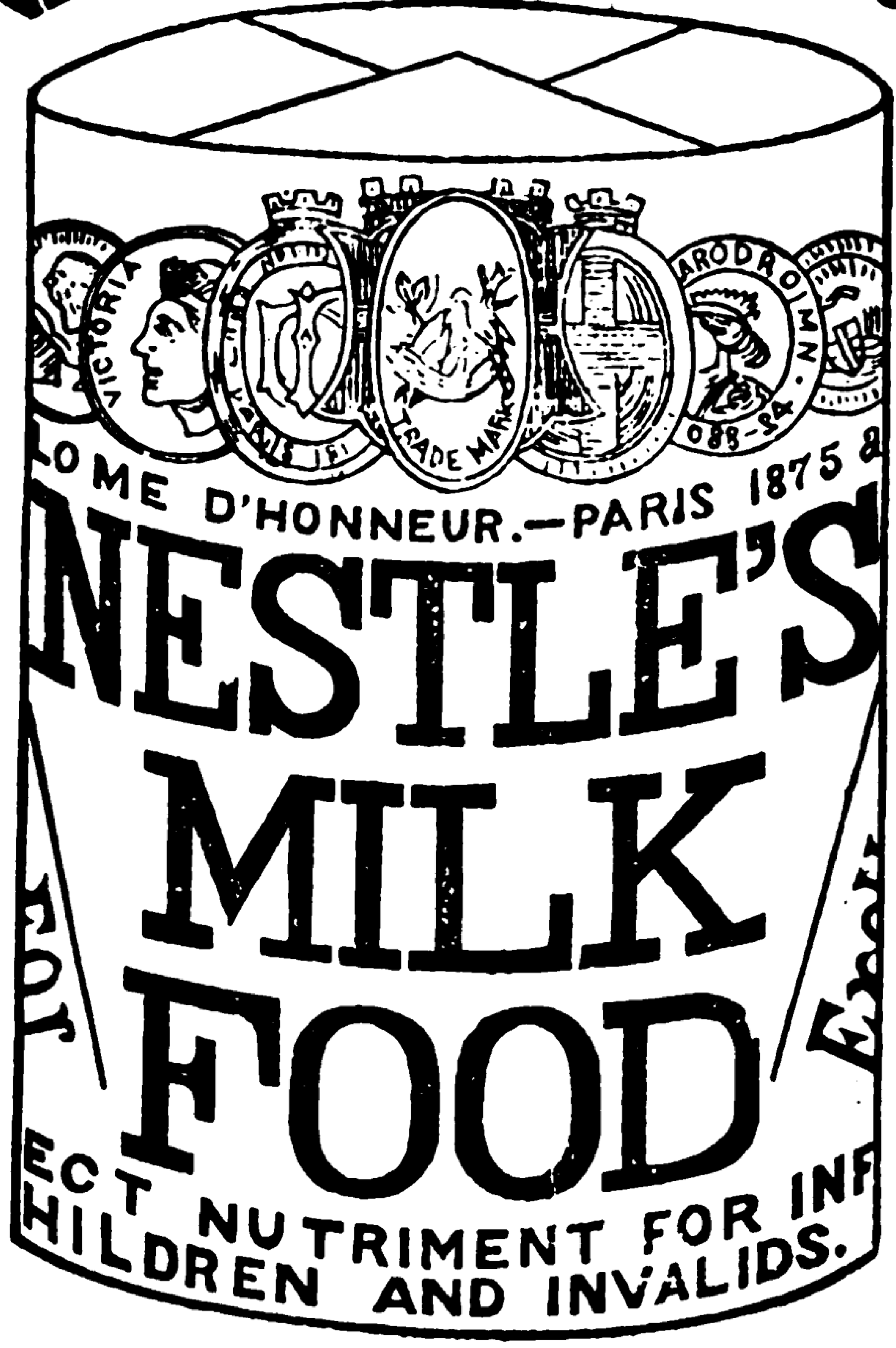
醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事(電話下谷[illegible]四六番)

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

# ミルクフウド

## NESTLE'S MILKFOOD




各國帝室御用品

各國醫科大學大病院

醫學博士ノ賞讃ヲ恭フス

（全國洋食品店及薬舗にて販賣す）

**ミルクフウド**は麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

**ミルクフウド**は小兒の生育、病者、虛弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

**ミルクフウド**は完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

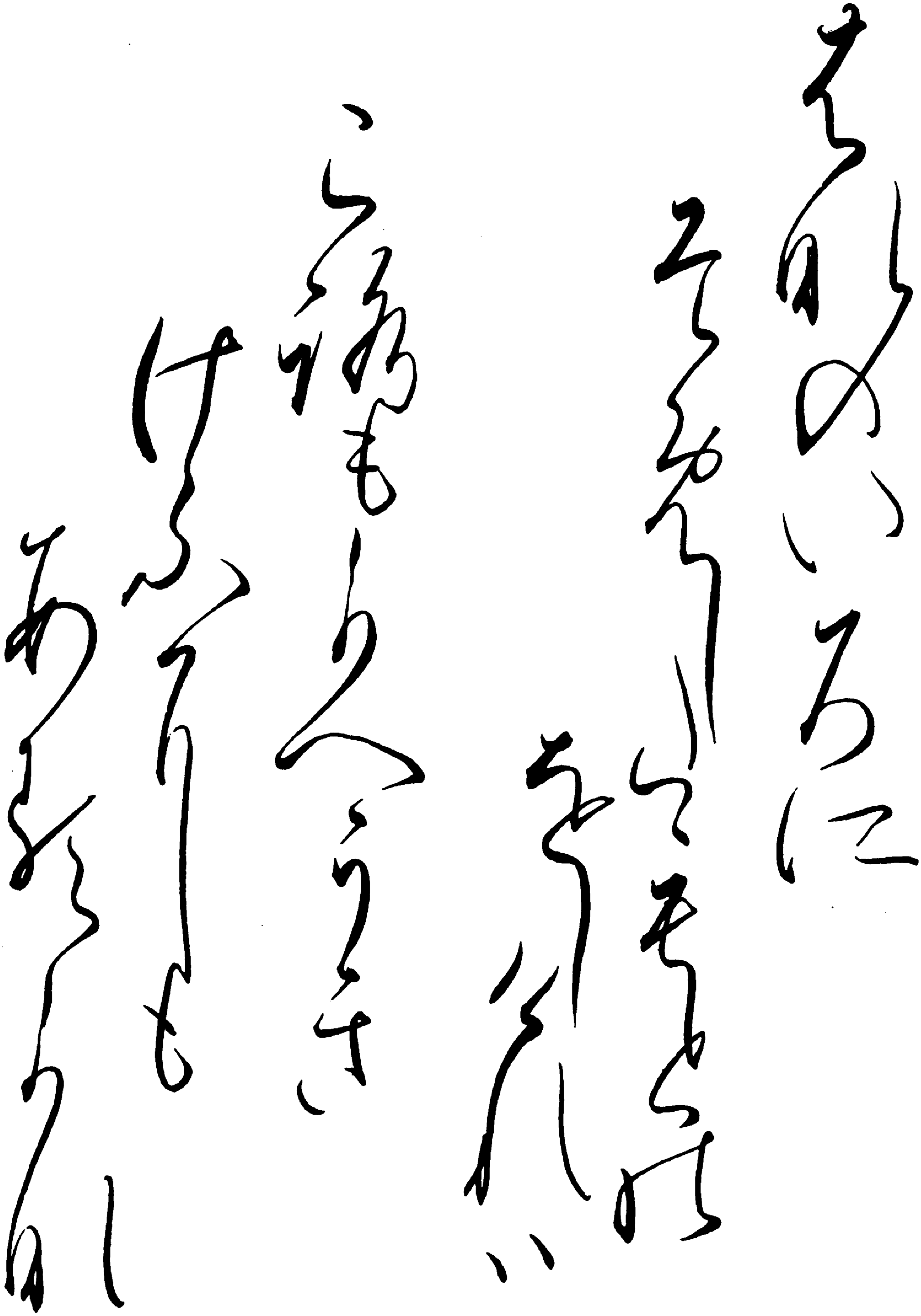
女鑑兼題投稿優等者

秋吉てる子

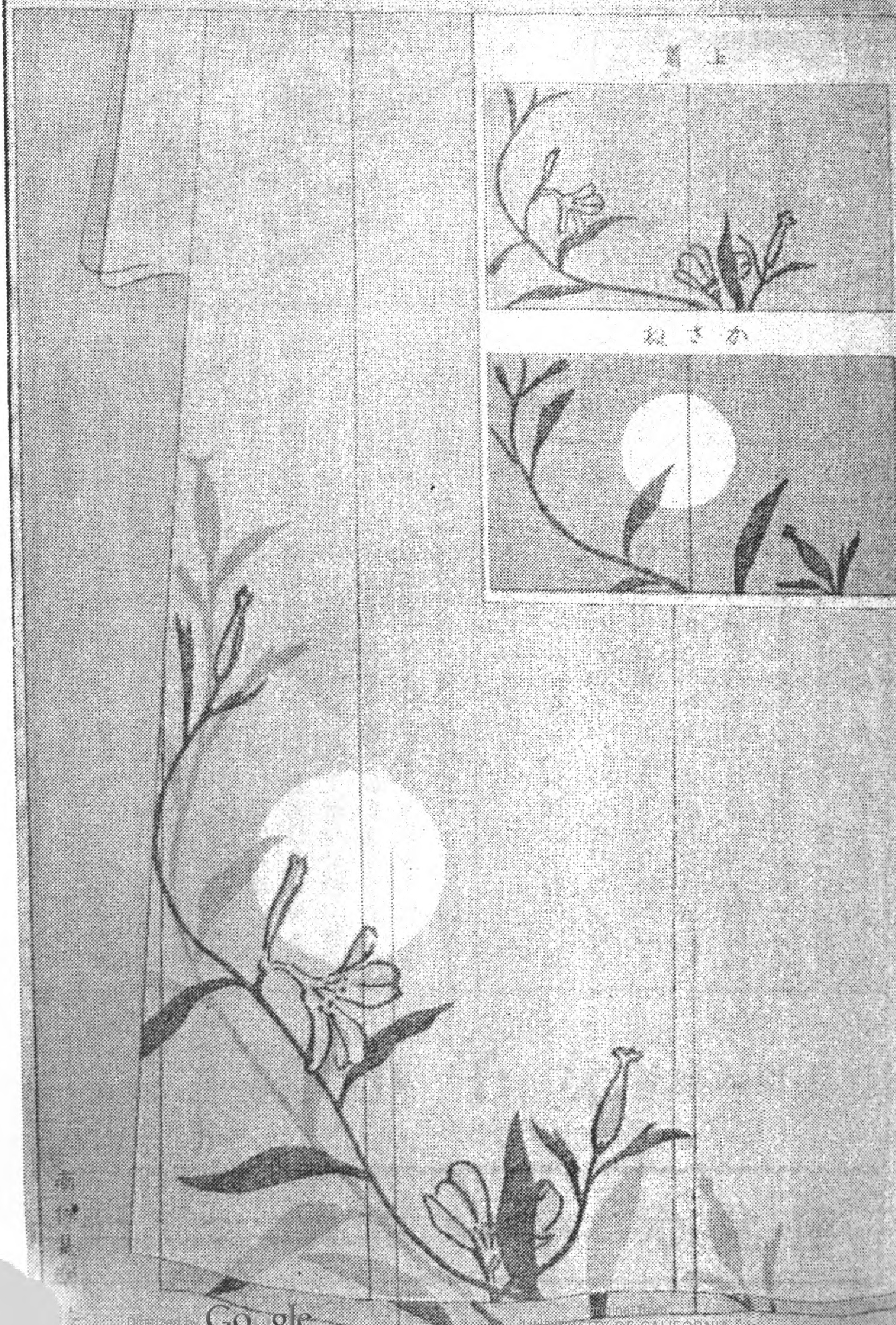




森田まさ子



宮里三木技子書


上前
かさね

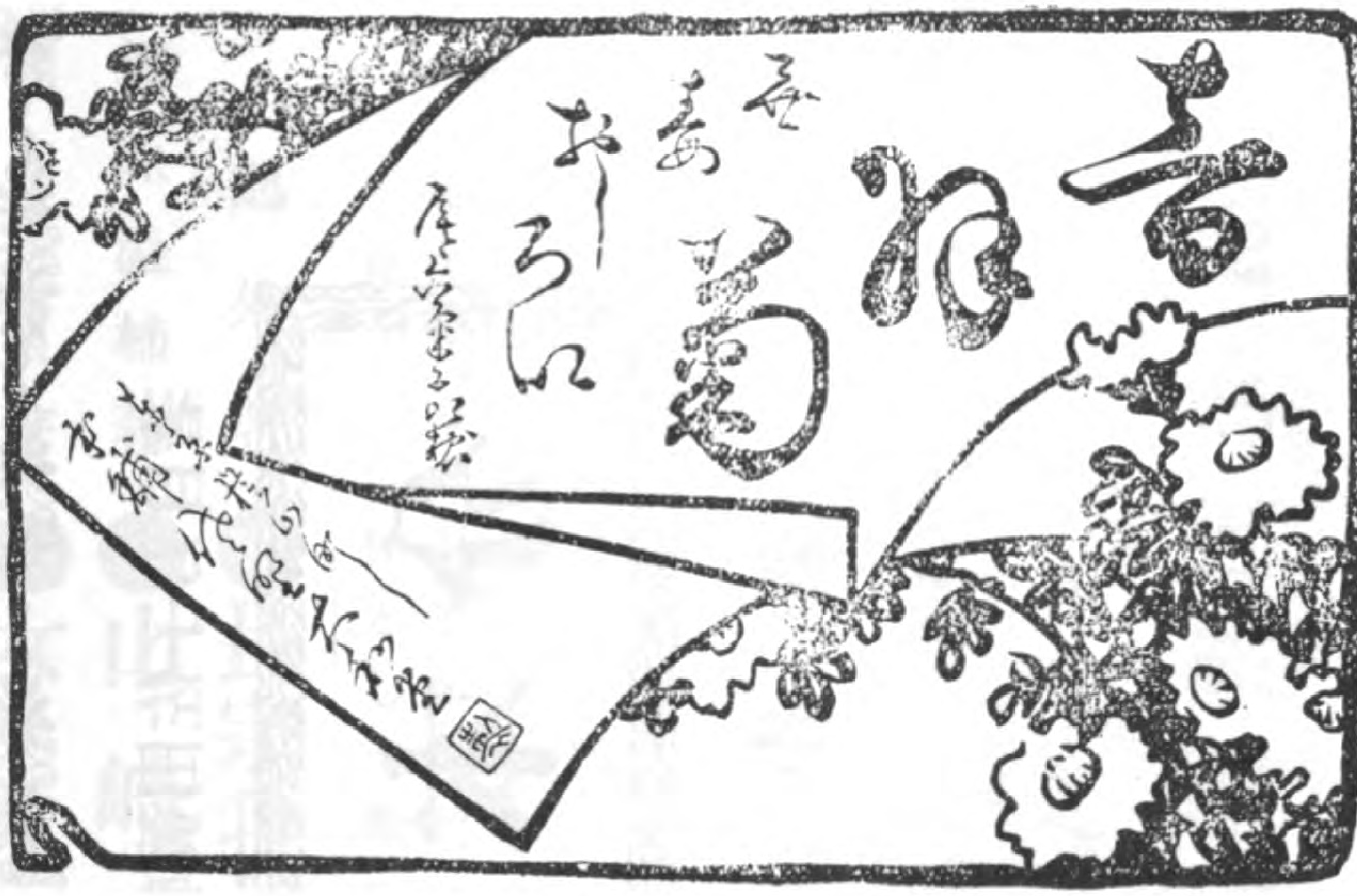
細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

# 女子の本分

第十八版出來

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金卅五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地
電話新橋特八八●●二六九三番
株式會社　國光社







定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金十二錢

女鑑

第拾四年
第六號

# 今年の櫻花

古詞は曰へり、敷島の大和心を人間はゞ朝日に匂ふ山櫻かなと、純潔にして、些の汚點を留めざる忠義の志や、爛熳たる天眞の流露せる報國の誠心や、而して義を視て死を惜まざる、名を重んじて命を顧みざるの節操は、彼れ實に是れと相似たるものあり。嗚呼人か花か、花か人か、見來れば櫻花は寔に吾が大和民族の心情が、粹を鍾め純を凝して、その形を顯はしたるものと云ふべし。

今や東風嫋々として百花を吹き、滿城到る處として花ならざるはなし。東臺の丘、墨田の堤、千枝萬朶撩亂咲きみだれて、鮮娟眞に憐れむに堪へたり。而して散るを惜まぬ其姿の一層優れて見ゆるは、心なき觀花の俗客をして、猶ほ感慨の情に堪へざらしむ。

年々歳々花相似たりと雖も、今年の花の例年に優して、其の色も香も、別けて鮮やかにして麗しきを覺ゆるは何の故なるぞ。若し夫れ絢爛たる櫻花に對して、靜かに胸中の思を叙でんか、誰れか又た無量の感慨に打たれざるを得んや。

花にも涙を灑ぎ、鳥にも魂を驚かすは、家山萬里の羈客が、傷心の情より出づる感慨なり。しかも吾等が今年の花に對する感慨は、孤客の家を憶ふが如きものにはあらず。異郷に索居して、四顧寂寞を感ずるが如きものにもあらず。之よりも數層高尙なる觀念の湧起して禁ずる能はざるものあるなり。

何をか高尙なる觀念といふ、曰く戰爭といへる觀念なり、戰爭と云へる觀念を以て、今年の櫻花に對しなば、何人も亦た無量の感慨を催ふさゞるを得ざるべし。日露戰爭の起りしより、吾が忠勇なる海陸の將卒は、義を泰山に比し、命を鴻毛よりも輕んじて、みな一死を以て忠君愛國の志を表せんとせざるなし。嗚呼是等將士の心情は誠に是れ櫻花なり。その凜乎たる義烈は朝日に匂へるものにあらずや。その危きを冒して身を顧みざるは、散るを惜まざるものにあらずや。試に二月九日第一回旅順攻擊より、三月廿七日第二回旅順口閉塞の擧に至るまでの間に於ける吾が艦隊死傷者の表を一見しなば、此の名譽ある戰死者の鮮血が、迸つて花にあらはれ、その忠魂の凝りて、花となりしにあらざるかを思はずんばあらざるべし。

二月九日旅順口外海戰死傷者表（四月六日午前調）

| 艦名 | 死傷合計 | 即死 | 入院前死亡 | 入院後死亡 | 全治 | 在院 | 艦內殘留 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 三笠 | 七 | — | — | — | 六 | 一 | — |
| 敷島 | 一六 | — | — | 一 | 一〇 | 二 | 三 |
| 富士 | 一四 | 二 | — | 一 | 五（內吳二） | 五 | 一 |
| 初瀬 | 一六 | 一 | 二 | 二 | 四 | 四 | 三 |
| 磐手（敵彈に因せず） | 一五 | — | — | — | 一〇 | 四 | 一 |
| 八雲 | 一 | — | — | — | — | 一 | — |
| 常磐（同上） | 二 | — | — | — | 二 | — | — |
| 吉野（同上） | 一 | — | — | — | — | — | 一 |
| 合計 | 七二 | 三 | 二 | 四 | 三七（內吳一二） | 一七 | 九 |

二月廿四日第一回旅順口閉塞隊死傷者表

| 艦名 | 死傷合計 | 即死 | 入院前死亡 | 入院後死亡 | 全治 | 在院 | 艦內殘留 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 敷島 | 三 | — | — | — | 二 | — | 一 |
| 八雲 | 一 | 一 | — | — | — | — | — |
| 合計 | 四 | 一 | — | — | 二 | — | 一 |

三月十日旅順口外驅逐艦戰闘死傷者表

| 艦名 | 死傷合計 | 即死 | 入院前死亡 | 入院後死亡 | 全治 | 在院 | 艦內殘留 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 曉 | 七 | 四 | 一 | — | — | — | 二 |
| 霞 | 四 | 一 | — | — | 一 | 三 | — |
| 朝潮 | 四 | 一 | — | 一 | — | — | 二 |
| 曙 | 四 | — | 一 | — | — | 一 | 二 |
| 漣 | 二 | 一 | — | — | — | 一 | — |
| 東雲（敵彈に因せず） | 二 | — | — | — | — | 一 | 一 |
| 合計 | 二三 | 七 | 二 | 一 | 一 | 六 | 七 |

三月廿七日第二回旅順口外閉塞隊死傷者表

| 艦名 | 死傷合計 | 即死 | 入院前死亡 | 入院後死亡 | 全治 | 在院 | 艦內殘留 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 朝日 | 三 | 三 | — | — | — | — | — |
| 敷島 | 二 | — | — | — | — | 一 | 一 |
| 富士 | 一 | — | — | — | — | — | 一 |
| 八雲 | 二 | — | — | — | — | — | 二 |
| 常磐 | 三 | — | — | — | — | 二 | 一 |
| 高砂 | 二 | — | — | — | — | 二 | — |
| 淺間（敵彈に因せず） | 一 | — | — | — | — | — | 一 |
| 高千穗 | 一 | — | 一 | — | — | — | — |
| 合計 | 一五 | 三 | 一 | 一 | — | 五 | 六 |
| 總計 | 一一四（內二一敵彈に因せず） | 一四 | 五 | 四 | 四〇 | 二八（內吳二） | 二三 |

嗚呼、忠勇なる吾が名譽の戰死者よ、今や其魂は天に上り、其魄は地に留るも、潔きその心事をば鮮娟たる櫻花に顯はして、我が國民に示さんとするにはあらざるか。櫻花を見る者、宜しく此の名譽ある戰死者の忠魂義膽を弔ひて、愈々忠愛の志を起さゞるべからざるなり。而して多感にして義氣に富める吾が同胞姉妹に至りては、紅涙潛々禁ずべからざるものあるを知るなり。徒らに春に酔ひ、花に遊ぶが如きは、今年の櫻花を見る所以の道にはあらざるなり。

# 女子と學問

論叢

リギヨル博士

今日の女子教育が世の非難攻撃の衝に當つて居るのは、洵に氣の毒千萬な譯であるが、然し其の非難攻撃の裡にも多少の眞理ありとすれば、世の教育者たるもの少しく考へなければならぬ譯である、今其の非難攻撃の中より多少有理と思はるゝもの一を擧ぐるならば、

「今日の女子教育は女子をして實際の生活には準備せしめず、隨て學業卒りても未だ女子の目的は達せられざるなり、云々」

此の言論の裡には確に眞理が包まれて居る、蓋し思ふに、今日の教育には大切な學問が缺陷して居るから、此の如き非難攻撃が出て來るのである、然らば其の缺陷して居るものは何であるかと云ふに、該博なる知識ではなくして、堅實なる精神である、今日の教育者は記憶を飾立てゝやるが、判斷力を磨いてやら

ない、和歌だの文學だのを敎へるけれども、事理の識別心を與へてやらない、音聲を習はせるが音樂を敎へぬ、年代などを諳記させるが歷史を學ばせない、思想の代りに文字と言語ばかりの敎授をなして居る。學問は思想となり、實用上の資けがなければ、何の趣味もなく、又何の利益もないものである、知るのは(若くは學ぶのは)考ふるが爲め、行ふが爲めである、女子に取りては格別此の方針を取つて學問させなければならぬ、此點に於ては知行一致說を唱へた古人は、空理空學をのみ叫びつゝある今人よりも確に有理である、處で此の知行一致の方面より觀るに、今日の女子敎育は餘り輕佻にして又餘り皮想的である、今日の敎育者は如何にすれば女子をして其の實際の目的を達せしめ得べきやを考へずして、今日世界に於ける、否歐米諸國に於ける女子敎育の實況は如何であるかと云ふ事をのみ顧慮して居るやうに思はれる、其の結果今日の女子は如何ほど珍らしい婦人、如何ほど役に立つ人間になるか、議論は姑く措き、實例を擧げて證示して見やうと思ふ、即ち私は今日の女子の標本を提出するのである、今日の女子と言はゞ、餘り廣過ぎるかも知れぬが、兎に角今日の敎育を受けつゝある女子、狹義に言へば、今日の女學生若くは女敎師志願の女子の標本を云ふのである。

尤も私は外人であるから日本の事狀はよく知らぬ、故に茲に語るのは西洋現時の女子の事であると記憶して貰ひたい、某下流社會に洗濯業を渡世として居つた貧しき婦人があつた、さなきだに閭巷生活の事にて、陋屋敝廬、室内の家具なども敗頹缺損、碌なものはなく、搗てゝ加へて日頃病氣勝にて、往々貧苦と病苦とを共に背負ふて破れた床に臥て居つたのである、處が其の床を距る程遠からぬ窓下に、一人の娘が机に向ひ今や書き物最中である、娘の衣裳はと云へば、母のそれとは天地の違ひ、時々書き物を止めて、生意氣な荒々しき言葉を發するのは、其母のこわ〴〵語る願ひの言葉に答へて居るのである。

『マリーや、お父さんが疲れて工場から歸つて來るのに、家に火が消えて鍋が空乏では爲方がないぢやないか、私が起きられるやうならお前に賴みやしないが、今度ばッかりは起きやうと云ふ力もないから私に代つて食事の支度をしておくれ、ヨー、マリー。』

娘は五月蠅くもあり腹立しくもありと云ふ樣な姿で箒を片手に持ちながら、

『お母さん、何を云んだネ、私の義務は理化學を學ぶんぢやないか、お母さんが起きて爲なよ、お母さんが……而して私なんかア炭を觸つて居られないよ、手も汚なるし、着物も穢るし、第一勉强が後れて了ふよ、私が如彼に云つたぢやないか、自今以後私は家事などに毫も從事ないッて、お母さんも承知した癖に。』

『然しお前、私達はどうでもいゝが、働いて歸つて來るお父さんが可哀相ぢやないか、ソップも飮まれないのだもの、それでも、お錢があれば調度物を買つて來ると云ふこともあるが、そのお錢もないのだもの。』

『お父さんは男だもの、勝手にさせれば宜ぢやないか、私だつていそがしいわネ。』

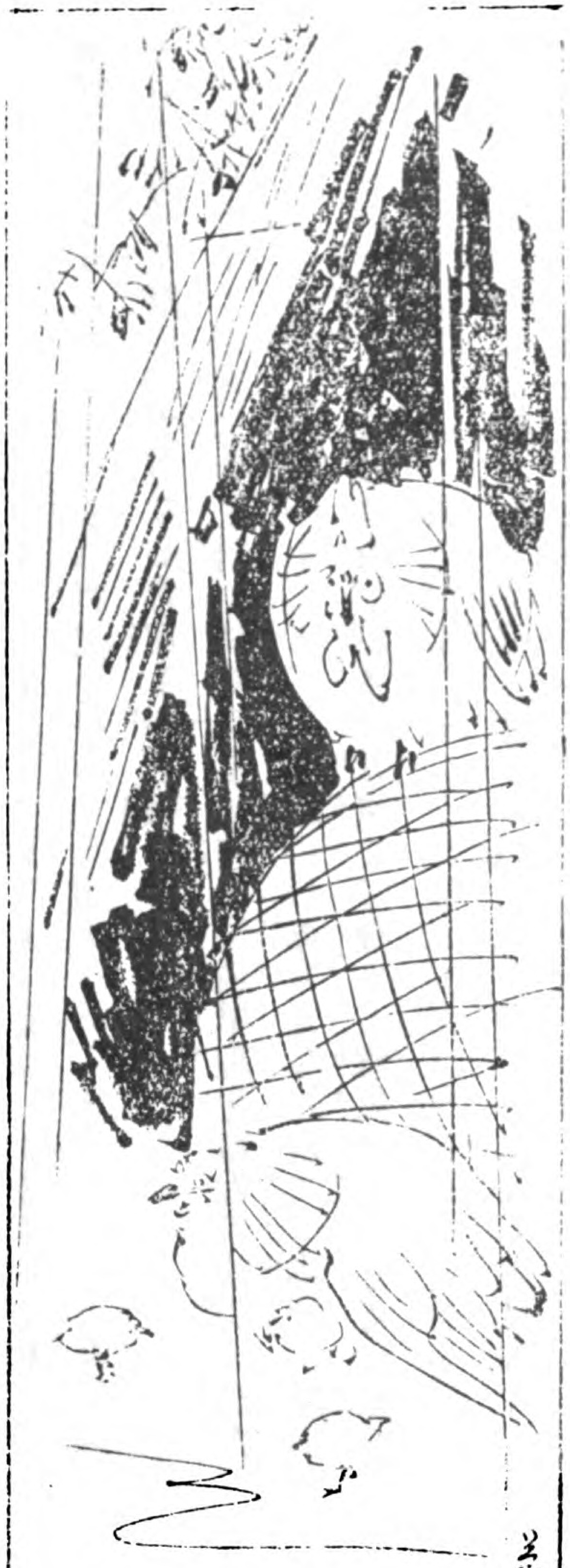
母は溜息吐きながら少しく失望したる體にて、

『お前も最早子供でもあるまい、十八にもなれば一人前である、それに今迄一文の錢も家へ持つて來た例がないぢやないか、若しお前が工場にでも出勤て居つたならば、今頃は餘ッ程家の生計の爲になつて居つただらうが、イッモ免狀々々と云つて、免狀があれば立派な者になつて見せると云ふのは、洵に末賴母敷い結構な話であるが、それは一體何時の事だい、聞けば試驗は未だと云ふ話だし、それに萬一落第でもしたならば……。』

娘は益々五月蠅くなり、語氣尙一層荒立ちて、
『落第したら、又二度受けて見るまでの話サ、そんな事を云つてた日には何んにも出來やしない。』
母は一念唯だお父さんの食事にのみあれば、依然として前述の論鋒を向けて、
『お前が食膳の調度をしないで、芋を燒くことまで厭なら、お前は何を食べるの――。』
『私は今朝買つたショコラを食べるのサ。』
と云ひつゝ急に椅子を離れ、立ちながら尙も語を繼け、
『本統にしつッこいなア、書き物も何んにも爲ない内に、最早理化稽古の時間が來た、直に二時になる私は學校のお庭で友達に會ふ約束があるよ、お友達のお母さんなんざア、本統に結構な人だとサ。』
斯くて此の女學生は挾板をわきばさみ、帽子を耳邊まで被り、怒氣憤然として、家を出で、戸をがたりと閉めて往きました、と云ふことであります。
此の如き女學生は話に聞ても憎らしう御座ります、然し此はつくりばなしではなく、實際あつた話であります、ア丶不幸にして實際あつた話であります。
私は勿論今日天下の女子皆然りとは申さぬ、數多き女子の中には中々よく事理を解して、其の學び得た所を成るべく實際に當篏めて行はんことを、務めて居る者があるに相違ないが、了簡が狹く、知慮が淺墓な女が種々樣々の學問を生噛りにかじつて、自分は餘程豪い人間になつたつもりで、生意氣極まるやうになると云ふのは、今日の女子敎育者が女子の自分、境遇性質をも考へずして、實用にならぬ學問を無暗につぎこむ結果、自然此の如くなると云ふので、今日は既に此の如き結果は明に顯はれ、此種の女子は決して尠いとは云はれぬと云ふことは嘆かはしい話である。

併しながら教育者のみに罪を嫁するは、少しく酷かも知れぬ、此點に就き父母も亦罪なしと云はれぬ、多くの父母は何でも關はず、學問さへさせれば、自分の娘が立派な者になると思ふて居る、處が其の立派な者になるだらうと思ふのは、往々皆前述のマリーのやうな者に成つて了ふ、試に御覽なさい、今日立身せんことを欲して、失敗する者果して幾人ありますか、是れ父母も亦其罪を分擔しなければならぬ、我娘を立派にしやうと思ふて、飛んでもなき女學生を出すやうになる、マリーは實に好箇の適例ではありませんか。

（をはり）



# 女子責任私觀

新庄竹涯

ピーコンスフキルド曰く「人間萬事婦人に由る」と、余は女子が社會に於て大なる權勢力を持つ事を知ると共に、又今日女子の狀態を見て、甚だ慨嘆に堪えぬのである。

若し人あつて最も愛するものは何かと、斯う云ふ質問をしたならば、余は直ぐ短刀直入に心情温雅、容姿端正なる女子であると答へるを憚らぬ、アラビヤ物語に「地上に於ては有徳なる愛らしき婦人と比較すべきものなし」といひ、ムーアは「熱帶の太陽の下にも兩極の地にも婦人あれば必ず幸福あり」といへり、實に然り、併し乍ら是は善き部分にのみ就て言ふのである、其惡しき部分に至つては果して如何であらうか、セントクリソト曰く「婦人は必然の災害、自然の誘惑物、望ましき厄難、家内の危險物、生命を奪ふべき魔物、紅粉を施したる、邪惡物なり」と、テニソン曰く「婦人は小人なり」と、要するに婦人を以て天使とするも、又惡魔とするも、畢竟善惡の二方面から觀察した結果に過ぎないのである、而し其天使たらむとするのも、また惡魔たらむとするのも、女子の責任如何にあると思ふ、余が茲に少しく論ぜむと欲するのも、只此兩樣の關係に於て、女子の責任を問はむとするに外ならない。

アナカーシス曰く「葡萄樹は三樣の實を有す、甲は快樂の實なり、乙は酩酊の實なり、丙は後悔の實なり」と、女子も亦其經過の關係に於て、三樣の方面を有して居ると思ふ、之を擧げて見れば其父母に對しての子、良人に對しての妻、兒女に對しての母、則ち是れである、而して更に時間の上から觀察したならば、劃然たる二大時期を有して居る、婚嫁前、婚嫁後則ち是である。

前者を少女時代とし、後者を妻女及び母親時代とする、少女時代と妻女及び母親時代との間には劃然たる區域があるが、妻女と母親との間は紛淆區劃する

ことが出來ぬ、何となれば女子は妻たると同時に亦母たることを常とするからである、女子は既に其境遇に於て三樣の方面を有して居る、隨て其責任も亦自ら三樣ならざるを得ない、其父母に對する責任、良人に對する責任、兒女に對する責任則ち是れである、而して余が茲に論ぜむとするのは、前者ではなく寧ろ後者である、則ち少女としての責任よりも、主として妻女及び母親としての責任である。

白樂天嘗て歌ふて曰く「人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人に依る」と、然し乍ら余はこれに向つて賛辭を呈する事を躊躇する、何となれば是は單に女子の男子に對する關係のみを見て、更に男子の女子に對する關係を遺却して居る言であるからである、既に男子の人となりが女子百年の苦樂に關係するならば、女子の人となりが亦男子百年の苦樂に關係せない理があらうか、余は男子の人となりが女子の苦樂に關係する度よりも、寧ろ女子の人と爲りが男子の苦樂に關係するの度が大なりと信ずる者である、何となれば男子の人と爲りが女子の苦樂に關係する範圍は、單に其女子一身に止まるが、女子の人と爲りが男子の苦樂に關係する範圍は、獨り其男子の一身に止まらないからである、試に東西古今の歷史を繙いて女子の爲に名を揚げ家を興し、また身命を殞し家國を亡した者、頻々相踵ぐを見たならば、必ず余が言の僞りならざるを知るであらう。

女子の男子に於ける關係が、前に言つた如くであるとすれば、其男子に對する責任が重且つ大であると言はなければならぬ、而して此關係此責任は、婚姻に由つて自然に生ずる結果である、婚姻とは何であるか、男女同一體に歸するとの謂に外ならない、古來婚姻の目的を子孫の生殖に在りとしたのは、東洋普通の觀念であつた、であるから「娶らずして祀を斷つは不孝なり」と又「子なければ則ち去る」と言はれて居つた、然しこれは女子を器物視する言である、余は夫妻間の關係此の如く冷淡ではないといふことを信ずる、子孫生殖は勿論婚姻の重要目的には

相違ないが、これを以て唯一の目的と爲るのは畢竟誤謬も甚だしいと言はなければならぬ、婚姻には何別に重要なる目的がなければならぬ、何であるか、是によつて自己の生涯を幸福ならしめむとする所の希望則ち是れである。

スコット曰く「苦痛悲哀交々來りて、我が眉目を皺くに當り、我を助くる天使は只一の汝(婦人を云ふ)あるのみ」と、思ふに男子の世に處する常に生存競爭の塲裡に立ち、優勝劣敗の渦中に投じて、失路蹉跎、不平憤恨、其の身邊に蝟集する塲合に、皆其慰藉を家庭に求むるではないか、斯くの如くして男子は家族就中其妻が同情の涙と熱心なる慰藉とを得て始めて其勇氣を回復して、再び其成効を企つるに至るものである、古昔から俊傑の士が、大業をなして令名を竹帛に乘る丶者を見るに、必ず内助の功多きに居るのである、若し其時に當つて女子の其良人に對する態度が冷淡であつて温情を缺いだならば、其婚姻は則ち間斷なき爭論の濫觴となつて、家庭は黯憺たる地獄と變し、人生の不幸亦言ふに忍びざるに至るであらう、バイロン曰く「結婚は萬人幸福の花なり、又其害蟲なり」と、畢竟幸福の花たるも、又其害蟲たるも一に女子の其責任を盡すと否とにあるのである、思ふて玆に至つたならば、余が之を論ずるもの、亦偶然ならざるを知る事が出來よう。

窈窕たる淑女は君子の好逑と、蓋し關雎は淑女を得て君子に配するを樂む、獨り君子のみでなく、一般の人士をして其生涯を幸福ならしむるものは、單に良妻を選ぶのにある、カウレーは「貞操なる細君は其良人をして純潔秀美なる愉快を感ぜしむ、彼の女の容貌は最も美麗なる花園の如く、彼の女の精神は最も有益なる書籍の如し」と云つた、實に然うである、惡しき庖丁は棒を切らずして指を切る、水と火と惡しき妻とは蓋し三大厄難であるといはねばならぬ。

女子が其境遇に於て三樣の方面を有するが如くに、其良人に對する關係にも又三種の狀態を取らなけれ

ばならぬ、第一情人、第二顧問、第三僕婢是れである、則ち情人としては其滿腔の愛情を捧げて良人を慰藉しなければならぬ、この情人としての慰藉は、實に其の良人に對して無限の價値を有するものであつて、隨がつてまた無限の効果があるものである。顧問としては最とも謹愼忠實に良人の爲めに參畫奬勵して、内助の効を奏さなければならぬ、尙ほ僕婢としては勤勉從順に良人に奉仕せなければならぬ、此の如くにして猶家庭の和樂を缺き、夫妻の間琴瑟調和せずと云へば、其罪全く男子にあると言はなければならぬ、右の如くにして女子は其良人をしてクーパーの云ひし如く「我家の笑顔は眞に秀美なり、互に和合するは眞に愉快なり、純潔なる愛情の充滿する家は、四邊到る處歡樂ならざるは無し」と叫ばしむるに至て、能く其家庭を樂園に導き、女子天使たるの責任始めて全しと云ふべきである。

母親としての責任は、妻女としての責任に比べて毫も軒輊する所ない、ナポレオン人に語つて曰く「予の心志、予の勉力、予の自治心は皆予が母の教育に依りて得たるものなり」と、兒女に對する母の感化力は實に偉大なるものと言はなければならぬ、孟母の孟子に於ける、楠夫人の小楠公に於ける皆然うである、而して前記良人に對する言動は、また直ちに其兒女を教育する所以であつて、かゝる家庭に於ける好摸範は教育上至大の價値を有するものである、ウヲリス曰く「上帝は各所に在ると能はず、故に母を作れり」と、要するに母は直ちに愛情の權化たらねばならぬ、母が其兒女に對して有する愛情は自ら其兒女をして從順ならしめ、隨て能く教育の効果を奏するものである、併し唯此際注意しなければならぬことは、舐犢の愛に溺れて其兒を賊はざらむと則ちこれである。

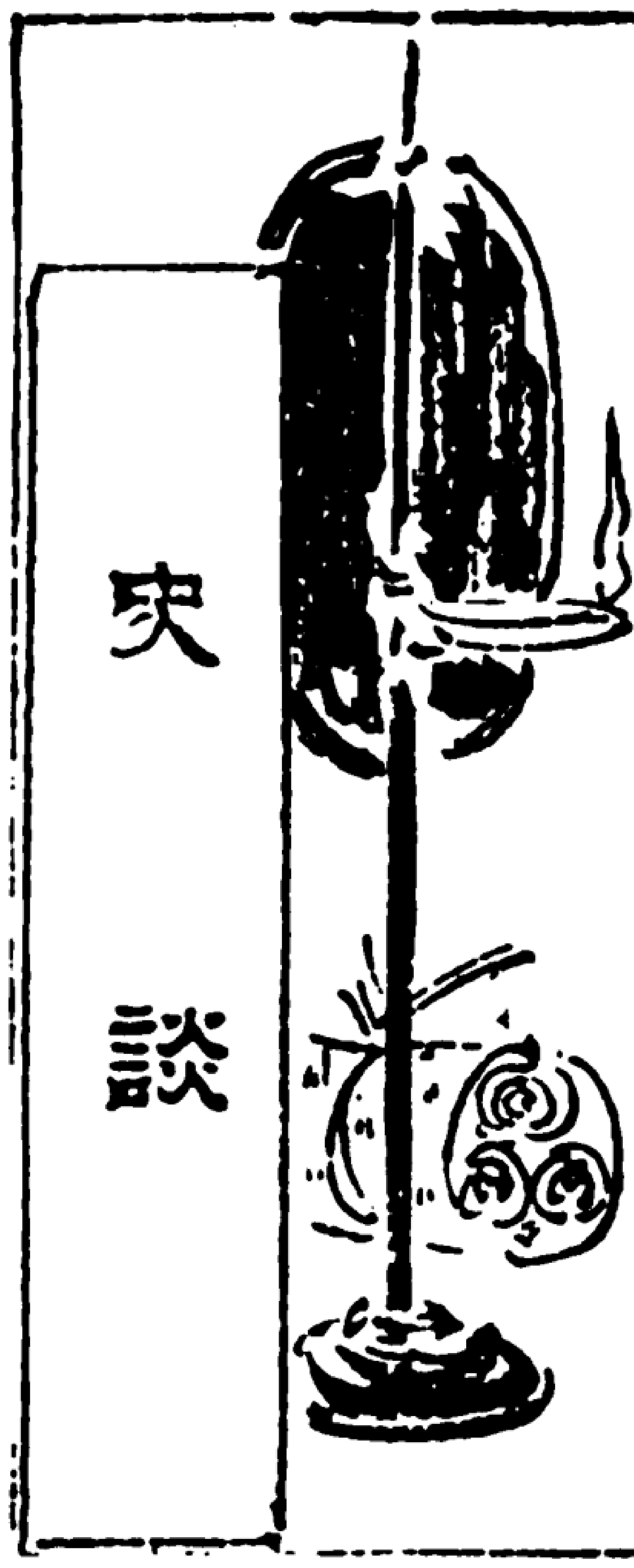
前に述べた妻女及母親としての責任を全うせむが爲めには、愛情と溫情とは必要缺くべからざる二大要素である、バイロン曰く「男子の愛は其生活中の一部たり、然れども女子の愛は其生命なり」と、蓋し

女子は生涯愛を以て終結せねばならぬ、愛情なき女子は直に女子たる資格を失ふものである、「信は信を生み愛は愛を生む」婚姻の一大要素は愛情である、其夫妻の間を結合する連鎖はまた只此愛情あるのみである。

温情が女子に取つて必要なる美徳であることは既に已に先哲が言ひ盡したのである、彼のハームスが、「婀娜たる貞婦は上帝の完全なる妙作なり、天使の眞正なる光榮なり、地上の珍奇なる靈怪なり、世界の單一なる佳品なり」と頌讃するに至つたのも、畢竟この温順と愛情との融和連合せし結果に外ならないのである、ミルトン曰く「女子は其理否に論なく男子と爭ふ時は常に否と爲る」と「理否に論なく」及び「常に否となる」の語は、一讀して甚だ奇怪に感ずるが、再讀して毫も怪しむに足らない、何となれば男子と爭ふ時は、女子の一大生命たる温順の美徳を根本的に破壞するからである、此點から云へば女子は恰も鑿で、男子は石である、石が鑿を打つも鑿が石を打つも、結局は鑿の害たるを免れない、要するに愛情と温順とは、女子の二大美德であつて又其生命であるのである、能く此二大美德を具備する者が始めて女子天使たる責任を全うし得べきである。

以上僅かに余が本論の概畧ではあるが、幸に諸嬢の一讀を博するを得たならば、本懐これに過ぎないのである。






# 佐久間象山先生の姉

梅廼屋主人

いつぞや信濃路に旅ゆきせし折、汽車が適々丹波島の鐵橋にさしかゝつた。車中なる一人のたくましい男、物知顔に、指さしゝて「皆さん御覧なさい。此の川が名にし負ふ丹波川で、彼處の岸の森のあたりが、武田信玄と上杉謙信の古戰場であります。何と昔の樣も思ひやられるではありませんか。」と云つた、時節がら戰爭と云ふ話に車内はパット景氣づいて、彼の男に對ひ合へる四十ばかりの物堅さうな婦人、何か氣にかゝりしと見え、「私は上方のもので遙々善光寺へお參りに來ましたのですが、出立の時に武田上杉の戰をした、川中島や姨捨山などを見て來いとのことでありました。只今あなたのお話では丹波島の古戰場とお仰つたが、川中島と申すのはドチラになりますか。」「イヤ、丹波島と申すも川中島と申すも一つなので、此川が丹波島川と申すから、此邊の人は一口に丹波と申します。」「左樣で御座いますか、おかげさまで國の土産話が出來ました、序に失禮ですが、此の丹波川は、ドチラから出て參るので御座いませう。」

此の問に彼の男は少々敗北したのか早速の答もなかりしが、忽ち「丹波の國から出て來るので、ソレ故丹波川と申します。」と、襟元正して咳一咳濟まし込んで更に二の矢の質問を待ち受け居る態度で有りました。此の時傍に在りし人々は、何れも卑しからぬ四十餘りのもので、善光寺參りの道者らしく見うけましたが、彼の男の丹波川の說明に「成程々々」と感服して居りました。私は一列を隔てゝ此方に居合

せましたが、一時にをかしさが、咽元へ突き掛けて其の場に居た丶まらない程でありました。

試みに思ひ見給へ。丹波の國と信濃の國とは、其の間の里數が何程有りませうか。丹波川の下流は越後の新潟に注ぐではありませんか。信濃は日本第一の高地ではありませんか。水は高きより低きに就いて流るものではありませんか。偖々彼の男は無鐵砲な說明を與へたものではありませんか。何しても吾等の同胞が地理上の智識の淺薄なるには唯愕くの外は有りませぬ。此等の人々は、明治の始め若しくは中頃の教育を受けたものに相違ありますまいが、今日とても死んだ地理學を學んだならば、略之に似よりの話が無いのでもありません。博士坪井正五郎氏曾て「今の學校では人の居らない地理を敎へて居るが地理の上から人と云ふものを除いたならば、其れこそ死骸の地理である」と甚だ痛い評をせられましたが、慥かに地と人との關係は博士の警告を服膺しなくてはなりません。私は博士の說に尾をつけて「地理の上に立たない人の說明は、其れこそ蜃氣樓の人である」と、申したいのであります。此の二つのものは、何れに重く何れに輕いと云ふことは出來ないので、彼の丹波川の說明の如きも、要するに此の二者の確かな考が無いから生じた滑稽に過ぎないのであります。是れより申述べやうとする歷史上のお話も、先づ其の土臺を明らかに致したいと思ひます。

### ◎松代の名勝

彼の丹波川の鐵橋より東を望む時は、連山の裾野に沿うて一つの小市街が見えます。之を松代町と申します。昔は海津の城と稱へて信玄の將山本晴幸の築いたものと言ひ傳へて居ます。市街の南面を壓して西に向ひ蜿蜒として居る小岳が、所謂謙信の陣所を設けたる妻條山で、麓を掠めながら市街の前を流るるものは千曲川であります、偖て川を隔て丶西の方一面の廣野が即ち川中島で、彼の「鞭聲肅々夜渡河、曉見千兵擁大牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇」と歌はれた當時の光景こそ、此の松代の名を世に紹

介したのである。而して維新の名士佐久間象山の此の地に出でしより、更に光榮ある市街として人に迎へらるゝに至りました。

象山に一人の姉がありました。幼い時から學問を好みましたが、父國善は昔かたぎの人にて、當時の習俗に從ひて、唯機織、紡績、裁縫などの事のみを習はしめ、學問に至りては僅かに名頭、村名、庭訓往來などの素讀ぐらゐを授けたに過ぎませんでした。好きこそ物の上手なれとかや。此の父をいたゞき此の習俗の間に處しながらも、機おり糸よりの暇に、弟なる象山の書を讀むを聞き居て、何時しか聞き覺へにそらんじて、終によく經書を讀み且つ講ずることが出來るようになりました。

斯樣な心がけゆゑ、妙齡の頃に及びまして、其名が一藩に高くなりましたので、彼方よりも此方よりも是非申し受たいと望むものが、數多くありました。時に同藩の醫官に北山朴翁と云ふ至つて朴訥誠實の人がありましたが、父國善は「かゝる篤行の人にとつがしむることそ女が身の爲めなれ」とて、終に北山家へ嫁入りさせることになりました。さて、北山一家の喜は言ふばかりなく、朴翁は善い妻を迎へたとて一藩の若者は羨まぬ者は無かつたそうであります。

◎新婚當時の北山夫人と朴翁

才子才女の配遇は古來稀なりと申して、才子が不束な女の爲めに、才女が不調法な男の故に人知れず苦みの淵に沈んで天を怨み命をかこちて、身の不幸を招くの例多きは、痛ましき限りでありますが。北山夫人も此の理に洩れずして、朴翁は元來其名の如く只朴訥誠實一片の人で、醫者に似合はぬ不才氣もの、風采も揚がらねば物言ひも流暢ならず、學問も淺ければ談論も妙ならず、夫人をして顏を赤らめ手に汗を握らせるやうの事が毎々でありました。まだ年若き夫人の事とて心の中に深く良縁を得ざりしをあぢきなく思ふて、それが爲め知らず／＼の中に、色あせ肉落ちて次第に衰へ行くので、朴翁の心配は一と通りでありません。自らの匙加減に心を盡し、時々

の食事から何くれとなくいと親切に介抱を致しました。夫が濃やかに温い情の有難さに「ア、我れながら何たる心得違ひをしたものぞ夫は才氣學問こそ澌けれ、心根に至りてはいと〳〵美しく淨らかなることは雪にも玉にも劣りはせぬ。況して我が淺ましい心をも知らずして、かく懇ろにいつくしみ痛はり給ふものを、不足に思ふのは、いかでか神の咎を免ることが出來ませう。兎ても角ても緣あつて此の家の人となりたるからは、力の及ぶ限り夫を助けて世の笑ひを招き給はぬやう努めて、我等夫妻の幸福を長に厚くする工夫こそ肝要なれ、と思ひかへしましたので、病もおのづと快くなり、其れより後は眞心を捧げて只管夫の爲めを計るやう心がけました。

◎夫人の内助

夫人は一たび思ひかへしてより、夫の爲めを計る外また他念なく、夫の身にかゝはる事は飲食衣服の末に至るまで、下女下男の手を借らずして、一々自ら營みました。其の外通信往復の書狀などについても、文意から文字の排列に至るまで、細かに心添をしまするとか、夫が客と談話する時は注意して其の模樣を聞き取り、客の歸つて後に其の應對に就いて其れ其れ有益な助言を進めて、夫が交際場裏に於ける位を低うせぬやう心を碎きました。去りながら時に依り夫が事を處することの餘りに覺束なきまゝに、夫に病とたゞへしめ、自ら代りて挨拶せばやとまで思ひしことも屢々でありましたが、去りとては夫のふつゝかな事を世に知られ、朴翁は妻の助けを受けて世に立てりなど、うはさせられなば、尚更夫の不爲のみでなく、北山一家の耻とも成りて、祖先の名を汚すなどのことありては、ソレこそ由々敷一大事、女は愼みとたしなみとこそ第一なれと、專ら内に在りて巧みに夫を助けました。かやうに夫人は夫の手を牽くばかりに心添を致しましたが、努〳〵夫をないがしろにするとなく、偏に己が功を夫の名譽に歸せんことを努めましたので、琴瑟ます〳〵和らぎ調ふて、樂しき年月を送れる中に三男一女を擧げまし

た。偖これよりは夫が務めは追々に數多くなり、夫を助けて參らねばならず、家政の整理は勿論、子女の敎養と云ふ新しい大いなる事柄が生じたので、夫人は朝まだきより夜たけるまで、内外の事に當らなくてはならぬ仕儀に及びましたが、かゝる中に夫人の身の上に容易ならぬ不幸が生じました。（つゞく）

# 勇敢なるコルデイ孃

石川野花

窈窕花の如き妙齡婦人の身を以て、匕首一閃、躍つて兇惡を殪すこと草を刈るよりも易く、而して一旦志を達するに及び、鼎鑊を甘しとすること飴の如く、從容笑を含むで、死地に就くの勇氣に至りては、鬚眉の男兒をして、覺えず、後へに瞠若たらしむるものあるは、佛蘭西革命の時代に於けるチエロツト、コルデイ孃にあらずや、彼れマラの罪惡は天に瀰り、地に滿ちて、天人の共に容れざるところなるも、一人の起て大義を唱へ、以て頽勢を已倒に挽回せんと欲するものなかりしに、此時に當り、孃の纎手一たび彼の身に觸るれば、彼れの體は解け骨は挫けて、忽ち此世を去れり、蓋し思ふに、天、力を孃に與へて、刑罰を行はしめたるか、或は人、手を孃に假りて、積怨を報ひたるか、胡ぞ其の事を爲すの極めて容易なりしや。

史家ラマルチン其著はすところのヂロンヂスト史に論じて曰く、弑逆の行は歷史の賞する能はざるところ、勇敢なる行爲は歷史の罰する能はざるところなりと、至論といふべし。夫れ殺人の一方よりして之を見れば、コルデイ實に罪なしといふべからざるも、その行爲の勇敢なるに至りては、誰れか又た之を嘆賞せざらむや、若し一歩を進めていはゞ、彼れの行は志士仁人身を殺して、仁を爲すものと、毫も優劣あるを見ざるなり。

今予はコルデイのことを叙せんとするに臨み、先づ當時の佛國の狀態の如何なりしか、又た彼の怪物マ

ラの人格は如何なりしかを概記せざるべからず。

そも佛國の革命が、多年の風俗習慣及び法律を打破して、殆んど狂氣の沙汰を見るに至りしは、苟くも歴史を讀む者の皆熟知するところなり、王族は廢せられ、社會の階級は取除かれ、人民はたゞ自由平等博愛の套語に沈溺して、偏に之を實行せんことをのみ願ひ、苟くも共和政府に不滿を抱くか、又は王黨に望を寄するの疑ある者は、直に捕縛せられて、猶豫なく死刑に處せらるゝを免かれざりき、彼の共和黨中比較的温和の主義を抱けるヂロンヂスト黨の如きすら、同じく嫌疑の中に入りて、殲滅の殃禍は、明かに彼等の頭に落ちんとせり、『吾等は暴風に圍まれたり、雷霆は吾等の周圍に鳴動せり、愛國者は壓制され、責罰され、威赫され、大なる苦痛は吾等の上に懸れり』とはダントンが常に其の演説に用ゐし激語なるが、マラの過劇なる言語と、血に渇ける所行とは、遙かに之にも優れて見へぬ。

マラは一千七百四十四年に生れ、その脊丈は五尺に充たざる小男なれども、容貌獰猛にして、頭甚だ太きく、性質大膽不敵にして、報仇の念に富みぬ、革命の亂起るや、彼れは『人民の友』と題する雜誌を發刊し、盛んに殺逆、謀反、奪略の主義を鼓吹しけるが、或時有名なるラフワエットの爲めに、其家を圍まれて、逮捕されんとせしかば、女俳優の家に隱れ、或は一味の者の窖藏に身を忍びなどして、猶其雜誌の發兌を續けゝり、其後市の議員となりしが、彼の十一月の大逆殺は、主として彼が煽動せしものなりき、又彼れはダントンに勸めて、獄囚を燒かんとせしことすらありき。かゝる殘忍極まれる所行に向ひて、數名の委員は國會に迫りて、彼れに對する逮捕狀を發せんことを求めしも、ロベスピールとダントンとが常に其の後楯となりしかば、事遂に行はれざりき、されば マラの惡逆は益々募りて、守舊派二十七萬人を逆殺せんと企てしこともありしぞ恐しけれ。其後遂に推されて、ジャコビン黨の首領となりしが、血に渇せる本性はいよ／＼顯はれて、日に

幾千人といふ多くの罪なき人々をば斷頭臺へ送り、鮮血もて佛國を漂はし、慘憺たる光景實に目も當てられざる程にてありき、後人彼れを呼びて、狼といへりしも、洵に理ありといふべきなり。

茲にノルマンディの首府なるカエンの市街に古昔ながらの一邸宅ありて、その内には大悲劇詩人ペル、コルネイルの孫に當れる一少婦の住へるあり、そは他にあらず、チャロット、コルデイにして其頃(一千七百九十三年)齡二十四歳とぞ聞へし、天の成せる麗質自ら鮮やかなるのみか、その祖先の血を承けて、詩才さへ凡〳〵ならざりしが、その態度服裝は全く之に引返へて、質素簡潔少しも矯飾を加へずして、其樣恰も世に知られんことを厭ひ、人目に觸れむことを嫌ふが如くなりき、父フランソワ、コルデイは、國家の不幸を悲みて、政治の改良を企圖したる士人にして、名聞ある天晴の紳士なりき、母は革命の亂起るに先だつこと數年に世を去りたれば、今は天上の人にして、此世にはあらず。

コルデイ孃は幼年の頃より多くの書籍に目を曝らし殊にかのプルターキの英雄傳はその愛讀の書籍なりき、されば自から古代偉人の言行に學びて、得るところ少なからざりしは云ふまでもなきことにて、他日國の爲め民の爲めに、一身を犧牲に供せしも、其基くところ此にありしは、粗々推知するを得べきなり。

マラの暴戾は增長して愈々其歩を進めぬ、或は嫌疑の廉をもて、或は報仇の情に驅られて、彼れは復び多數の人民を犧牲とし、其の好める鮮血を味はんと決定せり、リオンにては二千五百人、マルセイユにては三千人、パリにては二萬八千人、ブレタゴン及び其他の各州にて三萬人、都合六萬三千五百人の生命は無殘なる刄の下に斃さるべき運命は將に迫り來らんとせり、遠近之を傳へ聞きて戰慄せざるなく、マラの名は恐れと惡しみの惡魔の如く感ぜられしぞ道理なる、是に於てコルデイは憤然として、此の數萬の犧牲に代はり、吾が生命を棄てゝ、彼等を救は

んと決心せり、見よ芳紀僅に二十四歳、花をも欺く此の美婦人は、吾が身を殺して、六萬餘人の人命を償はんが爲めに、進んで惡魔の窟に入りて、そを殪さんと謀りしは、健氣とやいはん、勇ましとやいはん、實に感ずべき限りにあらずや、頃は千七百九十三年、乃ち今を距ること百年餘の昔にてありき。

その七月七日といふに、コルデイは其の父と姉妹とに別れを告げんとて、アルゼントに行きぬ、心の中の企ては固より打明けて云ふべきにあらねば、革命の亂を避け、且は生計の路をも得んが爲め、英吉利に赴く積りなりと僞りけるに、父は其志を賞讃して、前途を祝しけり、同日また伯母の住へるカエンに至りて、決行に必要なる萬般の準備を爲しけるが、伯母へは父に語りし如く、英國に行かば、佛國にては容易に得難き位置を占むるを得べしといひければ伯母もそを悦びけり、さればコルデイは、平常親しかりし人々に一々別を告げ、種々の贈物などを分け與へ、最も親密なる友人へは、其の好讀の書籍を贈りしは、紀念の爲めにてありしとは、後にぞ思ひ合はされける。たゞプルタークのみは旅行中に讀まんとて、その行李の中に殘しける、或日コルデイは近傍の麥畑收穫の景を寫生せんとて、手に畫用紙を携へて、伯母の家を出でしが、豫て昵近づきなる貧しき勞働者の兒供に逢ひしかば、コルデイは畫用紙を兒供に與へて云へるやう、ロバートよ、これは御身に取らするぞ、善良なる小兒となれかし、御身は此後再び妾を見る時あらじなど語りて、其まゝ旅路へと赴きぬ、ア、是れぞ其の古郷と其の伯母の家との見收めなりき。

かくて七月十一日の午時頃に巴里に着き、或る旅館に宿し、種々の思に充されて、一夜を過ごしけるが其胸の中には温和なる性質と、激發せる決心の間に定めて苦闘の起りしなるべし。翌朝は早く起き出でて、淸らかなる衣裳を着けて街衢に出で、一本の小刀を買ひ求めて胸に納め、又た一本の手紙を認め、一大秘密を告げんが爲め來れりとの意をあらはして、

マラに面會を求むるの準備を爲し、夕の七時にマラの邸宅へと尋ね行きしに、門番等固く拒みて容易に入るべくもあらざりしが、やうやくにして許されければ、喜び勇みてマラの室にと入りぬ、マラは此時暗憺たる燈火の下に、ボルボン王黨求刑に關する書面を認めつゝありしが、コルデイの携へたる書類を見て、其書中の事柄を問糺し、カインに逃亡したる人人の姓名を一々書き記して、好し、一週間の中には、彼等一同斷頭臺に上さるべしと叫びし時、其詞の終るや終らざるに、コルデイは忽ち彼の小刀を閃めかして、一刀深くマラの胸を刺しぬ、急所の痛手に如何でか堪ゆべき、マラは虫よりも細き聲もて一聲救助を叫びて、直に後に倒れて死しぬ。

此時マラの家の騷擾は筆紙に盡すべくもあらず、叫びの音、嘲りの聲高く聞へて、兵士は進み來り、コルデイを寸斷せんとするの勢を示せり、コルデイは騷擾の間を忍び出で、近隣なる獄囚へと急ぎ行き、殺人の罪を犯したること、又其の目的を達したることを包まず隱さず白狀しければ、番卒等はマラを刺したる鮮血の猶乾かざる小刀を見て、汝は之を用ゐたるかと問ひぬ、コルデイは然りと答ふ、何故かゝる大罪を犯せしかと問はれて、佛國目下の大擾亂と大危阨とは、全くマラの爲す業なれば、其を除きて、佛國を救はん爲めに吾身を犧牲となしたるなりと答へぬ、又た敎唆者なきや、巴里にて何人に面會せしや、小刀は何處にて購ひたるやなど樣々に尋ねられしも、コルデイは一々明白に答辯して少しも撞着するところなかりき。

裁判は其翌日まで續きしも、コルデイの證言は少しも換はるところなければ、兼て覺悟したるが如くに死刑の宣告は申渡され、直に執行せらるゝこととなりぬ。憐れむべし、コルデイは、人殺しの罪人の着るなる紅き衣を着せられ、囚車に載せられて、叫び罵る多くの徒黨原を後ろにして、巴里の市街を引廻されぬ、此時雷鳴はげしく、電光すさまじく、天地慘憺として此の女丈夫の爲めに怒り悲むもの、如く

なりき。やがて斷頭臺の下に引据ゑられ、今は早や身首處を異にする時に及びしも、決心堅確にして意氣少して沮撓せず、手は縛られ、赤き衣裳は長く裾を曳きて、最と哀れに見へしも、コルデイは快活に足踏みして階段を上り行きけるぞ勇ましけれ、かくて一打の斧の下に花の姿は散り亡せて、長く恨みを刑場に留め、千歲の下人をして斷魂の情に耐へざらしむ。

予はコルデイの行を以て、婦人として正當のことなりといふ能はざるも、彼れが兇惡を殪して、佛國數萬の人命を救ひたる偉業は、長へに後世に傳ふに足るべしと信ずるなり。（そはり）



學藝

# 庚子道の記評釋（三）

文學士　境野天華

こよひのやどりは江尻といふ所なり、そのかみかんざしもせざりしほどにて、伯父なりける僧に具して京へのぼりし時此すくにをちの僧のしれる人あるが、三保の松ばら見せしことありき。

此の夜は江尻の宿に一泊することにした。まだ自分が齢十五にも達せなかつた幼き頃、伯父に當る僧侶の人に連れられて京都に上りたことがあるが其の途中此の宿に立寄り、伯父の知る邊の人に三保の松原の案内をして貰らつたことがある、其の頃の記臆が今日復た此宿に泊りたに就いて思ひ出されて來た。（以下の本文下の「旅寐の物さびしきにつきてかゝる人のうへさへ思ひ出られてこそなつかしかりしか」と云ふ迄は其時の事を追想して書いたもので一段にして見るべきであるがそれでは餘り長くなるので便利上幾段にも分つことにした。）

かんさしもせざりしほど　禮内則に女子十年不出、十有五年而笄、二十而嫁とあり、女の一人前に達した年頃を云ふことになりて居る。

家のうしろより舟さし出で富士はさらなり、伊豆駿河うみごしに信濃の山々さへみえわたるけしき、いまも猶おもかげにたつこゝちす。

伯父の知る邊の人の家は後方が直ぐに海になつて

居たので、舟さし寄せて乘り出し三保の方へ漕ぎ行く道すがら顧みれば眼に近き富士の景色は云ふ迄もない、伊豆の山、駿河の山、遙かに信濃あたりの山々迄海の彼方に見やられる其の面白い景色其の時の景が想ひ出されてあり〳〵と浮んで來るやうである。

伊豆駿河うみこしに信濃の山　造句の上から一種の倒句法と云ふべきものでうみこしに伊豆駿河の山信濃の山々と云ふ意を斯く顛倒した所が巧みで面白い、

松原のうちには三保の御神のみやしろおはす。はふりなどめこくしたるが家もひろくずさなどのおほくてすむなり。よそより見しさまは、海原の中にさゞやかにさし出たる所なれば、さこそ心ぼそうすゞろなるめのみみるらんと思ふに、そこにいたりてみればさもあらざりけり。波の音風の聲などこそさわがしけれ、それも世の中のわたりぐるしきにくらへては、いつもなぎたることゝちこそせめ。神のみくりの昔よりよせられたるあれば朝夕のけぶりたゆることなしとぞ。

三保に着いた。松原の中に三保明神の祠がある。此の社の神官達は廣々とした家宅を構へ、妻あり兒あり、下男下婢の多くを養ひ、極めて有福な生活をして居た。此の三保の一帶の地は遠くから見ては海中に突き出でた極々小さな所のやうに思はれるが、來て見れば案外にも思はれる程で、只波の音、風の音の劇しいのは所が致方も無いこと、云はなければならぬ。然し此の世の中は隨分渡り苦るしいものである、それに比べては此處の波風は何でも無く平穏無事と云つてよい。それに明神に寄せられて居る封戸封米は昔から絕えたこと無

いと云ふとであれば、奉仕する神官達の朝夕の竈の賑ひも察せらるゝ。

はふり　神主の次に位する神職の名。

世の中のわたりくるしきにくらへては　白氏文集「大行路」に巫峡之水能覆レ舟。若比二人心一是安流とあり、又兼好法師の歌にも「世の中を渡りくらべて今ぞしる阿波の鳴門に波風もなし」と云ふのがある。此等を思ひ浮べて記したものらしい。

宮司は大田といへるがぶんやのすけにて六位のものなり。娘ひとりもたるをいたうかしづけるさまなり。まらうどのあるときは必この娘に琴すゝめて其夜も弾きけり。呂律のしらべにこそあらね、つくしことのいやしげなるもひなにはありかたうめづらしう聞ゆ、三保は姫神におはすればこそあれ、彼屋のむねより



および玉ひけん神などのあたりならば、おやのいかに心もとなからんとをかし。

大田と云ふ三保神社の宮司は、官は大學の助、位は六位と云ふ身分の人である。此の人に一人の娘があるが、宮司は甚どく此の娘を大事がり、掌上の珠とも思ふて居る様子、其處で來客がある時は此の一人娘に箏を引かせてもてなし、宮司自らもそれを以て樂しみとして居る樣子、丁度自分どもが立寄りた時も例により此の娘の人が出て箏を奏でゝ呉れた。陰陽呂律の正樂の聲とき調子はなくとも、此の時奏で呉れた筑紫琴の卑しき調べの一曲も、誠に珍らしく面白く聞きなされたことである。三保の神樣は姫神樣であるからまづは無難であるが若しや彼の屋根の上より遊び玉ふたとか聞く男神にも在しまさんには、此の娘の奏づる箏の調子面白きも親の身に取りては反つて心配の種子であらうと餘計なことまで考へられたことであつた。其の宮司の娘は、丁度其時年齢は自分よりも三つば

りも上であつたと覺えて居るから、自分の年齢から推す時は、今は最早相應のお婆されになつて居るだらう。どのやうな處にか緣づき、どう身の振り方がついて居るか、子供が出來て居るのであらうかと、此の娘の人と云ふのも其時も互に親しく話しなどしたと云ふでさへないが、今夜此の旅宿の餘りに物寂しきに誘はれ、過ぎし昔の事さきからさきへ思ひ出されてさまで深い因緣があるでも無い此等の人の身の上の事までも思ひ出されて、其後どうして居ることであらうと氣に懸りた。

ふんやのすけ　大學助に相當、官は六位下、

三保は姫神　三保明神は其の始め出雲三穗ケ崎から遷座ありたので神體は御穗津媛大已貴命の妃となつて居る。

屋のむねよりおよひたまひけん神　加茂大神の事を云つたので、其の事は山城風土記に委しく書き載せてある。

三月朔日江尻をいでゝ興津のあひだかの名たゝる松原見えたり。

　清見がた霞のまより見わたせば
　　浪にたゆたふ三保の松ばら

深草の上人の母を具し奉りて身延へまうでたまひしに、「殘月我をおくる清見が關」とつくられしは、からうたなれどえんにきゝなされて、まづ思ひ出らる。今は波のみ關もりてむかしのあとはなけれど猶心はとまるなり。

三月の朔、江尻の宿を立ち、興津の濱づたひに進み行いた。この邊りからはかの名高い三保の松原は道すがら見ることが出來た。

(歌)棚引く春霞、其の隙を洩れてさながら浪に漂ふかと見ゆるうるはしの松原、あはれ三保の松原、

昔深草の元政法師、曾て其の母を伴ひ身延山へ參詣せられた時、「殘月我を送る清見が關」と云ふ詩

を作られたと云ふことであるが、これは女の深くも知り得ぬ「から歌」ではあるが、今の旅情に適切である爲め如何にも立派な詩の句と此の景に對してはまづ第一に思ひ浮べられる。其の詩に歌はれた清見が關の跡は何處であるやら、あはれ關守の影も見せない代りに、昔に變らぬは只打ち寄する磯の邊の浪、昔の面影はそれとたづぬべきすべも無いが、人の心は尙ほ長く長く行くへも知らず昔の跡を追ふてこゝらにさまよふのである。

深草の上人　元政法師の事、此詩は其の身延道記に出て居る七言古詩の冒頭に、殘月送吾清見關、回頭猶見三穂遼。とあるを引いて來たもの。

蒲原へかゝる山道の左のかたに岩もる雫のしたゝるをきよげにものにうけて、こゝろぶと賣るものあり。此水は九郎義經の硯の水といひつたへぬ。くわさにておくへ下り給ひし時、此水のもとにて都への文などかいたまひきとまのあたり見しやうにいふを、皆人いみじかりて、をりはまださむけれど心わかゝう水のむもありけり。

これから蒲原の宿と云ふ山道の左の方に當りて岩崖から滴り落ちて來る水を清潔なる桶のやうなものに充てゝ其の中にところ天を入れて道行く人に賣りて居る所があつた。其の賣手の口上を聞いて居ると＝抑此處なる此の御水は昔九郎判官源義經殿の御硯の水に使用せられたもので、判官殿まだ弱年の頃奥州下向あつた時此の水のほとりに立寄られ、京都への便りの手紙を書いて居られた因縁由緒あるあり難い御水＝と自ら見でもしたやうな口振で頻りと功能を並べ立てゝ居るのを、同伴の人々も面白半分さうした有難い水ならばと云つて、まだ寒い時節であるのにも拘らず、手に受けて甘さうに飲んで居る人もあつた。其の狀が如

何にも若々しう眺められた。
こゝろぶ　海草の名大凝菜と書くところ天はこれから製られたもの、

うき島が原よりふじの山近く見ゆ、いたゞきには雲のたなびきてかたのほとりより雪いとしろうかゝり、裾はなべてみどりに見ゆめり。今めきたるすそごの几帳などたてたらんさまの筆にも言葉にもいひつくしがたきけしきなり。鹽尻といふ名のあてにも聞えぬを京極中納言のにくしと思ひたまひけんもことわりなりや。

ちりつもる山てふ山をかさねてや
名高きふじの峯となりけむ

かくて千本の松原を見やりつゝ沼津の宿にやどる、





今過ぎ行く所は浮島が原、此處よりは富士の高根も近く仰がれる。其頂上には白雲棚引き、肩の邊以下は眞白く降り積んだる雪、其の裾野は綠色に見ゆる所、譬へば只今流行の裙の所を濃くぼかして染め出した几帳を立てたやうな狀で、其の景色はとても筆にも口にも形容し得らるゝものでない此の尊とき美しき山に彼の鹽尻など云ふ面白くも無い殺風景な名を付けたのを、定家卿は面白からず思はれたと云ふことであるが實にさもあるべきことで同感に堪へぬ。

(歌)一切の山々と云へば何れ高いものであるが、それを悉く集め來りて初めて此の名も高き不二の峯とはなつたのであらう。とても尋常一樣の山ではなく名の通り一ありて二なき山である。

千本の松原を餘所に見ながら、沼津の宿に着いた。

すそご　染物鎧のおどし等の色の上方薄く下方に行くに從ひ次第に濃くなつて居るのを云つたもの

で其色は多く紅と紫とである。
京極中納言　和歌の名家藤原定家の事、此處に引かれて居る事は伊勢物語勘物と云ふ書に出て居る
鹽尻　海邊にて砂を囲く塚の如く積みあげたるもの、これに潮水を注ぎかけ、日に晒して鹽を製するもの、此の言葉は古く伊勢物語に出で、富士を形容した言葉に「なりはしほしりのやうになむありける」とある。

二日は關をこゆとて夜ふかく宿を立ちて星のひかりや﹅白むころ伊豆の國府につく、三島の神の御社の前にしばしいこふほど女はさはりかちにてえまうでず心ばかりのぬさ奉るついでに

行かへりみしまの神の宮よりも
　ふりぬるものは我身なりけり

二日の日には今日は名高き關所を經て八里山道の函根越えすることであるからと云つて何時より早く宿を出發し、夜も明けか﹅り、星の光白く薄すれ行く頃には早くも伊豆の國府に着いた。そこに鎭座ます三島明神の御社の前に暫時休息したが、折惡くも女の身の、月の穢れの爲めに參詣することも出來ず、只心ばかりの幣帛を奉る其の序でに
(歌)こ﹅の三島の神の御前は幾度も幾度も往來し其度毎に御社も幾くらか古るくなりて覺ゆるのであるが、それよりも尙ほ古るびたのは自分の身であらう、年は更ける姿はやつれるさても心細い。
さはり　月經の事、和名抄には月水を「さはり」とよませてある。

はこね山に入るに初音が原といふ所をすぐ、枯れたる杉の村立てるうちに、鶯のひなどもの巣たちたるがおほくなくをきくに、春ははやおくれたれど猶めづらしきこ﹅ちす。何某の僧正にきかせ奉らましかば、郭公ならでもおぼすらんよ

などいひて、すける人々は歌よむもあるべし。

いよいよ函根山に懸りた。道は初音が原と云ふ所を過ぎた。其處等に枯れたる杉の林がある、巣立ちをして幾程にもならぬと思はれる鶯の雛が數多く、其の林の中にまだ鳴きならひの覺束な歌を弄して居る。今は春も末にならうとする時節であるが、尚其の鳴く聲は珍らしく聞かれた。彼の何とか云つた僧正の君に此の聲を聞かせ申したなら、郭公の聲ではないが、これも定めし「いつも初音の」と賞美せらるゝことであらうと云つて、此の道の嗜みある人達は歌など詠んで居たらしい。

なにがしの僧正　袋草紙に其の逸話が出て居る、初音の僧正を指して云つたもの。其の歌は金葉集夏の部に權僧正永縁、きくたびにめづらしければ郭公、いつも初音のこゝちこそすれ」とありて、世の人これによりて初音の僧正と呼んだと云ふ事である。

みつやなどいふあたりは緑の林茂りたる蔭をたのみて、よにしらぬものゝ旅行人をわつらはせしこと、むかしはありしにこそ。今は里人の家居もあまたたちつゞきて、道ひろき御代なれば心ゆるして馬の上こしの内などにある限りはねぶりてさへもゆくなり。

山は漸く深くなりて來た、いゝみつやと名のある邊りは取り分け木立生ひ茂り、緑の蔭小暗きばかりである。斯樣な處に不逞の盜賊追剝など云ふ輩巣窟を構へて、道行く旅人を襲ひ、其の貨物衣服生命を奪ふたことが、よく昔はあつたと云ふが、今は聖代の有難さには此の山中にも住む人多くなり家も建てつゞけられて居るので、左樣な危險も無く、意を安くして馬なるものは馬の背に眠り、駕籠なるは駕籠の中に眠り、眠りながら此の函根の山越をすることである。

綠の林　後漢書光武紀に綠林の賦の事が見えて居る其等を考へて此の句を出して來たものと見える

山中といふ所に糸櫻の見ゆるを

玉くしげ箱根の山のいと櫻
　あけなばいかゞよるのみぞ見む

と云へば月の夜ならばこの歌もあはれならんとてわらふ。げに旅にていひ出づることは常のに今ひときは　おとりてわれさへおぼゆれど、後引なほさんもものうくてさておきしなり。

山中と云ふ所を過ぎた時、其の邊りに糸櫻の咲きこぼれて居るのを見て、

(歌)此の箱根の山中に咲いて居る糸櫻も夜が明けて見たらばどの位美るはしいとであらうと思はるゝが、今はそれも詮方がない。

と云ふ時に不似合な歌を作り出したので、月の夜に際して此の歌を詠み出したなら、時に取りてはそれも面白いことであらうがこの歌はどうも感心しかねると云つて笑ふ人もあつた。不斷と云つても餘り立派な歌の詠める自分でも無いけれど、旅行中の匆々の時にはたまに詠み出す歌も一層拙く覺ゆるのであるが、自分でさへさうと氣が付くものを、人にはいかばかりであらうか、然し歌が拙いからと云つて後になりてそれを色々と手を入れて細工するのも煩さく其の儘にして拙なる所をさらけ出したのである、

玉くしげ　箱の枕詞、

あけなば　箱をあくると、夜の明くるとを云ひかけたる詞、

（未完）



# 支那古代の詩（下）

林　恒　山

今度は少し長い詩を話さうと思ふたが、其れより短

い二つの方が宜からうといふことであるから、矢張短いのを二首丈話してお終ひとせう、先づ初めは小星といふ詩を話さうが、小星と云ふ詩は、其序に惠及レ下也とあつて、惠とは恩惠といふ事で、夫人の恩惠が召仕のものにまで行屆きて、召仕のものが、喜んで身を粉にして能く勤めるといふ事を述べた詩である、

嘒タル彼ノ小星。三五在リレ東ニ。肅肅トシテ宵征ク。夙夜在リレ公ニ。寔ニ命不レ同シカラズ。

此章の初めの二句は比で、嘒はもと口をひそめてコソ〳〵話をするといふ字であつて、小さき聲の可愛らしきことを、詩經中にも鳴蜩嘒々など書いてある、此字がすぐと小星の形容詞とはならぬが、本字は暳といふ字で、嘒は假りに用ゐたのである、暳は熒といふ字と通じて光の小さくかすかなる貌の字なり、之は夕方の景色をいひたるもので、星の光りも未だ明ならずして、ポッチリと光ある星も、多くは見えず、僅に三つか五つかの東方の天に現はれたといふ事で、西の方の天はまだ日の光が殘つて、明いから星も見えぬが、東の方にのみ、僅に見ゆるので、ほんの夕方を寫したのである、此小星は妾の事を比へたので、此詩からして妾のことを小星といふ、妾の君に仕へるのは、何時も夕方であるから、其妾が見た所をすぐと比べたので、君を日とし、夫人を月として、妾を星にしたるのである、夫人が在れば、妾の姿はなきも同樣となるもので、月が出れば星の光の見えぬ樣になるに比べたので、妾は夫人の恩惠により、勤まるもので、夫人の恩惠によりて君の前に出ることを得るのである、肅々から以下の三句は、前回にもいつた賦で、實事を述べたので、肅々とは、肅はツヽシムといふ字で、立居振舞のシヅカにしてサワガシからぬ事で、如何にも謹愼の體を表はす事をいふ、宵往の、宵は夜の未だ淺い時で、ヨイといふ事である、夙は早朝にて夜はヨルで、早朝も、夜深けでも、君の側に在りて、まめに勤める、即ち暮方に君の御殿に行き、宵に君の前に出で、夜晩くま

で勤め、朝も早くから勤める、寔は實なりとあつて正しくといふ事である、命は格といふ事で、身分の事である、妾は夫人とは身分の卑い事をいふので、妾も能く己の身分の夫人とは大に相違して、己の身の賤しき事を知つて、夫人を敬ひ、決して怨む樣の事なく、只管君を大事に萬事に心掛けて、謹愼に勤むるといふのは、夫人が嫉妬の念なく、能く下々を惠むの恩に感じて然るものなることを述べたので、此妾の命即己の身分の卑しきを知りて、夫人を敬ふといふ事が、夫人の恩惠でなければ出來ない故に、是れが極めて夫人が召仕のものに對する美德を賞めた所である、

嘒タル彼ノ小星。維レ參ト與昴。肅肅トシテ宵征ク。抱ニ衾ト與ロ裯。寔命不レ猶シカラ●

此章も初めの二句は比で、初めの一句は前と同じ、維はコレと讀みて別に意味なく、參と昴とは星の名で、夕方に出る星である、前章では唯々三つか五つかと云つた許りであつたのを、此章では星の名を舉げたまでゞ、意味は前章と同じく、夕方になりて、カスカに小さき星が、僅ばかり見えて、其星は參と昴とである、即 妾は此小さき星の參と昴との如く月に比べては比べものにもならぬ、月が出れば、忽ちあるかなきか見えぬ樣になる程の小さきものであるといふ事である、以下三句は賦で事實であるが、初めの一句は前章と同じく、衾はカイマキの樣なるものをいひ、裯は說文に幬に作り、古は婦人の寢間の入口には凉簾の樣なものを下げたので、裯とは之れの事である、妾といふものは宵に御殿に入りて、衾の如き衣類や、裯の如き居間の飾などを、抱くは取扱ふ事で、斯るもの丶世話をせなければならぬ、夫人とは違つて、斯る賤しき役までも勤める、是れは正しく自分が夫人と違ふからである、猶はおなじからずと讀む、ナホゴトシといふ字で、殆んど同じといふ意から、同じからずと讀むなり、凡て前章は三五東に在り、夙夜公に在りと、邈といひ、此章にては星も參と昴と丶いひ、役も衾と裯と丶品を舉げて說

きたのである、是等が詩の作り方である、夫人は兎角嫉妬といふ事を謹むのが、六ケ敷しいものであるが、支那の敎には婦人の第一の謹を此嫉妬といふ事にしてあつて、七去の一にも數へられて居る位で、此心を謹みて召仕のものを惠み愛するといふ事が出來れば、其他の事は出來るに相違ないといふ事で、此詩は賤しきものゝ事なれども、夫人の敎には大切なる詩の一つである、

次は鄘風の柏舟といふ詩を話さう、此詩は序に共姜自ら誓ふ也とあつて、共姜とは共伯の夫人で、共は姓で、姜は名である、共伯の夫人たる共姜は、夫が若死せられて、寡婦となられたが、自ら貞節を守りて再び他に嫁せずと誓ひたるのである、即再嫁せぬといふ意を述べた詩である、

汎彼柏舟。在彼中河。髧彼兩髦。實維我儀。之死矢靡他。母也天只。不諒人只。

此章も初めの二句は比で、次の五句は賦である。汎は舟のブラ〳〵と浮び漂ひ居ることで、柏はコノテガシハ、ヒノキ、モミなどの類を總稱していふのであるが、舟を作るのはヒノキである、中河は前回にも述べた通り河中といふ事を韻を踏むために轉倒したもので、河とは黃河の事である、支那では唯々河といへば、何時も黃河の事になる、此ブラ〳〵としてヒノキにて作りたる舟が黃河の中に在りといふのは、共姜が夫に分かれて捨てられた舟の如く、誰によるといふ事もなく、之を援くるものもなく、黃河の如き大河の中流に漂ひ居るといつて、殿中に在りて、世間にも知られず、たよりなき身の上であるといふ事で、寡婦の境遇を比べたので、柏といふのはヒノキは木理細にして堅き木であれば共姜の貞節堅きを自ら比べたるものである、髦は髮の被ふたるをいふので、兩髦は附髮の事で、詳しくいふと長いが、一口にいふと親のある間は、何時までも此附髮をするのが、當時の禮であつたので、儀とはタグイと訓みゝてツレアイといふ事で、之はユクといふ字である

から、イタルと讀み、矢はチカフといふ字であるから、コヒネガハクハと讀み、靡は無しにてナケンと讀み、他は他心即二心といふ事で、諒は亮と同じくアキラカといふ字で、其れより信ずるといふ義になり、又察するといふ事にもなる、只は助字で意味なく、語氣を延ばすまでの字である、此五句の意義はフサリと附髮をして居られたる共伯は、實に此人こそ我ツレアイで、二人となき我夫なれ、我夫といふものは此人より外にないから、自分は死するまで誓つて二心を抱く樣なることはすまじ、二人の夫は持つまじと誓つて居る、然るを母は年若でたよりなき身上といふより他に再嫁させ樣とせらるゝが母の恩は天と共に洪大なるものであるが、其母までも此自身の決心を唯々口先許りとして、信じ又察してくださらんと、自身の決心を述べて、哀訴せる意である、此言葉の穏なるのが、婦人なる謹みのあることと、母に對していふ所で誠によく出來て居るのである、又髧たる兩髦といふので、夫共伯はまだ親の在る身分で、至つて若死である事が分り、父母といはずして、母と云つたので、里方には最早父がなく、母のみであるといふ事も分る、此母のみを云つたのは實事であるが、夫の事をいふに、髧たる兩髦を形容詞で、其人を見るが如く、其人の位置までを現したるは、如何にも巧なる云ひ方である、

汎彼柏舟。在彼河側。髧彼兩髦。實維我特。之死矢靡慝。母也天只。不諒人只。

前の二句は比で、下の五句は賦であるとは文章の通りである、又第一の一句は前章と同じく、河側は河の中流より右か左かへよつた處で、此二句の比は前章と別に變つた所はない、其の次ぎの一句も前章と同じことで、特はヒトリといふ字で、其反訓で矢張タグイと訓みて、ツレアイといふ事になる、此反訓といふ事は支那の古書には多くあつて、論語にも舜臣五人有りて、天下治る、武王の曰く、予に亂臣十人ありとあつて、此亂臣といふを亂を治むるの臣な



りと說きて、之を反訓としてある、斯いふ樣に、字義の反對の意味に採ることが幾等もある、此特といふもヒトリといふ反對でタグイといふ事となる、併し釋文によると詩を引いて直としてあつて、直は値と同じことになりて、反訓にせずともツレアイといふ事になる、慝はヨコシマと讀みて、邪心といふ事で、此外は皆前章と同じ事である、斯く前章と二三字丈違つては居るが、其意味は略々同じことで唯々前章には他心なしといつたのを、此章にては邪心といつて、再嫁することを人道に協はぬヨコシマなる

心であると、深く斥けて、自身の決心の堅きことを表はしたのである、他心といへば、夫を慕ふの意であるが、邪心といへば人道を守るの意で眞逆母でも邪道を行へとは強いられまいといふ意味で、一層強味がある、是等も詩の作り方である、此詩は夫の若死せる、寡婦の貞節を守らんと誓ひたるもので、實に不吉不幸なる身の上の事であるが、斯る遭遇の婦人は、世には珍しきにあらず、時節柄婦人の敎として、大切なる一であらうと思ふから、此に撰んだのである、先づ此度は是れで一旦切り上げとせう、(完)

# MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamori.

## I. Letters. 書翰文

55 Sangenya Cho, Azabu,
March 1904.

Dear Miss Marie Eastlake,

It gave me great pleasure yesterday that you joined our bicycle trip although snow was falling. But I was very anxious about you when you started home by bicycle against my earnest advice. Please let me know if everything was alright.

I took train and reached my house at about 6 o,clock, Mrs. Ito and some of the gentlemen accompanying me.

There are sixteen lady members besides yourself in the Mita Bicycle Club. I think many of them will join the next trip which will probably be held at the beginning of next month. I hope you will join every tour in the future if possible.

Be so kind as to present my compliments to your parents who I hope remember me.

Yours most faithfully,
A. Miyamori.



拝啓昨日は吹雪を冒して自轉車遠乘に御同輪被下誠に愉快に御座候。然るに小生が熱心に御忠告申上候にも拘はらず輪乘して歸路に就かれたる時は大に御案じ申候。御歸路御無事なりしや御一報のほど願上候。

小生は伊東夫人及び數名の男子の輪客と共に滊車に乘り六時頃歸宅致候。

三田輪友倶樂部には貴孃の外に十六名の婦人の部員有之候。次回の遠乘は多分來月初旬に催さるゝ事と存候が其節は婦人輪客の多くは出輪可致と存候。將來成る可く毎回御出輪被下度願上候。

御兩親樣には定めて小生を御記憶の事と存候間何卒御鶴聲のほど奉希候。

早々頓首

三月十四日　宮森麻太郎

まりーいーすとれーき樣机下

| | |
|---|---|
| Miss Marie Eastlake,<br>No. 15, Dote Sambancho,<br>Kojimachiku,<br>City. | stamp |

此は封筒の表面なり裏面には發信者の住所姓名を記すべからず住所姓名は文面に記入すべし。

March 15th, 1904.
Tuesday.

A. Miyamori, Esq.,

Dear Sir,

I enjoyed the bicycle trip very much, it was great fun. The ride home was not so comfortable, because the snow blew into my eyes and drifted into my lap and covered me in front. But I reached home safely, and Mr. Matsumoto kindly saw me to my own door. I am afraid it was very uncomfortable for him, but he would come.

I wish there were more lady members. Do you know Mrs. Hinata the wife of Mr. Hinata M. P.? She is very beautiful and can ride a bicycle. I hear she is going to buy a chainless one. If you do not mind and if she likes I would be so happy if she would join our club.

I hope to have the pleasure of going on many more bicycle trips with you and the other members.

Is there any sign or badge of the club? And when do I have to give the club fee?

I belong to the "Palette Kwai" and the "Star Club" and the "Temperance League" and the "Kudan Literary Club" and the "Tiptop Club." So many! Six Clubs.

Please write and tell me when you have the next bicycle trip.

Excuse this dirty letter.

Yours sincerely,

Marie Eastlake.

拜啓自轉車遠乘會に御同行致誠に面白しく有之候。歸路には吹雪眼に這入り膝を濡し且つ身體の前部を覆ひあまり愉快には無かりしが無事歸宅致候又松本樣は御深切にも拙宅まで御見屆被下候。同氏は定めて不愉快の事なりしならんと察候。

三田輪友俱樂部の女子部員更に多かれば宜敷と存候。貴君は代議士日向氏の令夫人を御存じに候や。同夫人は中々美しき御方にて自轉車に乘られ候。同夫人は無鎖車(チエーンレス)を御求被遊べしと承候。若し同夫人が我俱樂部に入會相成候はゞ私は大に喜ぶ所に御坐候。

私は將來貴君及其他の部員と共に多くの遠乘會に出席致度と樂居候。

俱樂部の徽章有之候や又部費は何時相納可申や伺度候。

只今私の入會致居候はパレット會スター俱樂部禁酒會九段文學會チップトップ俱樂部及三田輪友俱樂部の六俱樂部に御座候。

次回の遠乘會の時には何卒御通知被下度願上候。亂文御免を乞ふ。

早々頓首

マリーイーストレーキ

宮森樣机下

---

## II. Pleasantries. 滑稽談

"Don't you remember me?

I was in your class in school!" said the enthusiastic girl, meeting an old friend while shopping.

"Oh, yes," said the haughty one, adjusting her lorgnette; "but you're in a different class, now."

---

一人の娘が買物を為居る際旧友に邂逅し熱心に云へり「あなたは私を記憶しませんか私はあなたと同級でしたよ」友人はだて眼鏡を直しながら傲然として云へり「いかにも同級でしたね。けれども只今は階級が違いますよ」(身分の高さを傲る)。

Judge.—You admit you sand-bagged the man. Have you any excuse?

Prisoner.—Yes, yer Honor. De sand-bag wuz me own property and J. P. Morgan says a man has de right ter do wot he pleases wit' his own property.

---

裁判官曰く「其方はあの人を砂嚢で打擲りた事は承認するのだな。其に就ては何か申譯があるか。」
囚人曰く「はい御座います。その砂嚢は私のものでございました。そしてモルガン氏の御話では人は自分の所有物は如何樣にでも自分の好きにする權利があるのです。」

註。上文 Prisoner の言葉は俗語俗音多し之を正しく書けば下の如し。

Yes, your Honor. The sand-bag was my own property, and J. P. Morgan says a man has the right to do what he pleases with his own property.

---

"Are n't you ashamed to be seen with a whisky bottle in your hand?" exclaimed the Rev. Goodman. "Faugh! it's disgusting!"

"It is so," replied Weary Willie. "I thought dey* wuz a drink in it, but it's empty." *dey wuz は there was の訛なり。

ゲッドマン師曰く「おまへは手にウイスキイ瓶をさげて居る所を人に見らるゝのが耻かしいと思はないか如何にも見ともないよ」
ウヰリイ答へて曰く「如何にも見ともないです。私は瓶の中に一杯位はあるだろうと思ひましたが空瓶です。ほんとに馬鹿々々しい。」

First Doctor.—I should say that his case is incurable.

Second Doctor.—What is he—pauper or millionaire?

甲の醫者曰く「あの人の病氣は治るまいと思ひます」
乙醫曰く「あの人は貧乏人ですか金滿家ですか」

"Now, this won't do, you know."

"What won't?"

"This one: 'Her eyes were like stars.'"

"Why not?"

"Why, poets have been using that for ages. Be up-to-date! Say 'Like radium.'"

---

「君此は駄目です」
「どれが駄目ですか」
「此句が駄目です＝彼女の眼は星の如し」

「何故いけませんか」

「何故で詩人は昔から此句を用ひて居る。時代相當の形容語を用ゐて其圓はレイデアムの如しと言ふべし」

註。Radium は近頃發見せられたる新元素にして光輝の極めて強きものなり。

## III. Maxims and Proverbs. 格言

1. No man is more than another unless be does more than another.

甲の人乙の人よりも多くの事を爲すにあらざれば彼は乙よりも大なる人にあらざるなり。

2. He prepares evil for himself who plots mischief for others.

他人に害を加へんと計る者は自ら禍を招くものなり。

3. A man finds no sweeter voice in the world than that which chants his praises.

人は己れを讃美する聲よりも美なる音聲を耳にすることなし。

4. Neither speak well or ill of yourself; if well, men will not believe you, if ill they will believe a great deal more than you say.

自己の事は善くも悪しくも言ふ勿れ若し善く言はゞ人之を信ぜず若し悪しく言はゞ人は汝の言ふよりも更に悪しきものと思ふべければなり。

5. He is truly rich who desires nothing and he is truly poor who covets all.

無慾なる者は誠の富者にして何もかも欲しがる者は誠の貧者なり。

6. To say little and perform much, is the characteristic of great minds.

言少くして行多きは偉人の特性なり。

7. It is better to do well than to say well.

能く行ふは能く言ふに優る。

## IV. News Items. 新聞記事

The partial eclipse of the sun which took place on the afternoon of the 17th was not seen in Tokyo, the sky being overcast.

十七日午後の部分日蝕は曇天の爲め東京にては見ることを得ざりき。

London, March 14.—According to a report from Russia, on the occasion of the bombardment of Port Arthur on Thursday (March 10) 140 Russians were killed and wounded and the forts on Lao-hu-shan were badly damaged. In addition, the *Retvisan* was hit by five shells.

三月十四日倫敦(發電報)露國よりの報知に依れば四月十日木曜日旅

順砲撃の際露人の死傷は百四十名にして老鐵山砲臺の損害甚しく加之レトヴィザン號は五個の砲彈に打たれたり。

London, March 14.—General Kuropatkin left Moscow for the Far East last night.

四月十四日倫敦(發電)クロパトキン將軍は昨夜極東に向けて出發せり。

The Russian Government has decided to disburse 756,000 roubles for the purpose of expediting the completion of the Baikal Railway.

露國政府はバイカル鐵道の竣功を速成せしむる爲めに七十五萬六千ルーブルを支出するに決したり。

The arrival of Vice-Admiral Makaroff at Port Arthur has greatly inspirited the Russian naval officers and sailors at that port.

マカロフ中將旅順港に到着せるため同港の露國士官及水兵の士氣大に振へり。

It is reported that the students of the French Mission School of the Morning Star at Sanchome, Iidamachi, have contributed 120 yen to the Soldiers' Relief Fund, while the school authorities will give a contribution to the funds of the Japan Red Cross Society.

飯田町三丁目の佛國傳道曉星學校の生徒は百二十圓を恤兵部に寄附したり又同校職員は日本赤十字社の基金へ若干の寄附をなすべしと云ふ。

When the Russian destroyer *Stregutschi* was on the point of being captured, a bluejacket from the Japanese destroyer *Sazanami* jumped on board the hostile ship and hauled down the Russian flag, replacing it by the Japanese. Had it not been for the breaking of the towrope, the enemy's destroyer would have been brought to a Japanese port.

露國驅逐艦ストレゲチ號の將さに捕獲せられんとするや日本驅逐艦漣の水兵は敵艦に飛乗り露國の國旗を撤し日本國旗を建てたり。若し曳綱の斷つことなかりせば敵艦は日本の港に引き來られしならん。




# 水戸烈公 武家女訓

(禁轉載)

花は櫻木人は武士とかや、その武士に連れ添ふ婦女の戒めにとて、水戸烈公がかき殘されしは、此の武家女誡なり、固より封建時代の記述にかゝるものなれば、今日の女子としては、守るに足らざる節もありと雖も、要するに古來日本女子の本色を發揮したるものにして熟讀の價値ありといふべし、今や討露の戰は開かれ、吾が國傳來の武士道は愈々發揚せらるべき時となりたれば、古來の女敎もまた研究の必要ありといふべし。而して平時たると戰時たるとを問はず、實に女子の戒めとなるべきもの、此の書中に少なからず、特に讀者の留意を乞ふ。

此書の寫本は往々水戸地方に傳はりたれども、未だ刊行して世に公けにせしものなし、友部鐵軒氏特に人をして淨寫せしめて、寄贈せられたるは、記者の感謝するところなり。

## 序論

凡天地の間に生るゝものは、天地の道に本づかざるものなし、天地の道をしりてこれに從がふは、人の禽

獸に異にして萬物の靈たるゆゑんなり、それ天は陽にして健に、地は陰にして順なり、天は物を始むる事をつかさどり、地は物を成事を司どる、男子は陽にして天の如く、女子は陰にして地の如し、されば女子は地道に本づき、柔和温順を專らとし、幼き時は父母に從ひ、人の家に嫁ぎては夫に從ひて、よく舅姑につかへ、年老ひては子に從ふべし、是を三從の義といふ、女子は衣服飮食のことをはじめ、すべて奥内の勤に心をつくし、男子のものすべきことには、ゆめ／＼たづさはるべからず、これ天地自然の道にして古へより今に至るまで、女子の常道とすべき所なり、されども世の中の治亂と、人の身の禍福とは、定め有て定めなきものなれば、めでたき御代にはみながらも、いかなる災難にかゝりうきめを見んもはかり難し、かゝる時は、女子ながらも男子にも立まさるばかりの意地をたて、少しも貞節の操を失はず、身は刄の霜ときゆる共、名を後の世にあげんと思ふこそ、又女子の道なるべけれ、されば女子の道細かにかぞふればあまた有ども、かなめともいふべきは順と貞との二つとしるべし、此二つは貴き賤きによらず、なべて女子の心すべきことなり、そも／＼主君あるもの、妻女は、女ながらも君臣の義をしらずんばあるべからず、いはんや仕官するに於てをや、又上臈老女其外人の上に立たるものは、人を治る道もしらずんばあるべからず、されども内外差別正くして、男子のものすべきわざにたづさはる事は、下々の女子よりも殊に戒め愼むべし、其ゆゑは賤きもの、家内亂れたる其家其身を亡ぼすにすぎず、國主領主の閨門亂れて女子とも、政事の權をとる時は、國中領中の亂れと成て、萬人の嘆きと成る、昔より其例し少なからず、古への訓にも、牝鷄は時をつくるものに非ず、牝鷄の時をつくるは家の衰へぬべきしるしと戒められければ、明君ともいふべき人は、必ず閨門を正くし、仕官する女子どもゝ自から正しく成ぬべき事なれとも、陰氣つのり安きものにて薄き霜のおきぬると思ふ間に、堅き氷を見るためしなれば、女子の身と成っては温順貞節

をこゝろとし、たとひいかなる夫に事ふるとも、一たび天と仰ぎぬるからは、おのれは地道を守りて、天地陽の道にしたがはんとだに心せば、家を治め、國を治むる一助にもならんかと、長き夏の日の手すさびに、女子のこゝろすべきあらましを書つゞりて、女誡と名づくる事しかり。

## 忠孝の道を辨ふべき事

君に忠を盡し親に孝をつくすは、人の道の第一なり、己が身は父母より受たるものなれば、父母は身の本なり、身ありても衣食住の三つなければ、命をつなぐことあたはず、然るに君より賜れる祿もて衣食とし、君より賜れる屋敷に住居して、雨風にもあたらず、飢寒の患をもしらずして、世を渡りぬることなれば、君は命の本と知るべし、(百姓、職人、商人のたぐひも君恩にあらざれば、立事あたはされば國主領主を大切にすべし)男子の學問武藝などさま〴〵のことを習ふも、みな君と父母とに、忠孝をつくさむためのわざなり、いかほど文武の藝能人にすぐれたりとも、忠孝の心なき人は、盜賊の刄物をもてるが如く、その藝能かへつて惡逆のたすけと成るべし、ことに惡むべきことなり、女子は他人の家に嫁ぐものなれば、父母に事ることを得ず、また君に事ることもなきゆゑ、一人の夫を天の如く尊び仰ぎて、しかもよく舅姑に事るを婦人の道の第一とす、それ男子は陽にして表をつかさどり、女子は陰にして内をつかさどるべき理なり、然るに女の心得あしくして、唱三絃などの淫聲を好み、又は佛道にまよひて物參りなどに日を費しぬれば、必其家風みだれて、のちには家をほろぼすにも至るべし、それほどまでには至らずとも、朝夕衣食の世話、老人子供の養育おろそかなれば、其あるじたるもの、家事に心ひかれて、專らに男子の職分を勤ることあたはず、其妻妾の心得うるはしくして、老をやしなひ、幼きをはぐくみ、目下のものに情をか

け、朝夕の費をはぶきなどする時は、其あるじたるもの、家事に心をわずらはすことなく、思ふまゝに、其職をつとめ、忠孝をはげむことを得べし、されば夫の忠孝を助くるは、女の忠孝にて、夫の忠孝を妨るは、女の不忠不孝なり、官するものは、女ながらもまのあたり君に事ふる事なれば、その君を夫の如く仰ぎて、忠をつくすべし、さて忠といひ、孝といひ、順といひ、貞といひて、その名はちがへども、其道の源は一つなり、たとへば酒を瓶子にもりて、神にさゝぐるを神酒といひ、銚子にもりて酒宴に用る時、奥にてはこれをおさゝといひ、表にてはこれを御酒といふ、その所により事によりて名はちがひたれども、酒は酒にて、同じものなるが如く、君には忠といひ、父母には孝といひ、夫には順といひ、操を守るを貞といへども、その源はおのが心の誠一つとしるべし、然るにその誠の心薄くして、うはべのみとりかざり、人の見る所にては目の上の人をうやまひ、ものかげにては、これをおろそかにするのみならず、或はこれをうらみ、或はこれをそしりなどするは、金銀の瓶子に水を入れて、神前にさゝぐるが如し、その偽をいかで神のしろしめさぬ事やあるべき、おそるべし、つゝしむべし。

## 男女の別を正しうすべき事

男女の別とは、夫婦のいと親しき中なりとも、よく尊卑内外の差別を明らかにして、みだりがはしきことなきやうに心得るをいふ、まして他人に於ては、さらにその差別を正しうすべきわざ也、されば聖人の教にも、七歳になりぬれば男女席を同じうする事なく、飲食はいふもさらなり、手道具のたぐひまでも、女子は必ず女子の品のみ用ることなり、七歳八歳の子供は、いまだ何心もなけれども、その何心なき時より、その別ををしへならはしむる事肝要なり、すべて人はならはしからにて、よくもあしくもなるものなれば、

一と間ばかり寢起するいやしきもの丶女子にても、幼年のうちより、女はかくの如きものぞとをしへさとすべし、むかしより、世の中衰へて、國、天下の亂れぬるためしを見るに、大かたは閨門のみだる丶にはじまる事也、かしこくも古へ朝廷の盛にましまして、天下を治め給ひし御代には、親王を始めまゐらせ、公卿の人々にも、みな文武の道を備へ給ひ、日本國中のみならず、海外なる夷狄までもうちしたがへ給ひ、なびかぬ草木もなかりけるが、治れる御代久しきうちに雲上の人々柔弱に流れ、男女の差別みだりになりゆきて、後には公卿の人あからさまに、官女と戀歌をとりかはしなどするさへあやしまぬばかりのあさましき世となりしゆゑ、武家起りて天下の權をとる事とはなれり、さて武家もはじめはみな武勇たくましくありしかども、その末はまた〳〵柔弱になりて、男女の別正しからず、ついに家をほろぼすにも至る、悲しむべし、わが德川家は東照宮をはじめまゐらせ、代々の將軍賢明にましまし、閨門の正しきことも、古へにすぐれたり、然れども中比太平の御代盛なるあまりに、その中奢に流れ、閨門の事もえいひがたきさまにならむとせしに、享保の年又むかしにかへし給ひ、今に其跡にしたがい給ふとかや、三家をはじめ、みな其風にしたがふ中にも、わが家は閨門の正しきこと、むかしより他家にすぐれたり、されば仕官する女子はさらなり、家中の女子も男女の別をゆるがせにすべからざることは、誰も心得あるべけれど、猶さらにつゝしみて、他家の手本にもなりぬべきほどにあらまほしき事なり、古き諺に瓜田に履をいれず、李下に冠をたゞさずといへり、うり作りたるはたけの中へくつをいるれば、うりやぬすむと人に疑はれ、すもゝの下にてかんむりのまがりたるを直せば、すもゝの實やとると人に思はれん、それを恐れて、かゝる所にては冠をたゞすべからず、くつをもいるべからずと敎へたるなり、このことわりを心得ば、男女の差別もみだるゝ事なく、人にうしろ指さゝるゝことなかるべし。

## 奢侈を戒むべき事

奢侈の二字はいづれもおごりと訓ず、おごりとはおのが身にすぎたることをいふ、すべて人は貴きも賤きも、おの〳〵定りぬる分限あるものなり、金銀にもあれ、米穀にもあれ、領にはその民より納め、家中へは其君より賜ふ、其年々の定まりあるかずを分限といふなり、この分限にこえたる不相應の金銀米穀を費して、衣食住を取かざるを奢侈とはいふなり、女子には三從の道ありて、一生何事もおのが心のまゝにすることなきものなれども、たとひおのがまゝなることを得るとも、ゆめ〳〵奢侈になりゆかざるよう心すべし、仕官するものは、夫もなく、父母にもはなれ、君のたまはりものにて、衣食をいとなみ、しんみやうはしたをもつかひ、おのが部屋にありては、一家のあるじの如く、何事もおのがまゝなれば、ことさらに奢侈にうつりやすし、始めて官する時は、世にありふれたる衣食をも、美服珍味とおもひ、たまはりものなどすれば、躍りあがるばかりによろこびぬるを、わづか一年二年の程に、いつしか目も口もおごりにならひて、はじめに美服珍味とおもひしをばかへりて見もせぬやうになりゆき、一つの美服を製しぬれば、この帯にては似つかはしからずとおもひ、帯も製しぬれば、この髪のかざりにては似つかはしからずとおもひて、おのが望みにまかする程に、一つにてたるべきものを、二ッ三ッも製し、いやがうへ取集め、後には世にまれなる美服等をも、猶事たらぬやうにおもふは、まさしく奢侈にうつれるなり、美服は人情誰も好むこと、別して仕官して外に樂しむ事もあるまじければ、一概にはいひがたし、奢侈に過る事をいましむべし、奢侈のあしきといふゆゑは、譬へば百金の分限には、二百金を費す時は、百金は出つべき様なきゆゑ、貧窮の父兄弟にたすけらるゝか、又は世にいふ、たのもしむじんなどものするか、あるひは後は

ともかくもすべしと思ひて、商人の品をとりて、其あたひを借置事ゆゑ、これを返しつくのふ時に至りては、くるしきにたへざれば、おのづからいやしき心いできて、あたひだにやすければ、正しからぬうり物をも求むるにも至るべし、かくさま〴〵の術をつくして、衣服をかざるは、古人のいはゆる商人の錦をきたるにひとしくして、いと〳〵はづべきことならずや、父兄弟はみな武士にて、それ〴〵主君に事へ、いかほど小身にても、武具馬具をもたくはへ、一族を養ひ、屋敷の修理までも、みな君より賜りたる祿にて、これをいとなむは、いかばかり心をくだくならん、しかるにその女子と生れて、みやづかへし、それ〴〵賜はれる金穀は、たゞ衣食などに用ゆるのみなれば、其分限にしたがひ、たとひ父兄弟をたすくることはなしえずとも、さらぬだにまづしき父兄弟に、心配をかけざるやうにありたき事なり、さて父兄弟も家富て何たらはぬことなく、又其身も長く奥にありて、財寶あまたもちたらんには、いかほど美麗をつくしたりとも、あしきことなきやうなれども、すべて奢侈といふものは、人にをとらじ、まけじとおもふ心よりいやましにつのるものなれば、富るもの美麗をかざりぬれば、まづしきものわれおとらじとこれにならひ、あまたの借財に及ぶ理りにて、一人の富るものゝために、十人百人のくるしみとなることなり、さればおのれ一人富ぬるとも、貧しき人の情をおもひ、ゆめ〳〵美麗をこのむべからず、老女その外人の上に立つべきものは、殊にこの心得あらまほし。

## 儉約を勤むべき事

儉約は奢侈の反對にて、よろづのこと取しまりてつゞまやかなるをいふ、たとへば奢侈は物一升をいるべき器へ、俄に一升五合も、二升もいれんとするが如く、勢ひ盛んに見ゆれども、その器があふれて、外へ

もるゝゆゑ、よくこれを見れば、器の中にみつること、儉約は一升の器へしづかに七八分をいれて、別にたくはへおくが如し、事たらぬやうなれども、みちあふるゝ患ひなく、さてその二三分づゝたくはへたるも、たびかさなれば、おびたゞしうつもりぬることわりにて、一家を治むるも、國天下を治るも、一年一年の入用の内を殘し置て、軍用火災飢饉などの非常の手當とする事、聖人の敎へなり、分限に大小こそあれ、奢侈を戒め、儉約を勤むべきは、貴きも賤きも男も女も同じことなるべし、わきて女子は地道に本づき、物を成ことをつかさどるものなれば、儉約をゆるがせにすべからず、それ地はよく五穀草木を生ずるのみならず、世にすたれたるちりあくた迄をも、みなこれを化して土地となし、その土地より、又物を生ず、女子は地の徳にならひて、破れたる品をもつくろひ、不用に成し品をもたくはへおきて、用ある時にそなへなどし、とにかくに世にいふ面倒成事をいとふまじき事なり、さて儉約に似よりて、吝嗇といふ事あり、人よりとる事はいかほどにてもとり、人をめぐむべき事はちり斗にても惜み、人は目の前に飢死ぬる共、己れだに不足なく、飲食せばさまたげなしと思ふほどの意を吝嗇といふなり、儉約はおのが身をつめても義理をたて、人をもめぐまんとするこゝろ有なり、吝嗇は人の肉をけづりても、おのが身を肥さんとする心あるなり、さればみだりに物を費さゞる所は、似たる様なれども、其志は雪と墨のたがへるが如し、女子の氣性よきといへるは、大かた奢侈にて、前後のかんがへもなきもの多く、又儉約といへるは、吝嗇にていやしき心ばへのもの多く、官して奥内を治め、人の上に立ものは、いかにも君の爲に儉約を勤め、費をはぶくべき事なれ共、下々の女子どもにとらすべきものをとらさず、めぐむべき事をもめぐまざる時は、下々のもの難儀にたへがたく、その役人を惡むが餘り、殊更に物を費やしなどする事ありて君の財寶をも徳義をも損じぬるに至る事なれば、上たる者は、よく〳〵下の情を知るべき事也、月見花見

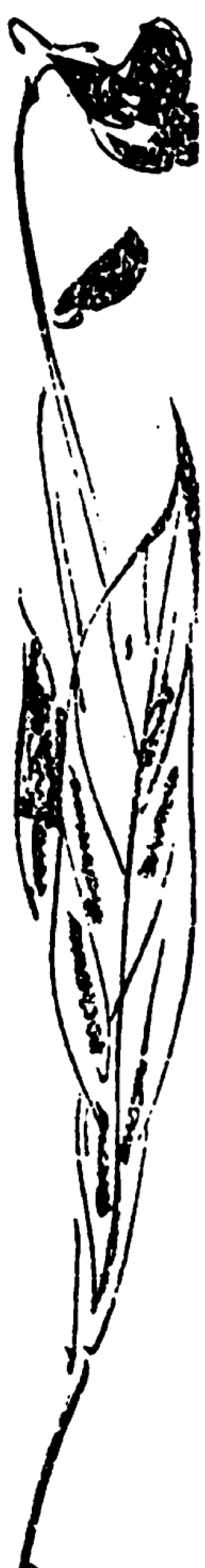
のをりにても、上に立もの計樂しみて、下々のためには、かへつてくるしみとなりてはよろしからず、飲食善惡のたぐひこそあるべけれ、上は上、下は下と、それ〴〵に其所を得て樂をともにするやうにすべし、さて下に立もの丶身となりては、上の人の仰せぬることは、たとひ行ひがたき事にても、成べきだけこゝろを盡し、おのが身はいかばかりくるしみぬるとも、上に立ぬる人々を樂ませんとのみ心得べし、かく上と下の情通ひて和きなば、おのづから無益の費もはぶかりて、まことの倹約行はるべき也、かの油を吝みて燈火の數をへらしぬれば蠟燭を費やし、蠟燭を禁ずれば、下の女子共は白晝におのがわたくしゝはざのみして、主の勤をおこたらんには、倹約の道とはいふべからず。

## 淫聲異端を遠ざくべき事

淫聲とはなまめきて正しからぬ音曲をいふ、今の世にていはゞ唄三絃をはじめ、河原もの丶わざとする音曲は、みな淫聲なり、異端とは我朝の神の道にもあらず、もろこしの聖人の敎にもそむきぬる道をいふ、佛道は何宗旨にもあれ其はじめ天竺といへるゑびす國より渡りし道なれば、みな異端なり、(西北のゑびすにて横文字を用ゆる國々の敎は皆異端なり、これをおふやけより嚴重に禁じ給ふと、誰も知る所ゆゑ、本文には女子の迷ひやすき佛道の事のみ申せし也)今の風俗、武家にても女子に、唄三絃などならはしむる者少なからず、又佛を信仰する人も多けれ共、この二ツを遠ざくべきゆゑは、すべて音曲は人の心を動かすものにて、たとへば寺の鐘、又どら、みやう鉢など打鳴すを聞ては、おのづから物すごくかなしみの心をおこすが如く、神樂をきけば、おのづから古代をしたひ、雅樂をきけば、和を催し禮を好む心を起し、ほら陣太鼓を打時は、勇氣を進むるが如く、唄三絃などもとより淫聲なるが上に、其唄のことばも大かた

みだりがはしき事なれば、おのづから人の心をとろかし、あるひは男女の別をみだし、あるひは河原ものの役者などいふものに迷ひて、之あるまじき行ひにも成行類ひいと〳〵惡むべき事ならずや、さて女子は男子にたやすく物など取かはす事なき理成に、男子の事にも出家は別ものゝ如くにおもひ、祈禱の札守など取受るはしほらしき樣に心得、又仕官する女子は、忌日の代拜など勤る故、自から出家にはしたしみやすし、今の世の出家は元より人をあざむきて、布施をむさぼり、金銀をあつむるわざなるに、男子よりも婦人はあざむき安く、大名などを欺くにも、表よりは奧へしたしみぬれば、其しるし早きゆゑ、奸智の出家はかならず奧向にちなみを求め、始は札守等又は時のくだものなど贈りぬれば、奧よりもむくいとしていと輕き品などおくりなどする内に、あざむかれ、表の役人へ願出べき事をも、ひそかに奧へなげきいづるたぐひにて、終には政事の大害をなすに至る、これ又惡むべき事ならずや、古歌に早き瀨の水の上にはふりきえて氷る方よりつもる白雪といふが如く成ば、此きざしを禁じて、奧向へ僧侶を近づくべからず、されば淫聲と異端はかならず近づくべからざる事なり、今の風俗淫聲は、專ら流行ぬれども、さすがに河原者に近づくは、惡きといふ事をしれり、佛を信仰するをばあしきとおもはざるのみならず、佛を嫌ふ人をば、女子にも似つかはしからぬとて、惡み居し事は大なるひが事なり、佛法のことといふもわづらはしけれど、其あらましをいはんに、其始は釋迦といへる異國人あり、其生れし國は天竺といひて、いとはるかなるえびす故、其國の人皆欲心のみ深くして禽獸にひとし、釋迦之を嘆きていろ〳〵さま〴〵の僞事を作り出し、よき事をすれば極樂へ行、惡き事をすれば地獄へ落るなど欺て、人をよき道に入れんとせし成れば、釋迦はさすが其國にてすぐれたる男にて、禽獸にひとしき人を導くには、相應の敎ともいふべし、然るに其道もろこしへ渡り、又日本へ渡り、代々の僧侶等僞の上に僞を作り、いとあさましき事言葉に述

難し、日本へ佛法を弘めしは、蘇我の馬子と厩戸の皇子也、馬子己が勢に乗じて時の帝を弑し奉れり、是我朝にて臣下たるもの君を弑する始也、(日本史等の正史にて見るべし)悪逆無道是にすぐる事や有べき、さて其帝弑せられ給ひし時、厩戸の皇子是は過去(過去とはすぎさりし前の世と云事也、佛法にては過去現世未來と云て、人は總て生れ替るといふ例の僞ごとなり)の報ひ成とて、其儘にせられしとぞ、一天の君逆臣の爲に弑せられ給ひしに、其敵を打亡ぼさゞるのみならず、前の世の報ひ成とてやみぬるは、何事ぞや、(我西山の君に仕へまつりし佐々介三郎は、佛門に入て僧徒となりしが、佛書中に君父の讐なりとも討事なかれといふを見て、大に怒り、還俗して名ある儒者となりし也)されば佛の道に迷へる人は、讐ひ其君父を失ひても、佛法だに弘まれば、其道に叶ふと思ふぞいまはしき近き頃の出家共は殊更に汚れたる事のみ多くして、釋迦の道にもそむきぬれば、いふ迄にもあらず、さて釋迦といへる夷男、今の世にいきて有にもせよ、汚らはしき異國人成ば、たやすく貴人などの前に出るを得べきものにあらず、然るに佛とだにいへば、我國の神にも勝れる程に思ふは、おろかなる事也、いかに女子なりとも、神の御國に生れしからは、異國人ををがまんより、神を尊び仰ぎぬべし、又禽獸にひとしき人をみちびかんとてつくり出せしそうとよりは、人の人たる道を知て、うつゝの君父舅姑につかへんと志ざすべきなり。(未完)



# 演壇

# 廣瀬中佐と日本婦人

阿多廣介

日露戰爭が始つて以來、皇軍は連戰連勝、所謂王師の向ふ處敵なきといふ有樣で、國民の元氣も一層發揚し、軍債募集の如き四倍以上の申込みにて、恤兵献金軍人援護會愛國婦人會など種々な名義を以つて、軍隊の保護を勤めて居る我國の婦人は勿論、外國の婦人までも、或は看護婦となり、或は繃帶などを献納して、軍國の爲に盡され、遠征の將士を慰藉さるゝ赤誠は、實に歎賞すべきであります、而て此の名譽ある戰爭につきて廣瀬中佐の功績と名譽の如きは、歷史上になき空前の事で國民は固より外國人も、非常な敬意を表して軍神と仰ぎ慘忍酷薄なる敵國すら、其首なき屍を厚く葬りしとの事でありまして、連日の新聞は殆ど同中佐の逸事を以て充たされて居ます、誰か中佐を羨望哀悼せざるものが有ませうか、それに付いて少と可笑なやうな事でありますけれども、中佐が妻君を娶られなかつたといふことに就いて、私は我邦婦人の爲めに悲しき事を發見いたしまして覺へず感慨を催ふしました。

それは他では有りません、廣瀬中佐は三十七歳になられても、妻君を娶られなかつたのは、決して無情の爲めではなくて、寧ろ婦人の境遇に同情を寄せられた爲であります、皮相に考ふれば鬼をも挫ぐ中佐の事なれば、婦人小兒の如きは近けもしない荒武者の様でありますけれども、決してそうではなく、誠に煩惱深き人で弟妹は申すまでもなく、同僚の妻君や令嬢など、親く交際され、部下を愛するのは、己れ以上にして、慈悲深き方であつたそうです、即ち中佐は身命を擲つて、義勇奉公の實を盡し、軍人の龜鑑たらんことを希望せられたもので有りますから、妻子が有る時は其の煩惱に牽かされて軍事上の研究の出來ない事も有つたり、又は戰死した時は、其未亡人や孤兒が不幸の境遇に陷るといふことを懸念されて、平生より今日の覺悟をせられたものに違ありません、實に中佐の品性行動に對しては何とも評する言葉がありませんけれども、論理上より申せば我國民は無妻でなければ、中佐のやうな偉業を營むことは出來ないといふことになりまする、皆様がたも親たる人は、中佐の如き子を持ちたいと思ふで有りませう、婦人たる人は中佐の如き夫を持たいで有りませう、又兄や弟たる人は中佐の如き人を兄や弟としたいで有りませう、けれども無妻でなければ、中佐の如き偉業が、成し得られぬと云ふことであれば、我國婦人は到底中佐の如き偉人物を夫とすることは出來ない、親は嫁を取られない、弟妹は嫂が見られない、豪傑には子孫がないと云ふ譯になりますのでありまして、日本婦人の境遇は甚だ殘念なる次第では有りませんか、又國家としても、夫れでは濟まない譯では有りませんか、畢竟するに中佐が妻君を娶られなかつたのは、中佐の妻君たるべき資格を有する婦人が無つたからのことゝ私は信じます、即ち我國婦人の敎育、體格、資產、品格、氣質に於て、中佐の希望を充す丈けの婦人が無つたからのことで有ります、言葉を更へて云へば、中佐の職務上の相談相手となり、中佐の死後悲慘の境遇に陷らない丈の覺悟を有する婦人が、其の眼中に

無つたからだと想像されます。斯く申さば日本狭しと雖ども、一中佐の婦人がないとは情けない、其れは餘り婦人令嬢方を輕蔑した話だと、皆様が御立腹になりましようけれども、現に私の友人にも廣瀬中佐と同じ覺悟をして居るものが二三人あります。

されば今後我國の男子は、皆中佐の如き人物を模範として、修養しなくてはならないが、之れと同時に婦人も亦中佐の如き人物に匹敵する丈けの男子の、妻君たる覺悟をしなくてはならぬことであります、殊に我が國が戰に勝つて、平和の極を結ぶに至れば、我が國民たるものは、單に軍人に限らず、商人でも農家でも、官吏工業家でも、朝鮮滿洲はもとより、大陸に渡つて偉業を營まなくてはなりませぬが、其の偉業を成すに付きましては、男子は皆廣瀬中佐の覺悟を以つて、己れの覺悟としなくてはならぬ、けれども總てが無妻であつては社會が成り立つものではありません、矢張歐米人の如く天上天下皆故郷と云ふ鹽梅に、夫婦相携へ至る處一家團欒の樂天地を造らなければなりませぬ、然れば我邦婦人たるものは、自ら、廣瀬中佐の如き人物の夫人となるべき覺悟を以つて、大に其の品格を修養しなくてはなりませぬとと深く信じます。

（をはり）






# 山階宮殿下と御家庭

矢野蒼泿

山階宮殿下が、金枝玉葉の御身に渡らせ給ひながら、夙に軍務に御勵精わらせられ、目下海軍少佐大勳位功五級にて御在しまし、過ぐる日の旅順海戰に、天晴御軍功を立てさせ給ひしことは、皆人の知る所なり。

今殿下の御閲歷及び御家庭を殿下の家令香川秀五郎氏に由りて拜承するに、一々感泣に堪えぬ事のみである、千古未曾有ともいふべき戰爭の今日に當り、此に其拜承し奉りたる大略を筆にして、世に示さんも亦奉公の一ならんかな。

△御幼少の時代

殿下は故大勳位晃親王の御一子にましまし明治六年癸酉七月三日の御誕生なり、御幼少の時より、已に天の就せる玉顏麗質に富ませ給ひ、御擧動凡べて成人の如く御在しまし、屢々御父宮殿下の御嘆賞を得たりと申す事で、御成長後、學習院に御入學遊ばされしが、常に御成績御優等に御在しまし、なかなか御譽高かりしと承る。

△殿下の御履歷

殿下は學習院を御卒業後江田島兵學校に御入校遊ばし、後勅命にて獨逸のキール海軍兵學校に御遊學、次いで同海軍大學校に螢雪の御辛苦を積ませられ、明治廿七年七月御優等の御成績にて御卒業遊ばされたのである。

大學校を御卒業遊ばされて後、艦隊演習として、歐洲各地を御巡遊わりて、明治廿七年十一月十四日御歸朝、直ちに海軍少尉に任じ軍艦吉野に召させられたが、日清戰爭の酣なる時とて、廿三日といふ

に宇品御出發ありて、威海衛に激戰せられ、次いで臺灣征討にも從事し給ひ、明治廿八年八月、目出度く本國に御凱旋遊ばされ、陛下より金鵄勳章功五級を賜はり、且つ大尉に御上進遊ばされた。

明治廿九年更に軍艦武藏に御乘組ありて、北海道警備の任務を帶びさせられ、ケトロフトに赴かせ給ひ、此處に六ヶ月間御滯留ありたるに、士民等光榮此上もなしといひて紀念碑を建てゝ、永く忘れざらんことを期せり、後嚴島艦に、更に又磐手艦に移乘あり、翌卅六年八月今の御召艦八雲に移乘あらせ給ひ、分隊長の御職に就かせられて、艦隊演習及び實彈射擊に御從事あり、訓練に訓練を積み、經驗に經驗を重ねられて、砲一門を御擔當あらせられ給ふ、去ぬる旅順の激戰に偉功を御立て遊ばしゝも、詢に理りなりといふべきである。

△御平生

殿下は温和なる御方にて、聲高に物など宣ふことなく、何時も御靜肅に御在し給ふ、御遊技は餘り好ませ給はず、先年迄御邸内に玉突場を設けられ給ひしが、これも目今は取除けさせられし由、たゞ氣象學のみは、最とも克く好ませられ、二年前より水戸の筑波山頂に觀測所を設立せられ給へり、此觀測所は有名なるものにて其設立當時は其事屢々新聞にて報導せられぬ、殿下軍務の餘暇には、時々御登山あり、且つ又觀測報告書を御膝下に御取寄せ遊ばして御覽あり、其他には、讀書を御好み遊ばされ、獨逸を主に、傍ら英佛の新刊書に御目を曝し給ひて、種々なる方面より御智識を集めらる、就中軍事上の研究には、最も御熱心にて、軍港内に碇泊の時などは、決して御上陸ましまさず、艦内生活の御不自由を忍ばせられ、百有餘日の無聊に堪え給ふ、此御耐忍を拜して、上陸する士官などは、能く殿下の御平生に想ひ比べて、御氣の毒に察し申すといふことである。

△御歸館の時

殿下は海軍に御身を立てさせ給へば、御殿に御在し給ふことは甚だ稀なり、會々御殿に入らせられ御

家族と御一緒にならせ給ふときにも、多くは御机に倚りて、海圖などの御調べあり、其間造次も御座を崩さず、端然として御靜座ましまし、少しも惰容なしと申す、されども、御食卓に向はせらるゝ時には、打解け給ひ、心地よく笑ませられ、御一家は春風和氣、花咲き鳥唄ふとぞ承る。

御料理は、日本料理の淡泊なるを好ませられ給ふな、艦内にては洋食を召され、酒量は大分深かるべく見受奉るも、晩酌などは絶えて召し給はず、御肴は御自ら何をと御注文はあらず、御次の者が、御窺ひ奉れば『何にもよし有合のものにせよ』と仰せらる、されば皆喜んで『仕へよき宮樣』と申し奉つるとなん。

△妃殿下と御王子

先妃殿下は範子と申しゝが、過ぐる明治三十四年二王一姫を後に殘し參らせて、此世を去給はられぬ、後妃には、御王子の御爲にやさしき御方をと御選定の上、島津忠重公の御姉君にましまする常子姫を迎へられて、一昨年御入輿、妃殿下とならせられ給ひぬ。

妃殿下は、明治七年二月七日の御誕生にましまし、御性質淘にやさしく、且つ嚴格なる島津公爵家の御家庭に御成長遊ばされしことゝて、頗ぶる宮殿下の御思召に叶はせられ、御交情甚だ睦じく、御王子に對しても、實母も及はぬほど克く御慈愛を垂れさせられ、御付添の人々感泣に堪えぬこと多しといふ。王子は、第一子を武彦王と申し、當年七歳にならせ給ふが、父宮殿下に似て御怜悧に御在します、第二子は芳麿王と申し、當年五歳にならせ給ふ、第一の姬宮は安子姬と申し、當年四歳にならせ給ふ、芳麿王も安子姬も、皆御兄君に御似遊ばして御怜悧なりとぞ承はる、今の妃殿下は、昨年御懷姙遊ばされしが、客臘廿三日第二の姬宮を御流產し給ひしこそ口惜しき御事なれ。

妃殿下は、御次の者を御使ひ遊ばすに、甚だ緩急宜しきを得、屢々勿體なき御言葉をかけ給ふこともありと、殊に音樂に御妙なりと申せども、宮殿下の

好ませ給はぬため御控へあり、和歌にも御上達にて御名吟も少なからずと申せども、御謙遜の御性質とて之を人に示し給はず、香川家令は、斯道の大家景樹大人の家に生れたれども、妃殿下の御作には及ばぬと申すを『香川之を直してよ』と仰せらるゝには香川氏も冷汗背を濕ほすとぞ、宮殿下の旅順に御勇戰ありて以來、妃殿下は、一入軍國に心を勞し給ひ、近侍を召して、戰時の模樣など御下問あり、尚ほ篤志看護婦會の名譽會員に渡らせらるれば、尊とき御身をも厭はせ給はず、此際御手づから軍用の繃帶及び綿撒糸など御製作あらせらるべく仰せ出されぬ、されども舊冬御流產遊ばされし以來、今に侍醫より御加養を願ひ奉り、御外出も、今暫し長閑の日を待たせ給はん樣、御勸告申上げし程なれば、厚き思召を否み奉るも恐れ多き事なれど、近侍の者より、御製作丈は御止りあるやうと申上げたるに、さらばとて金五十圓を同會に御寄附あそばされ、厚き御詞さへ傳へられしといふ。

△平民主義の宮樣

宮殿下は俗にいふ「直な御方」にましまして、言葉使など餘り角張ることを御嫌ひ遊ばし、上下の差別なく、互に打解けて、談話することを好ませらるゝと承はる。

されば、如何なる粗服なる人にても、殿下に敬禮を表するときは、殿下必らず御答禮あり、出入の人召使ひの人方にやさしく御丁寧なること、知らぬ者は、宮樣と見上奉らぬほどにて、御服裝は極めて御儉朴のを愛し給ひ、御附の者が絹布を捧くれば、『それには及ばぬ』と仰せあり、御食事も亦御質素を悦ばせらるゝより、人々殿下を拜して「平民主義の宮樣」と申すといふ。

△殿下の御交際

殿下は平民主義の宮樣といはるゝ丈に、なかく克く人情に通じ人に接するに巧みなり、殊に永く外國に遊學し給ひ、且つ諸所御回航も多かりしため、自ら外人と接することに長けさせられ給ふ、況して

其語學は英佛獨の三ヶ國を御自由に御使ひ遊ばさるれば、殆んど如何なる外人に接しても御不自由はない。

されば其溢るゝばかりの御愛嬌を御顏に湛え給ひ、縱橫無盡に外人に接し給ふ時は、傍らより觀奉つる者をして、ほと／＼感服に堪えざらしむるとなん、殿下の人と接し給ふや、其外人なると國人なるとを問はず、必らず相手の心を喜ばし圓滑に人をそらさず、而して克く先方の佞辯欺瞞を洞見して其心事那邊にある乎を知り給ふ、されば外人は克く『交際家の日本皇族』といひ國人は『ドーモ恐入る宮殿下』といふとの事である。

△軍人としての殿下

殿下は規律を守り給ふことに於て、甚だ御名高し、其命せられたる職務には、熱心忠實に御勤め遊ばす由、少尉の御時より、今日少佐に御榮進あらせ給ふ時迄、御當直の折には、決して御粗漏の事なく寒暑風雨の厭ひなく其任務を果し、戰鬪の時にも彼の穩和なる御方が、如何して斯くも御勇氣に渡らせ給ふかと驚く人々多しといふ、日清戰役の當時殿下は彈丸雨注の下に立たせ給ひて、部下を指揮し御奮鬪遊ばしつゝありしに、敵彈は、殿下の御在し給ふ傍らなる煙突の間に落下して爆發せり、然るに殿下は泰然自若として避け給はず『御避け遊ばせ』と傍らなる部下の一人が申上たるに『軍人の本分』と宣ひて始終平氣にて御任務を全うせられたとの事である、臺灣征討の時にも御召艦吉野が座礁せし折り、艦長は『せめては殿下だけなりとも、安全の處に御移し申したし』と御附武官に告げたるに、御附武官は早速御手廻り物を片附けんと抽斗の鍵を出しかけたるに殿下は『死なば諸共』と仰せありて一同を感泣せしめ給ひぬ、這回日露戰爭にて未だ我艦隊が佐世保に在りける時、殿下は御風氣に渡らせられて御養生中なるに御召艦八雲は實彈射擊演習を催うすことゝなつた、軍醫長御附武官などが『御病氣の事故御上陸ありては』と申上げたるに『ナニこれしきの事夫れに

は及ばぬ」と御沙汰ありて強ひて臨場し給ひぬ、御歸港後尚御全快あらせられず、艦長始め一同にて御勸め申上げて、同廿八日御上陸松浦伯(詮)別邸に成らせられて御靜養、頓て御全快あらせられしが、六日の御出征故未だ一日を餘せば、緩々御歸艦ありてもと御附武官香川家令など御勸め申し上げしも殿下は少しも御聞入遊ばされず、五日御歸艦あり、香川家令は遲く御歸艦ありて、萬一御出征に漏れてはとの御心配にて、御急ぎ遊ばされたるならんと察し奉つるといふ、且つ同家令は御用と御訣別とを兼て、佐世保に赴きたることゝなれば、御別れ申上ぐる迄、何か御仰せあるとと思ひしに、殿下は戰爭に關しての御決心のほど露ほども御口に出し給はざりしかば、家令は、さては何とも御口に出し給はざる以上、御生還を期し給はぬ御出征よと、覺えず暗涙襟を濕ほして、棧橋を歩みて御別れ申上たりと。



# 陸軍編修 横井忠直氏の家庭

一記者

横井忠直氏は、國文漢文の學者として名高い、官は陸軍編修であつて久しく參謀本部に勤務し、今に同部高等文官の最故參である。

横井氏の家庭は、嘗て、其令孃を花に、矢來の名物として、世に謳はれた、而して斯く、立派なる家庭を造りたる良工は、横井氏其人なる乎、否々家庭のよしあしは、一に其女王たる夫人の力如何である、余は、横井氏の夫人初枝子が、如何に賢妻良母てふ四字の化身であるかを、此に少しく説明する。

△其兒女

夫人は、女らしき女の名所とも云ふ、京都の人である、其出生は、嘉永五年其横井氏に嫁したは明治七年。

横井氏に嫁して一男三女を生む、三女の内一女は三歳にて京都に亡ひ、二女は、東京にて成長し、所

謂矢來の花と評判せられたが、姉は京都府華族伯爵壬生基修氏の長男陸軍大尉基義氏に嫁し、妹は東京府華族男爵高崎正風氏の長男海軍大尉元彦氏に嫁いだ、男は忠吉と云ひ、目下東京外國語學校の學生である。

△寺小屋出身

夫人の生れたる時代は、今の如くに教育の道開けず、所謂寺小屋なる家塾が、其處此處にありて、一字千金、二千金一字を訓はるも、容易ならぬと云ふ風にて覺束なくも人の子を教育したるものである。

夫人は、かゝる時代に成長したる爲め寺小屋仕込の教育を受けられた、されば當世的婦人の如くロングフエロの詩は如何とか、モアのユトピヤは如何とか云ふことは、些とも知らない、けれども、多少の文字はあり、日本古風の婦人としては、立派に一人前の學問を有せられて居る。

夫人は古風に教育せられたれども、甚だ實用的に能く出來て居る、就中胸算の達者なのは天稟である、胸算とは、家政上要用のものにて、一寸立ながら一家の收入支出の面倒を筆や算盤の力を借らずに、自分の胸一ッにて決定するものである、而して夫人の胸算は凡そ十筆以下の加減乘除ならば、普通の人の筆算よりも迅いと云ふ。

△平生の交遊

賢夫人と謂はるゝ者は、必ず平生餘り交遊を好まない人が多い。

夫人は平生交遊が少ない、今日となりても、未だ決して自筆にて他人と書柬の取り遣りを仕ない、物見遊散などは、東京に來りて已に二十有五年に及べども、タッタ一度、向島の花見に行きし位、演劇は好まざるにあらずと雖ども、他より招かれるにあらぬ限りは、之を觀ない、觀るときは、其藝術を品評するに、彼の舞臺の代り目毎には必らず觀ると云ふ俳優狂の婦人達よりも能く肯綮に中る、人と應接するときは、柔かにして愛嬌あり且つ謙遜である、が一つ罷り違ふて議論となると、侃々として屈せず普通

の辯護士は辟易する位であつて、夙に女丈夫の名をも博して居らるゝ。

△音樂、割烹、裁縫、

夫人は、幼少の時には琴及三絃をも稽古したものであるが、嫁して後は、家政にのみ孜々として更に之を手にしたること無し、尤も、これも人の巧拙を評するには、一々的中して專門家をも懼かすと云ふのである、二人の令孃には琴は學ばせたれども、三絃は堅く禁じたりと云ふ。

夫人は又割烹を能くし、調理に長じ、普通の宴會ならば、婢女を指揮して十分之を辨じ、茶の湯生花などにも通じて居る、けれどもこれらは女の嗜にて、人に誇る可きにあらずとして絶えて其集會の催などに出席したことは無い、裁縫も婦女に必須の業なりとて幼時より好みて研究せられたが嫁して後は針を採りたること尠きも、其下婢を指揮して之を爲さしむるに、其技能の練熟せると屢々學校教師をして三舍を避けしめたと云ふことである、されば華族女學校に學びたる二人の令孃も、音樂生花割烹裁縫などに習熟したるは、夫人の薫陶に由るのである。

△家政

夫人は、家政に於て、當代稀に見る所の手腕家である、而して其遣り方を一言もて云へば、儉朴にして理財に長じて居るのである。

夫人は平素綿服を纏ひ、長裾をせず、而して、常に云ふ粗服で短いのでなければ働けるものではない、美服を着て長裾抔して居ては自然に不活潑になる、不經濟にもなると、夫人がかゝる風である爲め、婢僕の云ふことが面白い『奥樣が家居と外出とはまるで人が違うやうだ』と夫人が儉約家なることは、寧ろ過度では無いかと思はるゝ位で、人偶々其過度なるを諫ると夫人は之に答へて『金は有るからとて徒らに費やすべきものでは無い、一錢の金とて、勞せずには、手には入らず、家には不時の備と云ふものが無ければならぬ、金を浪費するときは、必らず金の實理と云ふものに背き早晩其罰を蒙るから』と

云ふのである、夫人は同時に、清潔家である、而して其清潔を好むは殆んど潔癖と云はるゝ位である、されば、婢僕は夫人の御機嫌を損じたときは、必らず、箒や雑巾を手に執るのである、さうすると夫人の顔色は忽ち微笑を含むと云ふ。

炭や薪などを購入するには、凡べて毎年夏の間に其冬より翌年夏迄の分を買ひ入れ、又長火鉢並びに炬燵には、重に炭團を用ふる、此一事にて如何に夫人が勝手元經濟に上手なる乎が知らるゝ、然り夫人が家政に對する全豹は此一斑を以て推して知るべしである。

### △子女教訓及び自己の信仰

道は近きにあり、然るに世人は多く之を遠きに求めて居る、簡單なる道徳教にても、克く之を實行すれば、それで立派なることゝ思ふ。

今夫人の人生に關する安心立命を云へば、少しは古臭くは思はるゝが彼の十善戒である、十善戒は此夫人の生命である、夫人は此尺金を以て、其子女を訓戒するのである、されども其十善戒を守るや、多くの人の如く之を舌の上に弄ぶのでは無して、チヤント之を信仰して日夕躬行實踐するのであるから、夫の洋書に半可通的の婦人達の如く或はクリスチヤンなどの教會に出入する女子達の如く、徒らに愛とか眞理とか云ふものを口にして、其實婦人としての本分を忘れて居る者とは霄壤の差がある、夫人の手に育ちたる二令嬢が、矢來の花と云はるゝ迄立派に成長し、共に堂々たる華冑の許に嫁入したるも、亦大に夫人の力に頼ると云はねばならぬ。

### △夫人の慰藉

夫人は、之を當世的の進取主義とか向上主義とか云ふ方から觀れば、少しは保守過ぐるやうに思はれる、けれども婦人の眞價は「内を守る」といふことゝに在るのを第一とするのであるから、夫人の如くあることこそ希はしけれである。

夫人は、前述べた如く儉約家である、交遊を好まない、從つて何等の慰藉を有たないやうである、け

れども、夫人は寔に美しい高いものを以て其精神を慰藉せられつゝある、それは邸內に菜園を拵へ之に蔬菜を植ゑて、其成熟したる後、之を親戚知人に贈りて其喜びを偕にするとである、又祖先の祭祀を大切に思ひ、朝夕に香華を供ふるを懈らず、其忌日には必らず身を清めて之を營む、又常に庭園の泉石や花卉を眺めて樂しむのである、されば婦人の慰藉は、全く自然である、然り『自然を愛する』など口喧しく云ふ人よりも反つて夫人の方が、能く自然の與ふる惠みに感謝して居るかも知れぬ。

△橫井氏の母堂

橫井氏の家は克く賢夫人を出す家であつて、先大人の夫人即ち忠直氏の母堂初枝子の姑も亦全く賢夫人であつた。

母堂は、已に十有三年前に簀を易へて、今は黃泉に眠られて居るが、其母堂の爲人を知るものは皆翼々として之を稱する、母堂は安子と呼びて淑德あり才識あり、鄉黨の風俗此人の爲めに振起すると云ふほど人に畏敬せられた、又其家政を治めたる內助の勞は舅、夫、兒の三世に亘つて居る、忠直氏の材を成し德を達したも其庭訓の力頗る大なりしと云ふ、又晚年婦人交際會を起して世道の爲に盡されたが、七十有四歲にて終られた、其一週忌に故行政裁判所長官槇村男爵が之を追弔したる詩あり左の如し。

淑德鄉閭推二此君一　平生行實到レ今聞
晴耕雨織常親督　永使テ兒孫一守中儉勤上

又其時今の橫井夫人初枝子の歌は次の二首であつた。

年月の夢驚かす秋風に
　拂らひ盡さぬ我が淚かな
受け得たる敎かしこし願くは
　兒等に傳へて報ひ奉らむ



# 種痘に就ての注意

痘苗製造所　佐藤信直述

抑も種痘と申しまするものは、天然痘の豫防のことでありまず、凡そ各種の傳染病の中でも、天然痘ほど正確に、豫防即ち免疫の出來るものはありません、種痘によりまして得たる免疫の、短きものは五年、長きものにありては數十年に渡りまするので、平均いたしますれば、十年は此の免疫を有すると云ひますが、我が國に於きましては、六年位よりしか免疫しないと云ふ人もあります、然れども萬國の衞生會に於きましては、完全佳良に發育したる痘疱の、二個以上善感したるものは、十年の免疫を得ることを決議されました、勿論完全なる痘疱の數が多く發生すれば、從ふて免疫の時期も長くなるに違はありません、斯樣な事柄でありますから、世界各國に於きましては、それ／＼種痘の事を規定したのであります、世人も既に御承知の事と思ひますが、我が國の種痘規則でも、小兒が生れますれば一年以内に初種をいたし、萬一不善感でありまする時は、其週年か若くは次の週年に於て、再三度種痘して善感させる樣にいたします、それから再種と云ふものも、初種を終りました後、滿五年乃至七年になりますれば、施行することになりてをります、それから三種と云ふものも、再種を終りました後、滿五年乃至七年を立ちましてから、施行することに規定されて居ります、獨逸國に於きましては、初種の種痘と云ふものも、我が國の種痘規則と、大した年限の差がありません、けれども再種は滿十二年を經ましたものに、種痘すると云ふことになりてをります、若萬一不善感でありまする時は、善感するまで種ると云ふことに定められてあります、そこで私は兩國の種痘の成績に就て、爰に比較をして見まするに、我が國に於きましては、近年の統計によりますると、年々平均人口千人に對する百人位は種痘をしてをります、尤も天然痘の大流行なき時は、千人に對する六十人、

多き時にありましては百四十八位であります、そうして初種の善感しました其數と云ふものは、百人中八十五人、再三種の善感しました數と云ふものは、百人中三十五人位であります、獨逸帝國に於きましては、年々人口千人に對する五十人の種痘をしてをります、又初種の善感した數と云ふものは、百人中九十九人、再種の善感した數は、百人中に八十人であります、然るに我が國に於きましては、年々多少の天然痘の流行がありますし、殊に明治十九年より、同三十六年までの天然痘の如きは、二二六七、七一六の患者が發生して、之が爲め倒れたるものも、又七〇、一九一であります、之に反し獨逸帝國に於きましては、近年天然痘の流行がなく、若しありましても只數名の患者に過ぎないのであります、かく多數種痘をする我が國が、數少なく種痘をする獨逸帝國よりも、其種痘の成績が何故不良でありましようか、これ一國の衛生、即ち公衆の健康を謀るもの丶、充分其原因を探索して、速に之が根除の計を立てなければならない事であらうと思ひます、そこで私の考では、其重なる原因として、左の三要點を指摘せねばなりません、第一種痘の施行上に於て、缺點のありますること、第二既往に於て製造したる、我が國の痘苗は不良には非らざりしや否やといふこと、第三痘苗使用法、及接種技術の點に於て、缺くるところありますること。

第一の缺點と申しまするのは、無用なる種痘が多くありまして、必要なる種痘に遺漏が多いと云ふことであります、何となれば、歐洲文明國に於きましては、再種の規定も無い國があります、例令墺國及佛國などでは、只軍隊に對しまして、再種を命令する丈であります、然るにもかゝはらず天然痘の流行は近來跡を絶ちて居ると云ふことから考へますれば、彼の國に於きましては、最も初種の種痘に重きを置きまして完全に種痘をするに違ありません、然るに我が國に於きましても、之と同じく種痘規則の第一條に基きまして、小兒出生後滿一年以内には、必ず

種痘をするといふことを實行してをりますにも拘はらず、實に此點に就きましては、大に吾々が疑念を存する所であります、元來初種痘しました人員と云ふものは、其年の生産數から、死亡數を引き去つた丈でなければならぬ筈であるのに、全國到る處の地方に於きましては、初種痘した數と、此の數と符合することが至て少ない、それであるから少ないだけ遺漏があるに相違ないのみならず、百人中十五人の不善感者は、必ず其週年か次の週年内に於て、再度三度と接種して善感させなければなりません、殊に完全したる種痘名簿と云ふものを、市町村役塲が整頓して居らないが爲に、春秋二季の行政種痘をするにしても、多くは戸籍簿より抜書する有樣であります、再種以上に於きましては、種痘規則によつて、滿五年乃至七年に、再種及三種をすることに於ても、又名簿を整理してありませんから、完全なる種痘を施行することが出來ません、甚しきに至りましては市町村役塲が、接種したる人員などを點檢もせずに、不善感或は不検と稱して、事實の調査をせざるものを、表中に記入して地方廳に差出すなどは、實に責任を重ぜざる言語同斷の至といはねばなりません、そこで地方長官たるものは、宜しく市町村制に因りまして、十分其過怠を責むるの必要ありと私は考へます、故に行政種痘に直接關係ある市町村役塲は勿論個人に對しても、爰一番の猛省を促さねばなりません。

されば市町村役塲では種痘名簿を完全にしまして、其他個人たるものにも、種痘の注意をよくして貰ひ少なくとも初種の種痘に遺漏のない樣に、且つ點檢をも充分に勵行しまして、殆んど善感に至らしむるやう、專ら力めなければなりません、既往の習慣としましては、市町村役塲が春季に、多く種痘をすると云ふ譯柄となつてをりますが、春季より秋季に於きまして、寧ろ種痘いたすことが、實際に於て適當でありますから、本年の秋季より、春季にかけては、市町村役塲個人に向て、大に其實行を希望します、

何となれば、今日までの流行の狀況を見まするに、天然痘と云ふものは、冬から春にかけて流行するので、恰かも今日の有樣から申しますれば、天然痘の流行の終りました後に於て、種痘すると云ふ事になつてます、凡そ充分に天然痘を豫防いたしまするには、流行期節の前に於て、未種痘者の無い樣に、秋季に於て種痘を勵行することが肝要であります。

第二種痘用の痘苗が不良なりと云ふことは、數年前より我國の學者が之を口にしてをりました、何となれば民間に任してある痘苗製造の事は、昨年まで監督する規定もなく、又之を取締るもののなきもの丶、製造したるものを用ゐまして、先にも申しましたる通り、日本人口の十分の一を、毎年接種してをりますから、一人の生涯より云ふ時は、少なくも三回位は種痘をしてをります、故に凡そ衛生事業の內で、最も廣く最も大なる關係を國民に及ぼすものは、痘苗製造事業より外に類はありませぬ、是の重大なる關係を一國の衛生上に持つて居る、痘苗製造事業をして、監督取締の規定もなく、利益を以て成立ちまする、一個人の事業に任かして置くことが出來ませうか、夫れが爲め不良なる痘苗の爲に、死亡するものもあるだらうし、又健康を害されるものも、多くあるだらうと私は思ひます。（つゞく）

## 家政學資料（承前）

磯部　武者五郎

（四）一家經濟の一覽表

前項に出したる一家經濟の科目は物品に依りて類別したるものなり、今又其性質に依りて分類すれば左表の如し。

〔收入〕

- 經常
  - 勞働收入
    - 收穫採取
    - 俸給賃銀
    - 利潤口錢
  - 財產收入
    - 利子利益金
    - 地代家賃
    - 土地副產物

- 一家の經濟
  - 臨時
    - 賣得
    - 受贈
    - 負債
    - 返債
  - 支出
    - 經常
      - 負債消却
      - 生計費
        - 衣食住費
        - 養育衛生費
        - 敎育費
        - 租税使用料
        - 交際費
        - 給料
        - 娛樂費
      - 營業費
      - 豫備費
        - 貯蓄
        - 保險
        - 財産購入
        - 貸付金
    - 臨時
      - 祝儀
        - 出産
        - 婚姻
        - 普請
        - 榮進
      - 變災
        - 天災
        - 疾病
        - 死亡

### (五)家庭に要する帳簿

家庭に於て收入支出を詳記し、金錢の有無を明かにし毎月決算を爲すは最必要の事なり、然るに一冊の帳簿をも備へざる家甚だ多し、是實に宜しからず、若し主婦にして簿記法を知るあらば、簿記式に據りて記帳すべし、簿記式に據るときは少くとも左の帳簿を要す。

日記帳、元帳、賄費勘定帳

日記帳は日々の收入支出を日を追ふて記入する者、元帳は科目々々の收入支出を明記するもの、賄費勘定帳は賄費の内譯帳なり。

右の三帳に記入して毎月決算一覽表を作るべきなり。

若簿記法を知らざるときは、左の帳簿を作りて、從來の大福帳小遣帳の付け方にて記入すべし。

諸支拂覺帳

此の一帳に諸支拂を悉く記入し、矢張一ヶ月分の決算を爲すを要す、又商賣をなす家にては左の帳簿を要すべし。

商品賣上帳(收入の部)

商品仕入帳（支出の部）

諸支拂雜帳（支出の部）

此の三帳にて收支決算を爲し、或は損益勘定表を作るべし、これも簿記を知るときは、商業簿記の記入法を用ふべし。

又簿記を知らざる家にて、收入の種類多きときは、其の收入につき特別の簿帳を作るべし、たとへば

地代收入帳、　家賃收入帳、　利息收入帳

等の如し。

以上は經濟に關する帳簿なるが、此の外經濟に關せざることに付きて、左の帳簿を要すべし。

日誌、　物品貸借帳、　贈答帳

日誌は日々の出來事を記載するものにて、左の書式に據らば、簡單に記することを得べし。

○月○日何曜晴天

一主人出勤

一某氏來訪

一主婦某件に付某氏を訪ふ

一在某國某氏より郵便着

一長男病氣に付學校休

物品貸借帳は物品の貸し借を記入して忘失せざる樣にし、其の貸したるは早く取り戻し、借りたるは疾く返す樣にせざるべからず、故に此の帳簿を要するなり、世の中に能く貸し無くすこと甚だ多く、又誰人の品なるか、借りたる儘自家のものとすることも甚だ多し、此等の不始末を正さんには是非共此の帳簿を要すべし、其記入法は左の如くすべし。

貸の部

○月○日

一雨傘一本　　某氏へ貸す

○月○日返る

○月○日

一地理書一冊　　某氏へ貸す

○月○日返る

○月○日

一風呂敷一枚　　某氏へ貸す

借の部

○月○日
一雨傘一本　某氏より借る
　○月○日返す

○月○日
一歴史一冊　某氏より借る
　○月○日返す

○月○日
一風呂敷一枚　某氏より借る

贈答帳は貰ひ物、遣ひ物を記入するものにて、餘り必要なきが如くなれども、世の中の交際には寒暑病氣其の他の見舞訪問に多少の音物を贈るべきは當然のことなれば、此の禮儀を缺かぬ樣にせんには此の帳簿に記載し置きて、他日見舞訪問を爲すときの參考に供すべきなり。

又他よりの貰ひ物には他日必ず返禮すべきことあるべきを以て、之れを忘れざる樣に此の帳簿に記載し置く必要あるなり。

貰ひ物の部

○月○日
病氣見舞
一菓子　一折　某氏より

○月○日
無沙汰見舞
一鮮魚　一尾　某氏より

○月○日
歸京土産
一菓子　一折　某氏より

遣ひ物の部

○月○日
病氣見舞
一菓子　一折　某氏へ

○月○日
火事見舞
一三ッ組重詰料理物　某氏へ

○月○日

返禮

一菓子　一折　　某氏へ

以上は中產の家庭に要する帳簿なり、上流の家庭には此の外種々の帳簿を要すべし。

（十六）財產の種類

財產とは廣き意味にていへば、土地家屋よりあらゆる室內の器具迄をいふべく、狹くいへば先づ利益を生ずべき、土地、家屋、株券、公債、證書の類なり、法律上にては之を動產不動產の二種に分てり、即ち

動產、不動產

動產とは一つの場所より他の場所へ移すことが出來るものにて、たとへば馬の如き自ら動くもの、及び椅子、机の如く人の力で動かすものを動產といふ、其の種類のあらましを擧ぐれば、

建築中の小屋建築用の足場、

培養したる草木果實の類、

著述發明等の權利、

牛馬家畜等、

家具什器等

不動產とは、其の形狀及び性質を變更するにあらざれば、他に移轉すること能はざるものにて、其の種類の大略を擧ぐれば

土地（耕作地、宅地、山林地、牧場等）

池沼、溜井、溝渠、堀割、泉源、堤橋等、

土地に固着せる樹木、竹木、浴場、水車、風車、水力、蒸氣の機械、

果實及收穫物の土地より離ること能はざるもの、

鑛物、坑石、石炭等の土地より離るゝこと能はざるもの、

建物（家屋）及び建物に附屬せる戶扉、

墻籬の類、

土地に附着したる電氣機器、瓦斯の筒管、

動產不動產といふは法律上の性質にて、若し金を貸すときに之を抵當として之を定むるに、動產は形狀位置を變更すると容易なる故に甚だ不安心なり、之に反して不動產は容易に形狀位置を變ずること能は

ざれば、法律上にて其變更を止め置けば安心なるべし。

家政學の上にて財産を區別すれば、左の二種とす、

基本財産　使用財産

基本財産とは、一家經濟の基本即ち元手なるものにして、利子を生ずる物をいふ、其の種類を擧ぐれば、

宅地、田畑、山林、船舶、貸車、牛馬、公債、證書、勸業債劵、會社銀行の株劵、預金證劵、郵便預金及銀行預金通帳、貸金證文の類、

其の他器械の類、店、及び藏にある商品等又利子を生ぜずとも賣買の際價値を生ずべき寳物品、

使用財産とは、所謂家具のことにて、平日使用する道具、家の中にある一切の品物にて、其の大概を擧ぐれば、

家屋の造作、障子、襖、雨戸の類、書籍、圖畫、掛物の類、時計、置物、皿、鉢、膳椀茶椀鍋釜より團扇扇子、衣服及び衣服に關する物品等なり。

## (七)基本財産の購入及び管理

一家の經濟を整理し、先づ節儉して貯金を爲し、其の貯金相應の額に上りたらば、何か基本財産となるべきものを購入するがよろし、固より貯金も基本財産なれば其の儘になし置くも差支なし、さて其の購入するに土地家屋公債證書等は最も確實の物なり、殊に土地の如きは年々價を增すを以て之を第一の寳とすべし、次には確實なる會社銀行の株劵なり、配當の少くして且つ資本金の少き會社銀行の株劵は見合せて、求めざるがよろし、田畑山林等は金錢に餘裕あるにあらざれば求むること難かるべけれども、これらの物を買ひ求め置かば確實にして後年に至りて、家の寳となるべし、船舶車の如きは土地と塲合と業務とに依りて利益を生ずべき見込あらば購求すべし。

基本財産の管理法を述べんに、先づ財産臺帳を作り、基本財産となるべき物を、悉く記入して洩すことなきを要す、別に基本財産の收入支拂を取り調べ、毎月及毎年財産一覽表を作りて、一家財産の額を明

記して計算することを要す。
財産臺帳を整理し置くときは、一には財産の散逸を防ぎ、二には財産の增殖を圖る方針を示し、三には財産の處分及び處分せられたることを明に知るを得る利益あり、故に此の整理を怠るべからず。

# 理科と家庭

K・K生

或日の夕まぐれ、とある小路にさしかゝつた折、可愛らしい一むれの小兵士が我等の目の先を遮りました。年かさなるが九つばかり、同勢總て七八人、てんでに菊世界のボール箱をランドセルとし、鍍金木綿の一本筋筒袖の端を締めまとひ、竹ぎれの鐵砲筒並を亂さず、眞先はブリキのラッパりゝしく小脇にかへるもの、續いて日の丸の旗勇ましう擔へるもの、縱に一列に整頓して大將の號令を今や遲しと待受けて居ります。大將の太郎は一聲高く、

前へ進め……

進行のラッパが

チテ〳〵タ、トッチテタ……

一曲吹き畢つて、崩れんばかりに、

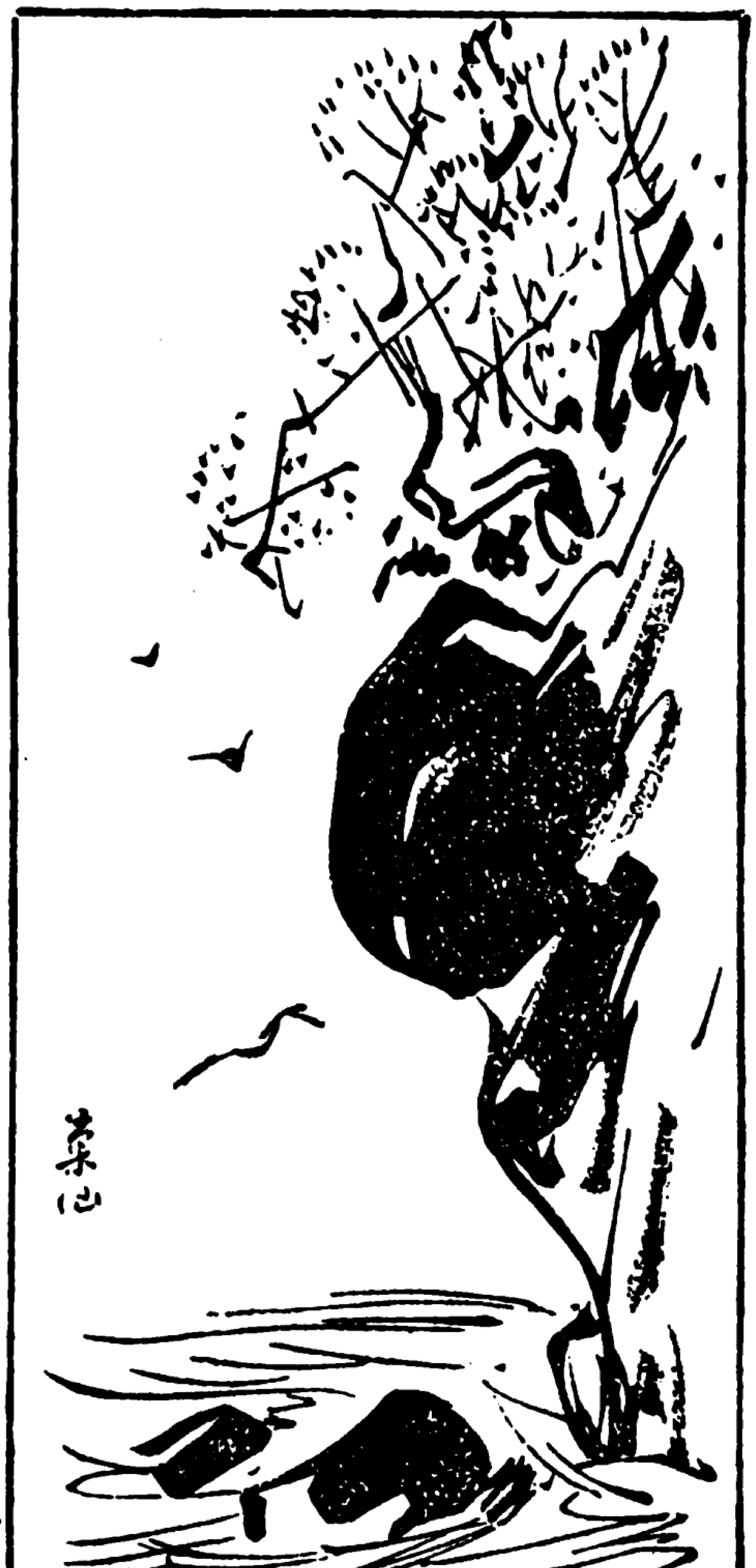
四百餘州をこぞる十萬餘騎の敵
國難こゝに見る弘安四年夏の頃
何ぞ恐れん我れに鎌倉男兒あり
正義武斷の名一喝して世に示す

其の雄々しさ、其の勇ましさ、第二の國民の遊びとして、將た戰時の小供が嗜みとして、我等は脊骨の縮むばかり只管感歎の外はありませんでした。日露開戰の響がいかに彼等の頭を刺戟し居るか、其の心の裏には、相模太郎をも加藤清正をも極め居るのでは無からふか。然り、彼等は既に虹を呑むの慨を示して居るでありませう。其れより自らもいと心よく尾張町のかりほに歸りて、見殘しの新聞紙を讀みながら、社會と戰爭とがドンナ安排になり居るものかなど其處此處と拾ひ見の中、フト四月興行の歌舞伎芝居が外題は艦隊譽夜襲で櫻痴居士の新作、淺草公園の興行物には、櫻勝館の旅順港外の激戰、ワ

リヤーグ轟沈の飾附を首め、球乗劍舞手踊までも追々際物に材料をさしかへるなど、二つ三つ眼に着いたので、ソロ〳〵と此の問題に興味が添えかけた所へ、適某女學校附屬幼稚園の女教師が尋ねられました故、話頭は端なく彼の小供等が遊技の批評に及んで、如何にも彼等が摸擬の巧みなる、思ひつきの珍しきに、互に驚服しましたが、女教師から更に一段稀れなる事實が提出されました。そは此の女教師の受持てる幼稚科二年生の少女が、矢張此度の戰爭をうたつた歌に、

軍のうた

へいはろしやと　たゝかつて
日本の爲めに　ちうぎをば
つくせやつくせ　くにのため




と、丸で和泉式部の再生か菅公の權化かとも疑はしむるばかりではありませんか。ソハ兎も角、此度の戰爭に對して人氣の出たことの夥しいのは如何にも大したもので、實に帝國萬歲萬々歲と申す外はありません。かやうに天下の人心が活動した場合には、巧みに之を利用しますと、益々忠君愛國の大本を堅確にし倫理の上に新しい生面を發展すると同時に、文學にあれ理學にあれ、其の他美學に工學に如何なる學科でも、平時に比して研究が盛んで有らふと思はれます。殊に家庭に於ては、新聞紙に、雜誌に、小

に、戰ぶりの讀物、談話の中心となつて、幹より枝を生じ葉を出すから、其れ〳〵專門の學術に由つて說明を致しませんと頗る誤謬に陷る例が多いのであります。分けても小供の姉となり母となり居らるゝ方々が、往々彼等の銳い質問の矢にかゝつて、散々に敗北をなし、見苦しい打死を遂げて、小供の精神界に好ましからぬ影響を與へるなどは、深く寒心致すべきことゝ存じます。是れも近來實見の事柄でありますが、

『姉さん水雷つて何に、』

『軍艦にわたるとソレが飜りかへるものよ、』

『ドウして飜りかへるの、』

『水雷が破裂するからさ』

『ドウすると破裂するの、』

『軍艦にわたるからさ、』

『わたるとナゼ破裂するの、』

『アラ、分らないこと當ると何でも破裂するではありませんか、ごらんなさい昨夜ランプに箒が當たので丸でコナ〳〵になつたでは有りませんか、』

『ソレデは水雷は箒みたやうなものでせう、』

『マアおかしい水雷と箒とは丸で違ふではありまんか、』

此時この小供は、痛く不滿の面持にて彼方の母様の許に走り寄り、

『お母さん水雷つて何に』

『姉さんにおきゝよ』

『姉さんは水雷は箒みたやうなもんだといつたのよ、』

『オホヽヽ、ソレハ違ふのよ、お父さんがお歸りなすつたらよく御存じだからお聞きなさい、』

兒童は不悄〳〵にこの一大疑問を腹藏して其場はそれ切の事であつたが、もし此の母姉にして科學上の知識に富み適當の解釋を與へたならば、かゝる烟の如き答辯をなして、此の小供の活動心を抑壓し防害しなかつたで有らふと思ひます。啻に知識上の萎縮

を來すばかりでなく、母の威信にも姉の信用にも差しひゞいて、遂には惡太郎の素地を、家庭の裏より釀し出すことになるので有ります。誠に寒心の上にも寒心を要すべきことゝ存じ、茲に聊か理科上に就て、特に家庭に緣あるものを撰んで、應急にも實用にも用立つものを講究致さうと思ひます。

### 理科とは何ぞや

理科と申すことは甚だ廣いとで、動物植物礦物から物理化學天文地文、さては生理衞生などの學問に渉つて研究するので有ります。箇樣に間口は廣くあるが、其のかはり奥行の少いのが本科の特質で、もしも奥行を深く致す時は動物は動物、植物は植物と各々一科專門の學科となり、此の同盟を離れ獨立して仕舞ふので有ります。ソレデ理科に於ては此の世に處して誰れでも無くてならぬ智識、即ち普通一般の事物を理解し得る常識を與へるのが其の目的とする所であります。世界何れの國でも此の常識が限なく行き亘つて然かも其の程度の高い程、文明の譽を博するので彼の小供と少女との水雷問答の如き事實が多く有るやうでは、誠に其の國の一大不面目、其の人の耻辱の極みと申して聊かさしつかえが有りますまい。所が我が國の人は歐米人に比べて此の理科思想の上に甚だ遜色があるので、識者は常に之が救濟の道に盡力して居ります。近來新聞紙に、雜誌に、著書に、此の種のものが數多く表れたれども、內容の表出が痛く六ケ敷いものでなければ、丸でお伽話のやうな、たはいの無いものゝみで長短輕重宜敷に叶へるものと云つては、慥に曉の星と云つて差支がありません、論より證據、彼の村井弦齋が食道樂といへる小說をものして、料理法の蘊奧を分り易う面白味を添えて廣く世に紹介されたので、報知新聞の發刊紙數一躍殆んど倍數に達したのみならず、其の合本を公にするや否や洛陽の紙價に大いなる變動を與へたさうで有ります。私は、只管此種の筆法で紛糾錯雜の理科などをも切り拓く銳い手腕のある第二の弦齋氏の現れるのを歡迎して止まぬものであり

ます、偖理科の性質、目的の大要より、從來の缺點弊所なども略々明瞭に成つたことゝ思ひますから、更に一歩を進めて理科を學ぶの用意に就て、一言いたさうと存じます。

　如何にして理科を學ぶべきか

曾てアメリカに於て某の山にトンネルを穿つた事がありました。此の時技師はトンチルの道筋を測量して、東西の兩面から一度に工事に取りかゝりました、やがて豫定の竣工期日に成りました所、コハソモ如何に、西より掘つたのと東から穿てるものとが、凡そ六尺ばかり喰ひ違ひが出來て、トンネルが一貫しませんので、技師は靑くなつて腰を拔すやら、工夫は呆氣にとられて鶴嘴を投げ出すやらで有りた想です。所が此の事が技手の責任問題となつて、會社では更に當時有數の測量家を聘し、再調査の上で此の問題の解決をすることになりました。偖新技師の人々は念には念を入れて、十分測量をした結果が矢張り舊技師のものと、少しも變らないので一同不思議の淵に沈みました。流石にアメリカのことゝて此の問題が一時に其の道の人々に鋭い注意を與へました、其の折、老練の一技師が、

　人の手の發達と活動とは、左の方より右の方が優つて居るから熟練の工夫でなければ右へ右へと力がはいるので東西から右癖について掘る結果アベコベに差が生じ長い間のこと故終に五六尺の喰ひ違ひを現したが、必竟は理論と實驗とが衝突したのであります。

と、快刀亂麻を斷つ如き解釋を降したので、此の問題は全く落着になりました。

ソコデ此の理科を學ぶにも實驗と理論との調和が極めて大切であります。何でも一方に重く他方に輕いやうのことが有つては、完全圓滿な目的を達するとが出來ぬもので、仮令理論が必要だと云つて、ドンナ事でも、餘り理屈ばかりに走ると、多くは實地に疎くなり易いもので、理論では間違ひのないやうに感じても、イザ實地と云ふ場合になると中々甘く行

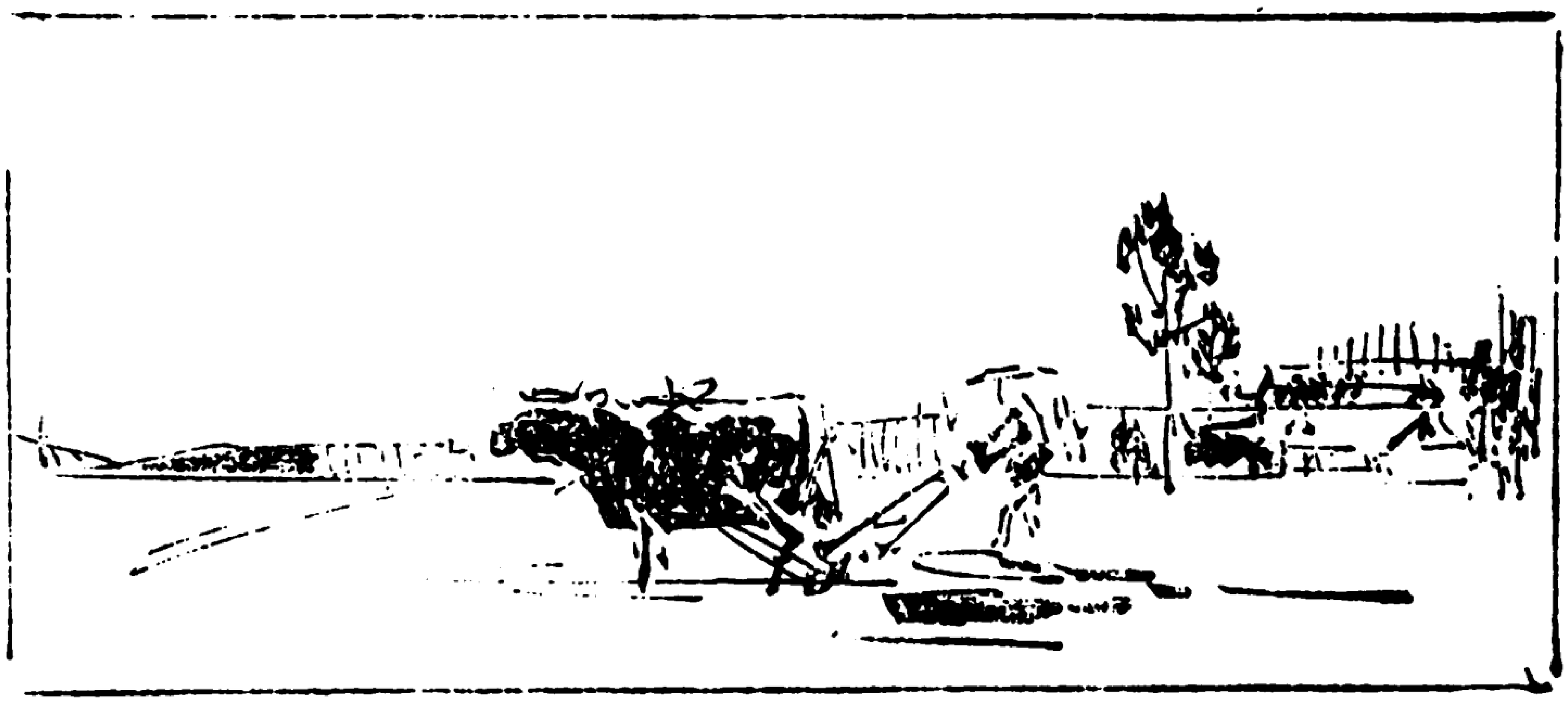
かなくつて寧ろ其の理論が間違つて居ることを發見したと云ふとか、丁度彼のアメリカの測量技師が理論と實地との衝突を招いたお話の類ひであります。理科を學ぶに於いても此の理論と實驗とが研究の緯となり經となるものでありまして、先づ精密なる實驗を積みまして、それから、其の由つて來る所の理論に及ぶのが最も自然の順序、適當の方法と思ひます。是れにて研究の次第も明かになつたから、愈々ドンナ所より始めて善いのか、甚だ其の撰擇に苦みましたが、差當り化學と云ふ標題に致しませう。

### 何故に化學を撰びたるか

理科研究の材料としては時節柄桃とか櫻とか、將た蟻とか油虫とか云ふ、眼の前に活動しつゝ居るものこそ、生々とした材料で、然かも面白味も多いことであるとは、誰しも考へることでありませう。それを態々時はづれの化學などを標題にしたのは、つむぢ曲りであると云ふ樣な譏りも有らふかも知れませんが、兎角雜誌界の傾向が千篇一律年々歲々其の內容同じくして、歲々年々人相同じからずと云ふ注意を缺けるやの疑が無きにしも非ずです。御覽なさい、理科の記事としては、春の初めには梅にあらずんば櫻、油菜にあらずんば蒲公英、秋は菊紅葉を始め桔梗苅萱女郎花などと先づ以て相場が大體定つて居るやうに見えます、ソレデ此の相場を見越して、ズット化學と云ふ變り物を出して、一番讀者のあらぎもを取つて遣らふと、突飛な好奇心に驅られたのみでなく、皆さんと化學とが至つて親しい關係を持つて居ることを、申し上げたいと思ふ故で有ります。今其の二三を擧げて申さば、日々お使ひになるおしろいやしやぼんなどは化學の說明でなくば、其の成立も性質も良否も分ることが出來ないのであります。其の外マッチの火の出るのも、ランプの燃えるのも、偖は味噌醬油の釀造など、一々他の學術の力では說明が出來ません。かやうに申し見れば、化學が女子に取つて如何に大切で有るか。更に家庭の品物を以つて材料とするに至つては、より一層の必要を認めなく

てはなりますまい。
序に申し上げますが、輓近歐洲諸國の富强になりましたのは、其の實化學の力に依ると云つても善いくらゐです。分けても獨逸の如きは非常な資本を化學者に與へて研究に專心せしめ、其の發見を利用して大いに富國の基を開いたことで有ります。彼のインヂゴ即ち藍は、誰れも能く知つて居るものであるが、此の藍は近頃までは人工では出來ぬものであつたのを、獨逸の化學者が其の人造法を發見されまして、頻りに海外へ輸出しましてから藍の生産に名の高い印度の國に大恐慌を來たして、英人が散々ひどい目に逢たさうであります。尚、かやうな事實は更々人ごとでは有りません、新領土臺灣の生命とも申すべき樟腦も人工で出來るやうになつたと云ふ話です、昨年の大阪博覽會にお出になつた方々は御覽になりましたらふが、獨逸工業品の出品に人造絹糸が出品して、其製法非常に進歩して一見天然の物と見分けがたいやうで有りました。愈々生糸や樟腦が人工で出來ることになつた曉には、我が國の蒙むる大打擊は啻に英人のインヂゴに於ける比では有りません。
其の外漆器の如きは、古來我が國の名産として、世界にジャパン即ち漆の國とまで申されたものが、近頃は粗製の品のみになつて、海外輸出の際、熱帶地方を通り過ぐると品物が破損を生じて、貿易場裏で二足三文に投賣をする失敗に陷つたと云ふ例が少く有ません。獨逸では逸早く此の事實を看破つて漆器を拵えまするに、其の形狀色彩摸樣など一々日本風に模倣し、ドシ〳〵アメリカへ向つて賣り込むさうですが、之が爲我が當業者は其の販路得意を蠶食されて、今日では大分困つて居るのであります。磁器の如き、矢張古來より名高い産物でありまして、九谷燒七寶燒有田燒などは世界至る處に歡迎されますが、偖玉に疵とも申すべきは、其の價が甚だ不廉で然かも其の拵え高が少いので、世界を相手の商品としては、未だ〳〵ズット物足らぬ感が致します。
かやうに我が國の特産や名物が世界の市場より退却

しつゝ有るのは、誠に心細い次第ではありませんか。今や我軍隊は海に陸に破竹の勢を以て進みつゝあるが、世界市場の戰爭は全く其の趣を異にして、歩一歩と後に退くと云ふ有様に至つては只管慨しき限りと思ひます。さらば何故かゝる不覺を取つたのかと申しますれば、第一其の實力即ち化學の智識が痛く缺乏して居るからだと思ひます。若し我が國人に化學の素養が十分にあるならば、獨逸人も佛蘭西人も決して恐るに足ません。玆に一寸お斷りをいたして置きますが、否お斷りをいたすまでもなく、化學を理科的に説明するのですから純粹に化學を申し上ぐるのでなく、之に關係のある學科は其個處々々にて枝より葉に渉つて來らなければならぬ場合が數多く有ります。尤も物理の如きは化學の説き加減に由つ



て其の領分を踏み荒らされて、化學であるのか物理であるのかドチラつかずの場合もあらふかと存じますれば、豫めお心得置きを煩したいのであります。要は成るべく分り易く、面白味があつて、然かも實用的の化學の概略をお話し致さうと思ひます。

## 風船玉

子供の玩具として、彼等に歡迎せられる彼の風船玉なるものは、曾て皆様も其の昔この興味を實驗せられて今も尚ほ記憶して居らるゝでありませう。さて子供は何故に斯ばかり、此の風船玉を歡迎致すのか、又玩具屋が如何なるはづみに依つて工夫をいたしたのか、一寸したことですが之を化學の上から解釋しまするど、

第一疑問　即ち子供は何故に此の風船

玉を歡迎しますかと申すに、ソレハ、子供が無意識ながら、水素といふものを大層好きであるからだと思はれます。之は一威無鐵砲のやうに聞えますが、更に一歩を進めて此風船玉の物質とか構造とかを、一々吟味いたせば明瞭になるとで、所謂風船玉のソトガハはゴムで、其うはつらのピカピカ光つて居るのはアラビヤゴムを引いて中なる瓦斯の漏れぬ爲めなのであります、此中の瓦斯こそ即ち水素といふものでゴムが張り切れるばかりに、はいつて居ります。

ソコデ此の水素と云ふものは、空氣に比べると餘程輕い物質でありますから、フワリフワリと氣中に浮遊するのであります。此の輕いといふ性質が働いて、

ソレガ子供を悦ばせるもので有りませう。言葉を換へて申さば水素の性質の作用が子供に歡迎せられたのでありますから、子供は水素が好きで有ると斷定したので有りました。

水素の輕いことは風船玉の實驗で明らかであるが、今學者の調べに基いて數の上に表はすと更に驚くべきもので、即ち攝氏の温度零度の時、壓力七百六十ミリメートルに於て、水素一リットルの重さは僅に〇、〇八九九グラムに過ぎませんが、空氣の重さは實に一四、四三二グラムであります。

〇、〇八九九　0,0899

一四、四三〇〇　14,4300

新聞紙の報道によれば梅ケ谷は、其の體量四十貫はども有ると申しますが、今梅ケ谷の重さを空氣の重さとすれば、水素の重さは、生れて僅か一年位の赤兒(二貫五六百目)の重さに過ぎません。

第二疑問　之は甚だ簡單なお答で濟みます。即ち玩具屋が子供の嗜好に投じて、水素を玩具の上に巧みに應用したので有りませう。是等は微細ながら化學の利用の一端であるが、其の始め之を工夫仕出した玩具屋は少からぬ利益を得たさうで有ります。

皆さんは、是れにて水素の性質の輕いといふことは善くお分りに成つたことゝ信じますが、水素の性質は只輕いと云ふだけでは十分の解釋になりません

此外にも未だ色々の性質があるので、先づ第一色も香も形もない、又之に火を點ずれば、直樣酸素と申す瓦斯と結び付いて青藍色の焰を放つて燃え出す。此の結び付く働を化學上の言葉で化合と申します。ソコデ、此の水素と酸素とが化合する場合には、非常の熱を發生して、水を拵へるのであります。吾々が日々飲用に供へて居る水の大切なることは今更申すまでもないが、其本をたゞせば水素と酸素との化合したものに過ぎぬので吾々の生命はコンナ瓦斯體の化合物を飲んで生きながらへて居るとは、今より四五十年前の人々は夢にも知らなかつたのであります。

序でながら此の水素とか、酸素とか申すものを化學上では、元素と云つて居ります。元素の種類は此の外尚ほ數多くありますが、皆さんが常に御覽になるものでは、金銀銅鐵錫鉛など有ります。此の元素と申すものは化學上の力で、最早其れ以上のものに分けることの出來ぬものであります。

以上は水素の性質に就いて其の荒増を説明したもので有りますが、更に之を一括に見易く書き現はせば、

水素の性質

一、空氣より遙に輕い瓦斯體なること。

二、無形無色無臭の瓦斯なること

三、酸素と化合する時は燃ゆること。

かく書き終つて一つ遺感に堪へませんのは、水素と酸と化合させて水にする實驗をお目にかけられないことです。定めて皆さんも御同感でありませうが、そこまで參るには、少々道行がありますれば、こゝ一時お預りとして後日のお樂みに致しませう。

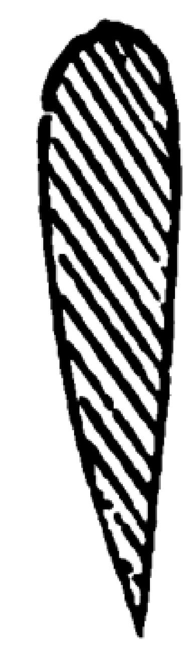
## 刺繡

### 竹平糸縫ひ

上村百世子

竹は濃き草色と淡き草色及び金糸が入用で有ます、大きな竹の葉を縫ますには、濃いのを用ひまして、小を縫ひます時は淡きを使ひます。此の縫ひ方は先

イ



ロ





きの方から縫ひました方が縫ひよく御座います、イ圖に有ります樣にはすに縫ひます、此の針目も餘り短かく成りません樣に、勢がぬけぬ樣に縫ひます、初めは葉先きのとがらぬもので有ますから、成る可く注意して先きの針を長く致します、枝の縫ひ方は、かま糸ではすに縫ひまして、五分置き程に二針ロ圖の如く草色のかま糸で縫ひます、之は節で御座います、細き所は次第に細く成る樣に縫ひます、葉を縫ツてしまいましたらば、金糸で葉脉を入れます、是は金糸一本を其葉の眞中に渡しまして、五厘程にとじ目を致します、綴じ糸は草色のすが合せでいたします、後に金糸の切目を引込みます。

## 衣服の模樣に就て

又仙子

本號より掲載始めし衣服の模樣物は、都て皆さん方の平常お心懸けになるべき筈の物なれど、之を製作致すもの丶上には、春秋の移り替り、流行の變化につれて、甚だ苦心多く而も多忙のものであります、苦心の點は即、模樣として天地間何物たりとも材料となされぬ事はなけれど實地は左にあらず、衣服の模樣とては大約材料として、種類の限られしもの、夫をば陳腐にならぬやう又取合せの趣きあるやう、百の模樣が百の見る目を改むるやうになすといふとにて以つて意匠の易からぬを知るべし、又多忙の次第は、四季折々の衣服に映り好く見ゆる染色の事より模樣の意匠によりて、時の好みの派手と澁味を按排すること、極めて技術を要するものなれば、寸時も油斷のならぬものと察せらるべし、皆さん方が若し召物を求めらるるとき、三井なり白木屋なり、赴かれて、望みの品を數多ある中で撰まる丶時の意中は如何なるや、アレのコレのと好きが上に好きをとの注文、さぞかし苦心の事ならんと想はる、愈々望みの品を求められて後、之を裁つの縫ふの[illegible]拔のせわしなさは、心の樂みと丶もに多忙なる他人に知ら

れぬ處なるべし、此の譬にて摸様製作者の苦心と多忙を悟るべし。偖、夏着透し模様は、絽又は透屋など如き羅綺の重ねにとての圖案なれば宜しく時季に注意し厭味がなくてよく圖案の意に叶ひたる、模様なり、景色なり、將た其の色合等涼しさうなる、目覺むるばかりの意匠を取度きものなり。

夏着の好みは第一に涼味に適せねばならず皆さん方のお心得でもあらふが、如何ほど好ましき模様たりとも、涼味なきは採ることならず、殊に又染色の熱苦しきは嫌ふべし、誰れとても夏着の色に梅鼠、トキなどの赤味を好むことは爲さるまい、大抵藍氣ある冷たき色を採らるゝならん、故に其の冷たき色に適ふやう、水草乃至雨季の花ものなど、自然に意匠し圖案をもなすべきなり。

透模様は、如何なる年齢格好の者に、着榮あるやと云はんに、御存知の如く涼意粋致の圖案なれば格安は二十芳紀以上の者にして、餘り厚化粧をなさぬ、謂ゆる楚々梅の如き容姿に適はんとは、皆さん方も先づ承知なさるゝべし、其道に精しき或呉服店の者の談に、染色も圖案も髯ある者の苦心されしよりは好み上手の女性がたの考へが、遙かに逸れて巧みなるには駭くに堪えたり、是れ種々の注文品によりて明かなり、想ふに女性は、他方の風俗を觀察するに密やかにして、己れの着こなしにまで工夫厚ければ、常住座臥に研究の功を積めるが故なるべしとのことを聞きました。

皆さん方も、御自分の衣服を新調なさる時は、豫じめ意匠をなすつて、御覽になるが宜しい、唯だ製作者に任せぎりにては、他人の物を買ふといふに止りて甚だ才覺の淋きものと云ふべきである、皆さん方は現に繪畫の修養もありませう、又學校によりては半衿の刺繍などは、課業の中に加へてあるものなれば、遂に一家の内室となられて、孃子達が衣服の模樣などに就ては、兼ての心懸に依り好み又取合せ等殊の外効果のあることは疑ひのない事である、前にも述た呉服店の話柄の女性の如きは、日比自から意

大本營參謀本部、大藏省、農商務省、司法省、鐵道作業局、各府縣廳、裁判所、郡市役所、警察署、各學校、會社銀行、本願寺、御用其他一般ヨリ續々御注文アリ

内國通運株式會社纂編

新式

# 大日本里程地圖

(分割四拾壹枚壹部 縮尺四拾萬分の一)

用紙舶來上質厚物●堅牢美裝總クロース金文字入●印刷鮮明三色刷●脊皮クロース 巾九寸長一尺三寸 帙入 巾一尺三寸 長一尺八寸 ▲見本入用の方は郵劵貳錢を送附せられたし

二種同價 **壹部正價金參圓五拾錢**(送料)東京大阪兩市内無料其他帙入參拾錢洋裝貳拾錢臺灣帙入五拾錢洋裝四拾錢

**本圖の資料**は三百年來繼承の歷史を有する内國通運株式會社が現に全國に有する幾多の機關に就き調査審定せしものなれば正確無比と云ふべし **特色其一**は人車馬道車不通道車馬不通道の三道を朱記區別し一々里程を明かになし加ふるに郵便線路を附記して旅客の來往貨物の運輸に空前の便益を與へたるものなり **其二**は各地重要の物產を圖中に表記して地方物產の所在と之れが集散の系統を知らしむるにあり **其三**は地方行政廳は勿論專賣局支局稅務監督局稅務署稅關特別輸出港郵便局電信局銀行鑛山兵營温泉海水浴神社佛閣名所古跡城墟港灣燈臺等三十有餘種の記號を各々其の所在地に附記して一目の下に重要の地物を知悉せしむるにあり **本圖の製圖**は多年斯業界に堪能の譽ある專門技師に託し之を圓錐式に法り開展製圖せしものならば世間普通の地圖と自ら其の撰を異にせり

本圖は内國通運株式會社が第五回内國勸業博覽會に出品して朝野官民の間に歡迎せられたる著名の地圖にして更に昨年四月以來增補改訂に從事し刻苦經營漸く稿を脫したるものなり故に交通運輸上又は旅費計算上必要缺くべからざるは論を竢たず官公衙及各學校陸海軍人銀行家保險家辯護士醫師修學旅行者等常に一本を備へて携帶に便ずべきものなり

**發行所** 東京市京橋區築地二丁目 (電話新橋特八八 二六九三) 株式會社 **國光社**

**大取次所** 東京吉川弘文館●大阪市合資會社積文社●大阪市盛文館●新潟縣長岡目黒十郎●名古屋市川瀨代助●名古屋市星野松次郎●長野市西澤喜太郎●仙臺市東北書籍會社●山形市牧野德太郎●秋田市成見淸兵衛●福井市品川太右衛門●富山市田中書店●金澤市宇都宮源平●熊本市長崎次郎●鹿兒島市吉田幸兵衛●横濱市田沼書店●前橋市換乎堂●千葉町多田屋支店●水戸市川又銀藏●宇都宮市内田濱吉●靜岡市吉見義次●甲府市大塚柳正堂●大津市島林書店●岐阜市玉成堂●弘前市今泉本店●札幌富貴堂書店●

弘田正郎編

# 豪吟集

嗚呼斷腸の詞、絶命の辭みな是れ當年の志士仁人が義を唱へ身を殺して國家の爲に濺きたる熱血の餘沫にあらざるなし之を秋風落日の前に吟じ之を寒月冷烟の中に誦じなば焉んぞ又豪懷壯圖の勃然として起らざるを得んや

村上濁浪譯述

# 鐵血宰相語錄

四六判洋裝定價卅錢郵稅四錢

●本書は公の一世に於ける逸事を編纂したるもの或は「ヂスレリー」と握手し或は「ゴルチヤコフ」と歡唔し或は「ナポレオン」を揶揄し忽ちにして熱火の修羅場となり忽ちにして樽俎の和局を現し忽にして閑靜なる家庭となる其間躍如として公の風丰面目を描き出して餘あり

安部正人編纂

# 泥舟遺稿

菊判洋裝大和綴

定價四十五錢　郵稅八錢

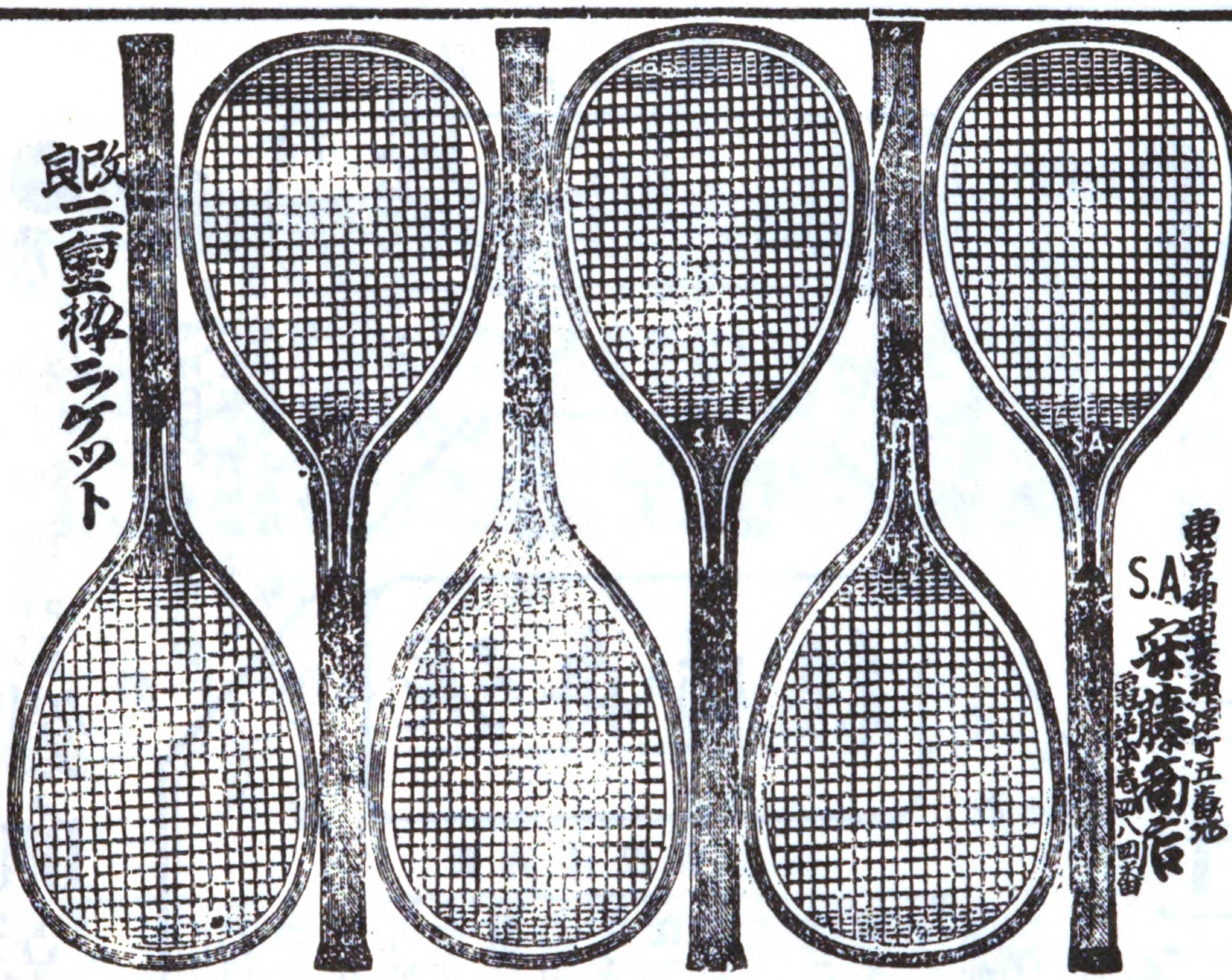
高橋泥舟先生は幕末の名士にして、また明治昭代の逸民也。其の言行の超凡脱俗なる、誰れか嘆賞せざらむや、先生徴さるれども朝に仕へず赤貧に安んじて志を高うし、首陽の蕨、逕の菊を友として、詩文和歌に思を遣ること三十有餘年、本書は則ち其の全集にして、一面には先生の非凡の高士なるを窺ひ得べきと共に。又一面には幕末の眞事情を知るを得べし。加ふるに先生の經歷及び逸事等、編者先生に親炙して聞きしところのものを掲げたれば、先生の面目風采の躍如として紙上に顯はるゝを見るべし

宮崎滔天著

# 三十三年の夢

●滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異様の人物也少壯家を辭し交游十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懷する哲學的理想に據て直に地上に施かんと欲し迎鬱蒿策する所一二にして足らざる也唯憾む天時人事共に未だ可ならず菲島の獨立に參與して一蹶し風雲を南清に捲いて再蹶し半夜燈前無端失笑して曰半生夢覺めて落花を懷ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歷を叙す(定價卅三錢郵稅八錢)

發兌元　東京築地　株式會社　國光社




登録商標

諸學校用 体操器械

安藤商店

改良二重枠ラケット

| | | |
|---|---|---|
| 一號 | 四本 | 一三、五〇 |
| 二號 | 四本 | 一二、五〇 |
| 三號 | 四本 | 一〇、三〇 |
| 四號 | 四本 | 八、二〇 |
| 五號 | 四本 | 七、二〇 |
| 六號 | 四本 | 六、二〇 |
| 七號 | 四本 | 五、二五 |

普通二重枠ラケット

| | | |
|---|---|---|
| 一號 | 四本 | 一三、〇〇 |
| 二號 | 四本 | 一一、二〇 |
| 三號 | 四本 | 九、八〇 |
| 四號 | 四本 | 七、四〇 |
| 五號 | 四本 | 六、七〇 |
| 六號 | 四本 | 五、七〇 |
| 七號 | 四本 | 四、七五 |

テニスネット

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一號 | 長四間半 | 巾三尺五寸 | 一、七五 |
| 二號 | 長五間半 | 巾三尺五寸 | 二、三五 |
| 三號 | 長六間 | 巾三尺五寸 | 二、四五 |
| 四號 | 長七間 | 巾三尺五寸 | 二、九五 |

網張棒

| | | |
|---|---|---|
| 上等 | 四點付 | 二、九〇 |
| 並等 | 三點付 | 一、五〇 |

最新形室内テニス
ラケット二本
ボール四ケ
ネット一張
網張棒二本
壹箱入 一、四五

S.A.
體育器械
遊戯品一切
体操器械
東京 神田 安藤商店

S.A.
體育器械
遊戯品一切
体操器械
東京 神田 安藤商店

匠により、染色は勿論圖案の事まで、充分の嗜みと工夫の念の深きをもて、一寸した染物たりとも注文なす場合、その製作者は宜しく染方に意を注ぐべきである、されば製作者も夫に倣ふて進歩をなしつゝあるなり。

玆に皆さん方が、意匠をなさる順序を語らんに、最初は先づ多く模樣染物に目を付けて、材料となすが肝心なり、何故なれば其多くを見るに於ては、當時の流行の色はナンであるか、又模樣の意匠はコンな物であると申す事まで納得さるゝものなり、而して夫等の模樣と染色を材料とし各々繪畫の腕前によりて適宜に圖案を試みらるべし、始めは缺點も多からんが、之を屢ばすれば、何時か會心の意匠も出來自からの圖案が成立て、御自分の衣服に應用される、是ほど快よき事はありますまい、左無くも流行の色合など、一早く目に入りて其色合から又一個の新案も出るに難からず、從がつて製作者も、其注文の點を等閑にせざるに到るものであります、故に皆さん方が模樣染物の意匠をなさるは必要の事にて、將來の爲め圖案を試みらるゝに限ります。

是より裾模樣の染方に就て、種々の名稱あること、其模樣の取合せ法等、次に述ぶることゝします。

## 實驗 牛乳日本料理（第二回）

清水鈴子

### 六　ミルク揚げ

普通の精進揚げをなすに、そのまへ饂飩粉を溶くに牛乳を用ゆるので、これには水を割りませぬ。凡じて牛乳の料理には滋養とその風味を尊ぶものでありますから、天麩羅の如く魚類の生臭さには適しませぬ。然して揚げたものは生醬油もよろしけれど、ソースは一層この揚物に適當いたします。油は上等の胡麻油を用ゐます。

### 七　ミルク彌生

まづ醬油またはタレを用ゐてスマシを造へ置き（鰹節を用ひず）別に豆腐一丁なれば雞卵の黄味のみを

取りて二個又は三個を加へ、これに牛乳若くは粉乳を等分してすり鉢にて程よくすり、一旦火に掛けて熱の通りたるを程とし、よく攪きませつゝ、別の容器に抜きてこれを寄せるのです。寄せて熱のさめたる時前のスマシの熱くなりたるものをとり、初めは静かに、寄せたるものを切りて碗に盛り、次にこのスマシを掛けて食べるのです。この寄せものは固らぬやう豫め牛乳を以て、その水加減を計らないではいけませぬ、そして碗に盛る時も形を除り頽さぬやう手際よくするのであります。若し又味の堅きを好む時は牛乳の代りに粉乳のみを用ゆるのです。これは一寸客に出す吸物として悪るくありませぬ。

### 八　ミルク羹

これは口取の合せ物などに用ゐてよろしい。まづ長芋を洗ひて短かく切り、水を充分にして鍋に入れ、よく茹でます。茹で芋の柔かになりたる時温湯の中にとり、角箸の如きものを用ゐて上皮を剥き、かくしたる芋を小口より細かに切り馬尾篩にて裏漉にするのです。裏漉にかけた芋には牛乳と乳粉とを程よく加へて、其濃さは矢張芋の裏漉にかけたる位を程として備へ置きます、(裏漉でなければよく摺鉢にて摺ります)　偖次には白角天を二本位水に浸し置いたものを絞り上げてこれを細かに頽し、水三合位と白砂糖を水に溶かしたるものを加へ、鹽一摘みを入れ一度火に掛けて前の芋の粉を之に入れて充分に溶き緩め、程よく熱の通りたるを見計ひて爐より鍋を下し、稍熱のさめるまで杓子にて攪きませながら團扇等にて冷氣を送り、かくしてその汁を他の容器(角なる淺き物塗盆などにてよろし)に流し込むなり、これに色を附けるとつけざるは各自の自由にて、若し表面にのみ色をつけんと思はゞ、流し込むに際しその汁を少し殘し置き、上等の食料染粉を入れて寄せたるもの丶上に再び流し込むのです。

### 九　ミルク澁柿汁

胡桃の實を七つ八つとりて摺鉢にて摺り、裏漉にかけて赤き澁皮を去り、又別に上味噌を摺りて同じく

馬尾篩にてこし、(味噌は甘口を用ゐた方が宜しい)これに前の胡桃を加へ、牛乳と水とにて程よく延べ、汁と致します。又青柿の澁きものを薄く丹冊に切りて味に用ゐます。澁柿は化學の作用に依て澁からず味ひよく食べられます、尤もこれは青柿のできる時分でなくては、造らへられませぬこと勿論です。

一〇　ミルクアラレ

雞卵を七八つ、温湯の中から鍋に入れまして、三十分間位煮、鐵箸で挾んで湯から上る頃になりましてから鍋より出し、空氣に當て充分冷やして冷えきりたる時その殻を剥きます。剥きました卵を二つに割つて、頽さぬやうに黄味と白味と別々に分けて皿に取ります。この白味の上に付て居る薄皮を取り去つて、それに白砂糖を大匙に一杯半位と食鹽極く少量とを入れ、摺り合せ、布巾の上にのせて強く卷き、四方に竹切れの薄きものを縦に當がひ、糸を以て結びます。兼て鍋に水六七分目を入れ上に杉箸の如きものを井桁に並べ、その上に右の卵を卷きたるものを渡し、蓋をして蒸します。(蒸籠を用ゆるのを略したのです)十五分間程したらば鍋から出して、今度はこれを三四分位の霰に切ります。偖又別に馬鈴薯を二つ三つその白味と同じ位の大さに切り、一度茹でゝ、水を去り、火に掛けて卵に用ゐたる程の砂糖を用ゐて味をつけ、白味と共に同じ皿に盛ります。そして先の黄味は器に入れて牛乳を加へ、程よく溶きたるものを右の白味と馬鈴薯との上にかけて、これに匙を添へて人に出すのであります。これは少し甘口故、他のものと取合せて出すがよろしい。

(未完)



# 女學校

## 卒業式參觀

### 家事專修女學校

菊池雪子

うらゝかな三月二十六日の今日、嬰兒の頰にもやと思はるゝ薄紅の桃の花、咲き滿ちて、梅は遲し櫻は早し、われのみは、昨日降りし春雨の雫の惠みだにせずと誇顏なる樣子、まことに長閑なる空の景色になつて參りましたのは、雨の夕風の朝、露にも霜にも怠りなく學校にお通ひなすつた孃樣方が、目出たく業を卒りなさいまして、おかしぶみをお授りなさいます、その光榮と競ふやうに思れて、一層の快感を起しまして、心地よく車を飛ばしました。



さて學校の御門前には國旗を交叉して內より漏れ聞えまするは、君が代でございました、其より記者は宮里樣と申す此の學校の先生に御面會致しましてその方の御導きで式場に參列いたしました、宮里先生は、女鑑の每號に美事な筆の跡を御出し遊ばさるる宮里三木枝子樣の御令妹でおいでなさいます。

敎場、式場に代用いたされて居りますが、總體に疊が敷れてございました、四方には生徒方の手に成りました、日本服西洋服の雛形寶物の單衣袷綿入をはじめまして、それは〳〵可愛らしい夜具蒲團など、陳列してありまして、これが一番よく目に付きました、頓て

講演が始まりました、これは餘程新趣向な興味のあることゝ感じました、大概何處の學校でございましても、知識を與へることが、主眼でございまして、多くは注入的敎育をいたします、それからまた生徒方が修めました事をあらはしますときは、筆で以てあらはすことが、大抵きまりでございます、此

校では生徒方を先生に致されまして、裁方や縫方などを、來賓の前に出で、實物に付きまして、一々お講義をなさるのでございました、中には十四五の可愛らしい先生も、言葉さはやかに來賓の前で、惜氣もなく快活に說明なさいまして、題目が代りますごとに、代つた先生がお見えになるのでございました、單衣重縫順序、またホワイトシャツ裁方このホワイトを說明なさいました先生は、あの何とか仰つしやるお方でございましたが、竪板に水を流しますやうに、辯舌爽かにお話しなさいます間に、袴を斯う〳〵なさいますと充分ハイカラになりますなど〻、滑稽におやりになりましたから、席上の方々は思はず解頤いたされました。先づ自活の道を講ずべしといふ題で、研究科の生徒さんが、讀み上げなさいましたが、言語が明瞭で一點の曇りもなく、よく聞き取れました、次の講師は重ね衣服寸法順序と申すことを、實物につきまして、說明なさいました。次に挿花の說明がございました、それから點茶を一段高い所で實地に試みられました、右終りますと、今度は袷比翼縫方順序嬰兒服縫方などの、お講義を各先生がなさいました、先生とは始終生徒さんなんです、多く學ばんよりは、能く熟するに如ずといふ意を、次の先生が讀み上げられました、和歌を讀み上げられた講師もございました、また次の講師が見えて袷袴縫方順序の說明、夫から次に學藝の要は實用にありといふことを、別の講師がお讀みになりまして、まづ講演はこれにて終りを告げました、夫から生徒さん、否こゝでは先生さんと申ませうお二人で箏の合奏がございました。

證書授與式　本間校長は卒業證書修業證書を授與なさいまして、卒業の生徒さん方にお別れの辭に添へて、將來の心得をお述べになりました。

此校は昨年の四月開校式を擧られましたさうで、今回は第一回の卒業生を出されました、卒業の方は本科卒業生裁縫專科卒業生と硏究科卒業生の方々でございましたのです、本科を卒へました方は、家庭

を修むるに必要な知識をお學びになり、研究科の方は猶一歩進みまして、看護法、育兒法、家政學など、お修業なすつたさうでございます、校長のお話には此校の教授は、すべて實用を尙ぶといふことでございますから、少數な人の着ます僧衣だとか、維新前の上下だとか、古代の衣服だとかは教授いたされません、何んでも實用主義なんで、實用に緣遠いものは悉皆省除かれてあるとのことでございますが、日用不必要な贅澤に屬する挿花茶の湯などを教授いたして居られるのは、たゞ婦人といふ者は感化力の大いなものでございますから、此樣な美術はたゞ精神の感化の上に最も必要と認められまして、教へられるので、一週の時間を分けて見ますと、裁縫が多數の時を占めてありまして、圖畫國語などは、一週に一回のみ教授されるさうでございます。

圖畫科　は昨年の七月より設けられまして、修業の月日が淺さうでございますが、それにしましては、可也な成蹟と拜見しました、これは今朝即座に畫かれたものでございますと、見ましたところが生徒さんが、しかも證書を手にして居る畫でございました。

料理　日本のと西洋のとのお料理が美しく、皿碗などに盛つて飾つてありましたのを見まして記者は直に感じました、主婦さん方が手づから、こんなに立派に調理せられますならば、隨つて男の方が外に出で、冗費をなさる必要もございますまい。

盆石　もございました、白い濱に紅、蘇芳の貝殼など撒き散らしましたのもあれば、岩のこなたに小波うちよせて、見はてぬ眺の景を移し取つたのなど、さま〴〵に美事な御手際でありました。

生徒方總代の祝辭が畢りますと、卒業の方の答辭があつて、卒業生の作と申す唱歌を卒業の方一同で歌はれました。

第一　卒業

家事專修のまなびやに　我が師の君のめぐみにて
女子の道とたちぬひな　學び終へつる嬉しさよ

第二　證書拜受

はげみしかひのあらはれて　あかしの狀をたまはれる

我等のけふのよろこびを
何にたぐへて歌はまし

第三　師の恩

東に西にはろがすみ
たちわかるとも師の君の
山より高きみめぐみは
朝な夕なに忘れじな

第四　希望

學びを終へしけふよりは
世のわづらひにうちかちて
いよ〳〵わざをはげみつゝ
家の榮をはからばや

又來賓江原素六氏の演説がありました、同氏がまづ生徒に感歎の詞を寄せられましたことは、本校生徒方が祝辭をお讀みなさいます言語明晰なのと、終末に臨みまして、年月日姓名までもヂミヌエンドに讀まないといふのでありまして、これは記者も大に皆樣の快活な御動作、あはせて校長の君の御注意行屆いたことゝ、感服いたしました、餘興として琴、琵琶の催がございましたが、記者は御暇することに致し宮里樣と軍服をお召になつた大尉樣、女先生樣方の丁寧な御挨拶を受けまして、夕日斜にうすかゞやく頃、歸途に付きました。

本校は區會議員の贊助によつて、設立されたとのお話でございます、生徒は總數七十名あります、餘り大きいと申すほどの學校ではございませんが、裁縫女學校の中には、新式に進歩的に泰西の教育を斟酌して、校長は熱心に女子の品性を陶冶して、お出になるやうにお見受け申ました、師弟の間が一家の親子といふやうな風でございまして、生徒方が校長先生方の前に出ましても、よく女子の致します氣取的の言葉行爲がなくて、まことに見宜しうございました。

## 東京高等女校學

同二十七日の日は朝から深い雲霧に包まれまして春雨しと〳〵と降りました、されどされど、このよろこばしい日、この幸福な日に雨の降りましたのは、幸が雨に代つて降り來ましたものでございませう、げに春雨は草木の花の父母よ、この惠あつてはじめて花を咲かせ實を結ぶのでございますから、希望を

齎らす春の雨と云つてよろしいと思ひます。
昨年四月末棚橋絢子女史校長また小川直子女史が校長心得にお成り遊ばして、本校が設立せられ、生徒方は總數九十名と聞えまして、今日は第一回卒業證書を授與せらるゝ晴の日でございます。
御門前に勝利を占むる日の御旗は、例よりも鮮かに輝やいてございます、下を通りまして、車より下り、接待の方に導かれて二階へと連られました、眺望廣く幾百の家を眼下に瞰して、式場とおぼしい彼方の校舍とこなたのと二軒列んで、運動場は廣くて、ベスボールの設けがございまして、追々來賓の方もお集りに成りましたとき、
校長棚橋絢子女史は記者に丁寧な御挨拶を下さいました、お寒いからとて火鉢の側にお招き下さいました、そのお氣輕な事、多年御懇意申した方のやうに、記者も同じ火鉢に手を翳して、お話を承はりました、女史は徐に何分にも日が淺うございますから、生徒は只今の處九十名ほどございますが、みんなよく勉强いたして居ります、私は常に道德といふことを敎へて居ります、どなたにいたしましても、道德が最も必要でございますよ、人に道德といふ基礎がなかつたならば、何うなるものでございますか、それで私は生徒にもよく道德といふことを敎へて置きます、また道德會といふのを設けまして、會員を募つて居りますが、人樣を無理に會員にお成り遊ばせと云つてお勸め申しません、一體道德と申すものは、人から勸められて、はじめて守るものではございませぬ、これはどなたでも、自身の心から進んで守りませんければならないものですから、無理やりお勸めして、いやながら會員になる方は、ほんとうの會員ではございませんから、私は進んで入らつしやる方ばかりに、入會を願つて居りますんですよ、ですから道德會に入るのはいやと仰しやる方に、私はあなた其れでは不道德家で入らつしやると申ますと、私の申すことは極端だとお咎がございますが、さうじやございませんかね、

女史のお話が愈佳境に入りました時、御挨拶にお出遊ばした方は、小川直子女史で、記者と三人火鉢の邊りに、お兩人の女史は當日催ある愛國婦人會のことなど、互にお話し遊ばしました、兩女史は漆のやうな黑い髮をふつとお切りになり、黑い被布を召して、温雅な御容子でありました、棚橋女史は御用事のため下にお出でになり、記者はまた小川直子女史の御話を承はりました。

私は草庵から撰ばれまして、再三御辭退申上げましたけれど、宮樣にお仕へ申すことになりました、さようでございますから、若し宮樣から下ります日には、草庵に歸りまして、何處にも仕へません決心でございました、棚橋さんと私は親密な間柄でもございます、お宅から此校までは餘程遠うございまして、度々お見えになるわけにはまゐりませんから、私が校長心得となりまして、代りをいたして居るんでございますよ、私は和歌をうけ持つてをりますが、此頃試驗前に生徒さん方は、展覽會に出品ますものを作つて、急がしくてお出なさいますから、私のは後でよろしうございますと、申て居りましたところが、もう推詰まりまして、一日の間に書かせましたので、平常よりはよく出來てございません、私は何んでもまあおあなたお先にと申まして、人樣にお讓りいたします習慣がございまして、それであなたね……引氣を取るのでございますよ。

と、女史は柔和の中にも愛嬌づいて、お話し遊ばしました、記者はまた女史にお面會ますことをお約束申て居ります間に、定時を報らせられまして式場に臨みました。

式場は卒業生を前に、九十名の生徒達は花顏によろこびの溢れるのが見えて、整列してお出なさいました、一段高く出來て居る彼方には、薄藍の机掛をかけられた大の卓子がございまして、其の上に始終生徒さんの目を引いて居りますものは、證書賞狀でございます、君が代二回歌ひをはりまして、校長の君はしづ〳〵と登臺なさいまして、勅語を奉讀遊ばし

た時は室内が粛然、たゞ雨のあしのみが、洩れ聞えました、それから校長様は當日來賓の方々に丁寧な御挨拶をなさいまして、次に報告がございました、其の中最も記者の感じましたところは、先生方は教授に御熱心で生徒方は熱心に勉強なさいますといふことでございました、校長は道徳を重んじ遊ばして人々を奨勵して入らつしやるのでございますから、さもありぬべきことゝ、記者は一の疑をも挾みませんでした、證書と賞狀授與式が終りまして、常に教訓遊ばした事を卒業の方に向つて、一應お話しになりました、大要を本誌に御紹介いたしますれば、

人は健康が最も大切なものでございまして、身體を強壯にいたしますには、日々滋養の食物をいたゞき、適宜に運動をして消化させねばなりません、滋養物は身體のためになると思つて、これをいたゞくはようございますが、若し消化しませんときには折角の滋養も其の効なく、食傷して却て病ひを醸す原因となるのでございます、皆さんは是れ迄學校にお出であつた間、私共は勤めて滋養物といたして、あらゆる知識を與へたのでございます、その與へられた滋養物を今から消化させますことは、皆さんの力でいたすのでありまして、皆さんは進んで高等の教育をお受になるとか、或はまた家庭で修養をなさるとか、種々の方面に向ひまして、今まで收容なさいました、滋養を消化させなければなりません、世には食傷の病ひに罹つた人が多く見えます、幸に皆さんの中にはそんな病ひに罹つた人はございませんが、例へばハイカラ病とか傲慢病とか申すものでございまして、西洋の説を其儘取りまして、是も非もなく日本に通用いたさうとする人がありますが、日本には日本の國體があり、西洋には西洋の國體があるのでございますから、斟酌して國體に當てはまるやうにいたさなければ、即ち前申した病に罹かるのでございます。

女史が進取の弊害を痛嘆遊ばして、加減をお取り

になりましたことは、御尤でございます。
續て來賓の演說、卒業生の答辭、生徒の送辭がございまして、
唱歌は卒業の生徒さんが歌ひ終りまして、在校生徒さん方のお歌ひなさいました萬歲の唱歌は、一聲に歌はれました、其の曲が愉快で、しかも優しくて幾十名の方が美音で歌はれますところは、まことに大空に雲雀の群が舞ひ上りまして、菫や蓮花草の廣い野邊を好音わけて上下して居りますかのやう、美妙の感にうたれました。
終つて退場いたしまして、生徒さん方の作品を拜見いたしましたが、作文、習字、和歌、地圖、家計簿記、圖畫、裁縫、手工などの成蹟品が陳列いたされてありました。
小川直子女史の、懇篤な說明を承りまして、記者は展覽の品々を拜見いたしました、短冊は大そう立派に書かれてございますと、他の方々も褒めてお出でした、地圖、家計簿記は綿密に製圖を作つてありました、作文は半切に手紙の通り、やさしい筆つきに、おもしろく書かれてございました、それから美しかつたのは、圖畫と手工品でございました、押繪結び紐など、これは技藝科の生徒方の作品だそうでございます。
小川女史は鄭重な御方でお出で遊ばします、御多忙の中にも、記者にお話し下さいまして、まあ彼方へと辭して歸らうとする記者をお伴れになりましたまた叮嚀な接待を來賓一同になさいましたは、先生方をはじめ生徒さん方なんです。
記者は慇懃に女史に謝辭をのべまして、喜悅みちて歸らうといたしましたところを、數名の生徒方が御門のこなたに、お見えになつて御挨拶を下さいましたが、それは何の君でございましたか、御姓名をお尋ね申す遑のなかつたのは遺憾に存じます。
本校は名も高き兩女史の薫陶與つて躾方の上に、大に功を奏して居られるやうでございます、生徒さん方の進退言語應對が、しとやかで禮讓が厚く、お互

の間にも、禮節を貴んで入らつしやる風がありまして、ゆかしうございました。

## 女子高等師範學校及同附屬高等女學校

廣濶いお庭に並み立つて居る車幾輛、やゝ高くなつて居ります校の、昇降口に進んで參りますと、近くに馬車一輛控へてありました、これぞ文部大臣が當日の祝賀式に御臨席遊ばしたのでございます、時刻を少し過ぎし、記者は導かれて、今や丁度報告の終る頃、盛大なしかも嚴粛な式場に連らなる光榮を得ました。

式場は六十三名と聞こえました、文科、理科、技藝、地理、歴史、家事専修科卒業の方をはじめといたしまして、四十名の附屬高等女學校専攻科、同高等女學校卒業の方を前に、後に控へて居られます生徒さんは、幾百名の高等女學校の生徒、及び師範學校の生徒さんでございました、式場の廣大、美麗、壯嚴な事は申すまでもなく、彼方の金屏風のきら／＼しさ、數多い電氣を此に引いてありますのが、たゞひ稀なことでございました。

三月三十日午前九時三十分に式が始まりまして、皇后陛下御製の『みがゝずば』の唱歌を一同に唱ひまして、高等師範本科卒業生徒さんから、地理歴史專修科、家事專修科、附屬高等女學校専攻科高等女學校卒業の生徒達に、證書を授與なさいましたのは、當日校長様缺席なさいまして、代理を勤められたお方でございました。

文部大臣の祝辭をお讀みになりました時、場内はたゞ粛といたしまして、大臣の希望を祝辭に代へてとてお述べになり、軍國の多端なことをお讀み遊ばされましたときなどは、忠君愛國の義氣を胸に溢らして、身をも家をも捨てゝ、出陣いたされた將校士卒方のことを思ひやりまして、何となう感慨にうたれました。

唱歌『おもへばはてなき』を洋琴に合せて卒業の方がお歌ひなさいました、まことに師の君に對する報恩の意と、訣別の情とが籠つてをりまして、しかも曲のモデラートなのと、衆聲がたゞ一齊にきこえましたは、嬉しさのうちにもいとあはれなりと申したうございました。

校長の祝辭は、本科卒業生專科卒業生と高等女學校卒業と、それ〳〵に教訓を與へられましたが、進んで教育の任にお當りなさる方を勵まし、家庭を治める方には奢侈の風をお誡めなさいましたのは、寔に御尤でございます。

卒業の方の答辭が各科一々でございまして、整肅の中に式を終つたとおもひますとき、一聲高く『はてしなき』の唱歌をみなさんでお歌ひになりましたは、活氣があつて愉快でございました。

成績品の陳列してございますところを拜見いたしましたが、作文は答辭、軍人の家族に送る消息文などの文題が見えて、美しくかきながされて居りましたのが、澤山でございました、短冊も美事でございました、これは岡田先生の御擔任なのでございます。

圖畫はみな美濃紙の大きさ位の絹地に、花鳥山水などのものが奇麗な彩色で出來てをりました。

裁縫は普通衣服の色々實物で仕立てゝございましたが、いづれも材料は立派なものでございました、また刺繡は美しい卓子掛やら、半衿など上手際にできて、陳列の光彩を添へました。

寄宿舍の寢室には、寢臺が四つ五つづゝ列んで一室をなして居ります、いづれも下層から二階まで、いくつとなく同樣に、赤毛布で包まれた寢臺が見えます、醫局もあり、病室もございまして、白衣を着けられた看護婦人も居られました、食堂は長い机が列らねてありまして、腰掛て頂くやうに、また風呂場は廣くて清潔であり、向合つて風呂桶二個据ゑられてございます、漱嗽所の戸を開かれましたところ、此處には姿見までが完備して中央兩側に漱嗽盥が並び、其の眞中を管の中水が通つて、至極便利な

装置がしてございました、新聞縦覧所には讀賣、日々、時事、婦女新聞など備えられて、生徒さん方が幾人となく讀んでお出になりました。卒業生の姓名府縣別けは左の通りであります。

## 女子高等師範學校第十五回卒業生氏名（いろは順）

◎文科卒業生

岩成すな（鳥取）
早田まつ（福島）
河野なを（和歌山）
柏木ふさ（兵庫）
吉岡ぬい（富山）
高橋まつほ（新潟）
辻三枝（山形）
村田きぬ（滋賀）
奥田ひろ（愛知）
松宮ゆき（京都）
木村實惠（大阪）
柴山喜代（東京）
森岡きく（京都）
鈴木まさよ（山形）
八田孝（福井）
小笠原とくよ（福島）
苅谷せい（和歌山）
吉場のぶ（秋田）
吉村もと（廣島）
相馬榮（山形）
内藤なか（長崎）
内田りか（岡山）
山本政（石川）
足立長（岡山）
水野得（和歌山）
志賀とみ（秋田）
瀬川とよ（宮城）

◎理科卒業生

德永さだ（福岡）
片岡環（奈良）
河野高（靜岡）
久保秀（大阪）
岡登幾（石川）
水島ひさ（長崎）
比山まさよ（大阪）
馬渡よれ（佐賀）
渡邊すみ（兵庫）
金山ふぢ（富山）
中島とり（青森）
草野さい（福島）
相川みれ（長崎）
澁谷はる（山形）
諸岡たつ（佐賀）
百澤さだ（福島）

◎技藝科　生

山瀬嘉代（福岡）
越智ひでよ（京都）
高木稱（山形）
根來政衛（大阪）
山本つる（富山）
金野いはゑ（山形）
厚見幸（石川）
安藤貞（岐阜）
宮地萬寸穗（高知）
森岡たか（福岡）
石津まつよ（山口）
高田萬壽（福井）
立野たがゑ（奈良）
野尻くに（靜岡）
船木やすゑ（奈良）
赤間よれ（宮城）
安東てい（大分）
佐藤きん（愛知）
惠比壽みよし（宮城）

◎地理歴史科專修科卒業生

池内わか（福島）
小田桐くに（東京）
堀合とし（岩手）
鷲尾幾子（富山）

高橋すゞ（島根）
丹宗さと（鹿兒島）
上野よし（三重）
大根田けい（栃木）
熊澤つや（大阪）
山中菊子（北海道）
寺田清（石川）
秋山千代吉（靜岡）
櫻井ゆき（福島）
木村初見（石川）
湯田ゐい（鹿兒島）

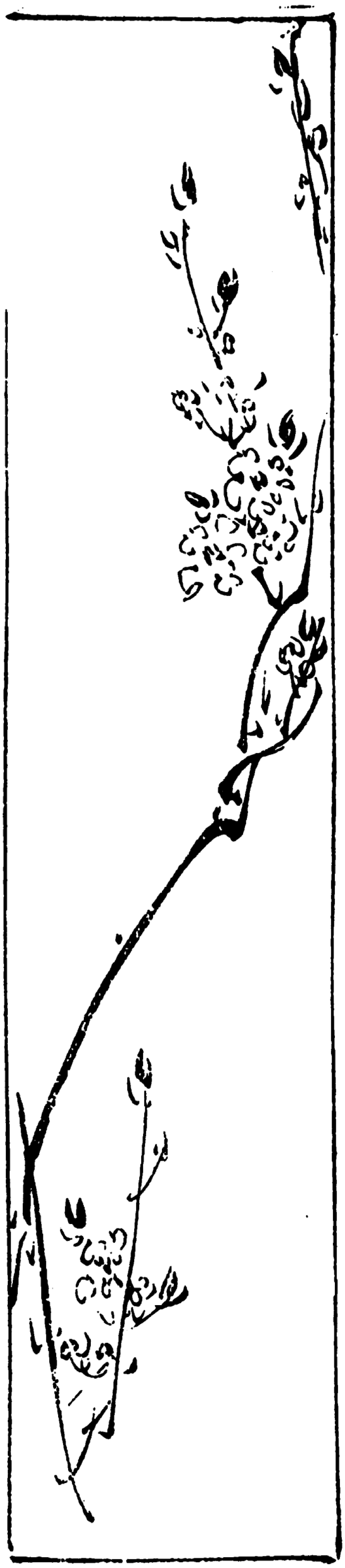
田中壽々（東京）
內海さだ（兵庫）
大立しのぶ（東京）
黑山とく（京都）
山田はな（長野）
藤野せつ（愛媛）
有島ふさ（鹿兒島）
猿田いゑ（茨城）
北野その（石川）
木宮つれ（新潟）
平野三枝（東京）

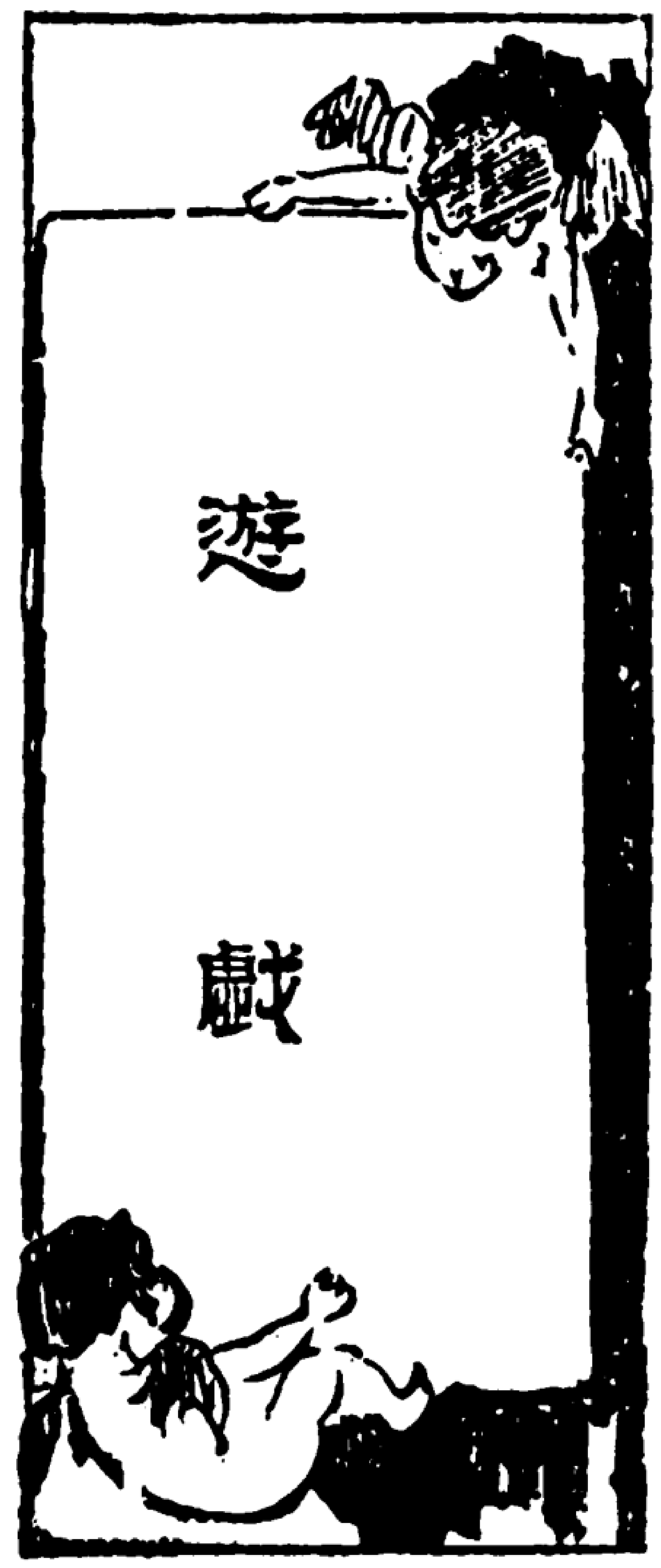
◎家事專修科卒業生

磯畑せい（茨城）
竹山むつ（新潟）
野崎しも（福岡）
山根春野（鳥取）
小磯しづ（東京）
安藤とも（福島）
森本民（高知）
杉山よしの（福岡）

高木まつ（熊本）
中澤りく（石川）
栗原まさ（埼玉）
丸山よし（長野）
秋月とく（福島）
清野頴（山形）
杉原みつ（滋賀）

（日本女子大學校（卒業生寫眞と共に）及び日本女學校の記事は次號に詳記すべし）






# 家庭遊戯 日本古代の雙六（其一）

準繩子

双六と貝合せとは昔の婚禮道具には、是非なくてはならぬもの丶、一つで御座りました位で、茶香花など丶共に遊藝の一になつて居りましたもので御座りますが、殿方の碁や將棊を致される樣には、双六は流行ませなんだゆゑ、唯今では此遊びを知るものは、誠に尠ない樣で御座ります。

併し是れは極めて優美な遊び方で、致し方次第造作もなく出來、又た多少思構を用ひる遊び方もありますので、女性方や小供衆の家庭遊戯と致しては頗る恰好のものであらうと存じます、殊に唯今は日露の開戰中でもありますゆゑ、學びの暇に鳥渡女子的の室內戰鬪を致すも亦た一興で御座りませう。ソコデはしがき、双六の起源、双六の道具、盤の据やう、賽の呼び聲、遊び法、折り羽双六、眞の双六、廻はり双六、と申す樣な工合にして追々と御話致しませう。

## （一）はしがき

日本橋を振り出して京都へ上る道中双六は、ホンノ小供衆の御慰みとなつて居りますが、昔堂上方などで玩ばれました双六と申すものは、其致方も面倒ですが、又た興味も多いもので御座ります、必竟道中双六とか官位双六とか申すものは、原は何れも此双六から考へ出しまして、小供の玩具にとて、作りましたもので御座ります。

眞の双六と申しますものは、（後ちに詳しく申ますが）黑白の石を十五づ丶と二個の賽とで玩びますもので、之れを双六盤（斯道では局と申ます）に連

行致させます、實地演技の上に於きましては、其掛引思慮を要しますこと、決して圍碁將棊の其れにも劣らん位でありまして、技質の上品高雅なることは、反て其等よりも優つて居る位で御座りませう。

本來此遊びは舊幕の頃でも、餘り江戸には流行致しません樣で、又た京都でも或る小部分の人達で賞玩せられて居つた樣に考へられます、其れと申すも碁將棊は純粹の戰戯——武家的遊戯——としては適當でありますが、双六の方は如何にも女性的公卿的の性質であります、故に悠長な遊戯として、武骨のものには適せなかつた理由でもありませうと考へられます。

斯樣な工合で今日では殆ど此遊びを致すものなく、又た遊び方を知つて居る人も尠いので、適ま書物に双六の名稱が見へましても、唯た之れは古代の遊技であると申す斗りで、益々分らないものになりはすまいかと存じます、其故茲に一通り其遊び方を述べることに致しました、彼の恐れ多くも、朕が意のまゝにならぬもの三つ、山法師加茂の水に双六の賽と仰せられたる、双六は即ち之れであります、兎に角此遊びを家庭の女性的遊技として復古致させますのは、頗る恰好のものでもあり、又た古代遊技の保存にもなりまして、誠に一擧兩得であらうと存じます。

（二）双六の起源

と申しても此遊びは何時の頃から始まりましたものやら、詳しくは分りませぬが、兎に角我が國で發明致したものではない樣で御座ります、西洋でも此遊技と全く同じ遊方の「バックガムモン」と申すものが御座りまして、之れは唯今でも彼國で室内遊技の一種として、盛に行はれて居ります處を見ますると、或は古代印度あたりからでも出ましたものではあるまいかと存じます。

我邦では、天武帝の十四年に、天皇大安殿に出御ありて公卿方を喚び集ひ給ひて博奕あり、然れども其賭物を戒められ給ふ云々中略小野宮は昔惟喬のみ

この双六のしちに取り給へる所なり云々、と古今著聞集に出て居ります處で考へますと、既に此頃は盛に行はれて居つたものと見へます、持統帝の御宇に此遊技を禁斷せられましたのは、尠なからぬ弊害があつた爲めで御座りませう、併し此禁令も一向其効なくして、益々弘く行はれたと申すことでありますが故、興味の多いものには相違ないのであります、故事の穿鑿は此位にして止めませう。

（三）双六の道具

と申しても格別面倒なものでも御座りませんが、左りとて、道中双六の樣に紙一枚と賽一個といふ程の手輕にも參りません、先づ、

賽　二個

之れは常の賽でよろしいのです、若しなければ白墨を四角に切りまして、薄紙を張り其各面へ點を打てばよろしい、點は一の裏へ六、二の裏へ五、三の裏へ四、と致せばよろしい、

賽筒　二本



之れは一本でも差支はないのですが、一人で一本づゝ持て居ります方が世話がありません、故に二本用意いたします、

常の丸竹で（徑一寸內外のもの）一方に節を置きましたもので結構であります、長さは三寸三分と定まつて居りますが、多少の伸縮は構ひません、又た「ボール」か厚紙で張抜きに致せば反て上等で御座ります、

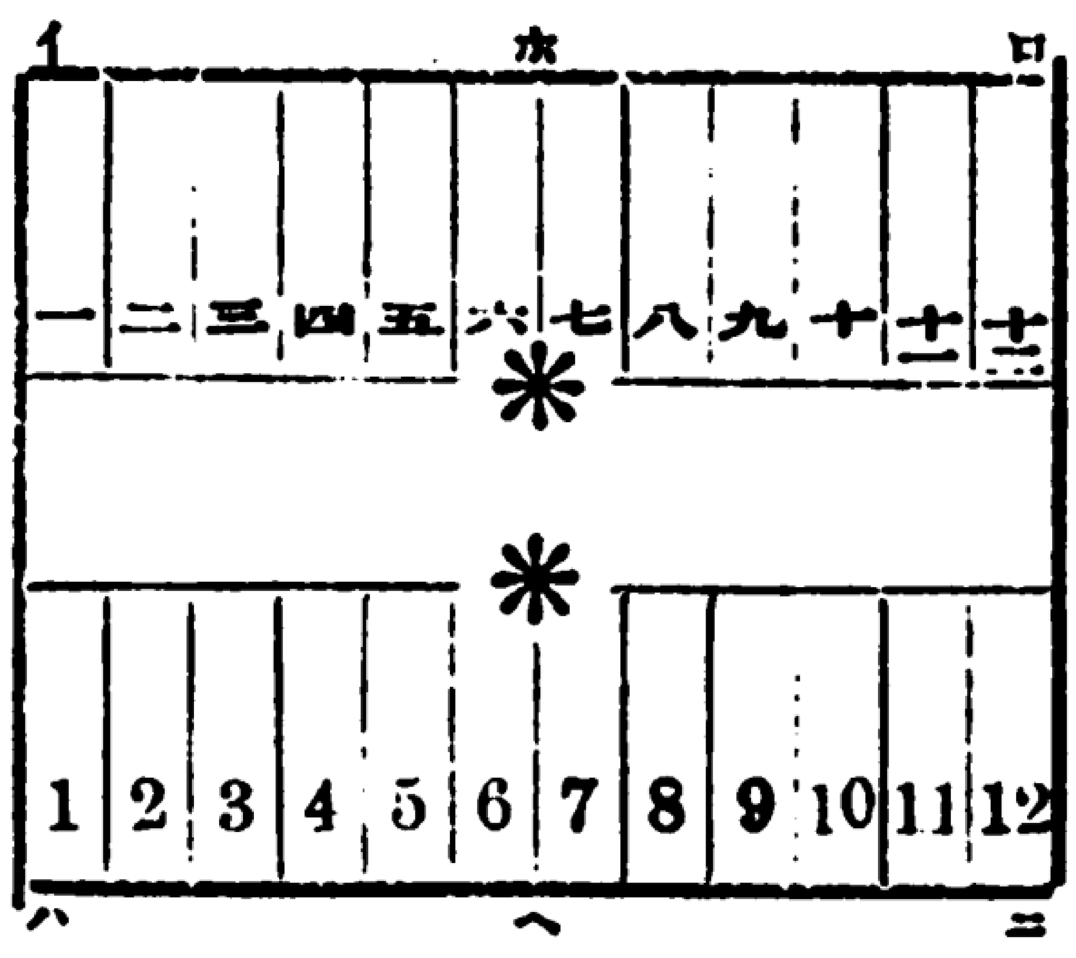
石　白十五個　黑十五個

之れは常の碁石でもよいのですが、一つ石の上へ他の石を積むことが御座りますので、或るべくは平圓のものを望みます、木で作たもので結構です、

盤　一面

之れは厚さ四寸廣さは八寸長さ一尺二寸と御座ります、是れを標準として便宜に作られて差支御座りません、其處で盤面は第一圖の樣な工合に横に一筋の間隔を執まして、上下に各十二劃

を設けます、是れを目と申しまして、一ト目二タ目と勘定いたします、又た中央の二個處に星點を置きます、是れは數へるに便宜なのと、決勝點を示しますとの二つを兼ねて居ります、




第一圖

（第一圖のイロハと數字とは説明に便宜の爲め、假りに記しましたので、實地の遊びには記さないのです）

又た中の横筋の間隔は賽を振ります場所といたしてあります、

是れで道具は揃ひましたのであります、矢張り碁將棊の樣に二人で此盤を中央に狭んで對座して行ひますので御座りますが、此の

（四）盤の据ゑやう

が昔は中に八釜しかつたので御座ります、總て『明り入り』と申して日光の入り來る方へ（夜なれば燈火の差す方）から始めるといふ規則になつて居ります、例へて見ますと、南向の座舗で客が西向に主人は東向に對座いたして盤を中央に据ゑましたときは、南の方を起點といたして始めますし、若し北向の座舗なれば北の方を起點といたして始めると申す樣な巧合でして、總て座舗の光線の來る方を始めといたします、併し現今致すのにはむつかしく古法に泥まぬでもよいでしやうが、又た一方から見ますと、之れも大に遊技の興味を添へる方便ともなりますから、強ち捨てたものでも御座りません。

## 慰み半分　鳥の飼法（承前）

囀々子

（レ）の部

### 連雀

生餌四分　青味入り
粉餌一匁

黄連雀と緋連雀との二種ありますが、黄の方が宜

いのです、大さ鶸よりも小さいので惣身煤竹色がありまして頭に連尺があります、腹は黄色で羽先きと尾の端に紅色があります、黄連雀の方は鬱金の色が交つて居ります、秋の末にも春にも出ますが、餘り囀りの好いものではありません。

(ツ)の部

鶫　餌　生 四分 青味入り　粉 一匁

大さ鵯よりも小振り惣身青黒く、腹白し、囀りよろしからず冬出るものなり。

ほし鶫　餌　同上

一名「わかしなへ」ともいふ鳥で、大さ鶫に同じ樣で、背の色黒赤く、腹は薄樺色に黒い斑點があります、此他に黒鶫まへつむぎ、岩つむぎ、鵺つむぎ、などありますが何れも同じ樣な鳥ですから略します。

燕　餌　生 一匁 青味入れ　粉 一匁

大さ鶯に似て惣身くろ色で喉咽は薄黄色腹は白く囀りよい鳥です、春の末から出ますが、寒氣を恐れる鳥で誠に飼悪いものです、峯燕小燕海燕など先づ似た樣なものであります。

(ム)の部

椋鳥　餌　生 四分 青味入り　粉 一匁

惣身は黒鼠色で目の周圍に白い毛あり、囀ることは大音で囀りますが、餘り宜しくはないです、小椋、島椋など先づ似たものです。

鶲　餌　生 一匁 青味入り　粉 一匁

之れには大小の二種あります、小は小燕の若鳥のことで、諸事燕のつもりで致せばよいのです、秋の末から冬出ます、又た大の方は毛色は時鳥に似て黒いのですが、迚も飼鳥にはなりません。

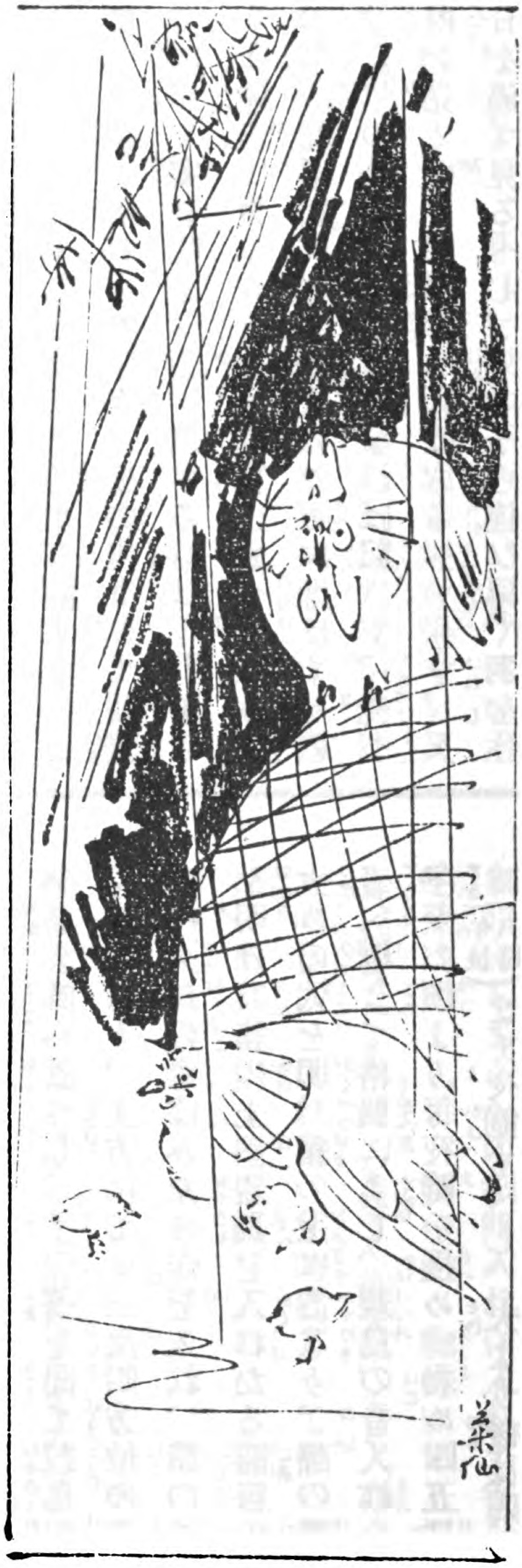
鶲には此外鶯鶲、目ばち鶲、鷹鶲、島鶲、仙臺鶲、などの數ありますが、何れも餌は前の通りで宜しいですから略します。

鶯　餌　生 七分 青味入り　粉 一匁

大さ雀に似て毛色黒青く奇麗な鳥です、荒鳥は藪鳥と申して秋の末から春の始に掛けて出ます、又た

巣子は夏の始めに出ます、此飼法は百千鳥（書名）にあるのが一番詳しいですから、次にそれを掲げませう。

鶯は美しき羽色にあらねど、聲よく詩歌に用られ、高間寺にて初陽毎朝來を囀る故に歌よみ鳥とも云ふ、又た法華經を囀るゆゑに經よみ鳥とも或はひとき鳥ともいへり、百囀の内に初音よりして人々の賞玩する事なり、飼鳥の隨一にて昔より廢れたる事なし、就中近頃流行して能き親鳥を



撰みて付子とする事専らなり、雛は走りと云て一番の子を第一とす、三月中旬より巣をかける、一番の巣には雄多し、例へば巣の内五羽あれば三四羽は雄なり、二番までは雄多し三番四番末の子になれば雌がちにて雄少なし、末の子は至て弱く五月末六月頃までも産ゆゑに、付け親の鳥音入り前に成て聞覺ゆる間なし、一番のはしりは二月末三月初に出るゆゑに、親鳥の音を聞こと久しく其上甚だ丈夫にて聲大きなり、末の子は弱く聲低

し、嘴の廻は黄色なる處白くなりて、餌喰ひ悪しく育ちがたし、然れども此時孑々虫を用ゆれば、嘴の白み黄色になりて育つものなり、鶯の子は飼にくき樣に思へども弱きものにはあらず、餌飼手當おしきゆゑなり、段々育ち獨餌につきし頃より、日々三度程づゝ霧水を吹かくべし、尤も輕く吹てよし、子の内は決して水に浴すること無用なり、必ず落るものなり、暑の内は別て朝晝夕と三度づゝ霧を吹くべし、斯する時は十羽が十羽ともに達者に育つこと秘事は實にまつ毛なり、霧水の事は秘事なれども好人のために顯はすものなり、鶯の巣は人の知る處なれば記さず、先づ巣の内を見ていまだ裸子ならば取るべからず、又四五日を過て見るべし、外の子と違ひ早く羽を生ずる故に、油斷すれば巣立ちすること早し、巣を立て、親鳥につきてあるを飛子といふなり、飛子にても付子にして付くものなり、子飼の内に驕子といふありて能く人に馴染みおゝしき鳥あり、是



は付子にして付ざると云人あれども、驕子によく付くことあり、荒き子に付ざるあり、全く器用無器用によるものなり、先づ驕子は弱し、夫れには孑々虫蚤など用ゆれば治るものなり、先づ付け子の仕樣は子を籠箱に入れて親鳥の廻りへならべ置くべし、日數三週間位も置て後ち少し間を隔て親鳥を高き處へ置べし、子の聲を聞て親鳥別てよく鳴くものなり、上方にては三尺四方位の箱を拵へ箱の内へ口のすぼみたる壺を入れ、箱の蓋へ丸く穴を明け其箱の上へ親鳥を入れたる籠箱の底へ同じ大さの穴を明、箱の上に置なり、聲の響箱の内の壺へ響きて格別によし、親鳥の音入れまで付置、冬至の頃より毎夜時を極め、初め四五日は夜五ッ時(午後八時)まで夜飼すべし、夫より後は四ッ時(午後十時)頃まで二タ廻り程行燈のあかりよくし籠の内へあかりの差す樣にして置べし、明りさゝざれば鳥眠るなり、斯する内段々鳴き出すものなり、鶯は一處に置ては鳴がたし、別々に離して置べし、夜飼

といふは日を永く覺へて春の季に移るが故なり、夜飼の内は常より下餌二分も增すべし、雛鳥は早く鳴き古鳥は遲し、鶯の遲き子は親鳥音を入し後飼育てゝは、冬至頃より親鳥を夜飼して音を出し夫れへ付るなり、是れを押付といふ、鶯にいろいろあれども先づむじ鳥と云て法華經を鳴くをよしとす、昔は引鳥を專ら賞美せしが近代は引鳥はやらず、引鳥と云は法華經を鳴て跡「ヒイ」と鳴なり、三ッ音ともに引を引の揃ひたるといふて上とするなり、皆笛を吹て敎へたるものなり、今も笛付といふて子の内より口笛にて敎ふるによく覺ゆるものなり、然れども笛付の鳥は口笛の音ぬけかね其鳥より、三代經るとも其の口笛の音ぬけ難し、又三光といふことあり、月日星と鳴く故なり、別に「ツプ」といふあり是は法華經といふ所を「ケケチン」ときびしく鳴なり、又た「こけ藤」といふあり、三光、ツプ、こけ藤ともに皆な鳴きぞこなひの鳥なり、兎角むじ鳥にしくはなし、上音中音下音と云て三ッ音の揃いたるを上とす。(中略)

鶯は秋八月より出で飛鳴きと云て梢を渡る、是を捕へて、餌に付るに割餌入れと云て、竹を二ッ割にして下餌は魦にて七分粉一匁靑味を入れて白餌にして、かの割餌入れに入れて半分はゆるく半分は固くして、餌の上へ蜘蛛にても蠅にても置き、捕へたる鶯を早く押入にても、亦は何れにても暗き所へ入れ置、半時ほどへて他の籠へ移す時捕へて口を割り摺り餌を三口ほど喰せ、紙張り籠箱か又風呂敷にてもかけ置けば、彼の虫を喰ひ水を吸ふなり、其時餌の上へ墨にてポチ〳〵と點を打ち置くべし、虫と思ひ喰付くものなり、摺餌の内へ松魚節の眞を少しかき入れよくすりてよし、是れにて野肉ひける事なし、大の口傳なれども顯すものなり、よく餌付し後ち靑味を入るべし、何鳥にても荒鳥は早く暗き所へ入れ置き、割餌にして餌付くべし、松魚節の眞は鶯に限るべし。

鶯時により音を留る事あり、是には田螺をと

りからを去りてよくつぶし水入にひたし呑すべし、八九月出る鶯は皆な籔鶯にて用ひがたし、偶ま籔にもよきものあれども、籔口といふて嫌ふ事なり。（以下略す）

鶉　　穀餌　粟黍稗米など

これは誰れも知れる鳥ですから別に申しません、飼ひますには籠の上は網にして置き、底へは砂を引てやります、生餌は鰻少々位づゝ宜いです、島鶉一に琉球鶉と申すものもありますが、之れは極めて稀にありますものです、飼法は前と同様で差支ありません。

嘘鳥　　荏胡麻　摺餌五分か餌よし

雀の倍ほどな大さです、頭は黒く尾羽も黒くして、目の下に紅色がありまして、胸から腹へ掛て薄赤い美しい鳥です、冬の内に渡ります鳥で囀りは到て細いものです。

---

# 兒童遊戯（續き）

實相寺一二三

前々號にお約束をして置きましたから、少し調べました丈を御話する事に致しませう。

（イ）福引　寶びき

福引の事は隨分古くから吾國に見えて居る。續日本紀に、

天平二年正月辛丑、天皇御二大安殿一、宴二五位已上一、晩頭移二幸皇后宮一、百官主典已上陪二從踏歌一且奏且引、引二入宮裏一、以賜二酒食一、因令レ探二短籍一、書以二仁義禮智信五字一、隨二其字一而賜レ物、得レ仁者絁也、義者絲也、禮者綿也、智者布也、信者段常也。

とあるが、即ち我國の福引の嚆矢である。月堂夜話と言ふ書中に、

正月の福引は昔は兩人して餅を引合ひて、兩方の多少とりたるを見て、其年中の禍福を見し事あり。

今代は種々の器物にとり代へたるなり。餅を引取る故福引とは言ふ。また寶引と言ふ。

など、記されてある。福引と言つて人に物品をとらせた事は、西鶴織留と言ふ書に、

さる大名方に御吉例とて、正月三日の夜、大書院にて家久しき者ばかり召しよせられ、寶引を仰せつけられける。襖障子の内より、五色の長緒を數百筋投げ出して、手毎に一筋づゝ引き取り、此緒の末に付け置かれし物を下されける。小姓引き出す繩に桑の木の鐘木杖、家老のひき出す繩に銀錢一貫文、或は唐綾の卷物、御物拵への脇差、印の古きに當るもあり。提重箱、長刀、印籠巾着、日傘、張子の夜着蒲團、振り杓子をとる者あり。

とあるので、江戸時代の大名の家の福引の一般は御解りであらう。

以上は、只昔時の福引の有樣を述べたのに過ぎぬ、紙捻などに番號を記したる物をひきて、番號毎に景品を出し、中には景品の當らぬ鬮をも作り置きて、笑はすなど、中々面白い戯である。その一歩進んだのは、謎もしくは、考物にありさうな題を認めて、巧を凝らしたる種々の題の下に、思ひもかけぬ物品を景品として出すなど、實に興の深き遊戯と言はねばならぬ。

それ等は多くの人の思考によつて、いろ／＼に作る事が出來るのである。是は餘計な事かも知れぬが、今客待の車夫が繩を引張つて長いのを取つた時は、お客に向つて「旦那まゐりませう」と言ふのである。これも是等の風の影響から生じた一種の者でもあらう。福引の文句の拵へ方などは、其方面の書冊が澤山世に刊行されて居るから、それを見れば解る。茲では略くとした。

（ロ）錢獨樂

錢に心棒を通して獨樂を拵へ、それを廻して遊ぶと云ふ事は兒童の好む所である。で錢獨樂の事に付いて、一寸一言しやうと思ふ。

何時頃から此遊戯はあつたらうか。何人が作り始め

たものか解らぬ。只寳永の頃の書で、新玉櫛笥と言ふ者の中に、左に記すべき事が見えて居るので、元祿の末か寳永の始頃から世間に流行したものでもあらうか。その文はかうである。其書の三の巻の中に、

香山梅之助と言ふ人あり。常に獨樂を翫て樂とせり。或時文の錢を六錢七錢乃至十錢と繋、貫き徹すに筆の軸を以てし、別に心木を通し、糸を卷て回轉の機を設け、ひたすらに是を愛し、此錢獨樂のために記を書きて曰く、

獨樂よく〳〵、汝時を得たり。一頃楊弓の柱に催促せられ、行成の紙袍を着て、射むきの座に連りしさへ珍らしき事に言ひたりしに、今は綾錦金襴の衣服に、象牙玳瑁の杖をつき、一曲の舞に錦の袂を飜せば、滿座頤を解きて善び、洛中の男女貴賤を厭はず、汝が藝の他に勝む事を思ふ事、妓女を仕立たるが如し。五節の舞、霓裳の曲、すがゝき、永代橋、何くれ〳〵曲に長じたる物は賞美せられて、時代蒔繪の箱の中に、豐かに眠り、青銅鳥目の幼名を削り、助六と云ひ文七と名乘り、柏崎と呼ばれ、松崎と號し、尊からずして高位に



交はる。料足と言ひ、御わしと名付けしは、穢き名なれど、今汝が花やかなる威勢には、誰ありて俗姓を言ふ者なし。

丈六や臍の緒きつて花二寸

此文によつて讀者は當時の有様を知る事が出來る。此頃は大人も此遊戯を試みたものである。今日は單に小兒の遊戯として、或一部に殘されて居るのみだ。

（八）ねつ杭打ち

古く童女の遊びに、鼻紙を出し針をうち付けて紙をとり、是を針打と言つて一種の遊戯としたのがある。それは何時頃か知る事は出來ぬが、思ふに足利時代前後の事でもあらうか。其針打の風が移つて、「ねんから」と言ふ遊戯が出來た。其方法は鐵の針を地に打ち立て丶遊ぶのである。此風から轉じて兒童が木の杭を地上に打立て丶玩ぶ事となつた。是が即ち「ねつ杭打」である。江戸時代の頃は、兒童は正月に此遊戯をしたものである。元祿の頃より盛んに行はれたのである。

（二）線香廻し　火まわし

昔時は脂燭の詩など丶言ふ戯が禁中に行はれた。脂燭と言ふのは昔禁中に用ひた燭火である。松の端を焦して油を塗つて、それに火を點したのを、その本を青紙で卷いたものである。玉海の壽永二年正月廿五日の條に、召㆓中將於前㆒脂燭詩兩度令㆑作、と言ふ事がある。又續世繼には、

歌を好ませ給ひ、（崇德院の御事也）朝夕侍ふ人々にかくし題よませ、しそくの歌、かなまりうち出て、響きのうちに詠めなど仰せられて云々

とも見えて居る。即ち金屬製の椀を打ちて、その響の中に歌を詠むと言ふ、咄嗟の間にすべき遊戯は、すでに昔時に於ても發達して居たのである、それと事は異なつて居るが、今火廻しと言ふ戯がある。線香のさきに火を點して是を圓く集りたる人々に渡すのである。其人々は最初より物の名、又は前の人の言ひたる言葉尻をとりて、語を作り、それを言ひては次席の人に廻すべく規約が設けられてある。か

くして最後に燃えつくさんとする線香を手に受て、その熱のために落すか。又次席の人に渡す能はざる者は、此遊戯に負けたる罰として、立つて一塲の隠し藝をせねばならぬのである。脂燭の詩歌のそれとは異なる處はある。しかし多少はそれ等の移れるのではあるまいかと考へたから、火廻しを言ふ前に、一寸其事を紹介して置いたのである。昔は脂燭の遊戯が禁中に行はれたと共に、火廻しと言ふ遊戯が現在兒童間に行はれると言ふ事、一寸とりあはせが面白くあるまいか。

（ホ）風車を廻す事

風車と言ふ物は、吾國に古くからあつたものだ、長谷寺觀音驗記に、

鳥羽院御宇當寺に法師丸といひける小童ありき。父に別れて貧母一人はぐゝみけり。七歳になりける保安二年の秋の比、同樣なる者風車を持ちて遊びけれども此法師丸にはとらする者なし、浦山しさのあまり、母に泣き悲しみて乞はれければ、また母を責めけり。



とあるのによつても、此頃すでに風車のある事が解る、又廻して遊んだ者とも知られる。

後奈良院の御撰の何曾に、嵐は山を去つて軒のへんにあり、などゝ言ふ事も見える、これは序に記して置くのである。

（ヘ）印地打

印地打とは大勢にて石を抛ぐるを言ふ。昔時は石を抛ぐる事は、戰爭用に一つの軍器とも言ふべき者であつたが、後には一つの遊戯となつたのである。小兒同志の戯にて、石を抛げ合ふ遊びである。その遊戯の或書に記された一例は左の如くである。

細き麻繩を長さ一尋半、或は二尋ばかりにして、中程五六寸が間を、三つの筋に取り、兩端を結びとめ、三筋になりたる處の正中に小石を載せ、繩の片端は右手の小指に結び、今一つの端をその手に取つて肩にかけ、繩に載せる石を左の手掌に据へ、後の方へ投げ越すを、右の手にて二つ三つ打

ふり、向ふの目あての方へ抛る時、繩の端を放てば、石は飛行き、繩は片端小指に結び留めたれば手に殘る。かくすれば石の飛ぶ事極めて高遠なり、手錬熟したる者は格別なり。是を名付けて雁殺と言ふ。雁などうつにや、勢の鋭きによつて名づけしなるべし云々

とあるので、說明する迄もなく御わかりの事と思ふから言はぬ。此遊戲のおもかげは、今も一部の兒童間には傳つて行はるゝのである。只石投げといふ簡單なる名目の上に。

あまり長くなるので一先筆を止むる事にした。そのうち遊戲欄に於て、讀者諸孃に御目にかゝる事としやう。

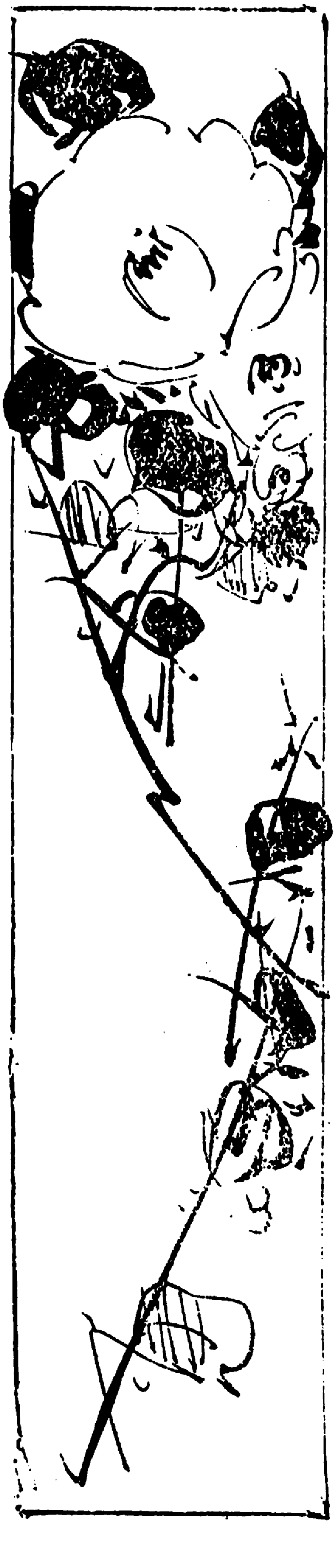
（完）

## 面白き問答（問は前々號にあり）

### 答の部

▲眞赤な嘘、

▲赤心又腹黑い



# 雜錄

## 女子の爲めの心理雜話（一）

竹楠

### 前おき

心理學といふものは、甚だ六づかしい學問であつて、一般の女子抔には少しも必要のないものゝ如く、又た其の話を聞いたからつて、到底分らないものゝ如く思ふて居る人が多いけれども、斯の如きは全く間違つた想像である。元來心理學といふものゝ範圍は實に廣いので、其のうちには種々の異なつた部分がある。唯だ哲學者の外は之れを知る必要のないやうな部分もあるが、又は人間としては誰れもかも一般に心得て居なければならない樣な部分もある。殊に女子に取つては、必要な部分がある。而して其れは決して理解し難い理屈ではないので、日常の經驗と直接の關係を持つて居る甚だ面白い事柄なのである。

女子が己れの位置を適當に保ち、其の天職を全うして行くに、最も必要なものは心理學の一部であると謂つても宜い。女子の普通教育としては、理化學の大要も必要であり、地理や歷史も必要であり、又た裁縫だとか、料理法だとかいふ樣なものは必要であるに相違ないが、併し心理學の一部に關する知識は此れらよりも更に必要である。斯く言はゞ、一見甚だ奇妙な議論を吐くやうに思はるゝかも知れないが、決してさういふ譯ではないので、此のことは是れから段々お話をして行く所に據つて分かるのである。

斯の如く女子に心理學の一部は必要であるが、併し世人は未だ此のことを認めて居ない。故に今日の

女學校の學課は甚だ多く、而して其のうちには、女子の普通敎育としては左程必要でないものがあるにも拘はらず、未だ少しも心理學上の知識を與ふる方法は設けてない。是れ今日の高等女學校などの一大缺點である。

高等敎育を受けた女子にして、家庭を愉快にすることの全く出來ないもの、育兒の方法や、兒童敎育の方法を少しも知らないもの、他人と交際することの極めて拙ないもの、自分の身體の裝飾の巧みに出來ないもの、着物の色の配合を知らないものなどの澤山あるのは、畢竟するに心理學上の知識が少しも授けてないからである、少しく心理學上の知識があつたら、一家の間に不愉快な風を起さなくとも濟む場合でも、其の知識の全くない爲めに家庭に風波を起すやうなとが、謂ゆる敎育ある婦人に少くないのである。又た服裝の爲めに非常に金をかけて居る婦人であつて、少しも心理上の知識のない爲めに、其のガラの撰擇は極めて拙なく、且つ其の人には甚だ不似合にして、立派な服裝をした爲めに却つて滑稽に見ゆるやうなことが隨分ある。

余は是れから、一般女子の心得として必要なる心理學上の事柄をお話しする積りである。併し此れは心理學を順序を追ふて講義するのではなくして雜話である。何人にも極分り易い、實際に必要な事柄に就いて成るべく平易に、成るべく面白くお話しをするのである。だから其のお積りで讀んで戴きたい。

## 一　女子の勢力

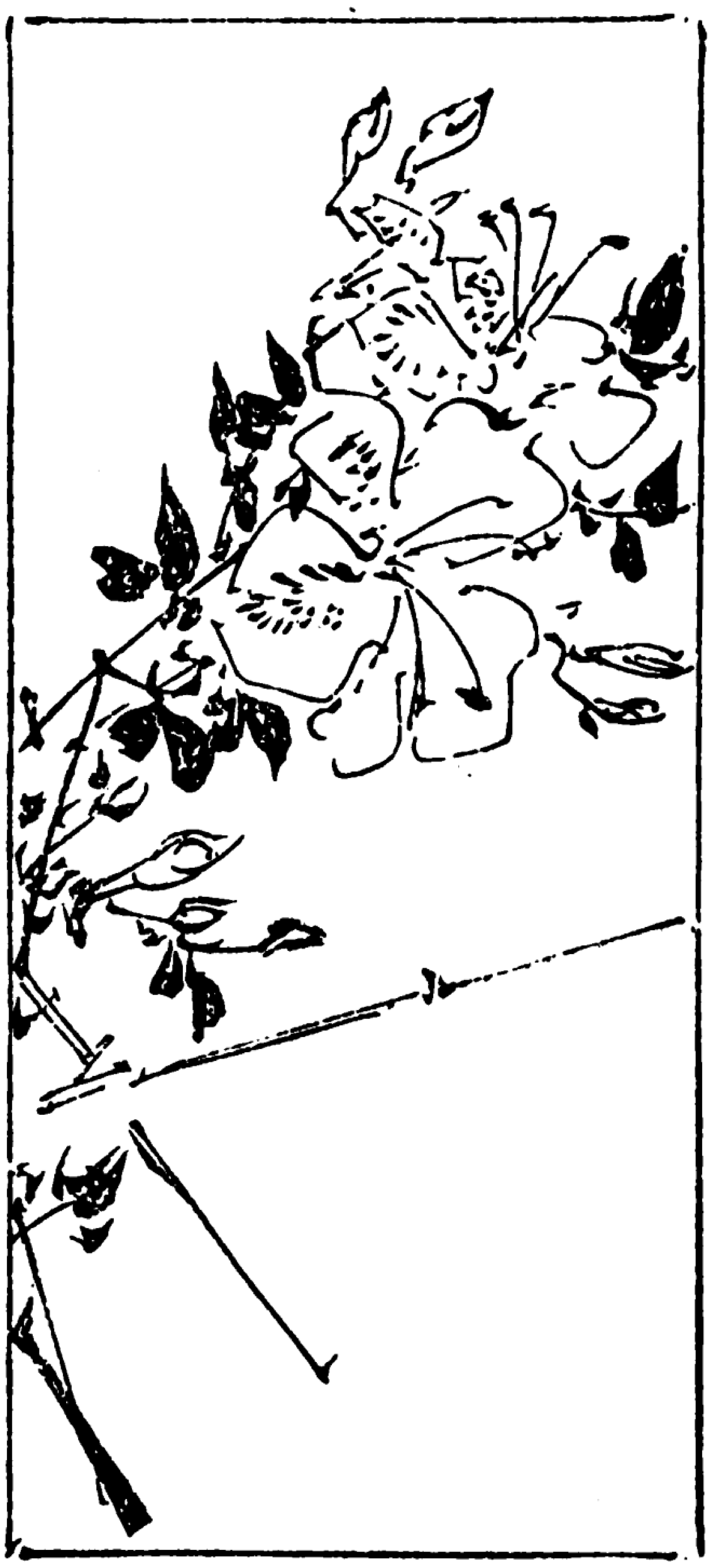
東洋に於ては、女子に權利がないとか、社會が女子を尊敬しないとか言つて、大に不平を鳴らしたり、憤慨したりして居る人があるが、縱ら女子に形式上の權利を與へたかつても、又は如何ほど社會が之れを尊敬したく思ふても、女子自身に實際の勢力がなくては駄目である。權利とか、社會が尊敬するとかいふ樣なことは、皆女子自身に勢力のある所から出づるのである。決して外から與へらるるものではな

く、女子自からが己れの價値によつて之れを得るのである。然らば女子の勢力とは何であるか。

女子の勢力とは、體力でもなく、知識でもなく、藝術でもなく、又た金力でもなく、男子をして恍惚たらしむる所の性情の發達である。之れに依つて女子は社會に特殊の勢力を持ち、一歩進んでは男子をして己れの意の如く働かしむるとも出來るのである、女子は知識が進んだら勢力を得ることの出來るやうに考へて居る人があるが、之れは甚だしい間違ひである。どれだけ女子大學が澤山できて、知識が進み專門の學藝を學んだからといつて、其れで女子に勢力が附く筈はない。如何ほど知識があつても、男子が女子を重んずるやうにならなければ女子の勢力といふものは決して無い譯である。然るに男子をして女子を重んぜしむるには、學問や藝術が進んでも駄目である。どれだけ女子の學問や藝術が進んだからつて、其れのみでは決して男子は之れを重んずるものではない、女子が男子をして己れを重んぜしむるは、男子をして恍惚たらしむる所がなければならない。此の要素があつて、始めて男子に重んぜられ、社會に勢力を有するに至るのである。

世人は西洋の女子が社會に重んぜられて居るのを見て、西洋の女子は知識が進んで居るからであるとか、生活上獨立することが出來るからであるとか考へて居るが、其れは根本に於て全く間違つて居る。知識の程度が高いとか、自活が出來るとかいふ様なことも、無論之れを助くる一事情となつて居るに相違はないが、併し其れらは決して本統の原因でない、本統の原因は何かといへば、矢張り前に述べた通り男子を恍惚たらしむる性情が發達して居ることである。西洋の女子は此の性情が大に著るしく發達して居るので、實は其れが爲めに男子に重んぜられるのである。無論歴史上の關係もあるに相違ないが、併し如何ほど歴史上の關係があり、古來の風習があつたからと謂つて、唯だ其れだけでは到底いつまでも尊重を維持して行くことは出來ないのである。

元來、一方の人間が他の人間から重んぜられるには、二つの異なつた事情がある。其の一つは恐れさすことであつて、他の一つは恍惚たらしむることである。然るに女子は男子をして己れを恐れさすことが出來るかといふに、此れは元來自然の性質に反して居ることであつて、到底出來ないのである。どんなに女子がエラクなつたからつて、又た角がはへて恐ろしくなつたからつて、決して男子は之れを恐れない然らば男子をして恍惚たらしむることは出來るかといふに、此れに適する性情は女子に本來具はつて居るのであつて、其の性情を發達せしめさへすれば充分出來る。だから女子の男子に重んぜらるゝは、全く此の性情を大に發達せしむるに在るのである。



然らば女子の如何なる性情が男子をして恍惚たらしむるものであるかといふに、此れには色々あるが先づ第一に擧ぐべきものは、『美』である。美には固定の美と表出の美とある。固定の美といふのは、即ち生れつきの形體上の美であつて、例へば、色が白いとか、髪が黒いとか、眼が涼しいとか、鼻の格好が善いとか、いふ樣なものである。又た表出の美といふのは、心のうちにある優美なる思想や感情が筋肉に依つて外部に表出さるゝ所の美であつて、例へば動作が優美であるとか、着物の着方が上手であるとか、眼球の運動が美であるとか、口のきゝ樣が上品であるとか、聲の使ひ方が巧みであるとか、いふ樣なことである。固定の美は生れながらに定められて居るものであ

るから、大體に於ては之れを變ずることは出來ないが、表出の美は生れてから後の境遇や、教育によつて定まるものであるから、幼少の時分から之れを注意すれば、どんなにでも變ずることが出來る。又た成長してからでも、優美な思想や感情を養成すれば、如何やうにでも之れを變ずることは出來る。而して固定の美は表出の美の發達に依つて大に補はれるのである。

眞に人間の美とすべき所は、固定の美ではなくして表出の美である。固定の美が男子をして恍惚たらしむることは固より強いに相違ないが、併し其の力に於ては到底表出の美に及ばない。唯だ生れつき鼻が高いとか、眼が奇麗だとか、色が白いとかいふ丈けで、表出の美の之れを補はない場合に於ては、其の男子をして恍惚たらしむる力は案外乏しいのである。例へば、生れつき極めて美貌であつても、其の動作が美でなければ、忽ち厭な感が生ずる。だから固定の美といふことは其の力を及ぼす範圍が案外少いのである。此ればかりでは決して男子を動かす力はない。之れに表出の美が加はつて、始めて大なる勢力となるのである。

然るに表出の美は、固定美の缺けて居る場所に於て、大に力がある。例へば、至つて顏の道具立てのマヅイ人でも、其の頭に優美なる思想や感情が充分發達して居て、其れが顏の筋肉の運動に依つて表出されるときには、著るしい感化力を具ふる美となるのである。生れつきは醜婦であつても、教育修養の力によつて、大に表出美の發達した爲めに、其の感化力に於ては、天然の美貌を具へて教育なき婦人に遙かに優るものは澤山ある。美の發達といふのは、即ち此の表出美の益々精緻に進むことを謂ふのである。

天然に美人であれば、其れほど結構なことはないが、併し生れつきの固定美がなくとも、幼少の時からの修養と又た自分の心がけとに依つて、充分優美なる婦人となり得るのである。而して婦人の美が男

子をして恍惚たらしむる力は實に偉大な者である、如何なる英雄も豪傑も其の前には恍惚として力なくなるのである。だから女子は先づ此の性情を發達せしむるが必要である。知識や藝術も必要には相違ないが、第一美の修養が無ければならない。美の修養なくしては、到底勢力を得ることは出來ない。女子の教育には學校に於ても、家庭に於ても大に此の點に注意せんければならない。機械のやうな實用的の女子をのみ作のは吾人の甚だ感服せざる所である。

　美の價値の大なることは斯の如くであるが、併し女子が男子をして恍惚たらしむるのは、唯た美の性情のみではないので、其の他にも亦た之れが要素となるべきものがある。之れ次に述べんとする所である。



（つゞく）

# 朝鮮の女性

倭翁

朝鮮の住民には兩班と常漢と奴婢との三つの階級がありまして、兩班とは貴族を指し、常漢とは平民を云ひ、奴婢とは我國で申さば昔の穢多のやうな身分で、役所或は一私人の私有となつて、セッセと一生を働き暮らすものであります、女性にしてもそれぞれ階級の異なるに應じて處世の道に相違あることは勿論であります。

さて朝鮮國は元來儒教の國でありまして、男女の間は中々嚴重で、「兒童の讀む『入德文』の中にも勿レ漫ニ窺ニ内室一内室婦人座、と云ふ文句がチャンと載せられてあります、その家屋の構造も、内室と外室との區別が立てゝあつて、女子は常に内室を守つて、決して内門を出づることはありません、男女七才にして席を同ふせずとの訓は堅く行はれてあるから、よし兄弟でも濫に内室に出入することを許さないで

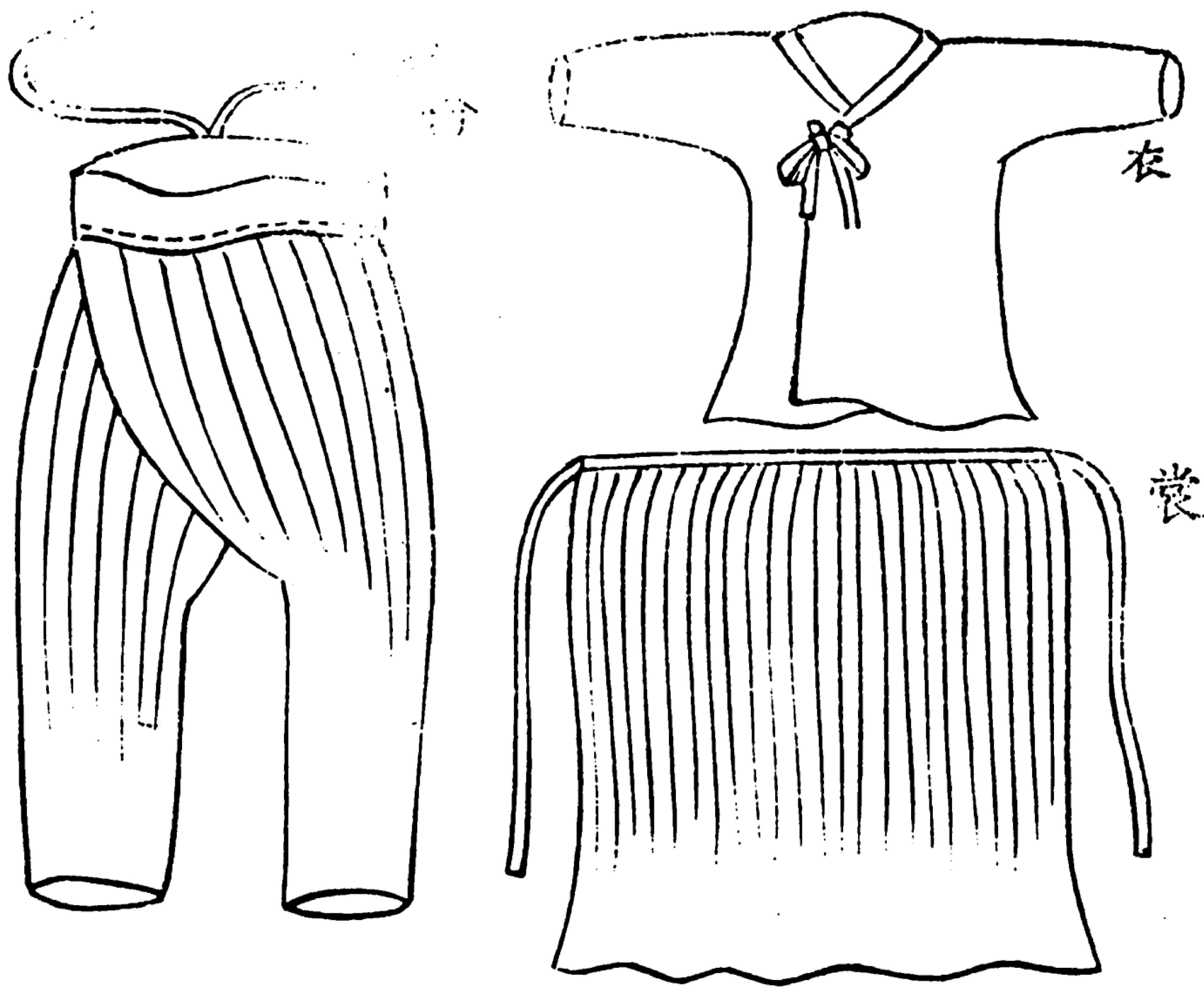
若し人ありて、內室へ闖入する場合は、その故意と過ちとに係らず打殺しても罪とならないと申すことであります、又夫が罪を犯して內室に隠れたときは捕吏も捕縛を差控へねばならぬそうであります、若し又家根を葺くとか修繕するとか云ふ場合には、兩三日以前から隣近處へ知らせ置くのであります、是れは家根などの高い所へ上る時は四方を見渡すことが出來ますから、自然お隣の內室を窺ふやうになるから、それでは相濟まないと云ふ所で、豫め斷つて置く必用があるのです、かくて婦人は全然社會から離隔せられて居るのであります、その外出するときなどは面帛を蒙りて、眉目を露はさないやうにいたします、或は輿に乘つても布帛を垂團して往くのであります。

○化粧　化粧品としては臙脂、白粉、密油などを用ゐて居る、眉を細く作り、髮を太く入れて髮の多いのが美人であります、常に髢を入れて頭上に纏ひ笄で留めてあります、その結方は極單純で上下共一樣であります、幼童も同じやうに髢を入れて長く編み背後へ垂して居ります、笄は金、銀、眞鍮の別がありまして、兩班の處女は龍頭又は鶴を彫付るもあります。

○衣服　上衣は短くありまして僅に乳を掩ふ位に過ぎません、袖は細く窄くして別に上着下着など云ふこともなく、同じ樣なるを重ね着するのであります、腹部を細長い木綿か、絹で幾重となく我邦の妊婦の腹帶のやうに捲き、袴を着け、その上に裳を着くるのであります、袴の下には、別に中衣を纏ふのであります、近年我邦で小學生徒などが着初めた改良服とか申しますのは、此の朝鮮婦人服に似て居るものであります。

衣も裳も共に白色を用ゐますが、其內少女は紅裳を着け、老女は藍裳を多く用ゐます、上等は縮緬や絹布類を用ゐて拵へますが、平常は木綿布であります。

○職業　上流の婦人は猥に戸外へ出ることなく僅に縫針の業を取る位にて、一生深窓の內に遊び暮らすの




であります、中流の婦人は家內總べての事務を取さばき、營業上萬般のことを一身に擔任し、家內を養ひ其上夫の遊興費まで辨ずるのであります、下流は夫婦共稼ぎでありまして、自ら勞働するので、例へて申さば農耕に肥糞を運ぶなどは、全く婦女の手に限り、男子は絕て與らないと云ふやうな譯であります。

○敎育　朝鮮は我日本と同じく漢字を使用して居る國であります、所謂同文の國とは玆のことであります、所が又別に諺文と申して丁度我國の伊呂波のやうな朝鮮文字があります、朝鮮婦人は總べて文盲であつて、偶々その諺文を讀むものがあつても、別段稱めません、故に其內で幾分か文字でもあるものと申さば妓生であつて、我邦の藝妓のやうなものであります、妓生を育てる爲に特別な學校があつて敎へますから、中には漢詩を作るものもあります。

○結婚　總べて婿よりも年長けた婦を娶るが彼の國の習慣であつて、婦の年十四才長じたるまでは嫁はないとしてあるですから、朝鮮婦人は皆自分より若き

夫を持つて居るのであります、尤も年上な亭主を持つも差支はありませんので。

さて結婚するには先づ男子より女の年齢を聞き、合性を吟味した上で、媒婆を頼みて婚を女の方へ申込むのであります、媒婆と申すは中年過ぎた女を見立て、双方の媒介を托するのであります、所で結婚の約束が成立てば、日を擇で、婿の身上に相應した布帛類を以て、結納とするのであります、その時は婿の親から書を認めて使を遣はすと、女の親からは其娘のことを卑下して返書を認め、使者を御馳走して返します、いよ〳〵期日となれば婿の親類一兩名で上流の貴族ならば輿に乘り、中流のものは馬に乘り、又下流の最下等でも紗帽、胸背、角帶の冠服を其處の地頭から借りてゆくのであります。

婚禮は親宴と申して、その始に生雁を紅褓に包んで頭ばかり出して持來り、花嫁の宅の庭前にて日覆を張り臺に雁を奠へ、花婿は先づ舅を四拜し畢りて廳上に至り花嫁を二拜すると、此時花嫁は花婿を四拜いたします、それが了ると花婿の前に、大棗を盛たるを備へ、花婦の前には乾雉を備へて、それから瓢盃に紅青の糸を附けて花嫁から花婿に贈るのであります、花嫁花婿の兩傍には侍女が居て盃を取次ぐのである。

この親宴即ち婚禮の式が終ると、花婿を始め同行の一同に盛宴を張て饗應するのであります、それから花婿花嫁は房内に一晝夜籠め置き、次の日になつて花婿は舅に見え、三日目に本宅に還るのであります、夫婦の緣があつたら此日花婿は手から誓文を花嫁に渡すのだそうであります、婦を迎へるも日を擇で夫の宅に至り舅姑を四拜し、その日から留り居るのであります、附て行た人々には矢張御馳走するのであります。

双方舅入は日を追てするのですが、身分の卑きものは婿入の日、双方の親々相談の上にて一日に其手數を濟ませ、翌日は婦も連れ歸るのである、夫婦の間は詞づかひ貴賤とも至つて丁寧であります。

〇産婦　産に難む婦人は至て少いです、随て産婆の如きもありません。臨産の時は兩班ならば侍女があるからそれが取扱ひ、下等人は近所又は懇意なものが來てこれを取扱ふのであります、不具なる子を産むは殆んどないと云て宜しい、双生は時によるとあるそうです、總て産後の身持大切にして食物などもよく〳〵謹みます所から、産後の難みに罹れるものは少いそうであります、それに前述べましたやうに女子の衣服は腹より上を細くして、裾を廣く拵へてあるから、腹より上を布にて堅く卷く風習になつて居ますので、姙婦でも別に纐帯を用ゐる必要はないのであります、貧家でも墮胎又は捨子などいたすことは絶へてありません、實によろしき風儀であります、嬰兒は常に房内の暖き所に寐かし置いて決して抱いたり、負つたりすることはないのです。



〇寡婦　貞女二夫に見えずとの戒は、矢張り堅く守られて居ります、不幸にして夫を失つても、兩班は勿論のこと、下流下賤のものなりとも再婚するとは稀であります、若し再婚するときは世人は痛くこれを擯斥するのであります、又合醴と申して許嫁の約なつて幼年の時より男女同室に住めるものが、或は十二三歳の時にその夫たる男子が死して寡婦となることもありますが、若し此婦人が他に縁付くとがあつても、其腹に生れた子は男子でも世嗣と成すことが出來ない

で、妾腹の子と同じ侍遇を受くるのであります。

○妾　妾を置く事は兩班は云ふに及ばず、商人でも持て居るのであります、朝鮮では妾を澤山持てるが名譽のやうに思ふて居るものだから五六人の妾を有して居るは珍らしくありません、我邦で昔からよくある御家騷動は大小共に妾が張本人であつて、本妻を追出して乘込うとか、正腹の子をないものと致して、己が生だ子を嫡流に座らせるとか云ふ處からの背反であります、處が朝鮮では制裁が確く立て居りますから、斯るゴタ〳〵は起つた例しがありませんと申すは、正妻に子なくて妾に子があつても、其子に家名を相續さするとを許さない、假令妾腹の男子が幾人あつても、他より養子をせねば其家は斷絶と極て居るのです、又庶子は及第して仕官するとが出來ない、妾腹の女子は兩班に嫁するとがならぬ、下流のものも之を嫌ふて娶らないのでありますから、妾の娘は又妾となるより外に道がありません、かくて正妻と妾との間は非常に權力の相違がありますから、



相互の間に喧嘩の出來る筈もありませぬ、若し起らふものなら、正妻が何故正統に結婚せないか、御前は婚資のない爲に人の妾となつたのではないかと、云はゞ此一言で妾は忽ち閉口するのであると云ふことです。

○女醫　女醫者は京城にて開業して居るものが多くあります、これはもと專ら婦人の療治を司るのであつて、各地方の官婢の内で適當の者を擇び、官から醫學を修業させたものであります、さて婦人の病氣に男醫を招く時は、内房の入口に帳幕を下ろし脈體を診察せしむるのであります、國王の侍醫が王妃を診察するには、親しく其手を王妃に觸るゝことなく、固く房門を鎖しておいて、醫官は門外にかしこまり王妃の脈搏の所へ糸を付けて門際から門外へ通し、その糸によつて脈を見るので、所謂糸脈とはこのことであります。

○尼堂　此處は憐なる婦人の隱れ家であります、此處へ來て尼になる女は、兩班の妻妾が夫に離れたもの

とか、又は不義の惡名を受けたものとか、其外便りなき獨身の女とか、不具なものとかゞ相集ひて十人二十人つゝ共に、衣類の洗濯や、綿繰や、糸引のやうな女子の手に叶つた職業を營むで生活して居るのであります、我邦の比丘尼と異りて得道して念佛三昧に日を送ると云ふやうなことではありません。

さて朝鮮の女性についての御話は先づ斯樣なものであります、此外彼の公賤、私賤の奴婢となつては、代價を以て賣買せらるゝので、必用とならば、何時でも買收し來り、不用とならば又賣飛ばすので、京城にはその市場があると云ふことであります、東西南北、明日は何處の空に身を置くことやら一切わからぬのであります、啻だ行着きばつたり勞働して一生を了るのであります。

斯くの如く儒敎を信奉して社會から離隔せられた朝鮮婦人は、世界中一番不幸なる女性かとも思はれますが、又一方には其品行なり操の正しさとも又世界一かとも想はれませうが、實際はさうでなくて種々な惡弊が内部に流行して居るとのとであります、宗敎の信念もなく眞正の敎育も受けなくて、只々外部の壓迫のみにて强て制裁せられて居ては、斯くあるのは當然とも思はれます、兎に角眞正の敎育修養がなければ、眞の婦人の崇高なる操は輝かないもので、朝鮮婦人は則ち其の證據であると思ひます。（完）

# 赤十字社の篤志看護婦會

菊池雪子

櫻花は薫り、鳥は歌ふ長閑かなる春をよそに見て、ほづゝに疵付けられし御國の兵士、また敵のそれにまで、同情を寄せつゝ平癒を希ひ溢るゝ愛のあかき心を、旭の御旗に次いで輝かすのは、まことに赤十字社でございます、普通看護婦の數は、今日全國を通じて二千名もありますとのこと、美しい博愛の名の下に、活動して居られますこの二千人の

婦人のことは、今更申すまでもございませんが、玆になほ一つ感歎に堪えませんのは、篤志の婦人方がお集りになつて、看護婦會といふを設けて御出でなさることでありまます。

春の潮は白う、野邊は綠に、霞まじりにほのみゆるは、にほふ雲かと申さまほしい、うら〳〵とした春の日、飯田町の赤十字本社内に篤志看護婦人會が催されました、こは例の金曜日の會でございます。

御姿け高う、おいで遊ばすのに、眞白な看護婦服を召して、淸い百合の花のやう見上げまつりましたは、北白川宮妃宮子殿下、華頂宮妃郁子殿下、東伏見宮妃周子殿下、梨本宮妃伊都子殿下、御けだかいうちにも御笑みをたゝへられて、數多の夫人方と同じく、講師の説明をお聞き遊ばしました、なかにも北白川宮妃殿下には、講師の話に一々御頷き遊ばして、怜悧な御口元も、愛嬌したゝる御目元も、一しほ麗はしう見上げまつりました。

會長鍋島侯爵夫人榮子、副會長千家男爵夫人俊子



をはじめまして幹事毛利公爵母堂、足立夫人、西鄕侯爵夫人伶子、田中子爵夫人伊輿子、裏松子爵夫人ちよ子、内山訓子、柳谷ちよ子、山上千世子、土屋かね子、淸水利子、伊地知雪子、伯爵松平充子、坂井春子、豐島文子、男爵黑木百子、伯爵松方まさ子、男爵小澤くわ子、ついで百三十九名の會員、いづれも朝野貴顯紳士有爵の貴婦人令孃方でお出で遊ばします、まことに近來の盛會でございますと、理事主掌淸水俊子樣と申すお方がお話になりました。

明治二十二年赤十字が創立されましたと同時に、篤志看護婦會も設けられたのでありますが、其頃看護婦になることは、一の賤業のやうに視做されて、自活の道を求める者でなければ、致さぬことに思つて居りましたから、從つて篤志看護婦人會も、有名無實まことに微々たるものでございました、それから二十七八年、日淸戰爭の際には其の擴張に思考を凝らしましたとお話しになりました、なほ語を次いで、そこで高貴の方に入會を願つて、他の御婦人方を誘

導していたゞきたいと存じまして、皇族方にお依頼いたしましたところ、容易に御引受け下さいまして今日までに御臨席、いな、貴い御身御手づから繃帯などを造り遊ばす程の榮を賜はつて入らせられます。

篤志看護婦は普通看護婦を助けて同じやうに働くのでございます、疵口を洗滌つてやることから、便器の世話から、また筆の採れないものには、故郷に出す音信を書いてやつたり、病人に代つて患者の模樣を父兄妻子に報らせたりしてやるのです、日清役の時大に盡力なすつて、この職を助けられた方が三十五六名でございます、田中子爵夫人、裏松子爵夫人、小笠原伯爵夫人は、東京に於て捕虜の看護をなさいました、外國公使夫人など參られまして、有爵の夫人方が下世話までして、便器の持運びをなさいますには、みな驚歎いたさない方はなかつたのです、仁禮中將夫人、今の石川縣知事村上夫人は廣島まで出張なさいました、私も其時行つて居りまして、それから私は篤志看護婦人會の理事主掌をいたして居ります、只今申ました夫人方は、看護婦と一所に、七疊の部屋に七八人ごろ寢までもなさつて、熱心に勞を取られました。

篤志の方五百名に登りましたが、毎日增加いたす傾きがございます、日露戰爭になりましてから、澁谷の支部の方に毎日篤志の方が、あの雨雪などの惡るい道にも係はらず參られまして、繃帯を卷いて、陸海軍省に献納いたされました、同省でも本社のはよろこんで受納せられたさうです、一體繃帯は疵口に直接當たるものですから、餘程清潔に製造しなければならぬのです、だから本社では製造にかゝる前に次の規則を實行して居ます

繃帯を製造する人の心得

一 前以て頭髮を洗ふ事
一 前以て瓜をはさみ置く事
一 製造にかゝる前看護衣を着する事
一 手指を洗滌ふ事
一 製造中は談話を禁ずる事

一食事は必ず食堂に限る事但し成るべく質素を守るべし

一看護及小使を濫りに使用すべからず

一繃帯製造は最も念を入れ後より巻直し等無之様注意すべき事

右様に注意に注意を加へて製造しますものを仕上げましてから後、またこれに百二十度の熱を加へて消毒いたし、ブリッキの鑵に密閉して、それをまた木の箱に入れて送るのです。

清水様のお話と右の規則は、箇人で繃帯献納しやうとする折に、大に心得となることであると思ひます。

矢張篤志看護婦の方の帽子を造つて佐世保に百五十、小倉に三百、松山の捕虜患者に二十二送りました、否二十四名でございましたが二名は死亡いたしました、これが禮狀ですと、清水様は記者に一通の奉書を示されました、記者は暫くそれを拜借して書き取りました。

拜啓陳れば篤發第六十四號を以て貴會

東伏見宮妃殿下

梨本宮妃殿下

御初め外二十名の御方々に於て御製造相成候患者用帽子五百個當病院へ御寄贈被成下恭なく拜受仕候右は御申付の通り出征地より後送入院患者へ御厚意の趣旨申聞配賦方取計可申候間左樣御承知可被下御禮迄此段御請申上候也　恐惶謹言

追て甚だ恐縮の至に奉存候得共　東伏見宮梨本宮兩妃殿下へ閣下より特に宣布御傳奏被成下度此段奉願候也　敬具

明治三十七年四月三日

小倉陸軍豫備病院長

陸軍三等軍醫正　村田　豊作

日本赤十字社篤志看護婦人會長

侯爵夫人　鍋島榮子殿

去月は英國公使夫人が主唱者になつて各國公使夫人の賛成せられて、上野に音樂會を催しまして、その上り高一千七百六十圓を赤十字社に献納せられたさうでございます、本日來會の外國婦人はガーデー婦人、ウエスト孃、佐藤大佐夫人、リヒー、松平子爵夫人、ルイスペルなどの方々また會員の有爵者は、公爵

三條千代子、侯爵山内禎子、同西郷伶子、伯爵佐野倘子、同酒井夏子、子爵大村梅子、山口谷子、男爵小早川式子、同相浦たう子などの方々でございました。

講師足立寛氏は芥子泥、破血器使用法につき種々說かれました、山上兼善氏は結節帶に關する講義をせられて、人體模型について實地練習を夫人令孃方に示されました、又た妃殿下にも御手づから遊ばしました。

本社の目的は博愛、尚武、社交を奬勵いたし、また個人として看護に暗からずば、機に臨んで狼狽せず、充分効を奏することがでございませうと清水樣がお話し遊ばしました、なほ萬一々師團の負傷者が當地に參られます折には、二三の病院に收容し、毎日篤志の方二三名づゝ參られて、看護いたす計畫でございますとの事です。

（をはり）

# 葉櫻狩

## 上野の清楚

園田紅村

花の色は移りにけりな、と慨世の詩人をして、歌はしめけむ四月の花も、降り續ける春雨に、名殘なう散り失せて、梢に囀る鶯の聲も、力なげに聞え、青葉生ひ繁りて、杜鵑血に啼く時節とはなりぬ。綠の松が枝に掛れる藤の花、千町の小田に波打つ青麥、さては雲雀の青空に囀づる、蝶々の菜花に狂へる、興味津々たる詩趣、豈に長閑けき春の日に劣らましやは。いでや、いぶせき僑居の樓上を逃れ出で、楚々たる天然の戀愛にあこがれつゝ、堆き心の塵埃を清めんかな。

されど、我が忠勇なる武士は、唐土の虎伏す野邊を驅け迴り、征衣の袖をば、肌寒き草葉の露に濕らしたまふ今日此頃、如何でか、銀鞍に跨り、華車に乘るなど、縉紳貴女の遊を學ぶべきかは。身は小倉織

の鞾袴に、麥藁の古帽を冠りつゝ、甲斐々々しくも、九段なる寓居をさすらひ出でしは、朝の八時と覺しき頃なりき。

此日天氣殊に麗しう。靑藍に紫紺を交へたらむが如き空は、一點の曇もなくて、華やかなる朝日隈なく照りわたりぬ。

先づお茶の水より、湯島に出で天滿宮を伏し拜みつゝ、不忍の湖畔へ着きぬ。湖綠なる蓮の此處彼處に若葉を出せるに、殘んの雁の二羽三羽、細波の上に浮びたる、忍が岡の樹々の梢の、綠翠滴るばかりなるに、辨天の御堂の赤う見ゆる、眞に一幅の活圖畫なり、靑草綠葉生ひ繁りたる邊りを、輕裝せる淑女の袖振りはへて、行き交ひたる、閑雅なる角帽の君の、ステッキ打ち振りつゝ、早足に行き過ぎたる、ア、何たる崇高の詩趣ぞや。

歩して石階を攀ぢ、淸水堂の傍を過ぐ、音に名高き秋色櫻、榮華の夢を葉櫻に留め、人をして、今年花落ち、顏色改まり、明年花開かば、誰か又わらむとて、世の常なきを嘆たしむ。想へば、井の端の櫻あぶなしと詠みけむ、古への才媛も、今は苔むす墓標の下、枯骨冷やに眠りますらむ、げに人の世は夢なれや。

歩を移して東照宮に詣づ、鬱蒼たる樹木の影、晝なほ暗く、社頭神さびて、神威の嚴然たるを覺ゆ、丹桷碧瓦、綠なす松と映帶せる五重の塔の下を過ぎて動物園の前に出で、とあるベンチに腰打ち掛けぬ。

傍に五十の阪を五つ六つ越したらむかと覺しき婦人、四五才なる稚兒の、眼元の愛らしき、海軍服を着けたるを伴なひつゝ、腰を下し玉ひぬ、子供は紅葉の如き手にて、石版畫を擴げつゝ問ひ掛けぬ。

「祖母ちやん、これ何？」

「おゝ、それは、日本の軍艦が、魯西亞の軍艦を擊ち沈める所」

と祖母なる人は、年波の疲の、いたく刻まれたる顏に笑ひを湛へつゝ答へぬ。

「然？　日本の軍艦は強いね」

と子供は肩を怒らせて、誇り顔に云ひぬ。
「然？強ひとも、坊やも大きくなつたら、軍艦に乘つて戰爭に行くんですよ、」
「はあ、私行くよ、劍を拔いて、喇叭を、チテチテつて吹いてね」
「お丶豪い大將に爲つて、勳章をドッサリ戴くんですよ」
「はあ、私海軍大將になるよ」
祖母なる人は、嬉しげに子供を抱き上げ乍ら。
「然？豪いね滿ちやんは、今にお父樣よりも、豪くなるよ」
子供は愛らしき眼を睜つて。
「お父さんは何？ね。戰爭に行つて居るの？」
「お父さんは、海軍中佐、八島と云ふ大きな軍艦に乘つて居らつしやるの」
「然？どん！と大砲を擊つの？」
「あ丶然だよ」と云ひつ丶子供の手を取りて美術學校の方へと立ち去りぬ。此簡單なる對話は、何となう愉快に、何となう天眞爛熳に、余の鼓膜に響きぬ。暫くにして余も又立ちて、山王臺を下り、電車の便を借りて、淺草へ至りぬ。

## 淺草の熱鬪

ア丶淺草！げに聞くだに忌ま〳〵しき俗界かな、江川靑木の玉乘、丸一の太神樂、都踊、浪華踊、書生劍舞、壯士芝居、さては珍世界、電氣館、ヘエ旦那入らつしやい、お早く入らつしやい、唯今が丁度好い所、サア入らつしやい〳〵、彼方には轟々たる太鼓の響、此方には洋々たる三絃の音、耳も聾せんばかり。氣障な高襟紳士が、シガーを燻ゆらすもあり、生意氣なる女學生の袂を連ぬるあり、ベラ梅の哥貴、赤毛布の田舍漢、丸髷、島田、さては銀杏返、貴賤混合、男女雜居、千態萬狀、肩摩轂擊、喧擾熱鬪、雜蹈狼藉、名狀すべくもあらず、混雜の中を足早に行き過ぎつ丶、池の東方に出づれば紫なる藤波の靜けき池の面に映れるに、大きなる緋鯉の悠々として泳ぎ居たる、眞に忙中の閑、俗中の雅

とも許すべきか。水族館の後、瓜生刀自の銅像の邊若木の櫻の、薄綠の葉を枝もたわゝに着けたるぞ、えも云はずをかしきや。

觀音堂に集る幾千の男女、彼れ何事をか祈るらむ。未心だに直からば、一寸八分の冥加に藉らずとも、未來永劫、必蓮の臺に住まるべき者を、さりとは淺猿しき人々の振舞かな。されど此み寺は、其緣起いと〳〵古く、聖武の帝の御時、濱成兄弟のこれを淺草川に得まつりしより、今に至るまで千有餘年、其間義家賴朝の如き勇將、早雲家康の如き智士も、皆これに歸依せしと聞けば、其尊さ云ふまでもあらじ。其堂内の聯額などの書畫の氣韻高き、見る者をして立ち去るに忍びざらしむ。步して仁王門を出づ、骨逞しき仁王の腕に力瘤を入れて、嚴めしう山門の左右に立せ給ふを打見やり「おのれ仁王、うぬ何をか睨みつる」と打ち興じつゝ、吾妻橋を渡りて、向島へと足を向けぬ。

## 向島の青草



僅か半月ばかり前までは、淡紅なる櫻雲、際限しもあらぬ長堤に靉きわたり、綺羅を飾れる都の士女、群り集ひて、其雜踏云はん方なかりし向島も、今は唯葉櫻のみ青々と打ち繁り、葉末の露、衣の袖にかゝりて、有爲轉變極りなき娑婆の無常を喞つ天女の淚かと思はしむる頃なれば、其地自ら幽寂になりもて行きて、稀に人の往來するを見るのみなりき。

我が思ふ人は、有りや無しやと、詠ひけむ言問の邊に、嘴と足との赤き都鳥の遊び居たる、坐ろに在五中將の昔を偲ばしめぬ、水は濁れど隅田の川に、白帆を風に孕せつゝ、たな無し小船の走せ行けるに、濛々たる黑煙を吐きつゝ艫に白波を蹴立てゝ川蒸汽の行き交ひたる、アヽ何等の絶景ぞや。

步して白鬚の社に至る、年の頃十二三歲計りなる娘の身には、派手なるネルの單衣を着けて、濃紫の袴を裾長に着流し、雲の如き下げ髮に、紅のリボンを結ひつゝ顏に薄化粧を施したるが、左手に草籠を持ちて立てる、無邪氣なる其容姿、高尚なる其風丰、

天女の天降りましたかと覺えたり。又そが傍に頬は薔薇の如く紅に、眼は眞珠の如く淸く、口元の締りて、鼻筋の通りたる、五つばかりなる女の子、房々したる黑髪を振り冠りつゝ、紅葉の如き手をさし延べて、餘念なう、菫、蒲公英など摘み居たりしに、黄色なる蝶一羽、翩々と舞ひ來て、子供の持てる草籠の花にとまりぬ。

「あら！姉さん　蝶々が！　蝶々〳〵菜の葉にとまれ！



淡泊なる茅花、可愛ゆき菫、鮮やかなる蒲公英、深紅なる蓮花草、露重げに咲き亂れたる淺茅原を踏み分けて、木母寺に至りぬ。梅若の祠の前に、海老茶式部の學生あり、數多の人々打ち集ひ居たる中間に、悠然腰を据ゑて、此秀逸なる風景を、其巧妙なる油繪に寫し給ふにてありき。其環視の中にありて、わるびれもせず、斯道の鍛錬に、心を罩めたまふ、其熱心、其勇氣、掛けまくも恐れあれど眞に畵道を勵み給ふ心組ならば、人出多き此場所ならずとも、他に閑靜なる地は、幾らもあるべき者をと思ひ侍りき。今の世の中流以下の女學生は、すべて生意氣なり、不行跡なり、高尚閑雅貞淑靜婉は、女德の最も美なる者なりと云ふを知らぬ者ぞ多き。唯田舎より出で來りて、飯田町、神田、本鄕、小石川邊の下層なる素人下宿に住ひて、怪げなる私立學校に通ひつゝ、朝な夕な、志想の固からぬ書生輩や、理想の低き腰辨當共を相手に、春の日の暮るゝも知らで

過す者多しとかや。年若き比ひは、嚴格なる父母の膝下にありてさへ、其身を誤り易き者と聞けるに、年葉も行かぬ者を、此危險極まる都會の地に 只一人手離して、遊學せしむる其親の心こそ量り知られね。されば、如何に書畫の道に巧みなるも、如何に裁縫の技に堪能なるも、一滴の唾液をだに吐き掛くるの價値あるべからず、我は世に多くの經驗を持たぬ身にしあれば、女子の身の上に就きて、とかう申す資格はなけれど、世の頽敗を慨きつるまゝに、覺えず、過激に筆走りぬ。あはれ憂國の士、余と感慨を同じうする者ありや、如何に。

## 熊谷土堤の順禮

夏の初めの武藏野ばかり、をかしきはあらじ。富士の根、小筑波、或は碓氷の山々、淡靄の中に影も朧に聳えたる。穗に出づる麥畑の薄綠の中より、聲朗かなる雲雀の、紫立ちたる蒼穹に舞ひ上りたる。菖蒲ふける茅の家根の、繁りたる木立の中に見え隱れせるに、五月幟の清風に飜りたる。たとへなくをかし。綠の河に架けたる、白き橋を打ち渡りて、千住驛の方へと、歩を進めぬ。赤き花籠負うたる村女の綠なる麥畑を行きつゝ、歌ふ鄙歌ぞこよなうをかしきや。

夏は嬉しや、二人揃うて靑田の中を、行きつ戻りつ若菜摘み、………

あとは松吹く風に隔てられて聞き分かれず、子供の姿も雲に隱れて見えずなりぬ。程なう千住を打ち過ぎて、熊谷土堤に差しかゝりぬ。右には萬頃の靑田を控へ、左に漫々たる大河流れ、長堤二里ばかりが間葉櫻の隧道を穿ち、行く人稀に、境自ら幽邃、人をして何となう寂寞を感せしむ。行くこと凡そ半里ばかりにして、行くての方に、影は見えねど、いと憐れなる順禮の鐘。

南無阿彌陀佛、南—無—阿—彌—陀—佛—、南！無！

漸く近けば、年頃三十ばかりなる女の順禮。十一二とも覺しき女の子を伴ひつゝ來りぬ。其姿もいたく

やつれ果て、餘所の見る目も、いとゞ哀を感せしむ、されど弊れし衣に、夜光の玉を包みたらんが如く何となく凜々しき所ありて、腹からの非人とも見られざりき、女は立ち止まりて、余に恭しく一禮し、東京への道の程を問ひぬ。聞けば懐しき九州訛、さてはと胸騷ぎて、其由緒を委しく問へば、悉く涙の種ならぬぞなき、彼は薩摩の產にて、余の故郷とは程遠からぬ所の者なり。その良人たる人は、生れながらの武士育ち、過る二十七年日清の戰役に從ひて、金州に旅順に、著しき戰功を表はし、後ち威海衛の攻撃に加りしが、ア、何ぞ旻天の無情なる、敵の巨彈彼が頭上に落ち來りて、其身は微塵に碎かれ、あはれ、譽を異域の土に留て草葉の露と消えにけりとかや、此時婦人は嫁して、まだ間もあらぬ事なれば、鴛鴦の夢未だ暖かならざるに、既に堅氷の至るてふ嘆きありて、明け暮れ悲嘆の涙にくれ居たりしが、假り寢の夢は淺くとも、妹脊の緣や深かりけむ、其時はや身重うして、程なく產みしは、此子なりしとかや

婦人は之れを亡き良人の形見とも見侍べりて、いと心を盡して育て居たりしが、仇なる浮世の風は烈しう吹き荒び、其姑なる人の邪慳に堪へ兼ね、幼き娘の手を取り、順禮姿に身をやつし、心つくしの山の果より、山陰山陽を辿りつゝ、善し惡しの憂き事繁き浪華津に足をとゞめ、暫し生業の道に、みをつくしたりしが、こゝも浮世の波風激しければ、木の花の咲かむ春にも逢はずして、又も此地をさすらひ出で、鳥が鳴く東の方を志し、世の憂き艱難も近江路や、瀬田唐崎の絕景も、只歎きの內に打ち見やり、醒が井の水に映れる、此身のやつれを喞ちつゝ、田子の浦曲に藻鹽焚く、煙をば我が胸の燃ゆる思ひに比べ、富士の高根の白雪を積る我心の憂ひにたぐへて、都の地へと足を入れしは、つひ十日前の事なりきとぞ。

余は始終の物語を聽き終へて、覺えず涙に袖を打ち濕らしぬ、ア、われ若し相當の家を搆へたらなむには、否完全なる人格を備へたらむには、何くれと世話

して斯る憐れの人を助けまほしう思ひしかども、今はさる身ならねば、唯色々に慰めて、右と左とに袖を別ちぬ。四五間隔りたる頃、子供は後を振り返りて、いと名殘惜し相に、

「爺さん！左樣なら！」

折りから、筑波颪烈しく吹き來りて、綠の青葉二つ三つ、余が袖の上に落ち掛りぬ。

余は再び千住へ引き返し、大橋より船に乘りて家路に就きぬ。

（終）

# 北米通信

うまのかみ

おことはり

◎戰爭始まりまして、アメリカ通ひの船の往來も數少くなり、私共の拵へて居る新聞のやうな小新聞も相應に用が多くなり、旁々通信も思ふやうにまゐりませんやうになりました、併しこれも御國の爲めと存じます、さて明日は伊豫丸が出帆歸國致しますに付て、彼是書き集めて差上ます。



## 日本軍に從軍する米國婦人たち

◎今夕ニウヨルクから當シャトルに着、明日伊豫丸で日本に向ひます婦人たちの一行はアニタ、ニウカム、マクギー婦人を筆頭として都合十人で御座います、十人ともに曾て米西戰爭のをりに、看護婦として從軍致しました經驗が御座います。

◎其服裝は白の揃ひの上衣、帽子、前垂を着けます地質は絹紬を用ひます、これは輕くて丈夫で、洗濯もたやすい所で、撰んだので御座います、但し船中では鼠のセル地の服を着ると申ます。

◎マクギー婦人は、歐洲に於て、教育を受けましたので、巧に佛獨語をおやつります、千八百八十八年に彼がジエー、ダブルユー、マクギー氏に嫁ぎましてから、始めて醫學を學びました、良人さんは醫師で御座いますから、自然學び始めなすつたんでせう。

◎マクギー婦人は、それから醫業を營みましたが、

千八百九十八年から、凡そ四年間、米國の陸軍の補助手術委員を務めました、米西戰爭の時には看護婦隊の長として、従軍しました。

◎一行日本に到着の上は、日本政府の指揮を受けて、戰地に向ひ、其博愛の腕をふるうと云ふとです。

◎私は信じます、日本婦人の中にも、決してマクギー婦人に劣らないかたもありませう。

## 露西亞の女學生

◎今月三日の聖ペテルスボルグよりの電報によれば、露國の女子大學校で珍事が出來まして、學校は閉校を命ぜられました。

◎それは女學生が、時節柄、皇帝陛下に或る上奏文



を奉る事になりました。

◎然るに全校女學生百六十七名の名を、一々其上奏文に記入する事を許されません、まだ學生と云ふ文字を書く事を許されません、たゞ生徒一同として、差出せと云ふ、政府からの命令で御座いました。

◎女生徒(イヤ)女學生一同大に憤激いたしまして、彼是論じ合ひまして、其末に、上奏文は見合せと致しまして其代りに日本の天皇陛下に祝電を奉送しやうと云ひ出す者が御座いまして、一同之に和して、拍手致しましたので御座います。

◎何かはたゞでをさまるべき、即時に閉校を命ぜら

れました。

## 米國婦人の日露觀

◎婦人と雖も、常に新聞雜誌を見て、私共時々議論の相手になる事があります、米西戰爭マニラ戰爭の時に、日本婦人は、米國兵の橫濱に立寄るを見て、何とも思ひませんでしたのは、其たちがもとから相違して居ますからです。しかし日本婦人に今少し、世間の事に注意を拂ふやうに致させたいものです。

（二月二十八日）

## ○英國に於ける「日本國軍人遺族救助基金」募集趣意書

大貌利典在住日本國人諸君

我鄕國大事の此の期に方り職務上其の他の事情により此の國に在留する日本國人は目下干戈を取り我天皇陛下及鄕國の爲め萬難を冒しつゝある陸海軍人に對し感謝と同情の念を表明せむことを希ふや疑なし

我等下名の者は此に右の如き我等日本人に共通なる希望を適當に實行せむことを我同胞に謀り陸海軍人に對し我等の力の及ぶ限りの慰藉と奬勵の方途を供するを以て其責務なりと思惟したり而して婦人としての我等の思想は欣然鄕國の爲めに其の命を致しつゝある勇敢なる軍人の寡婦及家族に及ぶは自然の勢にして我等は遺族に慰安を與ふるの途を講ずるを以て我等の希望を實行するに付最も適切なる方法なりと感じたり是を以て我等は此に林子爵及荒川氏の賛助を得て「日本國陸海軍々人遺族救助基金」と稱する財本を造らむことを發議す希くは諸君か寄附せんと欲せらるゝ金額を多少に拘らず寄附あらんことを

我等の希望は必ずしも我同胞に限らるゝにあらず鄕國の爲めに職務の爲めに殪れたる親愛なる夫若は子に別かれたる哀れなる婦女救助の爲め日本國の一切の友より投ぜらるゝ惠與は我等の最も欣むで受領する所なり若し寄附者諸君の中に其の寄附を基金特定の目的以外の事に用ゐむことを希望せらるゝあらば我等は之に從ひ其の取計を致すへしと雖も特に此の希望なくんは寄附は總て右基金の内に入れ我等は之を本國政府に送付するに方り必ず戰死軍人遺族救助に充用せむことを求むへし

此の基金は平和克復まで引續き募集すへけれとも本國へは募集金相應の額に達するとき時々之を送金すへし

此の基金に關する一切の通信は倫敦「ピショップスゲート」街八十四番日本總領事館受附「日本陸海軍々人遺族救助基金」幹事宛にて發送せられたし

寄附は「ピショップスゲート」街百二十番橫濱正金銀行取締役兼支配人山川氏宛にて送附ありたく小切手及郵便爲替は日本國寄附勘定と横書し同じく山川氏受取にて振出されたし

林子爵夫人　門野夫人　荒川夫人
西巻夫人　小室夫人　內田夫人




# 看護婦志願

谷活東

『一』

最う花曇と云ふのであらうか、朝晴たと思へば夕暮雨になり、夕暮晴れたかと思へば、翌朝は暗い中からしと〳〵降。ほんとうに、外稼の三ちやんは酷からう――と浅蜊賣三吉の姉は、仕事の手を止めて、今日も晝過ぎから雨の、薄暗い障子を恨めしく眺めた。

三吉は十四才である、姉はお光と云つて、十八才、容色ばかりで無く、氣質も好い子だと近所での評判である。その上は今一人兄があつて、日本橋邊の立派な料理店に料理番を勤めて居たが――國さんと云へば此道のこれも評判の腕達者で、處から口の利いたお客も多く、料理番へと云つて下がる祝義も少からず、それを集めてはこの深川の家に送つて居たが――今年二十六才の豫備で、伊東國太郎、然かも〇〇兵であ

つたから、動員令から、早くも第一軍に加はり、二月十六日、勇ましく敵地へ向つて出發した。
この善良なる三人の子の父は、三年前に世を去り、母は昨年の夏から、眼病に罹つてその暮には全たく明を失したのであつた。淺草に、有名なる紳士伊東時藏は、この三人の父の兄で、國太郎には立派な叔父であるけれど、國太郎が出發する事を知らせても、手紙一本くれず、まして顔も出さなかつた。が、平常この叔父の心がけを知つた三人の子及び母は、さもあるべしと思つて、別に怒りも爲なかつたのであつた。

貧しきこの深川の家、お光は他仕事をし、三吉は淺蜊を賣り、日本橋の兄からの助けとで、漸く其日の煙を立てゝ居たが、兄は居らなくなり、わけて戰時の此頃、他仕事とても少く、淺蜊も籠に殘つて來る事が多いのである。

かく、其日の米の代にも思をなやます中に、姉なるお光は、一つの願を以て居た、それは誰も多く望む看護婦になりたいと云ふ事である。けれど、盲目の母を置いて、十四歳の弟を置いて、何う爲て行かれやうと思ふと思ふだけ日に〱思は益して行くので、仕事の手を休めて、障子を見詰た時は、何時も、兄の行先と共に、この願をくり返すのであつた。が、かたへに、火鉢に手をかざして物も言はず、何事か考案するが如き母に目をやつては、妾は何故かうだらう、と心に心を叱つて、再び針にかゝる、がその手は次第にたるむ。

『オヤ、最う日が暮れるのかしら。』

と獨言、今も、雨の障子から、手元の暗くなつたのに驚いたのであつた。

『雨が降るからだよ、お彼岸じやァないか、一年中で、一番日が永い時だね、まだお前四時頃じやァな

いか。』
と目は見えぬが、時計は無いが、八幡鐘は聞えぬが、母は恁く云つた。
『ほんとに然うですねえ、毎日々々降てこまること、三ちやんは早く歸つてくれゝば可いのに。』
とお光は又針を運び初めた。家は狹く、且汚ないけれど、お光が今縫つて居る衣服は、輝くばかり立派なもので、近所のさる大家から、娘の着物、花見の間にあふやうにと、羽織を合せて三枚、お光が賴まれたのであつた。その娘とは、お光が子供の時分には友達であつた、が、彼方は富、此方は貧、次第にうとくなつたのである。
花見の間にあふ樣に、是非お光さんに、と其娘が云つたと、使のものが此品を持つて來た時、多感の性に生れたお光は、一時これを突き返さうと迄思つた。かゝる時節に花見とは何事、よし行くにしても世を憚らねばならぬのに、ことさらに花見と云つて誂へて來たは、私を馬鹿にしたも同樣！
けれど、この不景氣、これを三枚拵へれば……と淺ましい思ひとは承知の上、受取つて縫つて居るのである。時折は、これもお光を苦しめる種の一つである。
永々しい春の日も、其衣服の縞が見えわかぬまでに暮そめた。濡れに濡れて、小簑から雫を垂して、門口へ三吉が歸つて來る。折から、
『御免なさい、光ちやんは、居て。』
と入つて來た女があつた。

「二」

異樣な姿に三吉は、たゞさへ圓い目を、いよ〳〵圓くして眺めた。お光は走り出て來て、



『オヤ。まア珍らしい事。』
と云ふ、女は、
『ほんとに御不沙汰しちやつて、相濟みません。』
と笑顔、
『さア何うぞお上り下さい、こんな汚ない處だけれど。』
『えゝ、上りますとも、ほんとに毎日來た家だねえ。』
と見廻す、この女こそ、お光がかの望を起した導火線で、お光の極のなかよし、また兄の未來の妻と極めた譯でも無いが、然う云ふ話が無かつたでも無い。即ち今は赤十字社の看護婦を爲て居るので、名は清水お京、年はお光より一つ上で十九の厄。



三吉はその白い帽、白い服に驚いたのである、お京は看護婦をして居ても、此の姿で來たのは初てなので。

『阿母さん、暫らく。』

と挨拶をする、母は目は見えぬが、その聲でお京と悟つて、

『よくお出下さいました。』

『ほんとに日暮方伺つて、飛んだお邪魔致します、お光ちやん、御用があるなら手傳ひますよ。』

『あら、今灯をつけて參ります。』

と三分心の洋燈、あまり明るくは無いが、座敷の眞中へ出す。

『ほんとに、よく來て下すつたのねえ、今日はゆつくりして行ても可いのでせう。』

とお光は茶を汲みながら、

『いゝえ、然うもいかないの、お光ちやん。』

と改まつて、

『今日はねえ、實は私、お暇乞に來たのよ。』

と云ふ。

『え！。』

とお光は驚いて、

『お暇乞なんて、何處へ……。』

『實はねえ、私は澁谷の病院に居なくちやアならないんだけれども、今度の戰爭でせう、私は行きたくつてたまらなくつて、それで願つて出たの、然うしたら許されてね、明日は最う立つのよ。』

あゝ、この親しき友は、お光を羨ませに來たやうなものである。お光を苦しめに來たやうなものである。

「然う、それは……。」

とお光は、しげ〳〵其姿を眺めて、

「可かつた事ねえ、兄さんも向ふへ行つて居るわ。」

と云ふ。

「然うですつてねえ、何日お立ちになつたのです。」

「先月の十六日よ、三ちやん。」

と足を洗つて來て、暗い隅に座つて居る三吉を見て、

「此處へ來て御挨拶をしないのかい、お京さんじやアないか、可笑しな子だわねえ。」

「知つてらアい。」

と云ひながら三吉は近く來て、默つてお辭義をする。

「ほんとに大きくなつたのねえ、もう大人だわ、よく精が出ますねえ。」

とお京は振返つて云つた。

「お京さんはねえ、三ちやん、今度兄さんの行つてる方へ行くんだよ。」

「仁川かへ。」

と三吉が云ふ。

「まア、そんな方なの。」

とお京が答へる。
『可いなア、行つて何うするの女は。』
『負傷した人の看護をするのさ。』
とお光が云ふと、
『知つてらアい。』
『だつてお前聞くからさ。』
『聞いたつて知つてるんだい、露西亞人だつて怪俄人は救けるんだらう、俺ア繪で見たよ、露西亞人の野郎、傷が痛さうに泣つ面アして居やアがつた。』
『ホヽヽ、三ちやんは口が惡いねえ、三ちやんも早く大きくなつて、兵隊に行くと可い。』
『俺ア、陸軍なんぞにやアならねえ、海軍になるんだ、仁川じやア二艘軍艦を沈めたんだねえ、行くと見られるんだねえ、可いなア行かれると可いなア。お京ちやん行んだね。』
『あゝ。』
『俺も然うだらうと思つた、先刻入つて來た時、なんだか見たやうだと思つたら、繪で見たんだ、赤十字社の看護婦さ、露西亞人は神樣だつて然う云つてるつて、お京さんはエライなア、觀音樣のやうだ。』
『ホヽヽ、眞實に三ちやんは意勢が可いねえ。』
とお京が云ふ。
『だつて深川つ子だもの。』
とお光が笑ふ。

『三』

『姉ちやん。』

と不意に三吉は呼んだ。

『何んだへ。』

『姉ちやんもお京ちやんと一緒に行かないか、看護婦になつて、俺ア看護婦大好だぜ。』

と云ふ、何うしてまア、この子がこんな事を云ふのかとお光は思つて。

『だつてお前、お前と阿母さんと置いて行かれるものかね。』

『何故』

『何故つてお前。』

『へん、人を馬鹿にして居らア、俺だつて男だぜ、阿母さん一人位俺が引受けらア、そんな事云はずにお出よ、兄は兵隊に行つて、姉さんが看護婦に行つて居るて云やア、俺だつて巾が利かア。』

『ホヽヽほんとに意勢が可い事ねえ。』

とお京は云つたが、阿母さんのしよんぼり火鉢の前に座つて居るのを見ては、お京も、お光に行けとはすゝめられぬのである、お光は、たとひ自分が行かれぬにしても、よくこの子は、恁う云ふ事を云つてくれると思つて、嬉しく涙ぐまれるのであつた。

お京はお光の困つて居るのを見て取つて、話を轉じやうと、

『今日はねえ、私の家で、私の送別會をしてくれたのよ。』

と云ふ。

『然う、さぞ賑やかだつたでせう。』

『えゝ、弟も妹も皆寄つてねえ、弟にお酒を呑ましたのよ、可笑くつて、あんな小さな體で醉つぱらつて、ホヽヽヽ、三ちやんとは同い年だけれど、ほんとに意氣地が無いわ。』

『あら、それでも、學校へ行つていらつしやるから、温和しいでせう、これはほんとに暴れもんで、仕様がないんですよ。』

『いゝえ、あんなじやア、此度のやうな時にやア役に立ちませんよ、それからねえ、可笑しくつてよ、叔父さんが。』

『叔父さんが。』

『えゝ、叔父さんがねえ、醉つてねえ、劍舞をするんだつて、刀を拔いてね、阿父さんに叱られたの、叔父さんは老人のくせに、時々可笑しな事をするのよ。』

『へえ！。』

とお光は聞いて居たが、お京の送別會に、弟に酒を呑まして醉はせる、老人の叔父さんが劍を拔いて舞はんとする、それを父なるが叱ると云ふ物語には、一家親類中の暖かな樣が目に見えるのである。自分の叔父は金持で、名聲ある紳士でも、この劍を拔いて舞はんとする、お京の叔父と双べては、雪と墨の差があるとお光は思つた。あゝ、あの叔父が、時に興じて、劍を拔いて舞ふほどの意氣があつたら、私も今度は阿母さんを預けて、看護婦になつて行く事が出來やうにと、美しさの度はます／＼益て來る。お京は言葉を轉じて、却つてお光を苦しめるのであつた。

『それからねえ、本郷の兄も來たんですよ、私の兄さんは、近眼だもんだから、兵隊に出られなくつてねえ、今度も口惜しがつて居るのよ、國さんが羨ましいつて。』

と云つたが急に言葉を更へて、

『國さんは仁川に居らつしやるでせうか。』

と聞く、

『え丶、仁川から、葉書が來ましたがね、今何處に居りますか。』

『然うねえ、解りますまいね、尤も私が向ふで國さんに會へるやうじやア大變だ、ホ、、、、國さんが赤十字社へ入るやうじやアねえ』

『い丶え、あれも亂暴ものですからね、私は戰死するか、負傷ぐらゐは屹度して來るだらうと思ふのよ、何分お賴み申します。』

『はア、もし然うだつたら、私が一生懸命に看護するわ。』

と云ひながら、何を思ひ出でたか、お京は顔を赤めたのであつた。

『四』

つい話に浮れてと、止めるも聽かず、お京は暇乞ひして歸つた、それから、一週間がほどは此家に何事も無かつた、八日ばかり經つてお京の手紙が仁川から來た。

此間はつい心急いて失禮しました、この仁川に着くと、思ひがけなく國さんに會ふ事が出來た、けれど、國さんが負傷したわけでも、又、病氣でも無いから御安心なさい。それから國さんに、お暇乞に行つた日の事や、皆さんがお變り無い事や、三吉さんが意勢が好くつて、貴女に看護婦になれとすゝめた事や、何か話したら、三吉も來年は十五になれば男一人前だ、阿母さん一人ぐらゐは引受けるが可い、俺もお光に看護婦になれとすゝめる、今度の戰爭は何うで永引くから、看護婦も多くなくてはこまるのだ、私か

らもすゝめるやうにとの事でした。貴女のお心次第になさい、私は無理にとは申しません、けれど、もしおなりになるなら、手續はこれ〳〵恁うするが一番可いと、心切な、長い長い文であつた。
お光はこれを見ると最う、矢も盾もたまらぬ。が母に云ふ譯にはゆかず、何うしやうかと、いろ〳〵頭を廻らして居た、處へ何うしたか其日晝頃に三吉が歸つて來て、
「親方、此方へ入つておくんなさい。」
と云ふと、年四十ばかりの、結城紬の羽織に同じ衣服を着て、でつぷり太つた、見るからに立派な男が、
「御免下さい。」
と入つて來た。お光は驚いたが、兎に角座布團などを出して挨拶すると、
「姉ちやん、俺アなんだ、お前に今日は話しがあつて、此親方を連れて來たんだ、中洲に居なさる、三富さんと云ふんだ、俺が何時でも淺蜊を買つて貰うんだ。」
と云つて、
「ねえ親方、これが俺の姉さんだが、何うからうまく云つて下さい、親方が付いて居てくれゝば姉さんも安心するんだ。」
親方と云はれたのは、靜かに笑ひを含んで、
「實は恁う云ふ譯なんです、不意に出たんで、お驚でせうが、今朝、三吉さんが平時の樣に來ましてね、それから私に賴みがあると恁う云ふんです、何んだと聞くと、實は俺の兄さんは兵隊になつて、朝鮮へ行つて居るが、姉さんも看護婦に爲て向ふへやらうと思ふんだ、俺があとを引受けると云つたけれども、子供だもんだから、姉さんが信用してくれない、だから親方が來てあとのところは俺が呑込んだと云つて

下さい、然うすりやア姉さんも安心して行かれる、と云ふじやごわせんか、私も感心しやしてね、今日は實はその呑み込みに來たわけなんです、私も中洲で三富と云やア、ちつたア顏も賣つて居るんでございます、どうですえ、御出になつちやア。』

とかたへなる母親を尻目に云ふ。お光は涙ながらにこれを聞き了つて、何も云はず、今仁川のお京から來た手紙を親方に渡した、親方は取つて見て、讀み了つて、

『イヤ何うも感心な方ばかり、これだから日本は勝つんです、ねえ、阿母さん、未だ御挨拶もしませんが、何うです、このお子を看護婦に、お出しなすつちやア。』

母親は、三富の親方と聞いて、其名高い事は、お光よりも却つてよく知つて居るので、こんな破家へ來てくれた事の、却つて勿體ないと迄思つて居たのだから、丁寧に禮をして、

『然うすれば、私は兄の身の上にも一人でやつて置きますより、安心が出來るのでございます、けれど看護婦だつて、然うたやすくはなれますまい。』

と云ふ、

『なアに貴女、稽古さへすれば直ぐです、然う極りやア、お光さんは、もとより御出になりたいのでせう。』

『はい……。』

嬉し涙とはこれか、お光の望みは叶つたのであつた。

『親方。』

と三吉が呼ぶ。

『なんだ。』

『次手にもう一つ引受けておくんなさい、此處に在る此衣服だ、金持の娘が花見に行くんだつて姉さんに賴みやアがつたんだ、今時ほんとうに、花見なんて、俺は癪に障つて。』

と云ふが早いか、摺り寄つてビリ〳〵破り初めた。三富は笑つて。

『ハヽヽ、面白い、面白い。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

凡て三富が引受てくれて、お光は看護婦となりすまし、春過ぎて夏の初めの五月は、早や戰地に向つて出發した。天の佑か、三富が名醫にかけてくれた故か、母の目の霧は次第に晴れて來て、お光が仁川からよこした手紙は、明かに見えるやうになつた。されば、國太郎からしば〳〵來る、勝軍の報知も、其後は母が讀んで聞かせては、三吉を喜ばせる事となつた、光明！親子四人の光明は、かゝる破家にも輝きわたる。

（完）



# 危き生命

蘆城生譯

『大江さん。私は倅の辨吉を兵役に就かした時には、此廣い合衆國中にも、こんな立派な倅を國に捧げた親は又とあるまいと、自分ながらも心の中で悦んで居りました。倅は唯　ほんの僅の間居眠つたに相違ありませぬ。從來仕事中に居眠なんかする樣な事は、唯の一度もありませんでした。物事をよく辨へた、末頼もしい子で、身長は私ほどございましたが、まだ十八歳で、……あゝ思つても詮ないことです、番兵に立つてゐる間に居眠つた科で殺されるとは……電報では二十四時間以内といつて來ましたから、今頃はもう彼の世にいつて居るかも知れません。』

老人の此話を氣の毒さうに聽いて居た大江牧師は、

『この上は唯御子息が神樣のお膝もとへおいでなさる樣にお祈りをするのが何よりです。』

と慰める樣に答へた。

『さうでございます、お慈悲深い神樣に……いつぞや、辨吉が申しますに、「私が一人前の男になつたら、一朝事ある日には、この腕を國家のお役に立てたい。若しも其時願が叶はなかつたら、どんなに悔しからう。一生百姓で朽ち果てる位なら、いつそ此腕がもげる方がよい」といつて、其逞しい腕に力瘤を入れて、突き出して見せました。其時私も「よくいつた。その時は確乎やれ、神樣は屹度守つて下さるよ」と申しました。實に神樣は倅の身の上を守つて下さるとは存じますが……』

一食事は必ず食堂に限る事但し成るべく質素を守るべし
一看護及小使を濫りに使用すべからず
一繃帶製造は最も念を入れ後より卷直し等無之樣注意すべき事

右樣に注意に注意を加へて製造しますものを仕上げましてから後、またこれに百二十度の熱を加へて消毒いたし、ブリッキの罐に密閉して、それをまた木の箱に入れて送るのです。

清水樣のお話と右の規則は、箇人で繃帶献納しやうとする折に、大に心得となるとであると思ひます。

矢張篤志看護婦の方の帽子を造つて佐世保に百五十、小倉に三百、松山の捕虜患者に二十二送りました、否二十四名でございましたが二名は死亡いたしました、これが禮狀ですと、清水樣は記者に一通の奉書を示されました、記者は暫くそれを拜借して書き取りました。

拜啓陳れば篤發第六十四號を以て貴會

---

東伏見宮妃殿下
梨本宮妃殿下
御初め外二十名の御方々に於て御製造相成候患者用帽子五百個當病院へ御寄贈被成下恭なく拜受仕候右は御申付の通り出征地より後送入院患者へ御厚意の趣旨申聞配賦方取計可申候間左樣御承知可被下御禮迄此段御請申上候也　恐惶謹言

追て甚だ恐縮の至に奉存候得共　東伏見宮梨本宮兩妃殿下へ閣下より特に宣布御傳奏被成下度此段奉願候也　敬具

明治三十七年四月三日

小倉陸軍豫備病院長
陸軍三等軍醫正　村田豊作

日本赤十字社篤志看護婦人會長
侯爵夫人　鍋島榮子殿

去月は英國公使夫人が主唱者になつて各國公使夫人の賛成せられて、上野に音樂會を催しまして、その上り高一千七百六十圓を赤十字社に献納せられたさうでございます、本日來會の外國婦人はガーデー婦人、ウエスト孃、佐藤大佐夫人、リヒー、松平子爵夫人、ルイスベルなどの方々また會員の有爵者は、公爵

三條千代子、侯爵山内禎子、同西鄉伶子、伯爵佐野尙子、同酒井夏子、子爵大村梅子、山口谷子、男爵小早川式子、同相浦たつ子などの方々でございました。

講師足立寛氏は芥子泥、破血器使用法につき種々說かれました、山上兼善氏は結節帶に關する講義をせられて、人體模型について實地練習を夫人令孃方に示されました、又た妃殿下にも御手づから遊ばしました。

本社の目的は博愛、尙武、社交を奬勵いたし、また個人として看護に暗からずば、機に臨んで狼狽せず、充分効を奏することがございませうと淸水樣がお話し遊ばしました、なほ萬一々師團の負傷者が當地に參られます折には、二三の病院に收容し、毎日篤志の方二三名づゝ參られて、看護いたす計畫でございますとの事です。

（をはり）

# 葉櫻狩

園田紅村

## 上野の淸楚

花の色は移りにけりな、と慨世の詩人をして、歌はしめけむ四月の花も、降り續ける春雨に、名殘なう散り失せて、梢に囀る鶯の聲も、力なげに聞え、靑葉生ひ繁りて、杜鵑血に啼く時節とはなりぬ。綠の松が枝に掛れる藤の花、千町の小田に波打つ靑麥、さては雲雀の靑空に囀づる、蝶々の菜花に狂へる、興味津々たる詩趣、豈に長閑けき春の日に劣らましやは。いでや、いぶせき僑居の樓上を逃れ出で、楚々たる天然の戀愛にあこがれつゝ、堆き心の塵埃を淸めんかな。

されど、我が忠勇なる武士は、唐土の虎伏す野邊を驅け迴り、征衣の袖をば、肌寒き草葉の露に濕らしたまふ今日此頃、如何でか、銀鞍に跨り、華車に乘るなど、縉紳貴女の遊を學ぶべきかは。身は小倉織

の袴に、麥藁の古帽を冠りつゝ、甲斐々々しくも、九段なる寓居をさすらひ出でしは、朝の八時と覺しき頃なりき。

此日天氣殊に麗しう。靑藍に紫紺を交へたらむが如き空は、一點の曇もなくて、華やかなる朝日隈なく照りわたりぬ。

先づお茶の水より、湯島に出で天滿宮を伏し拜みつゝ、不忍の湖畔へ着きぬ。淺綠なる蓮の此處彼處に若葉を出せるに、殘んの雁の二羽三羽、細波の上に浮びたる、忍が岡の樹々の梢の、綠翠滴るばかりなるに、辨天の御堂の赤う見ゆる、眞に一幅の活圖畫なり、靑草綠葉生ひ繁りたる邊りを、輕裝せる淑女の袖振りはへて、行き交ひたる、閑雅なる角帽の君の、ステッキ打ち振りつゝ、早足に行き過ぎたる、ア、何たる崇高の詩趣ぞや。

歩して石階を攀ぢ、淸水堂の傍を過ぐ、音に名高き秋色櫻、榮華の夢を葉櫻に留め、人をして、今年花落ち、顏色改まり、明年花開かば、誰か又わらむとて、世の常なきを嘆たしむ。想へば、井の端の櫻わぶなしと詠みけむ、古への才媛も、今は苔むす墓標の下、枯骨冷やに眠りますらむ、げに人の世は夢なれや。

歩を移して東照宮に詣づ、鬱蒼たる樹木の影、晝なほ暗く、社頭神さびて、神威の嚴然たるを覺ゆ、丹桷碧瓦、綠なす松と映帶せる五重の塔の下を過ぎて動物園の前に出で、とあるベンチに腰打ち掛けぬ。

傍に五十の阪を五つ六つ越したらむかと覺しき婦人、四五才なる稚兒の、眼元の愛らしき、海軍服を着けたるを伴なひつゝ、腰を下し王ひぬ、子供は紅葉の如き手にて、石版畫を擴げつゝ問ひ掛けぬ。

「祖母ちやん、これ何？」

「おゝ、それは、日本の軍艦が、魯西亞の軍艦を擊ち沈める所」

と祖母なる人は、年波の疲の、いたく刻まれたる顏に笑ひを湛へつゝ答へぬ。

「然？　日本の軍艦は强いね」

と子供は肩を怒らせて、誇り顔に云ひぬ。
「然？強ひとも、坊やも大きくなつたら、軍艦に乘つて戰爭に行くんですよ。」
「はあ、私行くよ、劍を拔いて、喇叭を、チテチテつて吹いてね」
「おゝ豪い大將に爲つて、勳章をドッサリ戴くんですよ」
「はあ、私海軍大將になるよ」
祖母なる人は、嬉しげに子供を抱き上げ乍ら。
「然？豪いね滿ちやんは、今にお父樣よりも、豪くなるよ」
子供は愛らしき眼を睜つて。
「お父さんは何？ね。戰爭に行つて居るの？」
「お父さんは、海軍中佐、八島と云ふ大きな軍艦に乘つて居らつしやるの」
「然？どん！と大砲を擊つの？」
「あゝ然だよ」と云ひつゝ子供の手を取りて美術學校の方へと立ち去りぬ。此簡單なる對話は、何となう愉快に、何となう天眞爛熳に、余の皷膜に響きぬ。暫くにして余も又立ちて、山王臺を下り、電車の便を借りて、淺草へ至りぬ。

## 淺草の熱鬧

ア、淺草！げに聞くだに忌ま〳〵しき俗界かな、江川靑木の玉乘、丸一の太神樂、都踊、浪華踊、書生劍舞、壯士芝居、さては珍世界、電氣館、ヘエ旦那入らつしやい、お早く入らつしやい、唯今が丁度好い所、サア入らつしやい〳〵、彼方には轟々たる太皷の響、此方には洋々たる三絃の音、耳も聾せんばかり。氣障な高襟紳士が、シガーを燻ゆらすもあり、生意氣なる女學生の袂を連ぬるあり、ベラ梅の哥貴、赤毛布の田舍漢、丸髷、島田、さては銀杏返、貴賤混合、男女雜居、千態萬狀、肩摩轂擊、喧擾熱鬧、雜蹈狼藉、名狀すべくもあらず、混雜の中を足早に行き過ぎつゝ、池の東方に出づれば紫なる藤波の靜けき池の面に映れるに、大きなる緋鯉の悠々として泳ぎ居たる、眞に忙中の閑、俗中の雅

とも許すべきか。水族館の後、瓜生刀自の銅像の邊若木の櫻の、薄綠の葉を枝もたわゝに着けたるぞ、えも云はずをかしきや。

觀音堂に集る幾千の男女、彼れ何事をか祈るらむ。心だに直からば、一寸八分の冥加に藉らずとも、未來永劫、必ず蓮の臺に住まるべき者を、さりとは淺猿しき人々の振舞かな。されど此み寺は、其緣起いと〱古く、聖武の帝の御時、濱成兄弟のこれを淺草川に得まつりしより、今に至るまで千有餘年、其間義家賴朝の如き勇將、早雲家康の如き智士も、皆これに歸依せしと聞けば、其尊さ云ふまでもあらじ。其堂內の聯額などの書畫の氣韻高き、見る者をして立ち去るに忍びざらしむ。歩して仁王門を出づ、骨逞しき仁王の腕に力瘤を入れて、嚴めしう山門の左右に立せ給ふを打見やり「おのれ仁王、うぬ何をか睨みつる」と打ち興じつゝ、吾妻橋を渡りて、向島へと足を向けぬ。

## 向島の青草

僅か半月ばかり前までは、淡紅なる櫻雲、際限しもあらぬ長堤に靉きわたり、綺羅を飾れる都の士女、群り集ひて、其雜踏云はん方なかりし向島も、今は唯葉櫻のみ青々と打ち繁り、葉末の露、衣の袖にかゝりて、有爲轉變極りなき娑婆の無常を喞つ天女の涙かと思はしむる頃なれば、其地自ら幽寂になりもて行きて、稀に人の往來するを見るのみなりき。

我が思ふ人は、有りや無しやと、詠ひけむ言問の邊に、嘴と足との赤き都鳥の遊び居たる、坐ろに在五中將の昔を偲ばしめぬ、水は濁れど隅田の川に、白帆を風に孕せつゝ、たな無し小船の走せ行けるに、濛々たる黑烟を吐きつゝ艫に白波を蹴立てゝ川蒸汽の行き交ひたる、ア、何等の絕景ぞや。

歩して白鬚の社に至る、年の頃十二三歲計りなる娘の身には、派手なるネルの單衣を着けて、濃紫の袴を裾長に着流し、雲の如き下げ髮に、紅のリボンを結ひつゝ、顏に薄化粧を施したるが、左手に草籠を持ちて立てる、無邪氣なる其容姿、高尙なる其風丰、

天女の天降りましたかと覺えたり。又そが傍に頰は薔薇の如く紅に、眼は眞珠の如く淸く、口元の締りて、鼻筋の通りたる、五つばかりなる女の子、房々したる黑髮を振り冠りつゝ、紅葉の如き手をさし延べて、餘念なう、菫、蒲公英など摘み居たりしに、黄色なる蝶一羽、翩々と舞ひ來て、子供の持てる草籠の花にとまりぬ。

「あら！姉さん　蝶〳〵が！　蝶々〳〵菜の葉にとまれ！

淡泊なる茅花、可愛ゆき菫、鮮やかなる蒲公英、深紅なる蓮花草、露重げに咲き亂れたる淺茅原を踏み分けて、木母寺に至りぬ。梅若の祠の前に、海老茶式部の學生あり、數多の人々打ち集ひ居たる中間に、悠然腰を据ゑて、此秀逸なる風景を、



其巧妙なる油繪に寫し給ふにてありき。其環視の中にありて、わるびれもせず、斯道の鍛錬に、心を單めたまふ、其熱心、其勇氣、掛けまくも恐れあれど眞に畫道を勵み給ふ心組ならば、人出多き此場所ならずとも、他に閑靜なる地は、幾らもあるべき者をと思ひ侍りき。今の世の中流以下の女學生は、すべて生意氣なり、不行跡なり、高尚閑雅貞淑靜婉は、女德の最も美なる者なりと云ふを知らぬ者ぞ多き。唯田舍より出で來りて、飯田町、神田、本鄉、小石川邊の下層なる素人下宿に住ひて、怪げなる私立學校に通ひつゝ、朝な夕な、志想の固からぬ書生輩や、理想の低き腰辨當共を相手に、春の日の暮るゝも知らで

過す者多しとかや。年若き比ひは、嚴格なる父母の膝下にありてさへ、其身を誤り易き者と聞けるに、年葉も行かぬ者を、此危險極まる都會の地に　只一人手離して、遊學せしむる其親の心こそ量り知られね。されば、如何に書畫の道に巧みなるも、如何に裁縫の技に堪能なるも、一滴の唾液をだに吐き掛くるの價値あるべからず、我は世に多くの經驗を持たぬ身にしあれば、女子の身の上に就きて、とかう申す資格はなけれど、世の頽敗を慨きつるまゝに、覺えず、過激に筆走りぬ。あはれ憂國の士、余と感慨を同じうする者ありや、如何に。

## 熊谷土堤の順禮

夏の初めの武藏野ばかり、をかしきはあらじ。富士の根、小筑波、或は碓氷の山々、淡靄の中に影も朧に聳えたる。穗に出づる麥畑の薄綠の中より、聲朗かなる雲雀の、紫立ちたる蒼穹に舞ひ上りたる。菖蒲ふける茅の家根の、繁りたる木立の中に見え隱れせるに、五月幟の清風に飜りたる。たとへなくをかし。綠の河に架けたる、白き橋を打ち渡りて、千住驛の方へと、歩を進めぬ。赤き花籠負うたる村女の綠なる麥畑を行きつゝ、歌ふ鄙歌ぞことなうをかしきや。

夏は嬉しや、二人揃うて青田の中を、行きつ戻りつ若菜摘み、…………

あとは松吹く風に隔てられて聞き分かれず、子供の姿も雲に隱れて見えずなりぬ。程なう千住を打ち過ぎて、熊谷土堤に差しかゝりぬ。右には萬頃の青田を控へ、左に漫々たる大河流れ、長堤二里ばかり間葉櫻の隧道を穿ち、行く人稀に、境自ら幽邃、人をして何となう寂寞を感ぜしむ。行くこと凡そ半里ばかりにして、行くての方に、影は見えねど、いと憐れなる順禮の鐘。

南無阿彌陀佛、南―無―阿―彌―陀―佛―、南！無！

漸く近けば、年頃三十ばかりなる女の順禮。十一二とも覺しき女の子を伴ひつゝ來りぬ。其姿もいたく

やつれ果て、餘所の見る目も、いとゞ哀を感ぜしむ、されど弊れし布に、夜光の玉を包みたらんが如く何となく凛々しき所ありて、腹からの非人とも見られざりき、女は立ち止まりて、余に恭しく一禮し、東京への道の程を問ひぬ。聞けば懐しき九州訛、さてはと胸騒ぎて、其由緒を委しく問へば、悉く涙の種ならぬぞなき、彼は薩摩の產にて、余の故郷とは程遠からぬ所の者なり。その良人たる人は、生れながらの武士育ち、過る二十七年日清の戰役に從ひて、金州に旅順に、著しき戰功を表はし、後ち威海衛の攻擊に加りしが、ア、何ぞ旻天の無情なる、敵の巨彈彼が頭上に落ち來りて、其身は微塵に碎かれ、あはれ、譽を異域の土に留て草葉の露と消えにけりとかや、此時婦人は嫁して、まだ間もあらぬ事なれば、鴛鴦の夢未だ暖かならざるに、既に堅氷の至るてふ嘆きありて、明け暮れ悲嘆の涙にくれ居たりしが、假り寢の夢は淺くとも、妹脊の緣や深かりけむ、其時はや身重うして、程なく產みしは、此子なりしとかや婦人は之れを亡き良人の形見とも見侍べりて、いと心を盡して育て居たりしが、仇なる浮世の風は烈しう吹き荒び、其姑なる人の邪慳に堪へ兼ね、幼き娘の手を取り、順禮姿に身をやつし、心つくしの山の果より、山陰山陽を辿りつゝ、善し惡しの憂き事繁き浪華津に足をとゞめ、暫し生業の道に、みをつくしたりしが、こゝも浮世の波風激しければ、木の花の咲かむ春にも逢はずして、又も此地をさすらひ出で、鳥が鳴く東の方を志し、世の憂き艱難も近江路や、瀨田唐崎の絶景も、只歎きの内に打ち見やり、醒が井の水に映れる、此身のやつれを喞ちつゝ、田子の浦曲に藻鹽焚く、煙をば我が胸の燃ゆる思ひに比べ、富士の高根の白雪を積る我心の憂ひにたぐへて、都の地へと足を入れしは、つひ十日前の事なりきとぞ。

余は始終の物語を聽き終へて、覺えず涙に袖を打ち濕らしぬ、ア、われ若し相當の家を搆へたらなむには、否完全なる人格を備へたらむには、何くれと世話

して斯る憐れの人を助けまほしう思ひしかども、今はさる身ならねば、唯色々に慰めて、右と左とに袖を別ちぬ。四五間隔りたる頃、子供は後を振り返りて、いと名殘惜し相に、

「爺さん！左様なら！」

折りから、筑波嵐烈しく吹き來りて、綠の靑葉二つ三つ、余が袖の上に落ち掛りぬ。

余は再び千住へ引き返し、大橋より船に乗りて家路に就きぬ。

（終）

# 北米通信

うまのかみ

おことはり

◎戰爭始まりまして、アメリカ通ひの船の往來も數少くなり、私共の拵へて居る新聞のやうな小新聞も相應に用が多くなり、旁々通信も思ふやうにまゐりませんやうになりました、併しこれも御國の爲めと存じます、さて明日は伊豫丸が出帆歸國致しますに付て、彼是書き集めて差上ます。



## 日本軍に從軍する米國婦人たち

◎今夕ニウヨルクから當シヤトルに着、明日伊豫丸で日本に向ひます婦人たちの一行はアニタ、ニウカム、マクギー婦人を筆頭として都合十人で御座います、十人ともに曾て米西戰爭のをりに、看護婦として從軍致しました經驗が御座います。

◎其服裝は白の揃ひの上衣、帽子、前垂を着けます地質は絹紬を用ひます、これは輕くて丈夫で、洗濯もたやすい所で、撰んだので御座います、但し船中では鼠のセル地の服を着ると申ます。

◎マクギー婦人は、歐洲に於て、教育を受けましたので、巧に佛獨語をあやつります、千八百八十八年に彼がジエー、ダブルユー、マクギー氏に嫁ぎましてから、始めて醫學を學びました、良人さんは醫師で御座いますから、自然學び始めなすつたんでせう。

◎マクギー婦人は、それから醫業を營みましたが、

千八百九十八年から、凡そ四年間、米國の陸軍の補助手術委員を務めました、米西戰爭の時には看護婦隊の長として、從軍しました。

◎一行日本に到着の上は、日本政府の指揮を受けて、戰地に向ひ、其博愛の腕をふるうと云ふとです。

◎私は信じます、日本婦人の中にも、決してマクギー婦人に劣らないかたもありませう。

## 露西亞の女學生

◎今月三日の聖ペテルスポルグよりの電報によれば、露國の女子大學校で珍事が出來まして、學校は閉校を命せられました。

◎それは女學生が、時節柄、皇帝陛下に或る上奏文を奉る事になりました。



◎然るに全校女學生百六十七名の名を、一々其上奏文に記入する事を許されません、まだ學生と云ふ文字を書く事を許されません、たゞ生徒一同として、差出せと云ふ、政府からの命令で御座いました。

◎女生徒(イヤ)女學生一同大に憤激いたしまして、彼是論じ合ひまして、其末に、上奏文は見合せと致しまして其代りに日本の天皇陛下に祝電を奉送しやうと云ひ出す者が御座いまして、一同之に和して、拍手致しましたので御座います。

◎何かはたゞでをさまるべき、即時に閉校を命せら

れました。

## 米國婦人の日露觀

◎婦人と雖も、常に新聞雜誌を見て、私共時々議論の相手になる事があります、米西戰爭マニラ戰爭の時に、日本婦人は、米國兵の横濱に立寄るを見て、何とも思ひませんでしたのは、其たちがもとから相違して居ますからです。しかし日本婦人に今少し、世間の事に注意を拂ふやうに致させたいものです。（二月二十八日）

## ◎英國に於ける「日本國軍人遺族救助基金」募集趣意書

大貌利典在住日本國人諸君

我郷國大事の此の期に方り職務上其の他の事情により此の國に在留する日本國人は目下干戈を取り我天皇陛下及郷國の爲め萬難を冒しつゝある陸海軍人に對し感謝と同情の念を表明せむことを希ふや疑なし

我等下名の者は此に右の如き我等日本人に共通なる希望を適當に實行せむことを我同胞に謀り陸海軍人に對し我等の力の及ぶ限りの慰藉と奬勵の方途を供するを以て其責務なりと思惟したり而して婦人としての我等の思想は欣然郷國の爲めに其の命を致しつゝある勇敢なる軍人の寡婦及家族に及ぶは自然の勢にして我等は遺族に慰安を與ふるの途を講するを以て我等の希望を實行するに付最も適切なる方法なりと感じたり是を以て我等は此に林子爵及荒川氏の賛助を得て「日本國陸海軍々人遺族救助基金」と稱する財本を造らむことを發議す希くは諸君が寄附せんと欲せらるゝ金額を多少に拘らす寄附あらんことを

我等の希望は必すしも我同胞に限らるゝにあらす郷國の爲めに職務の爲めに殪れたる親愛なる夫若は子に別かれたる哀れなる婦女救助の爲め日本國の一切の友より投ぜらるゝ惠與は我等の最も欣むで受領する所なり若し寄附者諸君の中に其の寄附を基金特定の目的以外の事に用ゐむことを希望せらるゝあらは我等は之に從ひ其の取計を致すへしと雖も特に此の希望なくんは寄附は總て右基金の内に入れ我等は之を本國政府に送付するに方り必す戰死軍人遺族救助に充用せむことを求むへし

此の基金は平和克復まて引續き募集すへけれとも本國へは募集金相應の額に達するとき時々之を送金すへし

此の基金に關する一切の通信は倫敦「ビショップスゲート」街八十四番日本總領事館受附「日本陸海軍々人遺族救助基金」幹事宛にて發送せられたし

寄附は「ビショップスゲート」街百二十番横濱正金銀行取締役兼支配人山川氏宛にて送附ありたく小切手及郵便爲替は日本國[illegible]横書し同しく山川氏受取にて振出されたし

林子爵夫人　門野夫人

西卷夫人　小[illegible]

小説

# 看護婦志願

谷 活東

「一」

最う花曇と云ふのであらうか、朝晴たと思へば夕暮雨になり、夕暮晴れたかと思[illegible]、翌朝は暗い中からしと〱降。ほんとうに、外稼の三ちやんは酷からう——と淺蜊賣三吉の姉は、仕事の[illegible]止めて、今日も晝過ぎから雨の、薄暗い障子を恨めしく眺めた。

三吉は十四才である、姉はお光と云つて、十八才、容色ばかりで無く、氣質も好い子だと近所でのある。その上は今一人兄があつて、日本橋邊の立派な料理店に料理番を勤めて居たが——國さんと云へ此道のこれも評判の腕達者で、處から口の利いたお客も多く、料理番へと云つて下がる祝義も少からず、それを集めてはこの深川の家に送つて居たが——今年二十六才の豫備で、伊東國太郎、然かも〇〇兵であ



つたから、動員令から、早くも第一軍に加はり、二月十六日、勇ましく敵地へ向つて出發した。この善良なる三人の子の父は、三年前に世を去り、母は昨年の夏から、眼病に罹つてその暮には全たく明を失したのであつた。淺草に、有名なる紳士伊東時藏は、この三人の父の兄で、國太郎には立派な叔父であるけれど、國太郎が出發する事を知らせても、手紙一本くれず、まして顏も出さなかつた。が、平常この叔父の心がけを知つた三人の子及び母は、さもあるべしと思つて、別に怒りも爲なかつたのであつた。

貧しきこの深川の家、お光は他仕事をし、三吉は淺蜊を賣り、日本橋の兄からの助けとで、漸く其日の煙を立てゝ居たが、兄は居らなくなり、わけて戰時の此頃、他仕事とても少く、淺蜊も籠に殘つて來る事が多いのである。

かく、其日の米の代にも思をなやます中に、姉なるお光は、一つの願を以て居た、それは誰も多く望む看護婦になりたいと云ふ事である。けれど、盲目の母を置いて、十四歳の弟を置いて、何う爲て行かれやうと思ふと思ふだけ日に〳〵思は益して行くので、仕事の手を休めて、障子を見詰た時は、何時も、兄の行先と共に、この願をくり返すのであつた。が、かたへに、火鉢に手をかざして物も言はず、何事か考案するが如き母に目をやつては、妾は何故かうだらう、と心に心を叱つて、再び針にかゝる、がその手は次第にたるむ。

『オヤ、最う日が暮れるのかしら。』

と獨言、今も、雨の障子から、手元の暗くなつたのに驚いたのであつた。

『雨が降るからだよ、お彼岸じやァないか、一年中で、一番日が永い時だね、まだお前四時頃じやァな

いか。』

と目は見えぬが、時計は無いが、八幡鐘は聞えぬが、母は慥く云つた。

『ほんとに然うですねえ、毎日々々降てこまること、三ちやんは早く歸つてくれゝば可いのに。』

とお光は又針を運び初めた。家は狹く、且汚ないけれど、お光が今縫つて居る衣服は、輝くばかり立派なもので、近所のさる大家から、娘の着物、花見の間にあふやうにと、羽織を合せて三枚、お光が頼まれたのであつた。その娘とは、お光が子供の時分には友達であつた、が、彼方は富、此方は貧、次第にうとくなつたのである。

花見の間にあふ樣に、是非お光さんに、と其娘が云つたと、使のものが此品を持つて來た時、多感の性に生れたお光は、一時これを突き返さうと迄思つた。かゝる時節に花見とは何事、よし行くにしても世を憚らねばならぬのに、ことさらに花見と云つて誂へて來たは、私を馬鹿にしたも同樣!

けれど、この不景氣、これを三枚拵へれば……と淺ましい思ひとは承知の上、受取つて縫つて居るのである。時折は、これもお光を苦しめる種の一つである。

永々しい春の日も、其衣服の縞が見えわかぬまでに暮そめた。濡れに濡れて、小蓑から雫を垂して、門口へ三吉が歸つて來る。折から、

『御免なさい、光ちやんは、居て。』

と入つて來た女があつた。

## 『二』

異樣な姿に三吉は、たゞさへ圓い目を、いよ〳〵圓くして眺めた。お光は走り出て來て、



『オヤ。まア珍らしい事。』

と云ふ、女は、

『ほんとに御不沙汰しちやつて、相濟みません。』

と笑顔、

『さア何うぞお上り下さい、こんな汚ない處だけれど。』

『え丶、上りますとも、ほんとに毎日來た家だねえ。』

と見廻す、この女こそ、お光がかの望を起した導火線で、お光の極のなかよし、また兄の未來の妻と極めた譯でも無いが、然う云ふ話が無かつたでも無い。即ち今は赤十字社の看護婦を爲て居るので、名は清水お京、年はお光より一つ上で十九の厄。



三吉はその白い帽、白い服に驚いたのである、お京は看護婦をして居ても、此の姿で來たのは初てなので。
『阿母さん、暫らく。』
と挨拶をする、母は目は見えぬが、その聲でお京と悟つて、
『よくお出下さいました。』
『ほんとに日暮方伺つて、飛んだお邪魔致します、お光ちやん、御用があるなら手傳ひますよ。』
『あら、今灯をつけて參ります。』
と三分心の洋燈、あまり明るくは無いが、座敷の眞中へ出す。
『ほんとに、よく來て下すつたのねえ、今日はゆつくりして行ても可いのでせう。』
とお光は茶を汲みながら、
『いゝえ、然うもいかないの、お光ちやん。』
と改まつて、
『今日はねえ、實は私、お暇乞に來たのよ。』
と云ふ。
『え！。』
とお光は驚いて、
『お暇乞なんて、何處へ………。』
『實はねえ、私は澁谷の病院に居なくちやアならないんだけれども、今度の戰爭でせう、私は行きたくつてたまらなくつて、それで願つて出たの、然うしたら許されてね、明日は最う立つのよ。』

わゝ、この親しき友は、お光を羨ませに來たやうなものである。お光を苦しめに來たやうなものである。

「然う、それは……。」

とお光は、しげ〳〵其姿を眺めて、

「可かつた事ねえ、兄さんも向ふへ行つて居るわ。」

と云ふ。

「然うですつてねえ、何日お立ちになつたのです。」

「先月の十六日よ、三ちやん。」

と足を洗つて來て、暗い隅に座つて居る三吉を見て、

「此處へ來て御挨拶をしないのかい、お京さんじやアないか、可笑しな子だわねえ。」

「知つてらアい。」

と云ひながら三吉は近く來て、默つてお辭義をする。

「ほんとに大きくなつたのねえ、もう大人だわ、よく精が出ますすねえ。」

とお京は振返つて云つた。

「お京さんはねえ、三ちやん、今度兄さんの行つてる方へ行くんだよ。」

「仁川かへ。」

と三吉が云ふ。

「まア、そんな方なの。」

とお京が答へる。
『可いなア、行つて何うするの女は。』
『負傷した人の看護をするのさ。』
とお光が云ふと、
『知つてらアい。』
『だつてお前聞くからさ。』
『聞いたつて知つてるんだい、露西亞人だつて怪俄人は救けるんだらう、俺ア繪で見たよ、露西亞人の野郎、傷が痛さうに泣つ面アして居やアがつた。』
『ホヽヽ、三ちやんは口が惡いねえ、三ちやんも早く大きくなつて、兵隊に行くと可い。』
『俺ア、陸軍なんぞにやアならねえ、海軍になるんだ、仁川じやア二艘軍艦を沈めたんだねえ、行くと見られるんだねえ、可いなア行かれると可いなア。お京ちやん行んだね。』
『あゝ。』
『俺も然うだらうと思つた、先刻入つて來た時、なんだか見たやうだと思つたら、繪で見たんだ、赤十字社の看護婦さ、露西亞人は神様だつて然う云つてるつて、お京さんはエライなア、觀音樣のやうだ。』
『ホヽヽ、眞實に三ちやんは意勢が可いねえ。』
とお京が云ふ。
『だつて深川つ子だもの。』
とお光が笑ふ。

『三』

『姉ちやん。』
と不意に三吉は呼んだ。
『何んだへ。』
『姉ちやんもお京ちやんと一緒に行かないか、看護婦になつて、俺ァ看護婦大好だぜ。』
と云ふ、何うしてまァ、この子がこんな事を云ふのかとお光は思つて。
『だつてお前、お前と阿母さんと置いて行かれるものかね。』
『何故』
『何故つてお前。』
『へん、人を馬鹿にして居らァ、俺だつて男だぜ、阿母さん一人位俺が引受けらァ、そんな事云はずにお出よ、兄は兵隊に行つて、姉さんが看護婦に行つて居るて云やァ、俺だつて巾が利かァ。』
『ホヽヽ、ほんとに意勢が可い事ねえ。』
とお京は云つたが、阿母さんのしよんぼり火鉢の前に座つて居るのを見ては、お京も、お光に行けとはすゝめられぬのである、お光は、たとひ自分が行かれぬにしても、よくこの子は、恁う云ふ事を云つてくれると思つて、嬉しく涙ぐまれるのであつた。
お京はお光の困つて居るのを見て取つて、話を轉じやうと、
『今日はねえ、私の家で、私の送別會をしてくれたのよ。』
と云ふ。
『然う、さぞ賑やかだつたでせう。』

『え丶、弟も妹も皆寄つてねえ、弟にお酒を呑ましたのよ、可笑くつて、あんな小さな體で醉つぱらつて、ホ丶丶、三ちやんとは同い年だけれど、ほんとに意氣地が無いわ。』

『あら、それでも、學校へ行つていらつしやるから、温和しいでせう、これはほんとに暴れもんで、仕様がないんですよ。』

『い丶え、あんなじやア、此度のやうな時にやア役に立ちませんよ、それからねえ、可笑しくつてよ、叔父さんが。』

『叔父さんが。』

『え丶、叔父さんがねえ、醉つてねえ、劔舞をするんだつて、刀を拔いてね、阿父さんに叱られたの、叔父さんは老人のくせに、時々可笑しな事をするのよ。』

『へえ！。』

とお光は聞いて居たが、お京の送別會に、弟に酒を呑まして醉はせる、老人の叔父さんが劔を拔いて舞はんとする、それを父なるが叱ると云ふ物語には、一家親類中の暖かな様が目に見えるのである。自分の叔父は金持で、名譽ある紳士でも、この劔を拔いて舞はんとする、お京の叔父と双べては、雪と墨の差があるとお光は思つた。あ丶、あの叔父が、時に興じて、劔を拔いて舞ふほどの意氣があつたら、私も今度は阿母さんを預けて、看護婦になつて行く事が出來やうにと、羨しさの度はます／＼益て來る。お京は言葉を轉じて、却つてお光を苦しめるのであつた。

『それからねえ、本郷の兄も來たんですよ、私の兄さんは、近眼だもんだから、兵隊に出られなくつてねえ、今度も口惜しがつて居るのよ、國さんが羨ましいつて。』

と云つたが急に言葉を更へて、
『國さんは仁川に居らつしやるでせうか。』
と聞く、
『え丶、仁川から、葉書が來ましたがね、今何處に居りますか。』
『然うねえ、解りますまいね、尤も私が向ふで國さんに會へるやうじやア大變だ、ホ、、、、國さんが赤十字社へ入るやうじやアねえ』
『い丶え、あれも亂暴ものですからね、私は戰死するか、負傷ぐらゐは屹度して來るだらうと思ふのよ、何分お賴み申します。』
『はア、もし然うだつたら、私が一生懸命に看護するわ。』
と云ひながら、何を思ひ出でたか、お京は顏を赤めたのであつた。

『四』

つい話に浮れてと、止めるも聽かず、お京は暇乞ひして歸つた、それから、一週間がほどは此家に何事も無かつた、八日ばかり經つてお京の手紙が仁川から來た。
此間はつい心急いて失禮しました、この仁川に着くと、思ひがけなく國さんに會ふ事が出來た、けれど、國さんが負傷したわけでも、又、病氣でも無いから御安心なさい。それから國さんに、お暇乞に行つた日の事や、皆さんがお變り無い事や、三吉さんが意勢が好くつて、貴女に看護婦になれとす丶めた事や、何か話したら、三吉も來年は十五になれば男一人前だ、阿母さん一人ぐらゐは引受けるが可い、俺もお光に看護婦になれとす丶める、今度の戰爭は何うで永引くから、看護婦も多くなくてはこまるのだ、私か

らもすゝめるやうにとの事でした。貴女のお心次第になさい、私は無理にとは申しません、けれど、もしおなりになるなら、手續はこれ〳〵隨うするが一番可いと、必切な、長い長い文であつた。お光はこれを見ると最う、矢も楯もたまらぬ。が母に云ふ譯にはゆかず、何うしやうかと、いろ〳〵頭を廻らして居た、處へ何うしたか其日晝頃に三吉が歸つて來て、

『親方、此方へ入つておくんなさい。』

と云ふと、年四十ばかりの、結城紬の羽織に同じ衣服を着て、でつぷり太つた、見るからに立派な男が、

『御免下さい。』

と入つて來た。お光は驚いたが、兎に角座布團などを出して挨拶すると、

『姉ちやん、俺アなんだ、お前に今日は話しがあつて、此親方を連れて來たんだ、中洲に居なさる、三富さんと云ふんだ、俺が何時でも淺蜊を買つて貰うんだ。』

と云つて、

『ねえ親方、これが俺の姉さんだが、何うかうまく云つて下さい、親方が付いて居てくれゝば姉さんも安心するんだ。』

親方と云はれたのは、靜かに笑ひを含んで、

『實は恁う云ふ譯なんです、不意に出たんで、お驚でせうが、今朝、三吉さんが平時の樣に來ましてね、それから私に賴みがあると恁う云ふんです、何んだと聞くと、實は俺の兄さんは兵隊になつて、朝鮮へ行つて居るが、姉さんも看護婦に爲て向ふへやらうと思ふんだ、俺があとを引受けると云つたけれども、子供だもんだから、姉さんが信用してくれない、だから親方が來てあとのところは俺が呑込んだと云つて

下さい、然うすりやア姉さんも安心して行かれる、と云ふじやごわせんか、私も感心しやしてね、今日は實はその呑み込みに來たわけなんです、私も中洲で三富と云やア、ちつたア顏も賣つて居るんでございます、どうですえ、御出になつちやア。』

とかたへなる母親を尻目に云ふ。お光は涙ながらにこれを聞き了つて、何も云はず、今仁川のお京から來た手紙を親方に渡した、親方は取つて見て、讀み了つて、

『イヤ何うも感心な方ばかり、これだから日本は勝つんです、ねえ、阿母さん、未だ御挨拶もしませんが、何うです、このお子を看護婦に、お出しなすつちやア。』

母親は、三富の親方と聞いて、其名高い事は、お光よりも却つてよく知つて居るので、こんな破家へ來てくれた事の、却つて勿體ないと迄思つて居たのだから、丁寧に禮をして、

『然うすれば、私は兄の身の上にも一人でやつて置きますより、安心が出來るのでございます、けれど看護婦だつて、然うたやすくはなれますまい。』

と云ふ、

『なアに貴女、稽古さへすれば直ぐです、然う極りやア、お光さんは、もとより御出になりたいのでせう。』

『はい……………。』

嬉し涙とはこれか、お光の望みは叶つたのであつた。

『親方。』

と三吉が呼ぶ。

『なんだ。』

『次手にもう一つ引受けておくんなさい、此處に在る此衣服だ、金持の娘が花見に行くんだつて姉さんに頼みやアがつたんだ、今時ほんとうに、花見なんて、俺は癪に障つて。』

と云ふが早いか、摺り寄つてビリ〳〵破り初めた。三富は笑つて。

『ハ、、、面白い、面白い。』

* * *

凡て三富が引受てくれて、お光は看護婦となりすまし、春過ぎて夏の初めの五月は、早や戰地に向つて出發した。天の佑か、三富が名醫にかけてくれた故か、母の目の霧は次第に晴れて來て、お光が仁川からよこした手紙は、明かに見えるやうになつた。されば、國太郎からしば〳〵來る、勝軍の報知も、其後は母が讀んで聞かせては、三吉を喜ばせる事となつた、光明！親子四人の光明は、か丶る破家にも輝きわたる。

（完）



# 危き生命

蘆城生譯

『大江さん。私は伜の辨吉を兵役に就かした時には、此廣い合衆國中にも、こんな立派な伜を國に捧げた親は又とゐるまいと、自分ながらも心の中で悦んで居りました。伜は唯　ほんの僅の間居眠つたに相違ありませぬ。從來仕事中に居眠なんかする樣な事は、唯の一度もありませんでした。物事をよく辨へた、末頼もしい子で、身長は私ほどございましたが、まだ十八歳で、……あゝ思つても詮ないことです、番兵に立つてゐる間に居眠つた科で殺されるとは……電報では二十四時間以内といつて來ましたから、今頃はもう彼の世にいつて居るかも知れません。』

老人の此話を氣の毒さうに聽いて居た大江牧師は、

『この上は唯御子息が神樣のお膝もとへおいでなさる樣にお祈りをするのが何よりです。』

と慰める樣に答へた。

『さうでございます、お慈悲深い神樣に……いつぞや、辨吉が申しますに「私が一人前の男になつたら、一朝事ある日には、この腕を國家のお役に立てたい。若しも其時願が叶はなかつたら、どんなに悔しからう。一生百姓で朽ち果てる位なら、いつそ此腕がもげる方がよい」といつて、其逞しい腕に力瘤を入れて、突き出して見せました。其時私も「よくいつた。その時は確乎やれ、神樣は屹度守つて下さるよ」と申しました。實に神樣は伜の身の上を守つて下さるとは存じますが……』

可愛き吾子が死刑に處せらるゝとは、大慈大悲の神の力も及ばぬ事かと、老の身の、子を思ふ一徹に、神の御惠みさへ疑ふ心が起つたのである。

大江牧師は直に語を添へた。

『貴下にもお似合のない。どうして神樣にお慈悲のない事がございませう。』

辨吉の妹のお花は二人の側に居て、先刻からの對話を聞いてをつた。顏は蒼ざめてゐるが、目には涙の一滴も浮んでゐない。固より胸は張りさく樣に苦しいのであるが、それを外面に表はさないのである。丁度機械が動いてをるやうに、いろ〳〵家の用事をしてゐたが、心では斷えず兄の身の上を考へてゐたのである。

『御免なさい』

勝手口に聲がしたので、お花は立つて行つたが、頓て一通の手紙を持つて來て『兄樣から』といつた限りで、一言もいはない。皆冥土から來た音信の樣に思つたのである。

老人は手紙を受取つたが手が震へて封を開けることも出來ない。恰も腑甲斐ない嬰兒の樣に、開けてくれといはんばかりに、默つて其手紙を牧師に渡したので、牧師は開封して讀みはじめた。

『この手紙が屆きます頃には、私は早やあの世のものでございませう。この度のこと、初の内は恐い樣にも考へましたが、唯今はもう決してそんな事はございませぬ。係りの方々も、私に罪を負はせたくないと申され、又私が男らしく死ぬるであらうなど噂してゐられます。私は兼ねて出陣をすれば、名譽の最後を遂げやうとこそ思うてゐました。勤務怠慢の廉で、こんな汚名を受けて犬死しやうなどゝは、夢にも思ひませんでした。併しこれが爲に父上樣のお名を汚すことは、私の忍びませぬ次第でございま

すから、次に一切の事情を詳しく申し述べませう。
御承知の通り、此度出征前に、私はかの加藤善次の母に、同人出征中萬事世話してやる樣に約束いたしました。それで、先頃同人病氣の折には、私は出來るだけ世話してやりましたが、まだ全快せぬ内に、又服務の命令をうけましたので、此度の事件の起つた前日には、行軍中、私は始終彼の背嚢と、自分のと共に携へて歩きました。其の日の夕方から、又急行進の爲に、隊の者が皆非常に疲れましたので、善次も勿論誠に困りましたから、私は斷えず力を假してやりまして、やつと隊について行く事が出來ました。
陣地に着きました頃には、私も非常に疲れて居ましたが、善次は歩哨に立つ番に當りましたので、私は同人の代勤をしてやらうと思ひました、彌々服務しましたところ、頻りに眠氣を催して、二三度も自分の銃で頭をつかれて驚きましたがとう〳〵、悔いても及ばぬ仕儀に立至る迄に居眠りいたしました。』
『有難い。神樣のおかげだ。辨吉は惰けてゐねむりする樣なことはないと思つてゐた。』
と老人は言を挿んだ。牧師の聲は少時途切れたが、また讀み初めた。
『今日係りの方々から少時處刑の猶豫を與へると申されました。こは私の情狀を憐んで許可せられたので、大佐どのは父上への書面を認める間の猶豫を與へるのだと申されました。くれ〴〵も大佐どのをお怨みなさいますな。只職務上已を得ずしてなさるので、若し出來る事なら、悅んで私の命をお助けなさいませう。尙又私の死刑の罪を善次におかぶせなさいますな。憐れにも同人は自分故に私を殺すことゝなつたのを非常に心配して、只管私の代りに自分を殺してと嘆願してをります。母上樣と花さんの事を思へば實に堪へ難き感じが致します。どうぞよろしくお慰め下さい。今晩にも無

事に歸宅が出來ますれば、例の如くあの野邊の烏が森へ歸るのを眺める事もでき、また愛らしき花さんが背戸口で私の歸りを待つてをるのに逢ふことも出來ませうが、私は最早決して再び歸りは致しませぬ皆様お身をお大切になさいまし。私の不孝の罪は幾重にも宥して下さい。」

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

其晩夜更けて、この家の裏口をソッと開けて、忍び出た少女があつた。暗がりの小路を辿つて街道の方へ側目もふらず急いで行く有様は、砲丸の飛んで行く様で、唯時々天を仰いで合掌して祈をする様であつた。それから二時間も經つてからのことであつた。この少女は只ある停車場に着いて夜行列車の來るのを待つてをつたが、やがて汽車が着いたので乘り込まうとした折柄、そこを通り掛つた車掌は其提げて居た角燈の光で偶然此少女の頬の邊に涙が滴つてをるのを認めた。で、これは唯事ではないと思つて様子を尋ねた。すると、少女は一伍一什を細に話した。それから車掌がこの少女を勞はつた事は、兎ても骨肉の親も及ばぬ程であつた。此少女こそ即ちお花である。

お花は大統領リンコルン氏に謁して、兄の助命を歎願しやうと決心して、今は首府ワシントンを指して行く途中である。彼は吾家を忍び出る時には、唯父に宛てゝ簡短な書付を殘したばかりであつたが、晝間兄から來た手紙はその折持つて來たのである。

それからお花は翌朝紐育に着いて萬事その車掌の盡力でワシントン府へ直ぐ急行することが出來た。此時の一刻は實に千金よりも貴い、眞に一分一秒の事で、兄の生死の運命が岐れるのである。幸に汽車は故障なく馳せて、やがてワシントンに着いたので、お花は眞に大統領の官邸ホワイトハウスに向つて急いだ。

大統領は丁度自分の室で、午前の公務に取りかゝつて、重大な書類を閲覽して、一々それを署名してをる處であつたが、其處へ一言の挨拶もなく、靜に戸扉を排し開けて這入つて來たのは彼のお花である。お花は悄然として俯向いたまゝ、大統領の前に手を合して立つた。

『オヽ、お前はこの早朝から、如何樣な用事があるのか』と大統領は快く問うた。

『私の兄でございます。勤務中に居眠りしましたので、殺されるところでございます。』

『辨吉の生命をどうぞ……』

『辨吉！辨吉とは誰のことか』

大統領は机の上の書類に目を注いだ。

『オヽあつた。分つた。危險い折に眠つたものだ。誠に大切な時であつたのだから、同じ怠慢といつても、特に恥づべき次第で、あんな事をすれば、誰でも命をなくすることになるので、已を得ないわけだ。』

『父もさう申しましたが、辨吉は疲れてゐましたのに、善次は病後でございましたから、二人前の事を致しました。其時は善次の番で兄の番ではございませんでした。善次は餘り疲れてゐましたので、兄は自分の事などは氣にせずに致しましたが、やはり疲れ切つてゐたのでございます』

『何だと？マヽ此處へおいで。よく分らない。』

大統領は、進みよつたお花の肩に靜に手をおいて若しや辯解の筋があつて、刑を宥恕することが出來ることもあらうかと思つて、熱心に少女を見つめた、お花は蒼ざめた顏をあげて、大統領の顏を見て、其身長高く如何にも尊い樣子がしみ〲と胸に感じて敬畏の念を生じた。が、自分の言ふべきだけのことは明白に申し述べて、辨吉から來た手紙を差出した。

リンコルン氏は熱心にその手紙を見てゐたが、讀み了ると直に筆を執つて、急いで二三行書き付けをかいて、呼鈴を鳴らした。

『直ぐ之を送れ』と給仕に命じて、又お花の方に向いた。

『お前はこれから家へ歸つて、お父樣に話しなさい。あの樣な感心な子を殺すといふ場合でも、自分の國の宣告には何の怨も持たないほどの心がけの父君に話して貰はふ。このリンコルンはあの貴い生命を殺すに忍びないと話して貰はふ。さ、お歸り。さもなくば、明日まで待つてゐるか、辨吉も勇ましく死ぬと決心した後であるから、ちと目先をかへることも必要だらう。さうすればお前と一緒に歸ればよからう。』

『有りがたう存じます。』

とお花は叫ぶ樣にいふた。この樣な慈悲をうけて感謝しないものが、世の中に唯の一人でもあらうか。この時お花は心の奥底から感謝して大統領の身の上に幸あれかしと神に祈つたのである。

その後二日目に一人の、若い兵卒が、その妹と共に大統領官邸に來た。二人は直に大統領の居室に連れられて、その兵卒は其場で士官に拔擢の命をうけた。

『病友の爲に背嚢を運んで、其爲に死刑の宣告をうけながら、尚一言の不平も言はなかつた兵卒は、當に國家の報酬を得べき價値がある』

とは大統領リンコルン氏が此時話した言葉であつた。

辨吉とお花とはこゝを辭し去つて、吾家へ歸りを急いだ。停車場には村の人々が打集うて歡迎した。此時かの老人が天を仰いで掌を合せて、熱心に『神樣、有り難う存じます』と言つた聲が群集の耳に聞えた。

# 文林

宮中月次御歌會兼題詠進寫（四月五日）

## 春山

田中光顯

春風になひくみはたをおしたてむ
うらるのやまのその頂に

同　伊與子

村からすこずゑ離るゝあかつきの
山のとかにもかすみ棚ひく

高崎正風

佐保姫の花のゑまひもとほからぬ
遠山まゆのなつかしきかな

渡邊千秋

花わらはと思ふこゝろは春ことに
眺むるふしの高嶺なりけり

鍋島直大

はなさけはみにくる人の絶えずして
わか山里もにきはひにけり

本居豐穎

谷水にわらひゝたせりやまかつも
はるは花故ひとやまつらむ

黑川眞頼

たちいてゝみる心にそなりにける
かすみそめたる春のとほ山

津輕承昭

かきりなき花うくひすにあくかれて
杣山ふかくいりにけるかな

松浦詮

雪ふかくみえし信濃のむらやまも
このころかゝる花のしら雲

渡邊清

山は皆かすみのおくになりにけり
深くなりゆく春もしられて

小畑美稲

春はた丶花をおもひてあさことに
まつ山のはをうち眺めつ丶

北小路随光

みねふもと花さきそめてうち渡す
春の山へそのとけかりける

梅溪通治

たとりゆく春の山へはのとかにて
花なき方もうくひすのなく

竹屋光昭

霞たつあしたにみれはふしのねの
ゆきの光もはるめきにけり

前田利鬯

雲の上にそひえてみえし不二のねも

春はかすみの底になりつ丶

藤井行德

薄すみにかきなかしたる心地して
かすみにこもるはるの遠山

同鐵子

うら〳〵とかすみ渡れり昨日けふ
みとりにもえし若草のやま

唐橋在正

さわらひを花の木陰にあさりつ丶
はるの山へに日を暮しけり

日野西光善

うくひすの聲ものとかに聞えきて
春をふかむる山のいろかな

花鳥のいろねゆかしみたつねきて
春の山へにくらしつるかな

慈光寺恭仲

あしひきの山のすかたも變りけり
はるは霞のたちわたりつゝ
藤枝雅之

春かすみたなひきこめてあはた山
松のあらしは聞えさりけり
常磐井堯熙

消え殘る雪かとみえてやまゝつの
こすゑにかゝる花のしら雲
小原適

すかのねの長き日ねもすうち霞み
山もねふれる心地こそすれ
澁谷隆敎

春ことにゆかしき物はよしのやま
たかねにかゝる花のしら雲
千種任子

青柳のかつらきやまのゆき消えて
のとかになりぬやまと國原



薄かすみ松のこすゑにうちなひき
春の山へはのとけかりけり
小倉文子

風の音ものとかになりてあはた山
松原とほくかすむはる哉
園祥子

たかねには雪も殘れとうら〳〵と
霞たなひくをはつせの山
宮地嚴夫

あさ日かけそひらにおひて花の色を
よもにみせたるひかし山哉
坂正臣

みわたせはまたらに野火の跡しるく
雨にいろそふわかくさの山
近藤久敬

中空のかすみのうへにのこりけり
小池道子

また雪しろき不二のいたゝき
藪　象子

吹風もかすみのそてにしつまりて
山のとかにもなれる春かな
荻原巖雄

のとかなるかすみのおくの遠山は
ねふるか如くみえわたる哉
吉田愛

こそふりし雪はのこれとうち霞み
はるの姿になれるやまかな
植松有經

なくきしのこゑの外には音もなし
こえゆくかきり松山にして
小出粲

花ひときにほはぬのへの芝山も
はるは緑のまゆつくりせり
中村秋香

おもしろきやよひの山の花のかけ
ことしの春はたつ人もなし
小杉榲邨

花みつゝわけいりし山のわかれみち
左に右にいつかたにせん
鎌田正夫

わかやとにちかき粟田の山のはも
かすまぬひなき春のこのころ
大口鯛二

あさ日かけにほへる山のはる風に
うち靡かさる草も木もなし
猪熊夏樹

花かをりうくひすなきて山つみの
心もはるはのとけかるらん
千葉胤明

春のよの夢にもみえつをさな子と
わらひをりつるやまの姿は

遠山英一

百千鳥さへつりそめしのちもなほ
ねふるに似たりをすの外山は

加藤義濟

何ならぬわかすき山もはるされは
のとかになりて鶯のなく

鈴木小舟

あつさゆみ春の山こそたのしけれ
小鳥はうたひ花はわらひて

尾崎宍夫

春ふかくなりにけらしな雉子なく
むかひの山も霞みこめつゝ

須川信行

わけいらはいかに樂しき山ならむ
さく花みえて霞にほへり

宮中月次御歌會通題詠進寫(四月五日)

## 朝鶯

松浦詮

あさきよめしはしはやめよ鶯の
軒端の花にきつゝなくなり

水野忠敬

とくおきて庭巡りする折しもあれ
花をこつたひうくひすのなく

宮地嚴夫

うくひすに夢さまされぬ朝そなき
かきねの梅の花さきしより

荻原嚴雄

朝日影にほへる窓にかけみえて
なく鶯のこゑのゝとけさ

植松有經

よるの雨のとかにはれて朝日かけ
にほへるまとに鶯のなく

うくひすの聲をきくまにけさも亦
つかへの道におくれつる哉
大口鯛二

にひふみを手にもちなからけさも又
うくひすき〻つ花陰にして
千葉胤明

あさ日さす軒はの花のはなやかに
うたひいてたる鶯のこゑ
遠山英一

朝な〳〵くることにして我か庭の
生垣つたひうくひすのなく
加藤義清

## 花初開

春風はまたはたさむき庭のおもに
今年の花はゝやさきにけり
松浦詮

しつかなる春の雨夜のゝとけさに
俄にはなはさきいてにけり
水野忠敬

まち〳〵て日をへし庭のさくら花
けさ嬉しくも匂ひそめたる
宮地厳夫

ふたつみつひもときそめし櫻はな
梢はいまたつほみなりけり
荻原厳雄

けさまてはまたさかさりし櫻はな
ゆふ日の影に匂ひそめぬる
植松有經

かちときの聲の内にそさきにける
ことしの春のやまさくら花
大口鯛二

共にみんともは軍にいてたちぬ
都のさくらさきそむれとも
千葉胤明

遠山英一

にはさくらさきしけさこそ嬉しけれ
花にうかれん年ならねとも

加藤義清

濱殿のはなのみうたけ近からむ
のやまの櫻さきそめにけり

明治卅七年三月廿八日朝鮮國定州の討露戰に長岡子爵の世子近衛少尉護全君の名譽負傷を承りて

肥後　佐々豊水

みいくさのすがたをゝしくすゝみゆく
つゝの音たかきあさぼらけかな

ひさかたのあめにひゞきてたかき名は
八百よろづはるたゝへさらめや

塙　忠雄

痩馬もかずにめさるゝ今の世を
門田まもりておいんわがみか

田にそゝぐ水のあまりをひき入れて
あひるかふなり川添のむら

みなれつる隣の花もまねかれて
むかへばさらに珍しきかな

麓よりかへりみすれば山さくら
大かた松の木のまなりけり

もちわけて國につくさむ戰ひは
いくさ人らに歌はわれらに

## 山吹

下田春興

きしのへをおほひてさける
やまふきのはなのさかりは
いけの面にまこひもあそへ
みづの面にひこひもうかへ
ひこひなすわかおもふいも
まこひなすわかしたふいも
そのいもに似たるやまふき
いまさかりなり。

# 敎の庭

正三位子爵 黑田清綱先生撰
（代撰菊池武則先生撰）

## 猿

### 天

人の爲憂き世の中につなかれて
たち舞ふ猿ぞあはれなりける

伊豫國松山市出淵町一ノ廿一 南青子

### 地

おもしろくたちまふさるも人まねに
ものいはれぬやくやしかるらん

三河國寶飯郡下地町 永井さい子

### 人

子をおもふこゝろは人にかはらねと
ものいはさるぞあはれなりける

肥後國菊池郡隈府町 千知波橋子

---

## 甲

舞てふりのみにもあらてよにはまた
ましらにおとる人もありけり

津市 神田みよし子

子に親につかへはくゝむ眞心を
人に似さるとたれかいひけむ

松山 上原信子

中あしきものなりなからともすれは
いぬのせに乘さるもありけり

東京 河田いし子

人かけもあらぬ深山にいりぬれは
ましらの聲もたよりなりけり

東京 山田ふみ子

山ふかみこたまにひゝく瀧つせの
音につれつゝなくましらかな

熊本 田代綾子

山さるもおしゆるまゝにしたかひて
立舞すかたあいらしきかな

三河 榊原てる子

陸前 前田河千年子

奥山にむらかりすめるましらさへ
人にまさりてみちまもるとか
秋田 伊東よし子

さらぬだにわか山里のさひしさを
しらてましらのなきさけふらん
東京 青木たま子

わしひきの山のあらしのおとたえて
ましらの聲そいとゝみにしむ
松山 田村多豆子

## 乙

君か代もみ山のおくにすむさるにいてゝつかふる道をしへなむ
山口 村上操子

松にそふ蔦のうへにもやまさるのかよふはかりの道はありけり
埼玉 横田音羽子

かしの實のおつる音して我山の木末にさるの群さけふなり
埼玉 横田やな子

小夜ふかく窓うつ雨はやゝはれて木傳ふさるの群さけふなり
岡山 日下万龜子

しけりあふこたちをくらきおく山にあはれましらの鳴さけふなり
和泉 稲原基子

わひしらにましらなくなり足引の山のたえまに子をしたひつゝ
大阪 天野ちかを子

立まひてまたかひ人のかたによるなれし小猿のいとほしきかな
埼玉 横田秋子

おひつれてうたふきこりのかへるなり猿の聲ふむ谷の暗みち

秋田 古瀬りく子

みやこちをくるひまはれとなりはひにうきをましらの眉になくらん
秋田 古瀬惟子

おく山にあやめもわかぬさるすらもこのみなさけをくむとこそきけ
長野 中村佐喜子

人まねをしたりかほなる山さるのつひにはわなの憂目をそ見る
群馬 すみれ子

なにごとも人まねやすき山猿はぜんせいかなるゑんやありけん
石狩 小山かく子

うないらが舌つゝみうつをかしさに蚤とる猿も痒さ忘れつ
陸前 吉澤いと子

かろらかにみえにけるかなしけりあひし梢たわゝにわたるましらは
東京 渡邊初子

只ひとりわけゆく山のたにかけに聲ものすごくましらなくなり
東京 渡邊名加子

ふもとにはともしびみゆる夕ま暮峰のはやしにましらなくなり
東京 三好珍子

月のかけとらんとしてか山さるのさやけきよはに絶すなくなり
長野 山本基子

さるまろのみ山かくれに木の實とり子をおもふ聲のみたひ鳴なる
長野 山本直枝子

朝なゆふな深山のかひにつまこふるましらのこゑそあはれなる哉
長野 小泉たつじ子

そまか家に一夜かりねのよはふけていとものすごくましら啼なり
東京 荒井千代子

しげりあふ木々の梢になく聲はそれとわかれとましらなるらん
東京 荒井満武子

杣人の斧のひゝきもたえ〲ていとものすごくましらなくなり
東京 荒井讃久子

谷合にひゝくましらのこゑすこくわたりかねたる丸木はしかな
東京　神戸すゑ子

ゆきくれてしらぬやまちをたとりせはいつくともなくなく猿の
東京　荒井あさ子

あし引の山の木立も深き家ののきはをわたるさるのこゑかな
羽前　春野縁子

寂寞のあきのよふかくふけゆきてとほくきこゆる猿のこえ〳〵
神戸　鶴見清子

危さに我子をおもふ親こゝろひとにかはらぬおくやまのさる
東京　岩谷梓子

およひなき物をましらのさかしらにとるとはすれと水の上のつき
東京　岩谷淺子

親は子を子は親さるをしたふらんあはれしはなくみ山へにして
肥後　德永萬壽子

足引の山はあらしのおとたえて兒をよぶさるのこゑあはれなり
肥後　德永廣子

奥山におきふす猿もまよひ出て木の實あされるこゑそきこゆる
兵庫　飯島淳子

さよ更けてもくきよの音もいとかすみ猿なくなりやまてらのには
名古屋　木下鶴子

引くつなの強き弱きにましらすらなれしあるしのこゝろをそしる
東京　牛山業子

打はやすてふしにのりて人なみのてふりをみする猿のかしこさ
常陸　細谷はろ子

ひとたひはみ山にかへせあさくさの園のましらも親やこふらん
大和　栗山高子

花はけふうつろひそめしはる山の梢をつたふましらにくゝも
三河　白井よし子

ふみまよひ木立のおくに行きゆけば小枝に猿のあそびゐにけり
肥後　岡山登壽子



やま風にほろ〳〵落るこのみをはひろひてあそふおやこさる哉
尾張　後藤のぶ子

手かひせし子猿も今はおもしろく人のまれして日をおくるかな
三河　中島はや子

ましはこる柚もかへりてみ山ちに月かけあはくましらなくなり
薩摩　松原みね子

老まつの梢にひくき三日月にましら鳴くなり夜半のやまさと
伯耆　樋口つる子

山ふかくなれぬ旅路のかりまくらましらなくこゑすこくもある哉
東京　高橋津音子

わさまねふさかしきちゑはありぬともなるゝちゑなし猿はいつれも
伊豫　渡部信子

狩人のこぬひまをえてうらやまにしのひれになく猿のひとむれ
福井　平田そう子

夕まくれ山のかひよりましらなくこゑきくときはなみたおちけり
吳　和住千鶴子

よのひとのとはぬならひの山里もましらなくよは淋しかりけり
播磨　本多宜子

兒を思ふこゝろはおなしこゝろにて人にまさるのすかた成らん
肥後　佐々小琴子

立木より立木にわたる木の葉猿とふとりよりもわさのかろさよ
肥後　佐々有鄰子

風寒み木末をつたふやまさるのおちくりひらふときそ來にける
肥後　坂本㷔子

鳥としもみゆるはかりに身をかろく木の實あされるあきの山猿
肥後　坂本𡚴子

木つたひて木實たつぬる山猿は老をわすれて子やおもふらん
肥後　秋吉輝尾子

おろかなる山猿さへもおしふれは人めかしくもまひかなてけり
熊本　猪原みさを子

ものいはぬ人とはかりも思ふ哉年久しくもなれしましらは
東京　敷嶋つた子

つながるゝはしらになれて山猿の我世うしともおもはざるらん
東京　森ます子

山かけに親のあとをやたつぬらむ一人子猿のあはれにそなく
福岡　中島武子

山ふかみましらの聲のきこゆるはこやたつぬらん親やこふらん
大阪　桝田益子

かろけにもこつたひかよふ木のは猿つはさなきみも何かゝこたん
三河　河合ぬひ子

子猿をはさかさにおひて木傳へるその親さるやこゝろ有りなん
三河　本多きさ子

よわたりの人のおしへにしたかひてやまと舞する猿もありけり
三河　服部萬子

おく山にすみにし猿も里なれてものこそいはれ人まれふなり
三河　鵜部くわ子

さらぬたに物さひしきを山里のあはれもそへてましら鳴なり
美濃　吉村せん子

深山へのものとしもなく中々にひとにましらのわさをこそすれ
東京　山口寧子

そまひとの歸るゆふへのこした道こひきこさるのしたひてそ行
東京　武村るい子

あら鷲の聲しつまりし奥やまにものすこきまてましらなくなり
東京　篠田圓子

野にあそひ山にくろひてなかなかに人にましらと世を渡るらむ
東京　

世をのかれ深山にすめはわひしらにおのへ傳ひにましら鳴なり
福岡　山川敬子

さかしけに敎をまもりまひ衣ましらに劣るわがみなりけり
近江　稲永かつ子

板とうつ風物すこきよもすからまくらのやまにさるさけふなり
東京　甲藤わか子

むれあそふ小猿の顔のくれなゐに猶いろそへていりひさすなり
東京　金原たまき子

ましらなく聲は木の間に聞えきて旅の小かさにあられふるなり
東京　林艶子

あて人をよし眞似るとも猿なれやおもの爭ふことのをかしき
東京　林環子

山猿のあかきおもてに入ひさしてりかゝやきてくれのこりけり
東京　小川まさ子

み山よりましらむれきてよもすから聲物すこくきそひなくなり
東京　高艮子

きゝなれしましらの聲もとたえける雪にしづけき夜はのさひしさ
愛媛　高橋茂子

谷川にうつれる月をとらむとやきそふましらのこゑさはくなり
静岡　竹内みつ子

山ふかく岩きになるゝましらさへこをおもひつゝれをは鳴らん
東京　椎野秀子

一はたに殘らぬ枝をふくかせの誘ふましらのこえそみにしむ
下野　井上なほ子

いにしへは人をあやめしましらさへ住しと今はゝなしにそきく
松山　山崎匡子

むれ猿の嶺よりくだる顔のうへにいろこくてらすゆふつくひかな
東京　三上せい子

みやしろのうしろのあたり木々しけく青きこつゑにましらなくのみ
磐城　三森須麿子

# 夏朝

## 天

福井市佐佳枝中町　平田そう子

よもすからもえし螢のかけきえて
くさはのつゆに朝風のふく

## 地

和泉國泉北郡深井村　福原菫子

生ひしける庭のわかはの露みれは
かせなき朝もすゞしかりけり

## 人

肥後國菊池郡隈府町　秋吉輝尾子

蓮葉の露のしらたま吹きちらす
あしたのかせはすゞしかりけり

## 甲

出雲　高橋より子

起きいてゝつまとあくれは朝風に
垣の卯花のちるぞすゞしき

長野　小泉みつじ子

雨はれしわか葉のつゆのちる見えて
たもとすゞしく朝かせぞふく

東京　山田婦美子

玉すたれまくや少女のころも手に
凉しくかよふ夏のあさかせ

三河　永井さい子

起いてゝ先涼しきは葉さくらの
つゆふきちらす庭のあさかせ

東京　武村留意子

はさくらの露もかをれる朝庭に
はうきとるてもすゞしかりけり

東京　岩谷淺子

色ことにゆかしきものは水枝さす
なつのあしたの梢なりけり

埼玉　横田やな子

わらふきの馬屋のくりの花ちりて
朝日すゞしき小山田のさと

奥　和住千鶴子

音のしてひらくはちすに夢さめて
こゝろもきよき夏のあさかな

## 乙

埼玉　横田秋子

生しける木陰の宿はよもすがらあさもかやりの烟たつなり

東京　青木たま子

朝またきたちいてゝみれはいけ水に匂ふもきよきはなはちすかな

池水のきよきはちすのつゆちりてはかせすゞしき朝ぼらけかな　東京　牛山業子

ありあけの月もうすれて朝ぼらけくさはにむすふ露のすゞしき　岡山　日下蔦他子

ばらの花匂ふかきれにたちよればまつこゝちよきあさ風そふく　大阪　天野ちかを子

あつさをもよそにはらひて朝のまは伊豫すゆるかす風の涼しき　伊豫　南齋子

蚊の聲も絶にしあさのすゞしさはかせによるとも思はざりけり　松山　上原のふ子

夜のほどの短かき夏もすゞしさにあしたは長く寐られざりけり　山口　村上みさを子

おきよ子等夏のあしたは湯浴せしゆふへもしらぬ秋かぜそふく　松山　田村多豆子

山桐の花ちる庭の朝月夜すゞしき影にすゞめなくなり　埼玉　横田音羽子

春かすみ露になごりのとほやまはわかばの色にもえまさりけり　木村よれ子

朝ぼらけ門田の早苗ふしたちてそてふきわくるかぜのすゞしさ　肥後　阪本義子

朝な朝な池のはちすのつゆみればなつなきものとおもひけるかな　肥後　德永萬壽子

こゝちよく青葉にわたる風をのみなつのあしたそたのしまれける　肥後　德永廣子

朝かほのはつはなさけるあさ庭は夏もよそなるこゝちこそすれ　熊本　田代綾子

みしか夜をたゝく水鷄におこされて夢こゝちなる夏のあさかな　兵庫　飯島淳子

ことし生の竹ものき端にしけりあひてわかはすゞしきなつのあさ波　東京　山本茂子

朝な〳〵置しらつゆに夜すからのれやのあつさもうち忘れけり　神戸　鶴見清子

ならかしは茂る岡へもあやめふくのきもあしたの露のまそよき　京東　岩谷梓子

漁火のしたいく〳〵に影きえてあけそめにけりなつのうなばら　秋田　伊東よし子

けさもまたあさおくつゆの一しほにむすふもすゞしはきのさかりに　東京　神戸すゑ子

今朝よりはなつ來にけりと立さわくくものいつこへ春やいぬらむ　東京　山田靜子

あさまたき花のちりにしあとにきてあをはのつゆにぬれし袖かな　大和　栗山たか子

若竹のせたけものひてうちむかふまどの朝けのかぜのすゞしさ　三河　榊原てる子

朝きよめ清めしにはに水そゝき友まつか枝の葉かぜすゞしき　三河　白井よし子

をはしまにいもとゝふたり夏の朝咲しはちすの花かそへけり　羽前　春野緑子

さめやらぬ夢のうちなる閨の戸にさし入る夏のあさ日子のかけ　長野　山本基子

とく起て庭きよめするなつのあさはこゝろの奥もすゞしかりけり　長野　山本直枝子

夏の夜はひるにをとらぬあつけさも朝な〳〵は風そすゞしき　長野　小泉たつじ子

時きぬとさきそめにけり花はちすつゆをふくみし朝のふせいは　東京　荒井千代子

虫のねもまだなきやまぬあけかたは草木のいろもいとゞうるはし　東京　荒井幸子

おきいてゝ見れは冷しき朝かけに宵のあつさをわすれぬる哉　東京　荒井満武子

夜もすからかたりあかせし友垣とうちつれて行うみへのあさかな　東京　荒井幾久子

見わたせば朝きりふかくたちこめてそこともみえぬ夏の山さと　東京　荒井あさ子

夏木立しけれるにはの朝つゆはその日〳〵のいのちなりけり　陸前　前田河千年子

うらつたひくたくる波にこゝろあらふ夏の朝こそたのしかりけれ　神奈川　森田花子

そよとふく風にやなきのつゆちりてはたへすゝしき朝ほらけかな　尾張　後藤のふ子

草むらのほたるならねと朝ほらけ風にきらめく露のしらたま　肥後　佐々小季子

朝鳥のあさ立いづるなつのそらかけうるはしくあさ日さすなり　肥後　佐々有鄰子

さくら色にそめにしこゝろもをぬきかへて朝風かをるうのはなのそて　肥後　坂本豐子

おきいてゝ文よむ窓にすゝしくもふく朝かせはなつとしもなし　肥後　岡山登壽子

朝日かけのほらぬほとはひるのまのあつさわすれてすゝしかりけり　肥後　千知波橘子

朝かせにたかれのさきりふきおろしなつなほさむし谷の下いほ　東京　篠山圓子

なつのよはまだよひながら明ぬるに惜しき朝日はれぬかたもなし　近江　稲永かつ子

日にそひていろまさりゆく槍よりあまりて落つるつゆの涼しさ　近江　稲永靜子

東京　大枝つれ子

夏陰とはやなりにける椎かもとあさきよめするそてぞ涼しき　磐城　三森須磨子

さ衣のせつはきにげりわがやどのしのぶのつゆも朝な〳〵に　茨城　飯田ます子

白露を玉とちらして呉竹の葉音すゝしき夏のあさかぜ　根室　宮原いすよ子

あさかせのそよふく頃はすゝしくて暑さきひしき夏としもなし　東京　柏田靜子

茂りあふ草むらことにつゆおきてすゝしさまさるなつのあさ風　京都　井上なほ子

夏のひのあきとやいはんあさはやくふきくる風にのこるつき影　東京　林艶子

さらぬたに短かき夜半を鳴たつる蟬にめさるむなつのあさかな　東京　河合きさ子

まれ人も朝すゝみにとゝひ來なり夏をよそなるたけのしたいほ　東京　林環子

野邊ゆけは袖にみたれてちる露や夏のあしたのたひのすゝしき　山形　露子

牛の乳しほるしつのめ影すゝし牧はのひかしに朝日うらゝか　東京　石川蕭子

よへふりし雨のなこりの露ちりてわかはすゝしき夏のあさかせ　東京　大江はる子

はさくらの風にかをれる朝なあさなそゝろあるきの袖すゝしき　靜岡　竹内みつ子

玉かしはしけれる陰の庭きよめあさひすゝしくつゆそこほるゝ　山梨　標武子

いりのころかつらの花にてらされて露とまはゆき夏のあさかな　山梨　標武子

朝くもり日のみひかりに陰きえて露とこほるゝあさかほのはな

ほゝかしは茂れる庭の朝きよめなつにしられぬそてそすゝしき　東京　金原たまき子
花ゆゑにいとひしかせもけさよりは心すゝしく音つれてけり　東京　山口孝子
朝ことに人もとひきて夏なからすゝしさあまるたけのしたいほ　東京　高　貝子
よはにみしやとるほたるの影きえて宵はすゝしきけさのしら露　東京　椎野秀子
庭のきゝあなはしけりてみしかよのゆめさめかたき夏のあさ床　三重　神田みよし子
またかへてあはびすくなる夏ころもかされまほしく朝風そ吹く　松山　山崎秀子
春すきて若葉しけれるあをやきのみとりの糸を吹くやあさかせ　大阪　黒田代音子
若葉さす賤かのきばもなつはきてみとりにしらむ朝ほらけかな　松山　山崎国子
夏のよははやあけにけり朝つゆのおきいてみれば蓮そひらける　播磨　本多宜子
あさかほのあさとくひらくさま見むとあされなしのふ夏のあさ哉　伊豫　渡部信子
よの中は夏としいへど朝ごとのかすみそはるのなごりなりける　東京　高橋津音子
明方をあまつおとめの降りけんばらの露にほふ野への細道　伯耆　樋口鶴子
楢ふくすゝしき風に若葉のみゆらくあしたの心地よきかな　伯耆　樋口つる子
うち出てかなたこなたをみ渡せははやききにける池の蓮は　群馬　すみれ子
なつくさの露ふみわけて賤のなかたのもみまはる朝ほらけかな　東京　渡邊初子
夏としもをほえさりけり秋おきてわかばすゞしきその朝かせ　東京　渡邊名加子
夏は朝とくおきいてゝさき匂ふはちすのはなを見るそたのしき　東京　河田いし子
庭にてゝすゝしき風となかむれはわらやくに煙たちけり　三河　中島はや子
はこれたびあしとさためてれたるよのあけゆくはかり嬉しきはなし　秋田　古瀬りく子
ひるかりのあつさこぬまとつろへなはくろ人多し朝ほらけかな　秋田　古瀬帷子
草もきも露のなさけに色を衣てゆふへにかはるなつのあさかな　長野　中村佐喜子
夜もすがら暑に夢もむすびあえで醒めし朝にあやめ花咲く　札幌　うばら子
朝かせに竹の葉ごとのつゆちりて涼しさおくるまとのうちかな　東京　三好珍子
なつころもきたるあしたは何となくすがくしくもおもほゆるかな　陸前　吉澤いと子
おりたちて朝きよめする庭のおものわかはゆすれる風のすゝしさ　薩摩　松原美爾子
若竹の露ふきはらふ朝風はいひしらぬまてすゝしかりけり　美濃　吉村せん子
あかれさす方よりあけてなつ草のはにおく露にあさひさすなり　水戸　細谷はる子
いつはあれと何處はあれと山さとのわかは露ちるなつのあさかせ　東京　敷島うた子
蟬の羽の薄き袂を吹きかへすあさかぜはかり涼しきはなし　東京　森まさ子

たちよればちよのいろそふ若竹のかげもすゝしき庭のあさかぜ　静岡　中島武子

あさ風によへの名殘の露ちりて青葉すゝしき庭のおもかな　三河　鵜野くわ子

つくろはぬ庭の若葉は茂りあひてなつの朝日もすゝしかりけり　三河　服部蔦子

吹く風になびく軒ばのわか竹の葉こしにもるゝ旭すゝしも　三河　本多きさ子

ひるがほの花はれぶれる庭の面にみらくすゝしき夏の朝かな　三河　河合ぬひ子

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

## 硯

人

肥後國菊池郡隈府町　秋吉輝尾子

花の朝月の夕は更なり、千早振神津代よりわりし事どもを書つらね、末世までもまのあたり見るがごとく、はては嬉しきことはかなきことのをり〳〵につれて、心にあまる思をのべんとて打むかふなる筆墨のたぐひいづれをわかず親しきが中に、動きなき御代にもまめなる人にたとへつべきは硯になん、やんごとなき人等のいみじうもてはやしたまふらんうるはしきは、大和もろこしに數多かめれど、夫はさておき、妾が常にめでもてるは、すぎにし三伏の夏のころ、師の君の赤石浦に避暑せられたる御かへさに、惠みたまひし硯になんありける、さしてかざりとてもなくをかしく古びたる硯にはあれど、御なさけふかき御詞ふくみたまはりし、こよなき品なるに、まして卒業後は、海山とほくへだてまゐらせ、不幸と不運とを荷ひし身にしあれば、夢路ならでは相見ゆるよしもなくて、いつも思にみつる事ども、此のあいらしき硯にてしたためまゐらせつるに、師もまたゆかしき御筆の蹟たまはりぬ、家事のほかに世事にうとき、妾はいつもこよなき樂みなりしか、無常の嵐はまたなき師の君をさそひゆきぬ。あな惠まれし此硯は變りなく文机の上にあれど惠みし人は今いづこ、一きは目とまりて形見の品ぞなかなかあはれふかうなん。

東京　木村よれ子

何時の世にか始りけん、文書く道の漸く開け初めつる頃より、硯の海のいと深く思ひを述ぶる水莖の、世々に榮えて限り無きこそ、めでたけれは、されど幸少き身幼きより親に分れ、今はひとによるべの身となりて朝夕の暇もあらざれば、樂みてふ事も他所にのみ見

過しぬる年月のほど、僅に露の玉の緒のつなぎとめられしよすがとなりし者はわが父君の最後の際みに與へ給ひし此の硯にこそあれ思ひ出づれば悲や父君存生へ給ひし程はいたく彼のみ愛で給ひ、常に樂く暮し給ひつる者を甚くな傷けぞとて、の給ひ置かせ給ひける日より、早や幾年の星霜を經つる今日に至る迄、悲しき時たつき無き思ひの増る時、兩親の命日には殊更に、彼をば親しう取り出でゝは、なつかしみ、心の限り語らひつおもふよしを物しつるなり、今は漸く紙數も増りぬるにぞ、猶繰返すたつきさへ多き心地せられて、世の月花も物かは、我は唯だ片身と偲ぶ硯こそ、心の友と、いよ〳〵樂しくいたうむつびなん

大阪　桝田益子

人各〳〵嗜みあり、樂みあり、其嗜むや將樂むや、皆奇を愛し、美を弄するにあり物はた奇にして、美なるが故に尊きにあらず、一技の竹、一碗の茶必ず奇にして美ならずとも、能く神を樂しましむ。一硯の水、一枝の筆僅なりと雖も能く黒雲を起し、龍蛇の勢を爲して鬼神を感ぜしむるとなん。古より何れの道にも妙なる人、必ず身の尊きにあらで、心の高にある也、さればあやしの賤の、雲井の空高う聞え上るも、硯の海千尋の底の深き賜なりけり。近きは天龍寺の大硯を始め世に愛翫し給ふ珍稀銘硯の、澤に侍らんは倭錦に包み置て。言さやぐ唐の李衛公の硯は、結隣と名じ給ふ言は與に結で隣を爲し侍ると。薛稷は銘硯を藏し給ふ故に、位は九錫に昇り、離石卿侯に封ぜられ鐵面尙書、使持節、即墨軍事を拜し給ふ。文嵩字は居默は石虚中傳の官におはせしが、硯の爲に即墨侯に拜せられぬ。東坡は鳳味石硯を作り給ひて、銘に云らく、南叙黯淡灘の石に侍ると。李の後主の澄(ヘタ)心堂の紙、李廷珪の墨、毛元鋭の筆、龍尾石硯、之を世に四絶と聞ゆ將許漢陽の筆は、白玉をもて管と爲し、硯は碧玉に、玻璃をもて匣と爲し。端溪石は、白赤黃點の侍るを鸜鵒眼と謂ひ脉理(スヂ)の黃者は之を金線文と謂ふ。靑州より出で其絲理紅黃相ひ參(マジ)はるを紅絲石となし。桑維翰に仕を求め給ふに、鐵硯を鑄給ひ、人に示して曰く、硯弊(ヤブ)れは則改んと、卒に進士をもて及第し給ふ。淡背に宣帝の時、侍中張彭祖は、少うおはす時帝と與に、硯席を同じうして書し給しとなん。唐の文宮の硯は、碧を沉め山鑪は淸を泛ぶとかや寶泓はた、如何なる硯池に侍らんか。端溪硯の銘に云らく、墨を入るゝは、玉盤と仙人の食に侍り、水を出る事を爲すは、陰氣の凝りたる鑑の如く、懿也となん、玆の硯を君子の側に置けるは、玩弄し給ふにあらで、惟れ德を覩じ給はんか故也。硯は研すべく、墨を研りて和濡せしむべしと。魏の御物に三十種おはすが純銀三帶の一ひら侍ると、晉の孔廟に、紫石硯の一枚侍り、蓋し夫子平生の時物におはせりと。唐の韓文公の毛頴の傳に、弘農の陶泓と侍るあり。歙石は、龍尾溪より出るを、第一の名硯に侍り。漢の武帝の時、支となん云へる國より、馬肝石を進む、丹砂に和して食む時は、年ふとも飢へ侍らず、百髮を拭へば、黑うなり侍りて、此石はた硯となすべき、光おはしぬとなん。柳宗元の柳州山水の記に、其壁を龍壁と云ひ、其下に秀石の澤に侍り、硯と爲べしと。東坡志林に云ふ、澤州呂道人が、侍りし硯の首に、刻するにあらず、識するにあらで呂の字宛然とあり、活潑と千金に價しぬとかや。かゝる珍稀逸寶として、世〳〵に傳り侍るは、書き數ふべき程も知られず、とる筆の命毛も、ほと〳〵損ぬべし。されど今の世に物する、はこゝたくの黃金しろ金を、うづ高うちりばめ、あたりまばゆく、よそほふ物から、外匣の花やかにして、中〳〵に內なる硯の、見劣りのせらるゝは、口惜うこそ、今はた古今の美と尊とは、問はじ論らはじ、唯、日〳〵打向ふ机の島、塵はき淸め、すが〳〵しう硯の海の、心廣らかに思ひを萬里の波に航して、一介の棹、能く操りて言能く、書き流しうべきすべを得ん事をこそ乞ひ願はめ。硯は麁なり共、神は麁ならず勵まんとぞ思ふ。さばれ硯若し心あらんには、某が言へりし樣に、眼はしひざらんにも、心しひたりとや、笑はれぬらんかし。

筑前　中島よしみ子

いろは文字習ひそめしなり。かぞいろの求めて給はりしぞ。この硯なる。

某の年の四月。我齢六歳と云ふに。始めて。學びの庭に入り立ちて。夫より。おきての栞を。七とせ八とせに卒へて。ここに又三とせの年月。歌よむにも。はた文かくにも。朝な夕なに此硯によりて。濱の千鳥の跡。おぼつかながらたどり得るに至り。今はた。我は。人の家に。嫁くべき身とはなりにたり。されば萬の調度共は。舊きを捨てゝ。新しきを求めつれど。いかで。此硯のみは捨つべきやと。白妙の絹にうは包み。青貝の蒔繪したる箱の中に。納めて。五色彩る綾錦の衣にも。光まばゆき黄金の指輪にも。かへ難き寶として。携へ行かんとぞ思ふ。あはれ我硯よ。そが海はわだつみの底ひも深く。くぼめれどたらちれの父母戀しき夕。あるは友垣のなつかしき朝に。我思を。歌に。文にのべしめて。心のうきをはらさしめよ。此處に我硯と。千代を契りてかくなん。

筑前　中島武子

光こそ玉にはおとれ、海面に雲を起せば。行かたの濱洲に、千島の跡をのこして墨に筆に心を、合せつゝ、いにしへのことのまゝを、しるしつたへて後の世のために。光を見するはこの硯ぞかし。しかはあれと、ひとり硯のみにて、文といふ主なく、筆墨のつかさ人なくは、いかで硯の海を深め、はだへを、玉にみがきたりとて、そのいさをしを、千代萬代の後までも傳へ得べきやは。おの〳〵硯よく、おのがいさをしに、ほこらで臣の道をつくして、おの〳〵の、司人を、めでいつくしみつゝ、和たつみの底ひなきいみじきいさをゝ立てゝ、永き代に、朽せぬ名を、殘し傳へよや。然りと、聊か思ふことそはひとり、硯のみならず、萬の事皆すべて、とをゝ記して、世の戒とはなしぬ。

吳　和住千鶴子

ひねもすの友なる硯の身の上をし思ひぬるまゝかきつゞりぬ。なればかり、いさをの高きはあらじかし。ほの〳〵と明くる朝の若水そゝぎ入れ、まづ書きそむる年の賀の文より、春は花に秋は月にあすを一日の年の暮まで、硯の海のひがたなく、霜こほる冬のあしたも水たゝへ、墨すり流しいくぞ度手にもつ筆は運ばれけむ、思ひ出でぬるふし〳〵をも、千ひろの文も書きいづる此れ皆硯の徳なりけり。世に幸うすきたやまとうた心の花の匂ひ出だすも又なれの情なり。たをやめが落つる涙を注ぎ入れ其が手になれる玉づさは幾多の情やこもるらむ。いとまなき身のいかばかりか物うく思ふらん。されど硯よ汝をしも、ふつくゑの上の王とぞ思ひぬる。あはれ硯よ玉の緒のあらん限りは、とこしへにわが友たれよ。

松山　泡沫女

硯に付、心に浮びしよしなし事を書き連れん、さても硯の墨のこき薄きはするにまかせて、思ふまゝとなり、悲しげにつけ、嬉しきにつけ、妾の心を慰め、長き夜のすさびには、机が島によりつゝ、硯の海に掉さして、胸に浮びし事をほと〳〵あげれば玉も出で、もくずも出でゝ、春の日の、野山にあこがるゝ、それにもまして、なか〳〵に心行く、樂しき事ぞかし、近頃、鉛筆てふ物もあれど、硯の海に比すれば、及ぶべくもあらず、鉛筆は消ゆる恐れあれども、硯によりて書きし物は、幾千代ふとも、消ゆるうれひなし、其のみが、滿韓の野に伏給ふ、益荒武雄に『國のため、盡し給ひてよ、家の事は心にかけ給ふな』抔の言をやさしき、佳人、の筆もて書き送り、得らるゝもあはれ、何のたま物ぞや、實に硯は、筆もつ人の、命なるらめ。

神奈川　森田花子

大君の、大御硯となる見れば、玉にもまさる、石もありけりと、よまれしは、げにたふとし、たゞ石とし、いへば、さしも、心に、おかれど、硯てふ名に、かはりては、貴きあたりは、いふもかしこけれど、いぶせき、いほの、うちにても、文机の上におかれ、おのれ

ひとり、あろじげに、見ゆるもなかし、くさぐさ、奇しき形に、つくりなせるも、あれど、大かたは、一樣なり、模樣など、ばせをなど、ゑれるも、につかはし、赤間石雨畑石などより、擇ふるとぞ、うみにたゝへし水は、筆のあゆみにいくばくの言の葉を、そめ出すを、見れば、なかなかに、ふかき心地ぞなす、色紙短册などの、わきにとり出されたるさまの、やさしき、あたりたふとくおぼゆ、水ぐきまなぶ、友として、なつかしきものは、この君にこそ

肥後　德永廣子

ありとある石の中に玉にもまさりてうるはしく古より今の世にかはりなく上はかけまくもかしこき御わたりの御手にもふれ下は萬民の友ともなりいとなづかしきは硯になんあるされば筆とりてものせんにも紙ありとて色あらはれず昔の紫式部の君がゆかりの色ことばの花代々あせぬも其源は硯海の深き底にこそあはれかく世にしられし人の水莖のあとたとらんには硯海にかよふ千鳥ともなりて世をわたらまほしうなん覺ゆるあなたふときは硯にこそ

兵庫　飯嶋淳子

硯の海は淺けれど、其面こそせまけれど、言葉の玉も得らるべく、筆の花も浮ぶべし。遠き古しへの文を見ては、過ぎにし昔を忍び、日々のわざを書き記しては、後の世の人々にしらしめ、西に或は東に、幾百千里の路をへだつとも、互に心をかたるべく、四時折々の眺め、はた、徒然の節など、思ひを筆にはこばせて、自ら慰むるを得るは、是れ皆、硯ありてこそなれ。

藻鹽くさかきあつめても筆の海の
そこには種のつきせざるらむ

と、某君の詠したまひしは、實に、明言とこそ思はれてうれしけれ。

熊本　益田米子

花のあした、月の夕は更なり。うれしきにつけ、かなしきにつけ、事のまにまにつれて、心にあまる、思ひをのべんとて、先うちむかふは筆墨のたぐひぞ、何れをわかず、親はしくぞある、そが中にも、うごきなき御代とも、又誠實なる人にも、たとへ得べきは、硯なりけり。己が心に、浮み出づる思を書き流すにも、みな筆墨を友とはするなり。よろこびも、はかなきも、硯に、うちむかひつゝ思ひをのぶるなり。かく、今、墨すり流し筆とりて、己が心に思ひつる事を紙に書きあらはし、いつも文かく友とし、いよいよしたのしく、むつまじく幾時までもかはらぬ、事になん。

熊本　猪原みさを子

わらはは、小學を卒へてのちは、父に書を、母に縫ひ針の、事を習ふの外、何の業もなければ、文をつゞり書をゑがき、などして、學びの林に深く入らましとおもふぞ、世の樂みなりき。されば、文机の上なる硯ぞ、朝夕睦ましき、學びの友なりける。此硯いと柔にして形は珍らしきにもあられど、摺墨のいろの美はしく、執る筆のさまぐヽと運べるは、一は墨筆のよきにもあれど、大方は、硯の質の善きにぞあるらん。あゝ此硯こそは、またなき師にも友にもあるかな、幾千里へたつる友垣にも、またみぬ萬世の末の人にも、砲烟彈雨、凄き征露皇軍の勇々しきありさまも、果ては日本大勝利の、凱旋祝ひの賑かなる事柄も、又君が代の種々のうれしき、あるはたらちねの父母の、深きめぐみのかずぐヽも、おもふがまゝを書綴り、知らすることは、此硯てふ者の賜なれば、世にまたなき寶ともいふべけれ。

くらぬ山はてなき奥にすまんより硯のうみに流りくらさむ

三河　中島はや子

ゆび折りてぞふれば十以年前となん。學びしは十五年末とこそなりぬ。師の恩こそあつき。硯の水の黑けれど、それよりもこき、我師の恩ぞ、と、一人言ひつゝて、机のそばにうちより、歌にやつれしか、文にやつれしが、拾年の昔、我師よりたまはりたる、硯なれば、今は、いく百年の硯ともしれざれば、やつるゝも是非なきにぞ、すがたこそかわれど心は昔しも今もかわらじと、こそ思ひアゝ師のこそあつけれ、師おんこそあつけれ

羽前　諏訪夏子

字も満も書き得せしむる自己の友なる此の硯は、小學校に入り始めより之を用ひ居るなり、指折り數ふれば此に八年、嗚呼我は此の硯と筆との惠によりてこそ、此文字をも書き得るに至りたり、又如何に此の硯と親みを通ぜしが父母にも言ひ難きことも此硯には漏して思を紙に述べしこともありき、而も其時賞品に硯を貰ひしが自ら過ちて少しく破損せり、然るに此の硯は尚強固たり愛すべきかな、其親しみや如何に、或は師を思ひ或は骨肉とも思ふ、實に親愛なる此硯。

北海道　小山かく子

やよ硯の君、われは汝を愛す。汝の務めの、よし賤しくて、獨立するの能なくとも、常に其務め堅く守りてつぶやかず、時には腹きたなき墨もて、汝が顔を汚すも怒らず、又見る影もなき筆もて汝が友となすも咎めず、扨もやさしの君よな。

やよ硯の君、われは汝を愛す。汝が心の海の、よし淺くとも、そのうけ入れし一滴をも漏さぬやさしき心根こそ嬉しけれ、扨も情あつく、操正しき君よな。

やよ硯の君、われは汝を愛す。汝の堅忍、汝の忠實、汝の節操、誰か愛せざらめや、尊ふとき帝も、大臣も、名僧知識も、秀吉も、學生も、農も、工も、商も、皆さなりき、みめの黑きによらず。扨も愛嬌深き君よな。

山梨　標武子

羽色は染めても心の清よ。と道行く小女等が歌ひ過ぐるそが鳥にも似ていとく黒く我文机の許に、四つの友と相和して、睦まじく、ひれもす、まめやかに、かし付き、つゝある、一の硯こそあれ、千尋の、海には、底も、得分かぬ、思ひなど、限りなし、かき流させ、つたなき、手ぶりも、務めなば、しばしが間にも、見まがふ許りに。四つの、友と共に、いと、ねむごろに、かし付き、くろゝものを我も、そがめぐみをや、受けしならん、此頃は、花、郭公、月、雪、の、友が便りの、返しにも、心おきなく、書き、流さるゝ、様になりて、交りの、一入深く、なり得らるゝも、皆硯のめぐみならんや、ましして、氷るが如き、冬の日も、草木も、枯れ果てなん、とする、暑さにも、怠りなく、紙命に從ひ、倦まず、たゆまず、かし付く、けなげさよ。あゝ此硯こそ、今は京の都に學びしたまふ、友との別れに、かたみとて、求めし硯ならずや。そが當時を、思ひ出して、いともなつかしきば、友にぞありける、二年あまり、相見るたに得ず、空しく、月日を過しつれども、只々、此四つの、友のめぐみに因りて、二人が間には、あけくれ、春の如き、長閑なる、交は絶えせず、共に、心のうさも、語り合ひて、一つホームに、長らえつゝ、あるが如きは、皆此硯のめぐみに、こそあれ。我等の如き、二人が間に於ても、かくあるものを、まして、我帝國の。天が下に於てをや。如何ばかりならむやよ友よ、二人が間こそ、此硯の色と共に、いよいよ深く、行末迄も、變らじなよ

肥後　佐々有郷子

硯には種品あり。石もてつくれるを尋常のものとすれども古瓦を以て造れるもあり。木製もあり其人々の好めるによるぞつれなる。そも硯の代々もてはやさるゝはいかなる故ぞといへば。朝夕備忘の記をしるすがゆゑに。貴き賤き座右をはなれざるしたしき一品なり。四季をりをりの道ゆきふりには。駕に車に馬にもともなはれて花みる時は花にしたしき詞をうつし。郭公きく菖蒲の軒ばの下にありては涼しき言葉のなか人ともなり。月みる夜半には霧の籬はれわたれるけしきを。紅葉かされの紙にうつし。雪の日はさくら炭かきおこして。木のめにるべき消息の筆を助けて。四方の雅客をいざなふ力あづかりて勳功あり。あはれあはれ此の石硯よものいはねども千里外の用事をとゝのへ。筆墨和睦して天下貴重品とこそいふべけれあなゝづかしや。

羽前　春野絲子

あゝ此硯、妾は此机にむかふ度ごと、此硯を見る度ごと限りなき思ひにくれるよ。

をゝ、そは三とせの昔とはなりけるよ。父上樣には遙か都へと旅立たせ玉ひ。其歸るさ御土産にとて此赤間が關硯を妾に下され玉ひけるが、………今はいとも哀なる形見の品とはなり、妾は之にて、たえ果てぬ思をやるよ………。

それよ、去し卅六年の秋初めつかた、父上樣にはふと風邪の氣味にてをはせしが、翌月廿五日……彼の日はそも如何なる魔日なりしか、名醫の奇藥、神佛への願ひも水の泡、肅々たる秋雨のいや降りまさりて、世はなべて暗澹たる帳に閉されたる夕まぐれ、……をゝ妾が最愛の父上樣は、黄泉てふ地の客となられ玉ひける………。

妾が此時の悲しみはいかに、時しも紅葉の色つきそめし頃なれば、人は皆明日は彼の山今日は其森と、浮世を外に語りしも、妾が家のみはひれもす涙の雨はたえざりき。あゝ、最早言ふにえ絶えざるよ………。

肥後　岡山登壽子

げに千々の言の葉もいづべきものは硯なり。此の石や山の奥河の底よりいでゝ。花の朝月の夕筆さしひたしては。心に浮びいづることをしるし。うれしきをりかなしき。をりにつけ。心ひとつにあまる思ひを紙にのこし。うるはしき花は一夜の嵐にはかなくちり。清らかなる月はあやなくもむら雲におほはるゝにあらずや。されども一度筆とれば千代萬代までも消ざるなり。歌人これをとれば鬼神をも泣しめ。天地をもうごかすべき、是ひとへにこの硯の勳にこそ、あはれ硯よさるをしへを誰に受け。さる道をたれに學てしか。妾はこれより終日硯にむかひ千々の言の葉をつまん。故人の歌に。手なれつる硯の海も心あらばわれによせなん玉のひとつを。誠に願はしきことにこそ。

東京　木内まつ子

硯ばかり動かぬ姿はあらじかし。動かざれども人の心のまに〳〵用ひらるゝぞ、いともめで度おもゆるよ。まことや彼が多くの友のうちには、あるはやさしき姫が玉机の上に、面もうつらむ許りにみがきなされて、式部が筆の流れをくませ、納言が才のおもかげなどゝめさするも有らむ。あるは、みやび男が友となりて、月に花に、色香ゆかしき言の葉の花を匂はさするも有らむを。拙き己にまめ〳〵しく仕へくるゝいとしの硯よ、まいて。此日頃老ひたる伯母君の病みませるを、叔父君諸共看護りまつるものから、汝に親しむ暇もなければ、さこそ水は枯れはてゝ、ちりもて山をなす許りならむかし。さはれ、幾時までもうときものかは、やがて伯母君いえましなば清め、扨、六寸の筆のかひもてこぎいでん、行えや、看護實修記にこそ有れされぼうらみぞ、やよ硯よ。

和泉　稲原菫子

常にわが文机にある四つの友のひとりにて、いとめでたきものぞありける、其體やいと剛につよきを以て乾に、其用たるや、いと靜にすなほなるをもて坤にかたどりとなふとか、そが上殊に床しきはとこしへに、其德を全うするてふ尊さたれかはあはれと思はざるべき、あゝわれもひたぶるに、心の駒にむちうちて、學びの道をいそしみ、美しき硯の海のつゆを汲みて、いでかむばしき、あとゞめてん、みちのく紙に。

松山　南　齊子

うら安きみよに生れあひたる幸ながき身なれば、いそしみて、硯の海の玉あされよとのみ言葉をさへ、そへて、師の君の惠ませ賜ひしを、あはれ塵のみ打つもれる机の島の上に、水さへもあせ果てたる此樣君の見給ひなば、いかにかなひなしと思し玉ふらん、なれも心あなば、さぞなつれなき我をうらむらんと、打向はるゝにも身の怠りの悔まるゝよ、いでや、今日よりはつとめはげみて、筆の林に分け入らんよすがと賴みつゝ、波風だにたゝぬ此硯の海をひたにあさらばや、やがては嬉しき玉も得せしめてよ。

# 吾が常に愛讀する書籍に就て

## 人

北海道札幌北一四七ノ一　小山かく子

珍らしき物の理、説き明せし理科書よりも、天が下ありとあらゆる國々の面白きこと載せし地理書よりも、いみじき文士の物せし鬼神をも泣かしむてふ歌書よりも、すぐれて我が愛讀するは偉人傑士の傳記なりけり。

み空の星の數にも増して光り放てる偉人傑士傳の多き中に、日頃我が愛するは北米の偉人、ガーフィルド氏の傳記なりけり。

淋しき原野に貧しき暮しをして、杖と頼み柱とすがりし父を失ひ良人を失ひし、其の妻の心、思ひやるだに憐れなり、只管天父の加護を祈りつゝ頑是なき四名の愛兒を、婦人の手一つにて貧苦の中に養ひ育てつ、斷食に笑顔作りて其の子を勵ませしなど、天晴の女丈夫ならずや、丸太小屋の一貧兒より身を起して、後年ほまれある大統領とまでなりにし人も、此母の賜ならずや、あはれ彼が母文明の女丈夫！。失望の淵に沈みし時、我此書を繙けば忽ちにして希望湧き不平去るなり。

和泉　福原菫子

人のくちの葉にせし女子教育も、今は盛になりゆきて、そが知るべのふみさへ、いと澤に出でぬるこそうれしけれ。うちにつきてわれのいみじうめでひもとくものは、遠き東の都より、月に一たびおとづる。女鑑げにそのふみなりけり。女子のふむべき道のくさぐさ、何くれとなく、いとねもころに教へ導かれたるに、われは只だ師のこと親のこと、あるは、姉のごと、友の如仰がれて、なつかしう、打ち向はぬ時ぞなかりける、あはれいたづらに、われはいつくしみ讀むべきかは、女のかゞみてふ名にそむかぬやう、あけくれ心みがくのみ。

松山　南舒子

あはれ淋しき片田舍に住ふ身の、學ぶに師なきを、いかにせむとひたにかこたるゝ折しも、思ひがけなくも女鑑撰文の賞として、賜りしは、女子文章軌範なりけり、嬉ばしさ、げに云ひ知らずなん、繙けば古の女の殘し置かれにし文ども、すぐれたるをのみ數多撰び載せられ、編者の君の懇なる註釋をさへ、加へられたれば、いと解し易くて、文の林に分け入らんと志さす妾には、此上なきしをりともなりて、げに眞の師に導かるゝやうの心地せられつゝ、日頃愛讀する事の、たのしくも、はた嬉しくも、覺えらるゝよ、げにやかゝる書籍を與へられしはいともふかきみ甚なりけりな、あゝ此後ちはいそしみて唯一すぢに學びの道をたどりゆかばや。

三河　中嶋はや子

人の性格は其國々によりて、多少の差、あるこそなかしけれ、我國の女子は先づ一家を成たる後は、只其内政をのみ司るを以て一般の風

習と知らる丶ぞかし、されば我國の女子は、國家、社會、と云ふ事には少しも思ひ及ばざるもの極めて多し、然るに現時女子教育の有様を觀れば如何多くは、只だ技藝に適ふべき、裁縫、生花、文學、など位の技を學ばしむるのみにして其の社會的教育に於ては依然として沈滯荀守の惑あるぞ遺憾なる抑も女子は概ね寄生的依賴心あるもの多きものなるに是れ等の女子が他日第二社會の相續者の母たる任務を帶ばんとすあゝ誠に危い哉。夫れ然りされば方今の女子腦裡に向ふては宜しく社會、國家、と云ふ理想に富ましめざるに於いては我國の前途や、國家、の活動は容易に見得べき事にあらざるなり、若しそれ今日の儘にて行かば國の空は師走の、時雨、蚤り掩ふ有様とこそなりぬべし。世の教育者以て如何となす。

吳　和住千鶴子

わらは丶、初學の身にしあれば國文のよき書もがなど日ごろ思ひしかどたよるかたもなく徒らに過しに去にし年のはつき、ゆくりなく撰文の賞として指原乙子刀自の物し給へる女子文章軌範を賜はりぬ。かれて、望みし事なれば、たとへかたなき嬉しさにかくぞ思ひき、

うつくしく姫のなしたる綾にしき
衣うつしづもたとりゆかなむ

たまひてよりはぬば玉の夜はさらなりあかねさす日もなほひま〳〵、によみぬるに、山すけの錦に敎へ給へる言の葉に、白糸の結ぼれたるすじ〳〵もとけそめて、いと嬉しく手引の糸の繰り返し〳〵讀みもて行く程に今はしばしも放ち得ずこそなりにけれ。あゝ此文の花園、乙子の刀自の手箱の底に秘め置きて闇の錦をなし給ひなば、わらはは、今やいかになりけんあらぬ野山にさまよひて、秋の野に生ふる根なし草の枯れも果つべかりしを、はつかにも霜げのひまをもえ出づるなむいと嬉し。されば世の姿の如ぎ初學の姫たちよとく此花園になりたちて綾なき袖にも其香をしめ給へとこそ、思ひ出でぬるまゝかくはかいつけぬ。

肥後　佐々有鄰子

皇國には女子の讀べき書あまたあるがなかに。清紫の筆になれる書籍はいづれをいづれとも別がたきものから。妾は三栗の中津代のぶりにならひ。源平兩家の戰史よりはじめて。島民たるものは振武の心の柱つきたて丶外國のはづかしめをうけざる様に。朝に夕に思ひ侍れば。晝夜ひもときうちむかふ書籍は。歷朝忠義にたなれし史乘になんありける。そも〳〵西海にては菊池氏ありて。元寇の役には神武の勳を海外千里の天にかゞやかし。山陰にありては。萬乘の天皇を隱岐よりむかへ奉りて。船上の山よりたかき忠臣の名和家を出し。東山には新田氏。畿内には楠木家あらはれて。天下一統至尊に臣道をふましめてより。德川氏が修史の心に富て水戶家の大日本史の撰あり。いよいよ臣民の別あきらかになりにければ。愛讀すべき書籍は大日本史を朝夕の鑑となして讀べき書にこそありけれ。

肥後　岡山登游子

なにくれとなく女子に必要なる書籍をひもとくなかに。いといと姿が愛するものは。大日本女學會編纂の婦人寶典といふ書籍なり。此書はやんごとなき公達のものせられ給ひて妾のごとき家庭をはなれがたきもの丶爲にとてものせられたる書籍にして。いと婦人に適切なる良書なり。其れもごろなる敎は妾のやうなおろかものにも。よく其理解るゆゑに。あたかも師のもとにて敎をうけつ丶あるごとき心ちせられて。しらずしらずの間に智しきをまし其効あげてかぞふるにいとまあらず。中にも家庭教育のゆるがせにすべからざる事あるひは言語禮法を正しくし。節操を守り心を優美高尚にして。よく其家事を管理するなど。つたなき筆には申のべがたくなん。いとなづかしきかぎりにこそ。されば此書をのみ心の鑑と。うやまひ信じしばらくも文案のほとりをばなたず。常に愛讀しつ丶あるなり、あなゆかしの書にこそ。

肥後　秋吉輝尾子

すべて生たらんもの誰かその愛するものあらんや。しかれども其愛するもの種々あり。そは其人によりて山水花月。または樂器。鳥獸

酒茶など。さらに數ふるにいとまあらじ。されどみな一時眼前の快にして。つひにうむといふ事あらん。さすれば眞正の愛するものは何を以ていふ可きか。書を讀其樂をや。吾が常に讀みめづるは。故貝原大人の益軒十訓にこそ。其ものせられしところ一として眞理ならざるはなく。其敎ふるところ。ひとつとしてれもころならざるはなし。ゆゑに是を讀むときは。幽玄靈妙なる理想を生じ。眞味無垢なる想像をうかべ。優美なる風致を養ひ。あるひは行文の流麗巧妙なる。あるは立論の精確にして周到なるは。いよいよ讀むでいよいよ趣味を生じ。しらずしらずの間に。永久失ふべからざる樂を生ずるなり。あるひは聖賢の言行事蹟のところを見て。は妾が日頃の言語禮法を正しくせんことをねがひ。家庭訓を見ては。妾が節操を守らんことを思ひ、聖經賢傳みなこよなき良師にあらざるところなし。故に妾は是をもて樂として常に愛讀してあかざるなり。

長野　小泉みつじ子

大御代の開け行くまゝに、女子敎育も月に日に進み行きて、そが道知るべともなる、書籍雜誌の多かる中に、妾が師とも友とも賴みて、常に座右に供へて、愛讀なせるは女鑑にこそ、其の名におひて、誠にいみじき書なりけれ、深山のおくの埋れ木と、世をはかなみ過す身は、たゞ、此女鑑の來らん日をぞ、一日千秋の思ひにて待ちぞわびぬる、春雨のつれ〳〵とふりしきりたる夕べ、燈火の許に、あるは月影さやけくてらす窓の下に、世に博學の大人達より、婦德を修むる敎をうけ、遠く東西の才媛と、面のあたりに交りを結ぶ心地して、あぢきなしとかこちし身も、今はなか〳〵に賴み多くなりぬるも、皆、女鑑の惠みによるならん、あはれ、優曇華の花咲く折にあひぬる心地、今よりは、この書みを友となし、女子の道を學び心の鏡みがゝましう思ふ心のうれしさをかくなん。

伯耆　樋口つる子

わらはは田舎の片ほとりに住みなす賤の女にて侍るなり師の君とかしづかん人もなく學びの庭を踏み別けむ友垣もなくまして都に出で

て物學びする資力をや其の上に朝またきより夜もすがら糸くる業にたちぬひにのみ日を送り眞に暇はあらぬ身も女鑑雜誌てふ美くしき本を購ひてみしかきあしのふしの間も暇しあればそをひもときて大方の人の師の君とも友とちとも思はべりて花も實もある學の園に辿るはいと〳〵うれしく限なり其色かのふかき事本年二月より猶一しほましけれ雪のあしたも雨の夜もひまにしあれば開き見て發行の日を一日千秋の思ひしてまつにこそ此戀しき君を愛すべき女鑑の幾千代までもいやさかへに榮へゆかんことを祈るにこそ

熊本　猪原みさを子

別にこれとて、愛讀する書あるにあらず、唐大和さま〳〵に、よけんと父のいふまゝに、調ぶること三年あまりにもなりなむ、此春の始比より、女鑑てふ雜誌を見るに、上は畏きあたりに仕へまつり宮人の歌より、下は山賤の薪拾ふわれらの拙き文にいたるまで、東の果西の隅、あまの鹽燒く子等が物せるまで、おもしろくをかしく珍らしく貴く書綴りたる樣々より、文章博士方の女の鑑にとて、麗しく日出度書き玉へるなど、いへば果てなきまで、ありがたき言のみぞ多き册子なり、此の書籍を見れば、あまさかる鄙にすめる、吾等も、花の都にあるこゝちぞする。菅の根の、春のなが日、かたくるしき古書に飽きて、此女鑑を見れば、花の木下に木芽煮て、睦しき友垣と語るよりも、嬉しくも又樂しみぞおほかる。

くもりなき御世をてらせるかゞみとも
みるへきものは此女鑑かな

出雲　中尾菊子

## 短文

### 女子の博識

學者動もすれば女子の職分を家政織物裁縫編物結物

料理育兒杯云へる此外猶必用なる物あり何ぞや謂く織地見本染物見本(本色合色)紋帖小紋帖縞帖等なり此外友禪模様杯なきにしもあらず婦人の爲に驕奢を勸むるは不可なり要は分限相應を失はざるに在り管子三夫不耕則萬夫飢一婦不織則萬夫寒と宜矣
亦洗濯あり看護あり簿記も知らさるへからす計算も知らざるへからす禮式も知らざるべからず經史も多少は味ふべく詩文歌俳の樂は多少ありても不可なし女子の職分も亦鮮なからざるなり矣

### 戰場の光景

石狩　小山かく子

進軍喇叭に大砲小砲の響きは天地も崩れんばかり幾千の猛將勇卒塵を蹴立て雪なだれの如く突貫の聲耳を聾し劍戟ひらめき阿毘叫喚の大修羅場一時に現出し來る意氣地なしの敵は逃げたり堅壘は敗れたり。見れば嵐の後の花園の如くあれし戰場の光景。あな悲慘!。其所に倒れ兵士の血しほに染むあり。此所に折れ曲りし劍落ちたり。物凄き光景ならずや。忽ち見る彼所に赤十字の一隊嗚呼赤十字の一隊。

### 一瞬間の感

東京　石川薫子

日は既に暮れ、寒い〳〵風は冷え切た、お濠の水を渡つてまともに吹き付け、手も足も千切れさう、まして雪さえチラ〳〵と降り出した淋しい夜、フイト横町から人が飛が出たので、ギヨツとして立留つた一瞬間、妾の眼に映じた者は、目の涼しい、色の白いたをやめ、それは辻占屋で有た、妾は知らず知らず彼の跡を見送つた、聲は微かに、赤色の提灯が路次に隱れた時、一しきりの雪は勢よく降り出して來た、ア、彼天女の如かりし彼女、過去はいかなる歴史を持て居るで有らふか。

### 三月七日小竹園主を訪て

肥後　村井直子

一日ゆくりなくとふらひまゐらせ。なめげなるも。かとがめ給はでいともねもころにもてなし給ひし。かたじけなさ何ともいひしらぬまでになん。さやかなる御園の梅の花なかば。うつろひて庭もせに散しけるさま。池の堤に咲のこりて。みどりの水に色はゑたるけしき。今も面影にみえていとなづかしく。塵にのみうもれたる宿のことにわびしくなん思ひたまへらるゝ、をやみなく降くらしたる春雨に。今はゝや名殘も。とめじと思ひたまへられてあたらしくこそ。

さるは一言のいやをきこえさせんとてなんかして。

吹雪　それがし子

我が、住まふ北道海は、雪多く寒き處なれば、一年の冬中に、五六度吹雪とて、雪の風にまざりて降ることあり、この時は町も處々に山の如く雪つもり、又風にふかれては、谷のごとき處などもできて平なる道も忽ち山谷とかはり家の前は軒までもふりつみて、道行く人の姿も見えず、かゝる時にも學びやに通ふ幼子どもの氣強う出で立ちて、わざとつもりたる中をふみわけ／＼、ころびまろび行くは愛らしう勇ましゝ、ほりなどに雪つもりて、道とのけぢめわかず道にもあらぬ深みへ落ちて、苦しめる、殊にあはれなり。

我山里　三河　榊原てる子

都の君方にさても見せまほしくよ、我山里の春のけしきを、そゝりいでゝうちわたす、野邊はかすみのうら／＼と、柳のかみの打たれて、長閑に吹く春風、みどりこき麥生の上に、なくひばり、すみれつむ里の小女子、つくづくし、そここゝもゆる岡邊を越くればあいらしき聲してうしろの山に、よばふ鶯、早彼岸櫻の匂ひそめぬるが見へけり、やがてぞ山は櫻に野はこがれいとゞながめはつきなくよにしきの袖をふりはへて、必ずとはせよ都のひめたち

父上に菊　伯耆　樋口つる子

父上が大切にして居られた菊の花を採り姉上は買手わらはゝ商人となつて「菊の入用はありませんか」と云つて遊んで居たら父上に叱れたのはもはや十年の昔となつた

故郷の中學寄宿舍にある子に與ふ　辻村采穎女

春の寒さ哨料となほ嚴しく候折柄其寄宿舍の朝な夕な如何に快活に送られ候哉氷を砕て嗽き日暖かき運動塲にベースボール試られ候等苦しき樂しきことも之れ有り候はんと御推し申上候頃日〇〇師團の出征を北停車塲に送られ候由御父參り今更らに敵愾の氣勃爵々禁せられず候ひし趣左こそと打笑みつゝ拝見致し候さらぬだに日露戰爭の報はいかに幾多學窓の下にある人氣を軒昂せしめ候や其寄宿舍にも三々五に頭を集めては口角泡を飛し腕振りては悲憤の談論湧くが如くならんと毎々思ひやり候ひきされど文部省令にて示され候ことあり校長あるは先生より必らず御教示も候ひしならん學生のとるべき方針は明らかにあれによりて示され候第二の國民たる御前さま方の責任は至りて重大なることにて候へば送り參らせたる將校兵士達の笑つて戰塲に向はれ候心にて將來忠良なる臣民たらんことを片時も忘れず身を無病に保ち學問を勵み恥と云ふことを知りて性格うち上りたる人にならんやうに致され度候田舍に住みては山野を跋渉することもよし先生に伴なはれて雉兎を獲を樂しみ候も稀にはよし新るなり水汲みなり充分に體力を練りて勇敢の氣象を養はるへく候只あまりに冒險のことはつゝしまれ度く候學科は何も何も大切に候まゝ御勉強の外餘念無かるべく候今はた御前さまの年齡は大切なる記憶期に候へば兼て教え置候漢文學を忘れぬやうに復して一字一句疎にせずよく御記憶相成り度候彼れは私心たこめて撰びて教え候ものに候へば志し水の泡とならぬやうになされ候はゞいつか古人の文章なり性格なり自分の有となりて益する所少なからざるべしと存じ候科學的の智識の必要は申すに及ばずそれと共に學文の基礎たるべき漢文學の素養を欠くときは人の説もようせずば理解せず自己の識見も志想も發表し得られぬやうにならんことを杞憂致し候故にて候土曜日或は日曜には定めて叔父樣の家にまかられ候御事と存じ候御祖母樣の御機嫌いかに私に代りて御孝養なさるべく御命令なされ候ことある時はでき得るだけは努めて成し遂げて老の御心樂ましめ參らせらるべく候長上に服從すると云ふことは年少の人の尊ぶべき美徳にて修身の端緒となり禮容と云ふことは心の中の恭儉の徳の外に見つるゝものにて候へはよく御事へなさるべく滔々たる心得違ひの學生の長上を（校長なり教師なり舍監なり祖父母なり父母すべてめうへの人）蔑にし不敬の行ひし傲慢の言を放ちなどするにかまへて御倣ひなさるまじくこれは道義の修養足らぬよりすることにて恥かしきことの限りに候子の人格は一に母の責任によると存じ候へば

はよぎなく且暮の教育をなし能はぬ身の訓誨思ふに任せたらめ或は不良の習慣に染みはぜす候や若しくは學科に忠實ならて云ひ甲斐なき成蹟をみるともや候はんと憫然と襟もと寒く存じ入り候若しさもあらばこは私自身の罪輕からずと深く顧みて責むべきことに候私こと試驗前後にて忙はしくはた又調べものこれあり候て圖書舘に大方は參り居り此年は花とも鳥とも思はず候されど大方は片つき候へば春季休業に相成候はゞなつかしき故園にかへり候て諸共に庭柯をみて顏色を怡はすと申すやうなる樂しき對面も致すべく候籬の本の紅梅は春知りかほにやひとり匂ひ候らんとは夢にさへ思ひかよひ候さては又御まへさま祖母樣伴なひ參らせて御上京相成候はゞ上野隅田河の花見品海の沖に舟こぎいでゝ貝拾ひ候など其御地にはできぬやうなる面白きあそびいたすべく候あまりに長くなり候まゝ此度は是にて筆とめ候かきつゞけ候を反古にせすて御判讀相成度候かしこ

## 短歌

友人の遠征を送る　伯耆　樋口賀代子
いささよく君送らむと思ひしに思はすぬらす我袂哉

名所　三河　しづ子
御吉野の吉野の宮居有しよを忍ふ袂にはな散かゝる

折にふれて　東京　敷島うた子
春に逢はゞ想いてゝよ諸共に袂分ちし花の下蔭

餘寒月　東京　三好珍子
梅にのみ春の景色を匂はせて雪けの空に曇る月かけ

出征軍におくる
仇野のおとろ醜草刈盡し歸さまさむ時をこそまて

薄暮雲　長野　小泉みつじ子
末遠く消えゆく雲や賤か家の夕げ炊きし煙なるらん

養蠶　福井　平田そう子
賤の女は髮梳るまも無るらん春て盛の室にこもりて

小學校　福原菫子
あまさかる鄙のさかひも學ひやのまうけあるこそ嬉しかりけれ

民　長野縣　山本民年子
大御代のさかゑしろしも民くさのいや年ことに生ひしけりつゝ

春暮　山田靜子
くれてゆく春の名殘なしむらん花のあとゝふうくひすの聲

夘の花　榊原でる子
かはなみのよするとはかり見ゆるかな夕風わたるきしの夘の花

山家　大阪　長野悅子
みいくさに皆いでたちてさくらさくわが山さとの春そさびしき

蝶　東京　小川政子
にほひつゝ今をさかりとさく花をわか物かほにてふのしめたる

折にふれて
神風にみはたのなひくみいくさにはかなくきえんあたしの露
ひのもとのみいづかゝやくみ軍に驚のつはさもをれ伏にけり

少女献金　秋田縣　古瀨りく子
をとめこか桃のさけさへくますして赤きこゝろをみするみよ哉

露と云ふ國を題して
ひにあへはたちまちきえむ白露の草葉の上やいのちなるらん

## 教の庭

山家
鶯のこゑも聞えて山はたの菜の花つゞき蝶まひあそふ
首夏藤　三河 本多きさ子
なつかけてゆるしの色を山のゐの水にみせたるふちなみのはな
山吹
しら露もこかれの玉とみゆるまてやへやまふきの花のまさかり
春の山奥　磐城 須磨子
花ならぬ霞の奥はわかれとも草のいほりにことのねそする
路卯花　大和 栗山高子
うの花のさけるあたりは夕やみもさやかなりけりやま越のみち
花　播磨 本多宜子
あさかせに霞の衣ほころひてにほひいてたるやま櫻はな
我海軍浦塩を砲撃せしときゝて　奥 和佳千鶴子
ものみなは氷りてしろき浦しほに攻よせにけんあはれつはもの
本誌愛読の諸友へ　伯耆 樋口つる子
あひ見れど同じ園生の教へ草共に摘みつゝあそふ嬉しさ
鶯の初音をきゝて　薩摩 松原みれ子
さゝやかになく黄鳥をわれにのみ初音もらすと思ひけるかな
負傷兵　石狩 小山かく子
帰らしと勇みて家を出し身もいたてによわるきのふけふ
加納忠男氏の戦死をいたみて　伯耆 樋口つる子
とつ國の嵐に散りしさくら花千と世のゝちも香はのこるらん
春風　三河 しづ子
菜の花にねふる胡蝶のゆめさめてのとかにそよく野邊の春かせ
三月七日梅欅軒にやとりて　肥後 村井直子
さく梅のきよきかなりをまくらにてむすひし夢は千夜も忘れし

## 今様

霊かけふりかしらま弓
つらぬきとめし白露の
大阪 長野悦子
はるの川への糸やなき
玉もちちさぬはるの風

琴をきゝて
つきにすみゆくたか殿の
かへさ忘れて佇めば
稲原茁子
しらべ妙なる琴のねに
芝生にむしのうたふなり

山吹
きよき小川のさら／＼に
漂よふみれば袖ひちて
稲原茁子
いはぬいろなるやまふきの
おらまほしくも思ふ哉

鮒
清きなかれのさとかはに
脊くしげれる藻がくれに
伊豫 しづ子
根せり摘まんとなり立てば
驚く鮒の二つ三つ

姫百合
匂ひこぼるゝ姫ゆりの
めてにし姉は世にあらで
同
談はこそに變らぬど
やつるゝ袖に濡るなり

花を雲かといく度か
今はたたみれはなか／＼に
東京 三好珍子
迷ひし心にうたがひて
まとの花は峰のくも

出征軍人に
こち吹く風に飛び翔る
磨てや羽がひを心して
石狩 小山かく子
鷲のつばさは強くとも
み國の敵をこらすべく

花を手折りて
さかりなるみを折られしと
雨風にのみまがせしと
東京 三好珍子
恨みなけくなさくら花
汝をばなしむ我こゝろ

出征軍人を思ひて
氷にとちし北の海の
かすみの衣たちかへて
薩摩 松原みれ子
皇軍艦を思へとや
春の野山に雪そふる

秋の月
野寺の鐘のほそ／＼と
並木の松の木末にそ
稲井 平田そう子
わたるひゝきに霧はれて
さやかにかゝる秋の月




## ○伏見宮妃殿下の御高徳

### 御手づから酒盃を一大尉に賜ふ

普通將士の間に於てすら親子兄弟打揃ひて軍人たるは例多からざる次第なるに金枝玉葉の御身を以て伏見大宮殿下には第一師團長の職に在し東伏見宮、閑院宮御兄弟打揃はせられて孰れも軍務に盡させられ若宮博恭王殿下には海軍少佐として軍艦に御乘艦あり旅順の海戰に御勇名を擧げさせられしが大宮妃利子女王殿下にも殊の外軍事に御心を注がせ給ひ曩に宮殿を兵員に貸與へさせらるゝ旨仰出されたる程なるが同邸に在る某大尉は一日部下を舊殿正玄關前に整列せしめ

今回我々を斯くまで厚く御待遇あらせらるゝは全く妃殿下の思召に基くものにして畢竟軍人が國家の爲に一命を堵して外征せんとするを愛でさせ給ふ御心に外かならず實に我々部員一同は斯く厚き思召に對して感奮之に報ひ奉らざる可らざるは云ふ迄もなし殊に此戰鬪の向後幾年間繼續するやも計り難きを以て汝等此に深く心を固め報恩奉公の事を忘るべからず

との意味にて訓示する處あり、部員一同嚴肅に靜聽したるが此間若宮妃殿下には玄關に出御ありて總てを御聞取遊ばされ午後五時に至り宮殿に於て部員一同に酒肴を賜はり蓄音器を吹奏せしめられて厚く一同を犒ひ給ひ殊に畏くも妃殿下は開宴中お手づから銚子を取せ給ひ酒杯を大尉に賜りたれば大尉は感涙に咽び殆んど座に堪へざる程なりしが宴の終るに際し一同肅然と起立し盃を捧げて　天皇陛下の萬歳

貞愛親王殿下の萬歳を三唱し列座悉く無限の感慨に打たれ一死以て國家に報ゐんと決意したりとの事なるが、其後更に部員へ宮殿及び庭園の拜觀を許されたりしと

## ○故廣瀬中佐の葬儀

萬代軍人の龜鑑とまで稱へられ、或は軍神の權化にあらずやとまで唱はれたる贈正四位功三級勳四等廣瀬武夫氏の葬儀は去月十三日午後一時築地水交社出棺神葬式を以て青山墓地に埋葬せられたり

雨かと氣遣はれたる春の空は葬儀の近づくに隨ひて次第に晴れわたり赫々たる春光は亡き人の功業を照さんとするが如く途々の櫻は今を盛りと咲き亂れつ吹く風にハラ／＼と散りて柩の上に落ちかゝるは人は武夫の日本武士が適ばれの最期をぞ示さんとてか扨て當日午前六時といふに夜來通夜したる海軍本省、同軍令部、同大學校、同々窓幷に親戚故舊の人々を始め山本海軍大臣、伊東軍令部長、齋藤海軍次官伊集院軍令部次長、村上經理局長、小栗、井内、土山各中佐、川浪、高木、森、徳田、井出、田中、千秋、小笠原、山口各少佐、中島機關中監、齋藤軍醫中監、鈴木主計中監、關田大尉、藤井兵曹長、谷口上等兵曹等の諸氏築地水交社の靈場に集り諸般の準備に從事中午前十時頃勅使として東園侍從は來社され紅白の絹を靈前に賜はりたりやがて出棺の用意整頓したるころ齋主村田大教正は副齋主以下を率ゐ來着、靈前の舗設を爲し神饌幣物の奠供、祝詞の朗讀等あり豫定の如く午後一時といふに水交社の門を出でぬ

▲行列の次第を記せば先導谷口上等兵曹、次に軍樂隊、次に儀仗兵二百二十人繼いて東伏見宮殿下、山本海相、伊東軍令部長、東郷司令長官、伊集院軍令部次長、軍艦朝日、舊同藩人より送られたる七對の眞榊、次に紅白旗四對、是等はいづれも血氣壯にして何時にても決死の事業に馳せ參じて亡き人が志を繼ぎぬべき水兵等が捧持したりしは一種の悲壯な

る感をば引き起さしめたるに祭官齋主等の馬車に續いて一流の銘旗春風に飜へりつゞいて藤井兵曹長と關田大尉の捧持したる二箇の勳章の後には又々屈竟なる水兵たちが曳き行く砲車の上に勇士が遺肉を藏めたる黒き巾もて包める箱を安んじそを被ふにエポレット燦爛たる軍服を以てしたるは故人が爽颯たる勇姿彷彿としてそこに現はれ來たるかと疑はれ更に〳〵深き感情は見る人の胸を打ちぬ此棺側には小栗井内、土山の三中佐及び川浪、高木、森の三少佐陪從し續いて當年十二歲の少女、妻子を有ざりし故人が愛情の凝とも見るべき姪の馨子は赤味勝の毛髮を白きリボンもて結び白無垢に白の袴靴を穿ちて故人の叔父衞藤敎夫氏に手を引れ尙其他の親戚にまもられて從へるは亦一種異樣の感を以て沿道の人々の鼻をつまらせぬ　引續て故人が北堂令兄勝比古の夫人及故中佐の令妹は馬車にて從ひ其後には山本海相、伊東軍令部長を初目下東京、橫須賀等にある主なる將校は熟れも徒步にて從ひ其次に儀仗兵二百五十人其次に一般會葬者亦徒步にて從ひしが此會葬者中團體として最後まで扈從せしは講道館々員（草鞋穿）攻玉舍、慈惠醫院、醫學校、日本體育會員、海城學校の生徒職員等にして靴工組合亦從ひ、尙途中より學校歸りの學生等書籍と辨當箱とを小脇にかゝへ靜肅に伴したるは如何に中佐が學生間に其遺德の仰がれつゝある歟を見るに足らん

▲沿道の人々　江戸の人間を以てたゞに物見高しとのみ罵なかれ此葬送に各戸弔旗を揭し其沿道に人垣つくり一里餘の兩側を埋に埋たる人々は決して團菊の葬式に對すると同じ觀念を以て見物せるに非ず幾萬の貔貅鬼とも組んず人々が其繕はぬ面に包みがたき悲哀の色を浮めて胸轟かすべき軍樂の哀譜の中を肅々として進行くさまは實に是れ崇高の極悲壯の限にしてかゝる葬列は東京市民が多く見るを得ざりし處況んや軍國の民此『軍神』とまで慕ふの人の葬式に於て之を見るされば往々感極て稠人の中に淚を拭ふ髯男も多かりし

▲美しき女王殿下よ　沿道には種々なる團體の路傍に整列して弔意を表したるも多かりしがわきて人の感情を惹きたるは華族女學校生徒五百卅人が門前に正列したると青山、赤阪兩小學校生徒の武裝して路傍に屹立し弔意を表したるなりけり華族女學校生徒の中には北白川宮武子、廣子の兩女王殿下も交らひ給ひしが職員は兩殿下の路傍に立たしめ給ふ事餘りに勿體なしと其思召しを伺ひたるに兩殿下は容を改め給ひ中佐の如き誠忠義烈の人に對して弔意を表するに身分の階級など問ふの要あるべきや他の生徒と一列にて何の差支もなしと仰せありしとぞ中佐たる者死して餘榮ありと云ふべし

▲花吹雪と陸軍々人　行列は行き〳〵て赤阪見附へ赴きたるに道を挾んで幾十株の櫻樹今を盛りと咲き滿ちたるに折しも春風急にして落花繚亂柩を載せたる砲車は殆んど花吹雪をもて掩はれ列に連なる人々の刀の柄に二ひら三ひら附着したるなどいよ〳〵悲壯の感を増さしめたり更に赤阪は豐川稻荷前に至れば陸軍砲兵の一隊は阪上より來りて斯と認むるや車馬を止めて敬禮を施したる亦一種の壯觀なりけり

▲齋場の光景　青山なる齋場には既に先着の親戚知己の夫人令嬢大山、山縣、井上、小笠原、小田、金子夫人なんど四十餘人黑紋付の禮服にて控へ居り場外には陸海軍人朝野の紳士外國新聞記者等數百人集まり居り米國公使マクドナルド及同館附武官、米國領事なども來り會し樺山、井上の兩大將、杉浦、榎本の兩中將など亦來り弔されぬ但だ此の日濱離宮に觀櫻の御宴ありし爲之に臨むべき光榮を有する海將初め幾多の武官にして葬送行列の中途より脱するに至りしは遺憾なりしなるべし斯て午後三時廿分といふに棺は齋場に着し先村田齋主祭文を朗讀し讀で中佐が最期の事に至るや滿場寂として婦人席より嗚咽の聲のみ高かりき特に黑紋付の婦人の間に襟のつきたる綿服着て一種の異彩を放ちたる杉野兵曹長の北堂の如きは小笠原少佐夫人に向ひ今日の御佛は妾が倅孫七郎の姿が見えざるとて三度迄も御捜しくだされ

たばつかりにかう云ふ事になりました其の優しき御心ばせは何と申しても御禮の申しやうが御座りませんと感極つて號泣せしは慰めんかたなかりけり續いて東郷司令長官弔辭の代讀（村松大尉）有馬中將の祭文あり其他の祭文は一括して之を靈前に供へ午後四時に至りて全く式を畢り夕日まばゆく櫻花に映ずる定めの墓地に此忠烈偉大なる靈魂を埋め去れり、弔砲幾發夕暮の空にひゞきて勇士は永へに日本の軍の神として此國を護るべく靜かに横はりぬ

△葬儀雜觀　途上の見送　柩が京橋區元數寄屋町を通過の折泰明小學校生徒は武裝して門前に整列し捧げ銃の敬禮を行ひ、また帝國ホテル前に達するや同館外泊中の外國紳士淑女數十名はホテルの前に整列し脫帽して哀悼の意を表せり其他鍋町女學校は山下門内に、東京女學校は海相官舍脇に、獨乙公使館員は館前に、赤阪見附には衞生隊柩を迎へ赤阪小學校と青山小學校の生徒等は武裝して途上に整列したるはなか〳〵に勇しかりき◎俳優と力士　常陸山は門弟足尾山、常山、草加野、秀の浦を代理として送葬せしめ又芝翫、菊五郎、梅幸、莚升、猿之助、羽左衞門、八百藏、高麗藏、源之助、松助、市藏外十數名の俳優も會葬したり◎途上の撮影　近來未曾有の盛なる葬式なれば寫眞機を持出し行列を撮影し居る者多かりしが就中外國從軍記者が中佐の柩を乘せたる砲車を撮影したるは熟練に見受けられたり◎手向の花　日比谷公園外見送人の群中に數名の小學生徒あり櫻の一枝を手にしたる年少の者は柩に花を捧げんと同輩に諮りしに年上なるは靜に諭して云ふやう今は捧ぐる場合に非ず宜しく柩に供して青山に赴き靜に眠らるゝ我が軍神の墓前に手向け奉れとて互に手を携へて列後に隨ひ行きたるは實に列中の花なりき◎小村外相の接待役　英國公使マクドナルド及び同國少將ニコルソン、ハミルトン等の會葬ありたるが折柄來會はし居たる小村外相は臨時接待員の如く徒歩にて場内各所を案内し如才なく立廻り居たるが受附にありたる某中監顧て曰「廣瀨も幸福な

男だ外務大臣を接待役に使へば無上の光榮ではないか」

## ○勇士の母

去十日の旅順の激戰に奮戰せる勇士驅逐艦曉の機關長井上盛記氏は明治十三年六月愛媛縣宇和島町大字元結城に生れ父行年氏は故陸軍步兵大尉福井善次郎氏の令兄にして氏が二歳の時世を早うしたり母むら子は其時僅に二十二歳纖弱き腕に二歳の幼兒を抱へつゝ千艱萬難を冒て一心に盛記氏が敎育の犧牲に供し遂に今日の人とはなしけるなり

(前略)さて卒業試驗も都合よく相濟み候趣き長々の試驗にていかばかり骨折りに有りし事と存じ母は試驗中は唯朝夕如何にやと其事のみ案じ居り何卒都合よく及第致せば宜しきがと心配仕り居候處昨日の委しき手紙にて愈々及第と相分り大安心致し申候此の大喜びに就いて昔の有樣を思出し申し候、盛記は二歲にしてこの母は二十二歲の時盛記の父上死去致され其時一時は甚だ當惑落膽いたし候得共斯くては相成らずと存じ心を勵し此上は獨りにて世を渡りて如何やうの難義の場合に出遇ふとも志を堅固に持ちて一心に盛記の敎育に注意し行先兩親揃つて敎育せられし子にも劣らざるやう育て上げ若し國家に事ある時は衆にぬき出で君に忠義を盡すべき善き人物と成さんと存じ斯くいたすには然るべき學校に入れざれば其志を遂する能はず又學校に入るには多分の學費入用の事故何とかして只今より金子を貯へ置ざれば相成らずと存じ盛記は知るや知らずや確か盛記が四歲の時野川の井上へ參り紙漉の手傳ひに雇ふて貰ひ朝はまだ暗き中より起き一日分の盛記と母の食物とを煮て置き冬の寒き日夏の暑き日一日も厭はず三年間相働き居り候處盛記七歲の時最早尋常小學へ入學の年頃と相成り候間紙すきの手傳を止めて盛記に學問の志を勵す方將來賴母しき事と存じ入學後ば學校より歸ると母と共に机に向ひて讀書習字な

どして善き方へ導く事に苦勞し種々さまざまに艱難して育て候ひし事なるが若し盛記の性質愚鈍にて學問をきらひまた行惡しき時は母が斯くまで盡せし苦心も皆水の泡と消え失せ候事なるに誠に幸ひなるかな盛記は幼少の時より深く學問を好みて七歳の時より十九年間堪へ難きを忍びて精々と餘念なく勉學いたせし故母の素志の學校を此度卒業致すやうに相成り母子の幸福此上なしと存候父上も定めて草葉の陰より喜ばるゝ事とぞんじ此の手紙を認むるにあたり嬉しさの餘り涙うかび出でとゞめ兼申候此度卒業を祝ひて歌を詠み申候

ながながと心の玉をみがきわけ
御國の爲となるぞうれしき

師の君の深き敎をうけをへて
まなびの庭をいづるうれしさ

いまだ歌などを詠みし事御座なく候へ共祝ひの爲めかくと詠む氣に相成候盛記も實に愉快の事と察居り候卒業式の有樣を相成るべく委しく申越し候やう賴み入り候先は卒業の祝までかしこ

母より

盛記へ

これはこれ往年氏が機關學校を卒業しける時母堂むら子が二十餘年一日の如くなりし苦心の結果我愛兒の身の上に花咲き實生りしを喜びて與へし所の書狀なり讀來れば盛記氏が今日名譽ある勇士の一人として勳功を立つるに至りしは實に賢明なる母堂が家の爲め國の爲を思ふて刻苦精勵し盛記氏よく其訓誡を守りて勉學力行せしに外ならざるなり一讀誰か此の賢母と此勇士とが今昔の心事に同情せざらんや文中『母の素志の學校』云々とあるを見ても如何にむら子が氏に對する敎育の方針の疾くより歴然たりしかを察すべく氏は已に母の素志に酬ひし而已ならず天晴大戰場の舞臺に驍名を馳するに至りしについては母堂が今日の喜び亦如何ぞやあゝ旅順の海深さ幾何ぞ之を計るべくも母の恩は計る可からず旅順の戰ひ如何なりしぞ二十有餘年萬苦を甞めて鞠育せし母の勞

に比すれば其苦戰も物の數ならず

◎軍國の花　踏み迷ふ落花の雪去る十日(日曜)の上野は花見る人に埋められて左しもに廣き山內も衣の香卷煙草の匂ひに包まれて人と人と又人と人參差と行交ふ態は有繋に花の都なりけり新坂を登りたる此方俗に謂ふ竹の臺邊は最早盛りを過て風のまにまに片々と散り來るは香のある雪と見ても興あり折柄此地を今日一日の遊び場所として軍服凛々しき兵士の一個中隊ばかり名や床しき鶯亭を根城として軍帽の庇に幾片かの花片打戴せつ吹く風を勿來の關にと八幡太郎が風流を偲ぶなんど有繋に軍人は軍人らしき花見をなし居りしが正午を過ること何十分黑縮緬の羽織お召の上着夜會卷の品よき四十前後の如何樣よしある方の內君とも思はるゝ氣高き婦人の二人三人の愛らしき稚兒を伴ひたるが靜かに步みを此地へ運ばせつゝ兵士輩のさも無邪氣に戯れ居るを打目戍りたりしが何に感じてかサッと紅を潮したる面を供と見ゆる十七八の女に向けて何事か囁きつゝ身を外して帶の間より取出したるは小形の繻珍の紙入中より大きなる紙幣二片程取出して是にて好きにと言葉數尠かりしも忽ち多の兵士の前にオールド鷄卵などの山と積りぬ兵士輩はいふも更なり鶯亭の主人などの何人にて在すと只管其名を問たりしかど氏なきものとばかり微笑て名乘ずさア行ましうと稚き我が兒の手を引きつゝ博物館の後へと再び步みを運び去りぬあはれ床しき婦人よ何れは多くの侍女などに冊かるゝやんごとなき方なるべけど押じて押して尋ねたれど名乘ざりしはかへすがへすも今日の櫻に增りて色も香も天晴軍國の花とこそいふべけれ

◎七十二人の一家族　埼玉縣北埼玉郡手子村の舊家岡戶文右衞門(七十)は妻りか(七十)との間に擧げたる子女は本年五十歲の長男を初めとして二十八歲の末男に終り都合七男四女ありて孰れも滿足に成長し且つ孫三十四人曾孫二十人ありて之に其配偶者を加ふる時は老夫婦を合して總計八十七人內死亡十五人を差引き現存者七十二人の多きありされど家內至て睦

まじく何等風波の起る事も無くて和氣藹々と暮らし居れり斯かる芽出度き一家なれば其心掛けも一層殊勝にて此程何か祝ひ事ありて親戚知人を招きて内宴を張らんとせしが國家多事の折柄派手なる祝宴の如き遠慮なればとていと質素に濟まし節約したる費用百五十圓を軍資の足しにもとて其筋へ献納の義を願出でたりと云ふ

◎戰時の女學校　福島高等女學校第二年生に氏家ハナ子なる者あり其所有に係る二朱金八個に『右は私が生長の後指輪にこしらへよとて、生母よりかたみにもらひ候ものに候處、此度の戰爭に付、幾億分の一に當らずとも、私の志、御くみとり軍資金の中へ御加へ下さる様、御取計下され度候』との書面を添へ、差出せりと云ふ此の如き美談の續出せるは武夫戰士を懷ふ帝國女子の常態にして、洵に喜ぶべきことなるが今府下の女學校に在學せる少女等が種々の方法を立て丶奉公の誠心を致せる其計畫の種類を示せば(一)靴下、手袋等の製作品を陸軍恤兵部に差出すこと(二)醵金して軍人の遺族に給與すること(三)諸方の衣類を裁縫し其所得を悉く軍資に献納すること(四)校内に貯蓄函を設け勤儉の美風を奬勵すること(五)生徒の出金を積立て債券の募集に應ずること等にして此等諸方法の中吾人の意に適ふものを(一)及び(三)の二種とす而して吾人の女學生に望む所は陸軍將校の貴婦人が陸軍省より兵士に配與せらる丶襦袢類を相當の代金を以て仕立て其所得を軍人の遺族に給與せんとの方法是なり女學校にてその裁縫の時間を利用して此種の裁縫を引受け少女をして勇士の身に纏ふ衣服を仕立つる旁ら其遺族を救ふの擧に出でしめなば蓋し精神敎育の好材料として一擧兩得の策ならんか



# 歌

六月　親友　郭公
七月　軍人　避暑
八月　夏海　述懐
九月　初秋月　閑居
十月　山家霧　宅信
十一月　風前紅葉　烟
十二月　歳暮　杖

# 文

六月　藤花を贈る詞　梅雨中日記の一節
七月　七夕祭の記　出征軍人の首途を送りて
八月　盂蘭盆の日祖先の墓に詣でゝ　出征軍人の家族を慰問する文
九月　夏季休業中の事を記す　志を述べて親しき友に贈る文
十月　仲秋月を觀ざるの記　出陣中の父君(若くは兄弟)に贈る文
十一月　天長節　秋季運動會
十二月　家庭日記(三日間)　歳の暮に故郷の母君に贈る文


定價

| | |
|---|---|
| 一冊 | 前金金貳拾錢 |
| 三冊三ヶ月分 | 前金金五拾七錢 |
| 六冊半年分 | 前金金壹圓拾錢 |
| 拾貳冊一年分 | 前金金貳圓拾錢 |

全國無遞送料

廣告料

| 五號活字廿三字詰一 | |
|---|---|
| 行 | 金三拾錢 |
| 半頁　三十二行 | 金八圓 |
| 一頁　六拾四行 | 金拾貳圓 |
| 表紙二頁 | 金拾六圓 |

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割増の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年四月三十一日印刷
明治三十七年五月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊榮一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

前女子高等師範學校教授川村理助先生著

高等女學校用 **動物學新教科書** 全一册 文部省檢定濟

同 **植物學新教科書** 全一册 文部省檢定濟

同 **生理衞生新教科書** 全一册 文部省檢定濟

菊判總クロース美本 各定價五十錢 郵稅六錢

●近時高等女學校用博物敎科書の出版せらるゝもの充棟汗馬も啻ならずと雖も、其の多くは編纂の法を得ず、或は徒に其の材料を多くして乾燥無味に陷り、或は猥りに學理的に偏して敎授の實際と隔絶し、若しくは日常生活に無關係にして、眞に趣味と敎授の實際と日常生活との調和を謀りたるものは誠に少なし。

●本書は此に慨する所あり、高等女學校及び此と同程度の各女學校の博物科敎科書に充てんが爲め、著者多年の經驗と豐富なる學識とに基き文部省撰定敎授細目に據りて編纂し、趣味と敎授と日常生活との調和配合に注意し普通博物學敎科書の通弊に陷らざらんことを勉めたり。

發行所 東京市京橋區築地二丁目 株式會社 國光社

棚橋絢子刀自著

再版

# 女道叢話

菊判和裝美本
定價金三十錢
郵稅金六錢

著者棚橋絢子女史の現今女子教育界に於ける位地、名望及學識の如何は世の熟知せらるゝところなり、本書は女史が女子道に對する抱懷を記されたるものにして、女學生は勿論兒女を有する父母の必ず一讀せざるべからざる良書たるはまた多言を要せざるべし。

弊社は三輪田眞佐子刀自の『女子の本分』及び『女子處世論』と共に本書を出版して女性諸子に紹介するを以て大なる光榮と信ずるものなり。

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

# 北清名勝

四六倍判和綴　金緣帙入美本
定價金貳圓　全國無遞送料

本書は北清滿洲方面に於ける各種の風景各地の要害及皇族大官各國公使の家族武官其他百般の風俗人物を美麗なる寫眞版に描寫したるもの且卷尾には英文と清語の說明を附したり裝釘美麗應接室の裝飾に好適するのみならず殊に時節柄一本を備ふべき好書なり

再版

# 櫻癡居士と市川團十郎

菊判大和綴　定價卅錢　郵稅四錢

福地櫻癡居士は當代文壇の偉人、故市川團十郎は劇界の偉人、前者は脚本に、後者は舞臺の上に何れも著しき成功を以て我演劇の一進歩を顯した、此の兩偉人が演劇上に於ける關係、意見の衝突と符合、文藝界に關する逸話評論又は劇以外の劇等を憚かる處なく記したるものは即ち此小冊子である。と卷頭に記してあるが、まだ〳〵それよりも面白い〳〵團十郎の靑年時代の失策談や、櫻痴居士の洋行して歸つて來たときのハイカラ論などがあつて、維新後我國藝術界の活歷史を眼に見る樣な思もすれば、又た劇界と文壇との兩偉人の多方面に涉つて居る活動寫眞を見るが如き感じもする。又附錄として『秀吉と家康』と題せる團十郎の遺稿が載せてあつて、これもまた多く得られない文章である。兎に角藝術上近來の珍書である。

發賣元　東京京橋區築地二丁目　株式會社　國光社

第五回內國勸業博覽會
# 銅牌并に褒狀受領

登録商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫箸附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい




## 壽美禮おしろい

ねり製 定價 大錫二十錢 小錫十二錢

水製 定價 大錫二十五錢 中錫十五錢 小錫十錢

錫栓附乳白硝子罎入

ヴヰイオレツト水製




すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかにゝにきび、そばかす、あせも等を生ぜず御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の悪臭を退け不淨を排し心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

## 皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
鑵詰 六錢五厘 袋入 壹錢

● 弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞贊する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

● 常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生ぜず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

● 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登録商標
四季色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHING POWDER.

壽美禮あらい粉




## 製造本舗

東京東兩國（兩國橋際）元町

## 伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十七年五月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾四年第六號　第三種郵便物認可

山葉製風琴ハ第五回内國勸業博覽會ニ於テ第壹等賞牌ヲ受領セリ

## ●山葉製風琴





| | |
|---|---|
| 壹號形 | 金拾六圓五拾錢 |
| 貳號形 | 金廿六圓五拾錢 |
| 三號形 | 金參拾七圓 |
| 四號形 | 金四拾參圓 |
| 五號形 | 金四拾八圓 |
| 六號形 | 金五拾五圓 |
| 七號形 | 金六拾五圓 |
| 八號形 | 金七拾五圓 |
| 九號形 | 金百圓 |
| 十號形 | 金百貳拾圓 |
| メーソンモデル | |
| 第壹號 | 金百參拾圓 |
| 同第貳號 | 金百五拾圓 |
| 同第三號 | 金貳百圓 |
| 新形一號 | 金八拾圓 |
| 同二號 | 金四拾五圓 |
| 足折形一號 | 金廿五圓 |
| 同二號 | 金參十五圓 |

●山葉製洋琴　參百五拾圓以上。各種

●舶來洋琴　參百圓以上參千圓。各種

●舶來風琴　百圓以上千五百圓。各種

●鈴木製ヴァイオリン
五圓以上五十圓迄各種
其他弓箱附屬品等各種

●舶來ヴァイオリン　各種

●樂隊川陸軍々樂用吹奏
樂器新着品　各種

右の外手風琴バーモニカブラジョーレット各樂器附屬品各種
郵券貳錢御送付あらば美麗なる目錄進呈す



---

共益商社編（文部省撿定濟）

## ●唱歌教科書

教師用 全四冊
第一卷定價金參拾錢
第二卷定價金參拾錢
第三卷定價金參拾錢
第四卷定價金參拾錢

生徒用 全四冊
第一卷定價金拾五錢
第二卷定價金拾五錢
第三卷定價金拾八錢
第四卷定價金拾八錢

郵税一冊に就き各金四錢

空前の唱歌良敎科書
檢定濟教師用生徒用完備唱歌教科書の嚆矢

小山作之助先生編
**輪唱歌集**　全一册 壹部　定價金三十五錢 郵税金四錢

共益商社編
高等女學 **音樂教科書**　全四册卷一既刊二、三、四近刊 壹部　定價金四十五錢 郵税金八錢

共益商社編
師範教育 **音樂教科書**　全四册卷一既刊二、三、四近刊 壹部　定價金三十五錢 郵税金六錢

共益商社編
中學 **唱歌教科書**　全三册卷一既刊二、三近刊 壹部　定價金三十五錢 郵税金六錢

石川喜三郎先生譯
**音樂と詩歌**　全壹册 壹部　洋裝美本 定價金三十五錢 郵税金六錢

比留間賢八先生編
**マンドリン教科書**　全壹册　洋裝大形美本 定價金四十錢 郵税金六錢

琴曲大家山登萬和先生作曲
箏曲 **地久節**　全一册　大形美本 定價金五十錢 郵税金六錢

諸大家作歌曲
討露軍歌 **かちどき**　第一 壹册　美本 定價金五錢 郵税金二錢

東京市京橋區竹川町十三番地　**共益商社樂器店**　電話新橋五二九　電信略號キヨ



東京築地株式會社國光社印刷